臨時增刊 3

都會生活



女學世界

第八巻第二號

明治四十一年二月十五日發行

女學世界定期增刊 **都會生活** 第八巻第貳號 目次

口繪

寫眞版

肺病患者に告ぐ

孤園明治廿一年の十一月以來慢性肺病に罹り各地の國手は勿論妙藥なりと聞く毎に幾種の良藥を服し東京府内有名大家諸先生の診斷を仰ぎ
は檢東病院長（ドクトル）の藥剤も其效なし豆州熱海相州箱根上州伊香保等に轉地し熱海三ヶ月入浴するも寸效なく其外鍼灸等怠りなく療養したるも
效驗更になく遂に重症となり廿八年四月頃には時々喀血して皮膚蒼白く骨瘦せ日々咳嗽甚しく筋骨同樣に成り最早世上には數し
力無之只死を待つの外なし然るに私は同年中臥褥の內と雖ども常に喀見するの際ありし一日友人の紹介にて米國の名醫より發見する中文致の一大藥の名聲甚だ高きに從ひ
し際人より贈りたる肺病必治の奇劑に試みに服したるに不思議にも爽快を覺え衛療して服するに從々快方に赴き
四週間餘りにて全く根治したり既に九ヶ月を經たるも大熱を發くも容易く根治し實に稀に見る世の評判となり此の病患者と同く公衆に
其實を告げ試驗せしもの五十四人と共に根治せざるものなし誠に驚く可き世界第一の靈藥なるを以て寧ろ之を世に公にし廣く病の患
者を救濟せよとの勸めを受るに至り茲に肺治丸と名づけ內外諸君の御服用を勸め其の效驗の大なるを世に發表する事となれり然る此本藥の效能非凡な
るを以て發賣以來日尚は淺きにも不拘內地は勿論既に米國紐育市タイヤーが商會にてパタビヤヒイアエーテス
社等へ續々輸出す專ら詳細な報告は四月川迄計よりは全治の病狀記に四千六百餘に達せり然るに此靈藥を知らず種々
に迷ひ病苦に惱める人士なきにもあらじ天職を全ふせんと欲せば速に本劑を服して病根治の一大幸福を得よ

類價　七日分貳圓○十四日分四圓○廿一日分五圓○卅五日分七圓五十錢○七十日分十四圓○遞送料十錢○發賣弘通所名は大阪問屋取扱所の各

主治效能○肺結核○肺炎○氣管支加答兒○肋膜炎○肺尖加答兒○たん咳喘息病一切より起る諸病を根治する偉效あり

用法及び詳細は本能書にあり（但し本劑へ御注文の時は病狀の經過を詳細に記入申込をこふ）

東京府下荏原郡入新井村字不入斗二百十四番地

調劑本舗　川名助次郎

東京神田區花房町二番地　山崎帶願堂
横濱吉田町二丁目都橋際　永井永進堂
東京神田區檜本町二丁目　關井吉識堂
大阪心齋橋筋二丁目　丹平商會
横濱辨天通　櫻井伊之助
東京銀座一丁目　佐々木玄兵衛

肺病藥發賣特約店
東京銀座　岸田吟香
東京日本橋區本石町　守谷為次郎
東京麴區米澤町　吉田安五郎
大阪道修町　日本賣藥株式會社
富山市西四十物町　中田清兵衛
東京銀座　松澤八右衛門
東京日本橋區瀬戸物町　玉置金八
東京日本橋區上槇町　安川昇榮堂
長崎市船大工町　片岡七郎
東京神田區錦町　大木合名會社
東京日本橋區本町　大木口哲堂
東京[illegible]　[illegible]本店
大阪[illegible]　[illegible]
[illegible]市上[illegible]　[illegible]右衛門
東京日本橋通　中田清兵衛
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
（全國到る所の有名なる藥舖にて販賣せり萬一無之地は本舗へ申越次第郵送す）

女學世界大懸賞

懸賞寶さがし

景品目錄

第一等（一名）三越呉服店切符（價格金百圓）

第二等（二名）玉寶堂製女持金時計（價格各金五拾圓宛）

第三等（五名）玉寶堂製金指環（價格各金貳拾圓宛）

第四等（十名）三越呉服店切符（價格各金拾圓宛）

第五等（二十名）内｛十名懐中化粧道具 十名婦人用肩掛｝（價格各金五圓宛）

第六等（百名）内｛二十名衛生腹巻 二十名東髪用三枚櫛 二十名婦人用駒下駄 二十名千代田草履 二十名縮緬帯上げ｝（價格各金貳圓宛）

第七等（二百名）内｛五十名婦人用ハンカチーフ 五十名上等香水 五十名銀貨入 五十名婦人用羽織紐｝（價格各金壹圓宛）

第八等（三百名）｛リボン、ハンカチーフ、西洋手拭、エビス袋、襟留、石鹸、煉白粉、其他｝（價格各金參拾錢宛）

品數總計 六百三十八點――價格金壹千圓

二月一日發行の本誌を見よ


ケーバ香油
Made Beautiful by
Beautiful Hair.
Try
Keiba Oil.
本品は日本特有の椿の油を搾りたるまゝ佛國へ輸出し之れを以て日本人に適する様精製せしめ加ふるに芳香馥郁たるロースの香料を以て種々研究したる結果再び輸入せし品なれば和洋香油數十種中最も進歩したる日本人向唯一の香油なり
本品の特色
縮毛を延ばし赤毛も漆の如き艶を出し皮膚を滑らかならしむ毛髪を延びよくす
●ケーバ香油を使用すれば「フケトリ」香水の必用なし
東京日本橋區橘町二
化粧品直輸入商 竹間商店
電、浪、一六二四

女(甲の一)

女(甲の二)

郵稅 金二錢

皇族畫報

定價 金卅八錢

● 一月十日發行 ●

皇室を始め奉り皇族の御繁榮にまします御事、未だ今日の如きはあらず又尊き御身を捧げて國事に盡瘁したまふ御事、今日の如きはあらず、我等國民誠に未曾有の盛事と仰ぎ、歡喜し感泣する所なり。然れ共皇室皇族の御面影を一に集め、日夕相親しみまいらすに足るべき出版物未だあらず之を憾みとする事久し。弊社敢へて其任に當らんとし、之れを宮内省に請ふや、同省にては喜び納れ、特に各宮家別當會議を開かせ、各宮家御家族最近の御肖像を下し賜ふ事となれり。弊社は感激事に當り、其名に耻ぢざるの眞と美とを得んとし多大の勞を拂ひて作りたるが此の皇族畫報なり。尚卷末には、各宮家に就て、親しく伺ひたる御家庭の模樣を添へ、相待つて其眞を發揮せんとを期せり。我等國民は如何に誇るべき尊むべき皇室皇族を戴けるか、本書は之れを語りて餘りありと信ず。新春の初頭、弊社は國民のあらゆる階級に對ひて、此一書を捧げんとす。

尚ほ官衙學校等團體の名によりて御注文の節は特別に御相談致すべし御照會を乞ふ

東京神田小川町四一

東京社

人事活斷

一年の計は一月に在り!!

人誰が煩悶なからんや凡そ戀に愛に依て煩悶する男女家庭上に依て煩悶する者●婚を求むる人職に就かんとする者●病に患む老若商戰に失敗したる者事業を始めん者勝負事に必勝を欲する者●其他人生一切の事項に就き確然たる指敎を得活然光明を得て滿足を得んとせば

日本易學大博士 高嶋先生

開運秘法 **運氣之鑑定** 書に依れ誓て滿足を得ん！

本秘傳鑑定に依り煩悶幽鬱せる青年男女の新生面を得理想を現實にし、家庭に處世上に滿足を得たる者頗る多く禮狀續々送料共郵劵卅五錢を送ば速送す●東京麻布笄町六四 高橋信院

簡易複寫インキ

器械不要

蒟蒻版寒天版及び其他の印類又は器械いらず此インキ一品にて簡便迅速座上立どころに文書畫版數十百枚を印刷し得べし本品はすでに諸官衙及び郡區町村役場等の採用品たり

●定價 二オンス壜入送料共 金參拾錢 郵劵代用一割增

神田區松富町十二番地

中村屋商店

●**圖書目錄**

御入用の方は往復葉書にて御申越次第直ちに送呈仕候

東京日本橋區本町 **博文館**

女(甲の三)

女(甲の四)

雪のあした



一條成美筆

少女世界定期増刊

第三巻第二號

少女と立志



一月十五日發行

全一冊菊判洋裝　正價金拾錢　郵税四錢　本號限リ

●少女お伽芝居

主な記事

▲勉學の方法
▲少女の世界
▲都の女學校
▲入學試驗
▲少女と技藝
▲少女の職業
▲道子の立志
▲花子の入學

これは、巖谷小波山人得意の新案になツたもので、少女の讀みものとしても、また學校のお遊びとしても、新春第一の面白いものです。

これから後の少女は、男子に負けないやうに、遠大の志を立てゝ、學を修め業を勵まなくてはなりません。將來、少女の伺ふべき舞臺は廣く、執るべき業務は多いのです。何を撰び何を學ぶべきでしようか。速かにこの一冊を熟讀して、前途の方針をお定めなさい。今や、年はあらたまツて氣も亦新たです。一年の計を立てるのは、まさにこの時です少女諸子！　奮勵一番し給へ!!!

●敬慕すべき婦人

主な記事

▲學校顧問
▲女子判任官
▲女醫と看護婦
▲少女獨學の栞
▲英語の學校
▲少女と音樂
▲商家の少女
▲諸學校入學手續

懸賞法を以て、いろ〳〵天下の少女諸子より投票募集した結果を發表します。昔の婦人二名、今の婦人二名、はたして誰が當選するでせう？　お待ち遠さま！

販賣用電話本局二六二〇　發兌元　東京日本橋本町三丁目　博文館　振替貯金口座第二百四十番

(乙の二)

謹賀新年



東京京橋區銀坐三丁目 松澤商店

懐姙避姙自在

全壹册 拾五錢 送料貳錢

子なき人は本書を讀みて懐姙の法を知るべく又子が出來て困る人は避姙の法を知るべく實に本書は懐姙避姙を望むが儘に自由ならしむる秘訣書なり郵券代用必一割増

大阪市東區和泉町二丁 泉陽堂

最近 子宮病 自宅療法 全一册

▲如何にせば子宮、血の道の難病を根治し▼

▲子寶を擧ぐべき健女性となるを得べきか▼

◎本書は著者が多年の實驗より得たる成効と、最近の學說を基礎とし、親切叮嚀に自宅の療法を記述せるもの◎郵券貳錢を送れば當分の内無代進呈す

申込所 東京市築地新榮町四丁目一番地 笹岡省三

日本全國有名 當世美人寫眞

寫眞版壹百枚壹組箱入 定價五拾錢 送料四錢

本品は日本全國の有名なる美婦人にして令孃と云はず藝妓と云はず有とあらゆる美人中より寄拔きの美々麗々たる當世婦人の寫眞なり何人も某地には如何なる美人あるか如何なる風俗なるか且其流行の如何は座ながら顔姿を見るも趣味あり

●專賣元 大阪松屋町通平野町 振替口座壹壹五八壹 文玉堂書店

圖書雜誌 何れの發行に不係勉强販賣

東京神田表神保町三番地 東京堂書店

電話本局一二三番二四八番 振替貯金口座二七〇番

女(乙の三)


THE GEM
ゼム
衛生家必携懐中良薬
ゼム一粒の馥郁たる香氣と愛すべき美味とは一度用ひて終生忘るゝ能はざらしむ故にゼムは廣く萬人に愛用せらる
ゼム二粒は煙草の味を美にし心神を爽快にし疲勞を減じ息切れを防ぎ渇を醫す故にゼムは外遊學生に愛用せらる
ゼム三粒は音聲を美くす音聲は美の一要素也故にゼムは紳士佳人に愛用せらる
ゼム五粒を食前食後に用ふれば食慾を増進し消化を助く故にゼムは衛生を重んずる士の常用劑として愛用せらる
ゼム十粒は異境に於ける風土病疾病食當り水傷りを治して神効あり舟車の酔を防ぐ故にゼムは進取的遠征家及び旅行家の必携劑として愛用せらる
ゼム定價 七十五粒入十錢 百六十粒入廿錢 四百卅粒入五十錢 九百粒入一圓三十錢 容器ゼム
日本一手發賣 東京馬喰町二丁目 愛國堂 山崎榮三郎
支舖 大阪高麗橋二丁目 山崎兄弟商會
其他賣捌は全國各地賣藥化粧品店にあり

(乙の四)

粧ひ



多大の發行も好評の爲め賣切となり今や再版を出すに至る

▲『實業少年』出でたり商店會社工場の有爲の少年何ぞ一讀して指導者とせざる。

（其の二）

實業少年

初號一月一日發行

每月一回一日發行洋裝大判（四六判二倍大）紙數七十二頁

正價一冊金拾錢　郵稅一冊壹錢五厘

口繪

●日本銀行事務室紙幣山の如し●工業補習夜學校の教室實況●紡績王日比谷氏の家庭新撮影●最珍西洋勸工場街町に屋根あり

本誌內容

實業少年に對する予の精神的注文　男爵　澁澤榮一君

實業界に入る少年の覺悟　三井鑛山部理事　高橋義雄君

欲するままに富貴安樂を得る法　大谷嘉兵衛君

米國大商店の盜難豫防請負　堀越商會主　堀越善重郎君

職工の名譽は官吏に劣らず　高等工業學校長　手島精一君

商店員に多き病患と其豫防法　日本橋病院長醫學士　岡本武次君

▲一萬圓の報酬を得た小僧の奉公時代　日比谷紡績王　▲日本一の模範職工　▲補習夜學校　▲客足を引く法　▲三百年間營業繁昌秘訣　▲ねちと其應用　▲小切手實用法　▲商業會話　▲勸工場町を造れ　▲其他數十件

其他實業界の少年に有益にして面白き事項山の如し

▲新年大附錄◎實業少年出世雙六　新聞紙大、極彩色意匠嶄新、新年附錄中の最新最優のもの也

東京　博文館　本町

神戸高等商業學校教授
中川靜君著

現代商業文指鍼

全一冊

洋裝三六判上製
紙數四百三十頁
正價金七拾錢
郵税金八錢

文書課は會社商店の秘府にして、秘書役は其參謀たり、此參謀に依て此秘府に作らるゝ所のものは何ぞや、商業信書は通信文にして豫て營業記錄なり、又取引の證憑なり、營業主は整理の要を感じ、國法は保存の責を付す、其他報告書廣告文定款事業方法書契約書證券商業登記の如き、亦自ら一定の法則あり、條件あり、若夫等閑に認むるものは義務損害忽にして到らんのみ、本書は是等の各種文章使用の機會性質認方を遺憾なく示し、且實行の文例百貳拾を揭げ時としては之を批評し更に前編としては商業文書の形式を解說し後編には文書類の整理保存複寫摘要電報暗號編制文書事務等多くは著者實驗の結果を示し、終に信書用語の慣用法を附し現時普通行はるゝ商業作文書と全く其撰を異にす、加ふるに文章亦流暢にして整理法等には挿畫を加へ、獨習の便あり、文書課員、商業學生又は現代實業界に志ある青年の座右、蓋し本書を缺くべからざるなり、

發兌元 博文館

人世の最大福音◉衛生家の必讀書
百五十歳の強健法

糸左近先生著 新刊發賣洋裝三六判總クロース美本價六十錢

空前無比
無藥療法
藥いらずの素人療治書

何すれば
長命できるか
百五十歳の健康の長壽書

糸左近先生著菊判全壹冊美本 價送料共金廿九錢

目次。總論、感冒、神經衰弱、ヒステリー、胃弱、糖尿病、陰萎、遺精、或る心臟病、或る肺病、貧血、多血等の療治、記憶法、肥ゆる法、瘦せる法、(下略)其他種々の病を藥いらずに治する方法を書いた者然らば、まじないか、否々、催眠術か、然らず、灸か、ノウ〳〵、鍼か、斯る陳腐な法で無い、先生獨得の名法、空前無比の良書、素人も醫士も讀み玉へ、たゞよりも安いものは無い、賣り切れぬうちに。本書は讀んで字の如く熟讀して實行すれば百五十歳以上の長命できる秘法です著者は當代の衛生大家而も優美の筆を有てる人一たび卷を開けば興味津々として何人も讀みたく實行したくなるは本書、刊行以來大評判今や第五版なる。

發賣元 東京神田表神保町 東京堂
振替貯金口座二七〇番
全國到る處の各書店にて取次販賣す

女(丙の三)

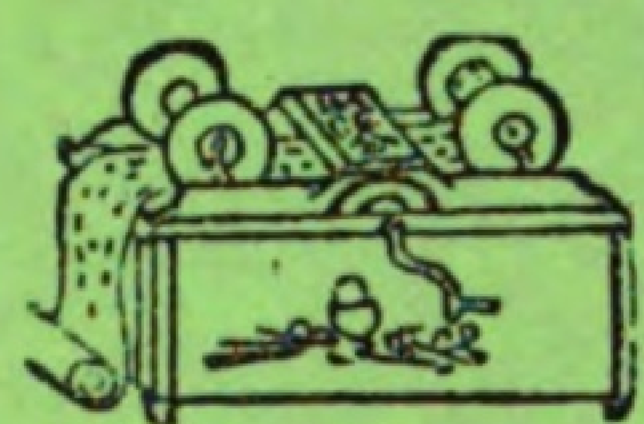
詳細目錄御望ノ方ハ郵券二錢相添へ御申込被下度候

和洋樂器大販賣所

電話新橋 一二五九　振替口座 七一五八

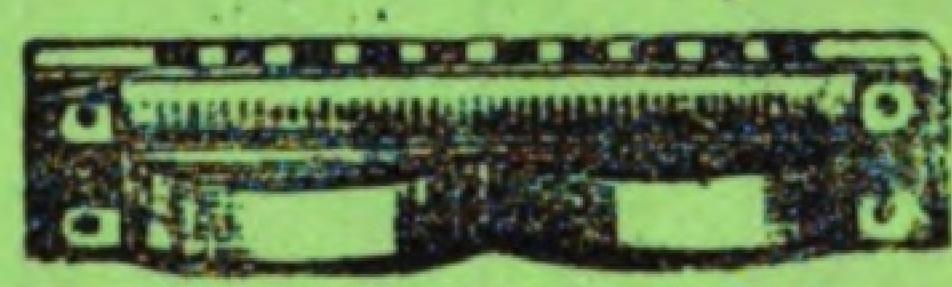
十字屋樂器店

無師獨奏
紙腔琴



上製金拾五圓　中製金拾圓　小形金五圓

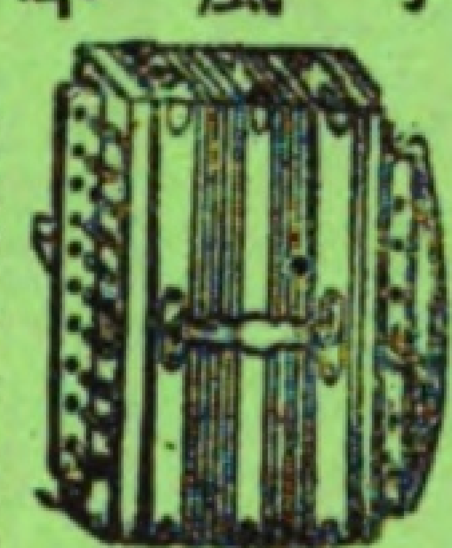
西洋横笛（ハーモニカ）



金廿五錢以上金二圓迄

西洋横笛新荷着

舶來
手風琴



金參圓卅錢以上　金貳拾圓迄

手風琴新荷着

大聲發音器



各製造會社特約

◎箏曲 松風　バイオリン樂譜　正價廿五錢 郵税貳錢
◎同 椿盡し　同　正價參拾錢 郵税貳錢
◎同 江の島の曲　正價參拾錢 郵税貳錢
◎同 うすの聲　正價參拾錢 郵税貳錢
◎根曳の松　正價四拾錢 郵税貳錢

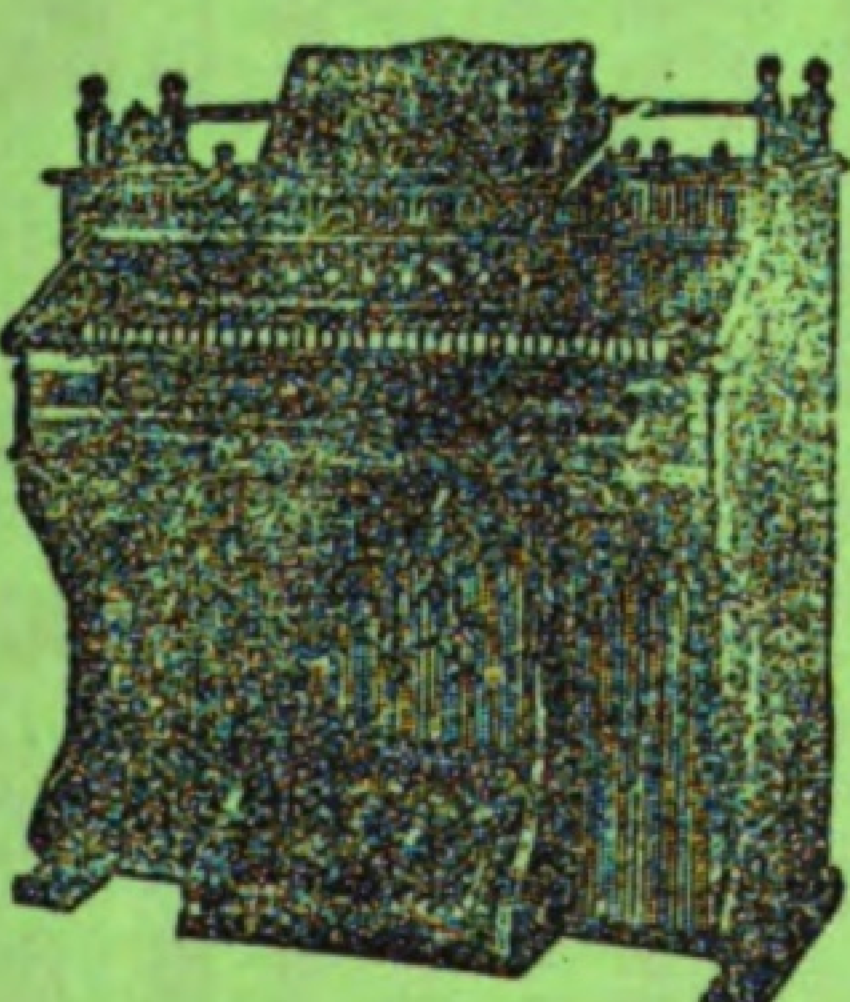
和洋バイオリン



◎舶來バイオリン新荷着

附屬品各種

東京博覽會一等賞牌
日本製造元祖
西川風琴



第一號金拾八圓以上　第廿號金四百圓迄

◎ケンダル氏著 英語唱歌集 全三册　正價各拾五錢 郵税各二錢

右第一集久敷品切の處今般再版發行候條陸續御用命願上候

東京銀座三丁目

女（丙の四）



吉田・ふじを筆

第五回內國勸業博覽會賞牌及褒狀受領

壽（ス）美（ミ）禮（レ）おしろい

商標登錄

壽美禮白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成績液體等に配劑しあるを以て常に用ひて御顔肌を艶麗ならしめ清々しく天然と色白きに至るべし殊に衣服、半襟等のよごれざるは本白粉の特色なり『菫おしろい』は芳香馥郁として長時間保續するが故宴會祝席雜踏の場所に臨むに衛生上又社交上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱其他に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

西洋皮膚艶麗劑 壽美禮あらひ粉の特性

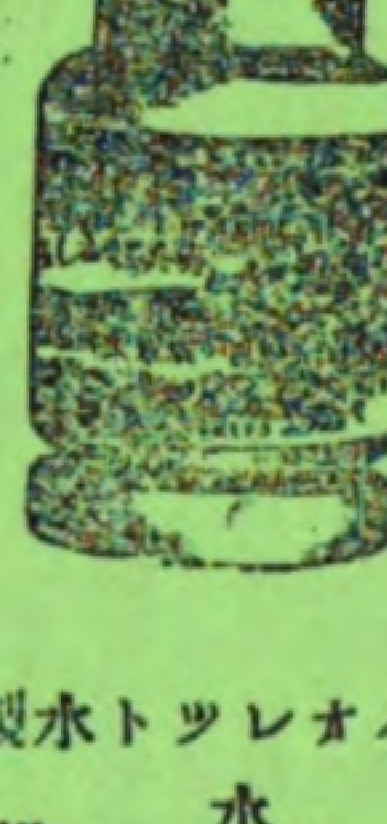
壽美禮洗粉は近來歐米諸國に賞賛する香料及弊店が多年間研究の上製せし獨特の新原料を用ひて製せし品なれば朝夕此の洗粉を御用ひ給はゞ常に御肌の艶深くきめを滑かにし色白く美しくなす◎壽美禮あらひ粉は御髮洗ひに御用ひ給へば髮のねばりを取り油あか等を生ぜず又半襟ハンカチーフ絹布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する特性あり◎御使用法は普通あらひ粉の半分にて宜ろし水又は温湯に溶し又はぬかに混ぜ御入浴の際用ふるを便とす

綠、藍、紅彩蝶番ひ鑵詰入 錢
別製鑵詰 五拾錢
大袋入二錢
小袋入壹錢



五二會品評會功勞賞牌

THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ヴアイオレツト煉
錫蓋附乳白硝子器入
壽美禮おしろい



壽美禮おしろい

ヴアイオレツトホ水製

ねり製 定價（大壜 二十錢 小壜 十二錢）

水製 定價（大壜 二十五錢 中壜 十五錢 小壜 十錢）

錫栓附乳白硝子壜入

登錄商標
西洋色白くなる あらひ粉
SUMIRE
Washing
Powder.
壽美禮 あらひ粉



製造本舖 東京東兩國元町（兩國橋際） 壽美禮堂謹製

取賣所は全國到る處の小間物店化粧品店賣藥店等に有之に付御近邊にて御求めを乞ふ

女（丁の一）

統計學專攻伊東祐穀君著

大勳位公爵 伊藤博文君題辭
陸軍大將元帥公爵 山縣有朋君題辭
內閣總理大臣侯爵 西園寺公望君題辭
男爵 後藤新平君題辭
伯爵 大隈重信君序文
子爵 渡邊國武君序文
大藏大臣男爵 阪谷芳郎君序文
鐵道總裁 平井晴二郎君序文
日本郵船會社社長 近藤廉平君序文

明治四十一年

世界年鑑

全壹册

洋裝大判美本

縱八寸五分橫六寸 總クロース金文字入函入紙數千四百七十餘頁

正價金五圓

小包送料參拾錢

二月廿日までの御註文に限る特價金四圓(外に要送料)

一月中旬發行

卷頭挿入諸圖廿五枚

▲石版彩色地圖七枚　亞細亞洲、歐羅巴洲、阿弗利加洲、北亞米利加洲、濠洲及大洋洲(右六圖は銅版彩色刷にて縱七寸橫九寸の最新地圖なり)東洋地圖(縱一尺六寸橫一尺三寸の銅版彩色刷)

▲縮圖七枚　各國貨幣(金銀銅貨)亞細亞、歐羅巴、阿弗利加、亞米利加

▲描畫圖拾壹枚　最近二十年間日本の發展　土地人口及宗教。敎育の一。敎育の二。裁判、犯罪及衞生等。財政及國防。產業。外國貿易及內國商業。水運及交通。交通、銀行及金融。銀行及金融。

本文

●日本之部……自一頁至三九二頁
△皇室△國體△政治△土地△人口△宗教△教育△裁判及犯罪△衞生△救恤△財政△國防△產業△外國貿易△商業會社預金及保險等△船舶及水運交通△銀行及金融△外交△北海道△臺灣△樺太△貨幣及度量衡對照

●各國之部……自三九三頁至一〇八八頁
△亞細亞洲之部△歐洲之部△阿弗利加洲之部△亞米加利洲之部△濠洲之部△大洋洲之部(上記六大洲內各國の形勢を細錄する事日本の部に於けるが如し)

●世界之部……自一〇八九頁至一一一八頁
△各國主權者△土地△人口△宗教及教育△財政△國防△產業△商業△船舶及水運△交通△銀行及金融等の比較統計

●實用之部……自一一一九頁至一三〇五頁
△年號紀元及天皇御歷代對照△日本、西洋、支那朝鮮年代對照△日本、支那及西洋年代記事對照△露國侵略年代記事△日本地質系統△風の名稱及符合△物體の膨脹△音響光線△風力△海波△元素の符號及原子量△利子の積算△年利日步等の換算△米價公債株式利劵換算△貨幣度量衡沿革及對照△メートル制△諸稅納期及屆出期△地租條例△相續、所得、營業、登錄、印紙諸稅法徵兵諸則等外數十項

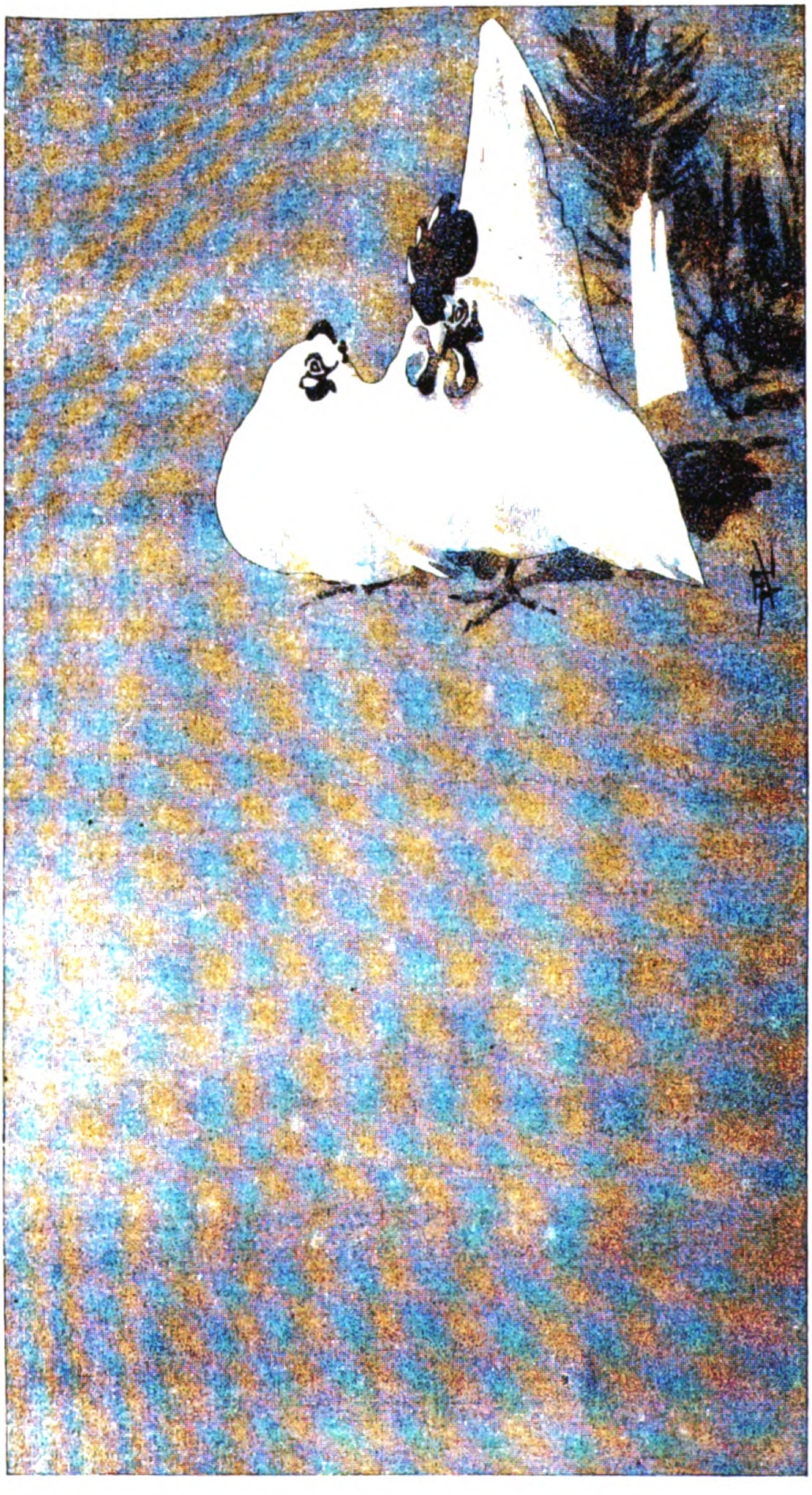
●附錄
△世界地名稱呼對照△臺灣各地土音△鐵道乘車賃金算出表△本邦統計界記事△大に統計の發達を促す△前年鑑に對する內外の批評△索引等

本篇改良 日本之部の解說を增し特に海軍の沿革記事を試み。各國之部の清韓等東洋諸國に精細なる。世界之部に各國鐵道の現況及其發達を加へたる。其他實用、附錄各部の纂錄亦た皆な新にして卷頭の日本發展統計圖表其他光彩陸離

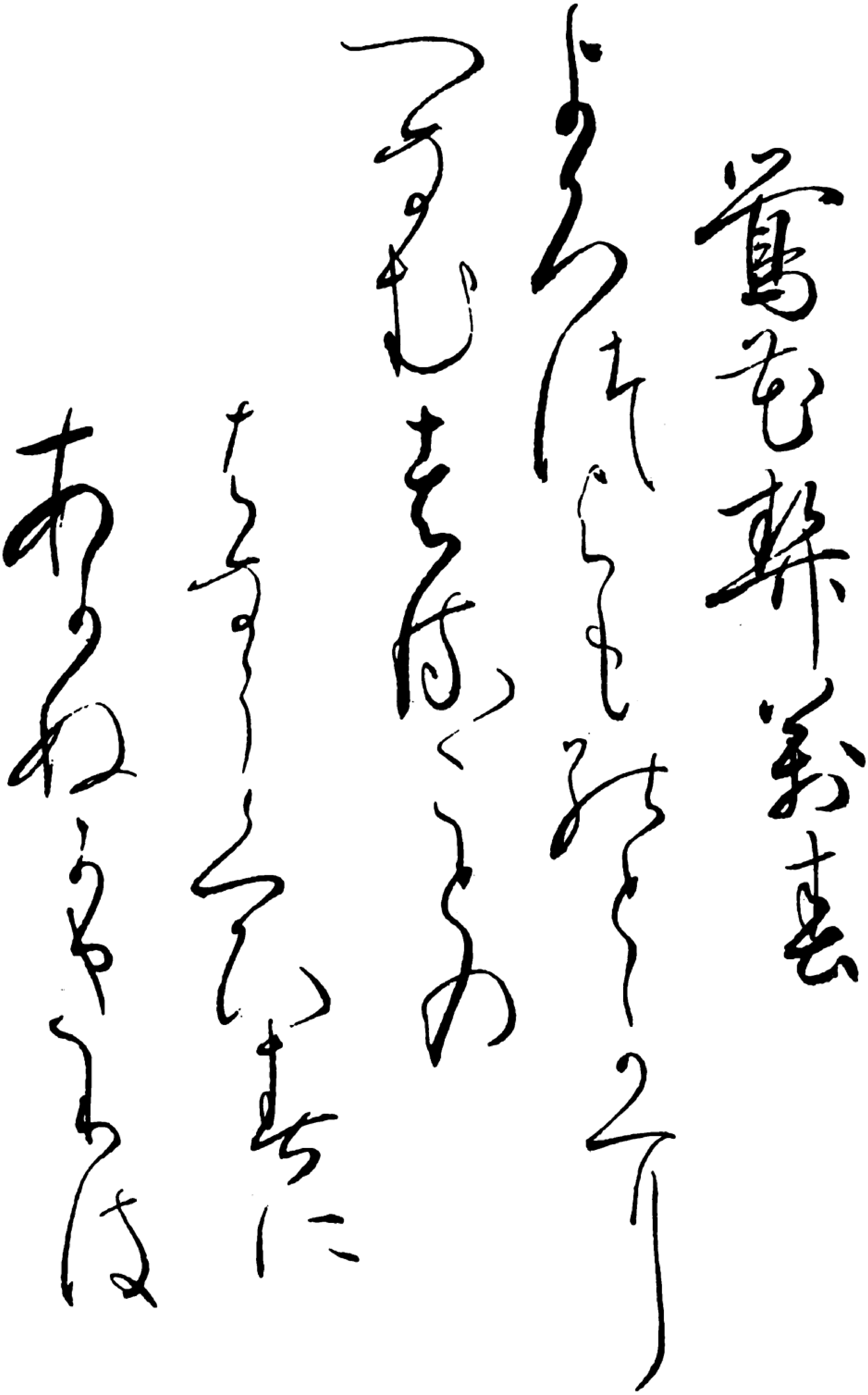
販賣用電話 本局二六二〇　發兌元　東京日本橋本町三丁目　博文館　振替貯金口座第二百四十番

(丁の二)

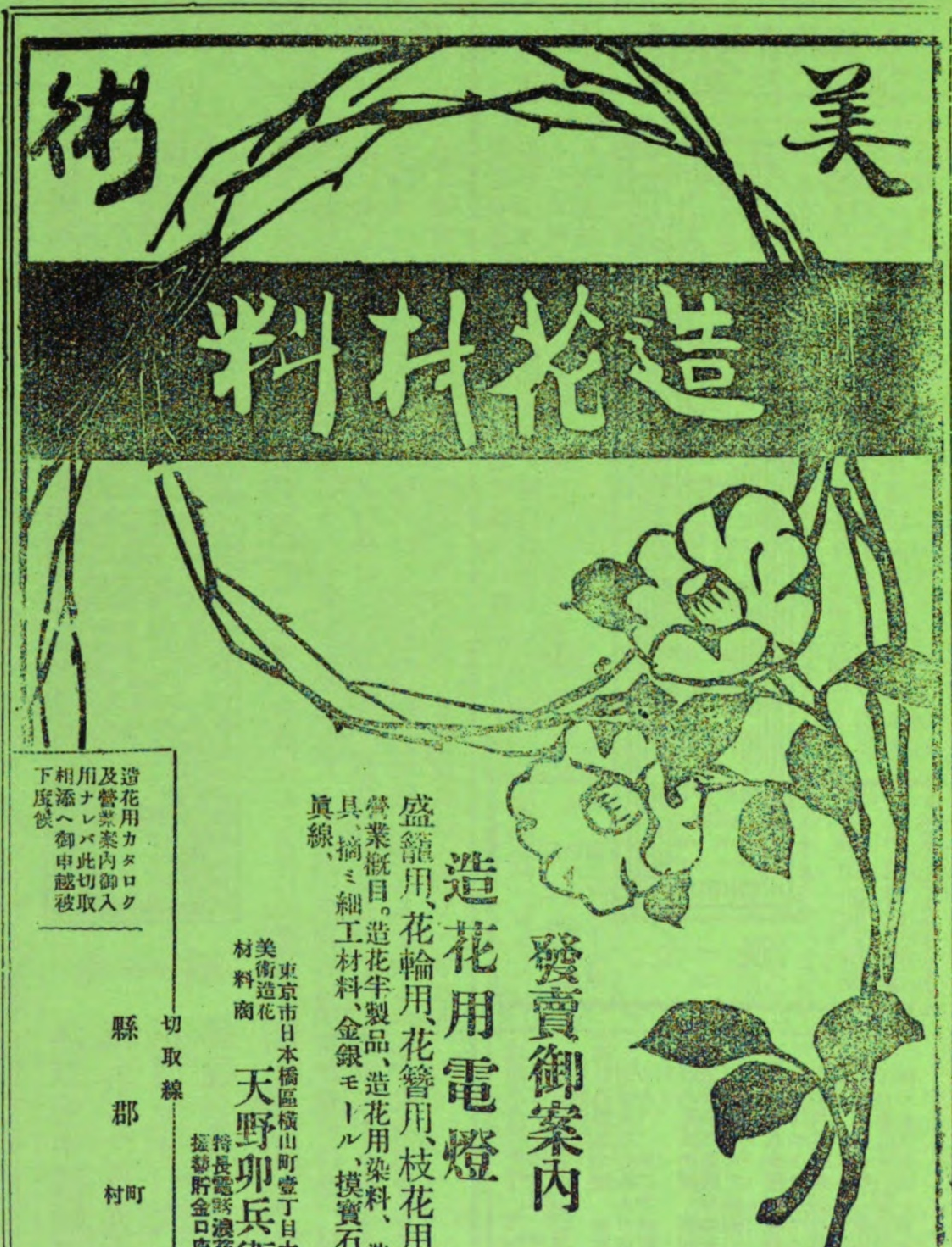
はつとり



一條成美筆



小野鵞堂筆


美術
造花材料
發賣御案内
造花用電燈
盛籠用、花輪用、花簪用、枝花用等各種營業概目。造花半製品、造花用染料、造花用器具、摘ミ細工材料、金銀モール、摸寶石、電氣用眞線、
東京市日本橋區横山町壹丁目十六番地
美術造花材料商
天野卯兵衛商店
特長電話浪花一六四三番
振替貯金口座四九七〇番
造花用カタロク及營業案内御入用ナレバ此切取相添ヘ御申越被下度候
切取線
縣　郡　町村
女學世界

女(戊の一)

文藝倶樂部　第十四卷第貳號　定期增刊

笑ふ門には福來る——あら玉の年の初めに笑ひ給はゞ、その年に福の來ること、船にも溢れ、藏にも置き餘るは、今更事新らしげにペチャクチャするまでもなし。文藝倶樂部の春期增刊は名さへ『福笑ひ』と題し、當今講談落語界の眞打連が、腕に撚り—オット舌に力を込めたる得意の讀物に、御最負厚き皆々樣方を思ふさまお笑はせ申す所存とござりますれば、御愛讀の上シコ玉福をお取込みなされたく、表紙は山中古洞氏、木版口繪は水野年方氏にて卷中の挿畫は、清方、春汀、春帆、古洞、義德、英朋等の諸畫伯が腕くらべ、其の上百美人の寫眞版大附錄をも添へ、善盡し美盡したる新春未曾有の珍本なれば、一月十五日の發行を待たれ、賣切れぬ内永當々々御愛讀の程を、隅から隅までヅラリヅウと願上奉ります!

出版界空前の一大珍書



本號には
▲百美人寫眞版大附錄あり!!!

（一月十五日發行）

全一册
洋裝菊判紙數三百廿頁
正價金廿五錢
郵税（本號に限り）八錢

本號には
▲懸賞百美人投票用紙あり!!!

◀目次▶

（戊の三）

發兌元　博文館
東京日本橋區本町三丁目
振替貯金口座第二百四十番



女(戊の四)

久邇宮妃殿下





彫刻師の苦心

理想の小供服



女子共立會洋服部の撮影（本郷彌生町三松江みさ子女史案）

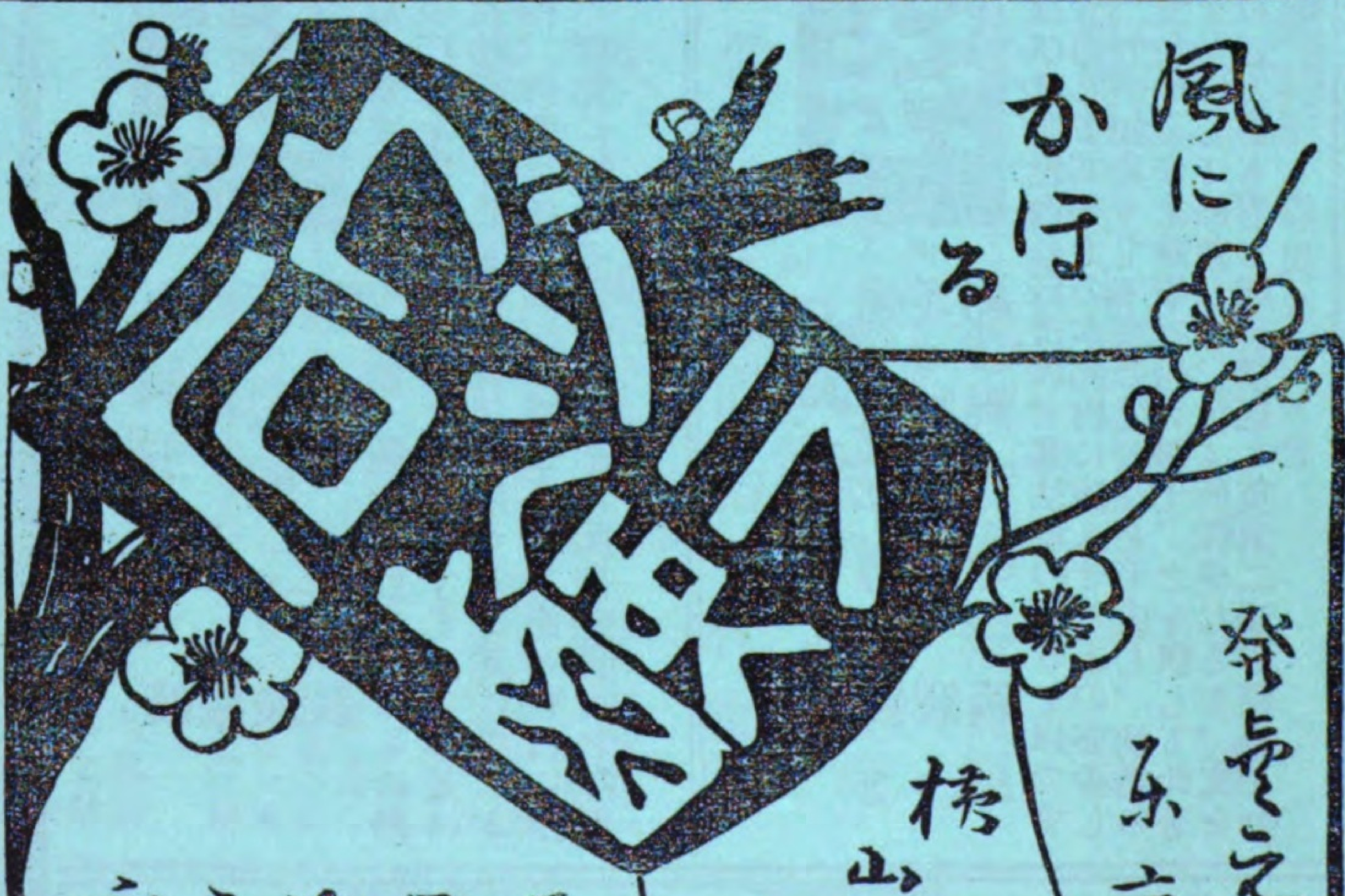
二重橋外の老松





竹橋内の初雪


於内外博覧會名譽大賞及金銀牌受領
元和二年創業
ヒゲタ印醬油
HICETA SHOYU
THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE
TRADE MARK
Patronised by the Imperial Household Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad
The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor
G. TANAKA
Choshi, Chiba-ken, JAPAN
宮内省御用達
千葉縣
田中玄蕃醸造
銚子港
ヒゲタ印醬油


風にかほる
東京
町

女(己の一)

通俗作文全書

全部廿四冊洋裝四六判
並製紙數三百頁
正價一冊三十五錢
郵稅一冊六錢宛

記事論說或は紀行敍事等の雄編大作より尺牘業書の日用文に至るまで、齊しく是れ文なる以上は、文明社會の人は皆文を以て互に意思を通じつゝある者と謂ふべし。然るに今日の狀況を見るに、百般藝術の駸々進步するに反し作文の技のみ獨り退步の觀あるは洵に痛嘆の至りといふべし。是れ多數の人士が文章に重きを置かざるに由ると雖も、從來作文法を敎ふる完全なる書籍なきも亦其一因なりといふべし。弊館之を遺憾とし、通俗作文全書を發行し聊か以て此缺點を裨補する所あらんとす。其の目は下に列記す。

第一編 文章組立法 大和田健樹君著
第二編 書簡文作法 同
第三編 美文作法 田山花袋君著
第四編 商業作文法 天城安政君著
第五編 評釋支那時文軌範 青柳篤恒君著
第六編 紀行文作法 西村醉夢君著
第七編 寫生文範 福田琴月君著
第八編 論說記事文範 河村醉茗君編著
第九編 女子消息文範 西田敬止君著
第十編 書翰文範 森田米松君著
第十一編 日記文範 大和田健樹君編
第十二編 祝賀弔祭文範 石崎篁園君著
第十三編 中等學生文範 山川直五郎君編
第十四編 明治時代文範 生田星郊君編
第十五編 言文一致文範 堀江秀雄君編

言文一致とは何ぞや○言語の目的と文章の目的○外三項 言文一致の大勢○過去の言文一致○外二項 言文一致の作法○まづ腹案を立てよ○外五項 言文一致の文範 書翰文範○年始狀○外九項○記事文範○佐渡國羽田濱○外九項○敍事文範○猫の綸棄書○外九項○解釋文範○日本人種○外九項○議論文範○戰後經營の要は軍備にあり○外九項 言文一致の注意○言語に關する注意○外五項

續刊
古今名家尺牘文集
才媛文
英語商業作文
雅俗はがき文範
古今文人逸話
古今名家文話
英文作法
作文熟語類字聚

(己の三)

販賣用電話 本局二六〇二番
東京 博文館 本町
振替口座番號 第二百四十番

素顔は常に何を以て美しくするか？

日本第一のクラブ洗粉は舶來石鹼よりも秀でたる文明の化粧品にして美身術に妙ある爲高評頗る盛なり



(己の四)

クラブの如き洗粉を以て其美を増す

クラブは三越呉服店を始め各化粧品店にあり

高輪御殿のお附人





前列左端の老女は侍女取締國久猷子、束髪婦人四名は御側役、其他はお召物并に御食事掛なり、猶洋裝の婦人は侍女大河内峯子にしてこの寫眞は周宮殿下の御撮影遊ばされしものなり

專賣特許

防寒用男女衛生股引發賣

冬季に於ける旅行用唯一の適品



▼本品は專ら衛生と實用の二點に留意考案せし斬新の製品にして發賣以來滿都衛生家の大賞賛を博し居候に付き尚進んで此に發賣す

製防寒物

▼本品は最上質の兩毛ネル地を充分に使用し腰廻へ特種の藥を侵染したる眞綿を挿入しまい裏の仕立なれば上部は腹代用となり裁縫け最念入れ所謂東京誂仕立にて耐久に出來居候▼本品は單人○男女○會社員○自轉車乘等には最も適當にして○馬上又は椅子に依る時一度着用すれば温柔の快感忘る能はず冬期旅行には最も缺べからざる良き品でありります▲御婦人用は着用の儘兩便に差支なく至極便利に出來て居ます

乙種 一着一圓四十錢 小包料八錢
男女 二着二圓七十五錢 小包料十二錢

見本 販賣
市内 地方 御望の方は御約束可申上候

發賣元 特許衛生股引商會
東京四谷傳馬町一の三三（振替口座一一五五一）
代表者 熊田伊兵衛

御注文の節はズボン下製なるか股引製なるかを御記入の事

（都下某大新聞の評）防寒用ズボン下股引 四谷區傳馬町一丁目特許衛生股引商會の發賣に係る同品は腰廻りへ特種の工夫と衛生藥品を浸したる眞綿製防寒物を挿入し洗濯の取外し自由に出來殊に婦人にても着用の儘便用なし得る如き至極輕妙にて時節柄缺くべからざる必用品なる上價格も低廉に調進すると云ふ故に賣り出し以來世の賞讃を博し目下多大の注文に追はれつゝある由なり

中部不折君畫

水彩繪手本

花卉山水人物

各輯 正價五十五錢 郵税四錢

●第一輯目次
（一）鳥歌花舞（春の景色）
（二）暢神養素（菜）
（三）萬濃香雲（梅咲く花）
（四）空濛幽清（雨の日）
（五）富貴安樂（牡丹）
（六）閒店養志（夜の景）

●第二輯目次
（一）詩情畫意（橋鳥渡）
（二）神怡心靜（挿櫻）
（三）江山清爽（諏訪湖畔神祠）
（四）雅趣高逸（オダマキノ花）
（五）月淡煙沈（綾瀨川ノ新月）
（六）發神保壽（枇杷ト林檎）

東京 博文館發行

●●婦人科小兒科專門

午前宅診 午後往診

東京市麴町區飯田町四丁目九番地

女醫 鷲山彌生

女（庚の一）

明治四十一年 お伽界の大發展

(小波山人の大活動)

明治文壇空前の大作と傳へられたる、我が小波山人の世界お伽噺は、創刊以來茲に十個年を閲みして、滿天下の喝采聲裡に、全部一百卷を完成するに至れり、而も編者が精力と材料とは、決して之が爲に盡きたりとせず、否、更に筆硯を新にして、進んで第二期の大發展を試みんとす、聞けその新計畫を！一を『世界お伽噺』の後身としてより面白く、より奥深き、

●世界お伽文庫

毎月一回發行　菊判頗美本　紙數百餘頁　挿畫木版二十個入　正價一册 金拾三錢

とし、他を『幼年書報』の弟分として、よりあどけなく、より美しき

●お伽畫帖

毎月二回發行　四六判頗美本　極彩色石版十六頁　正價一册 金六錢

なりとす、蓋し前者は、世界お伽噺に比して、體裁更に美に、紙數更に多く、價は僅に之が倍額に過ぎざるも、興味は之に幾倍するを知らず、後者は又之に反して、形と價は幼年書報に半ばすと雖、其實質に至ては、毫も差あるを認め難し、而して共に小波山人が、例の獨特の快腕を揮つて、趣味と實益とを等分に調劑せるもの、新日本の少年少女が、坐右に缺くべからざるの良籍、此の二書を措いて他にあらんや、
且又本館は、此度世界お伽噺完成を祝して、特に之が紀念の爲に、製本に意匠を凝らせる

●合本 世界お伽噺

クロース製美本全部十卷

を發行せんとす、思ふに是れ、家庭書庫の好裝飾、將た賞品進物の好材料として、優美に又有益なるもの他に比あるを見ざらんとす、尚發行方法に付ては他日を期して更に細説せん。

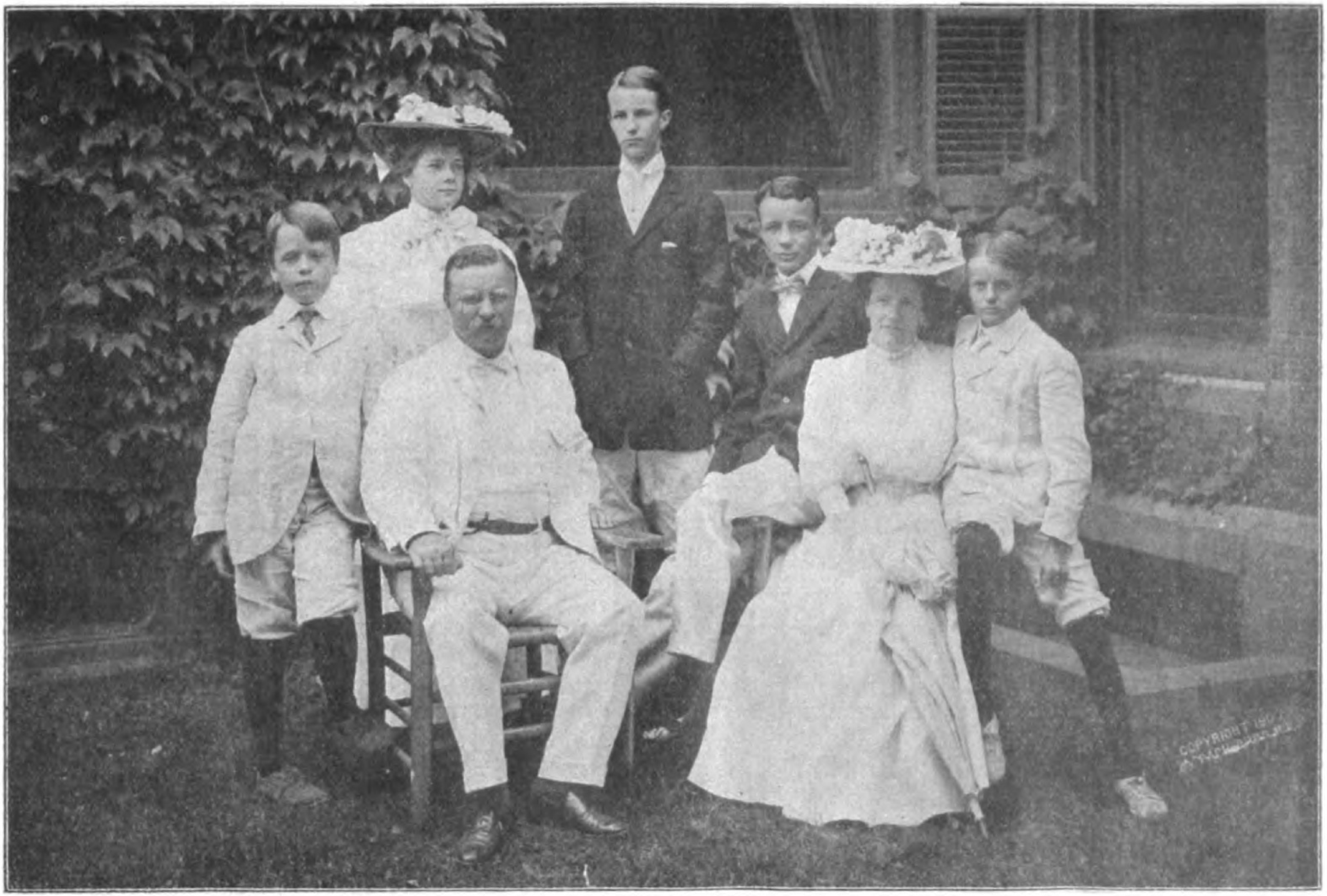
(廣の三)

販賣用電話 本局二六二〇　發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館　振替貯金口座第二百四十番


醬油發賣廣告
登録商標
ヒシニホン
フジニホン
マルニホン
醬油釀造界の一大革新
弊社は前人未發の新發明にかゝる嶄新にして完全なる鈴木式釀造方法及び機械的装置により精良無比の醬油を釀造販賣す
(特色)
一衛生に適す
一經濟に宜し
一滋養に富む
一嗜好に叶ふ
●丸日本印特別製甘露醬油　は本社特得の複式再製にかゝる逸品なり香味の醇良にして滋養分の豐富なると他に比類なし
●富士日本印最上醬油　は品質濃厚にして風味の美なると在來の製品に優る數等也
●菱日本印最上醬油　は品質富士日本印と同一なるも淡泊にして極めて調理に適す
販賣所は　合資會社日本醬油東京販賣所
日本橋區北新堀町　電話浪花一四六番
又は到處の酒醬油問屋及び販賣店にあり
資本金壹千萬圓
日本醬油釀造株式會社
東京市
深川小名木川通

女(庚の四)

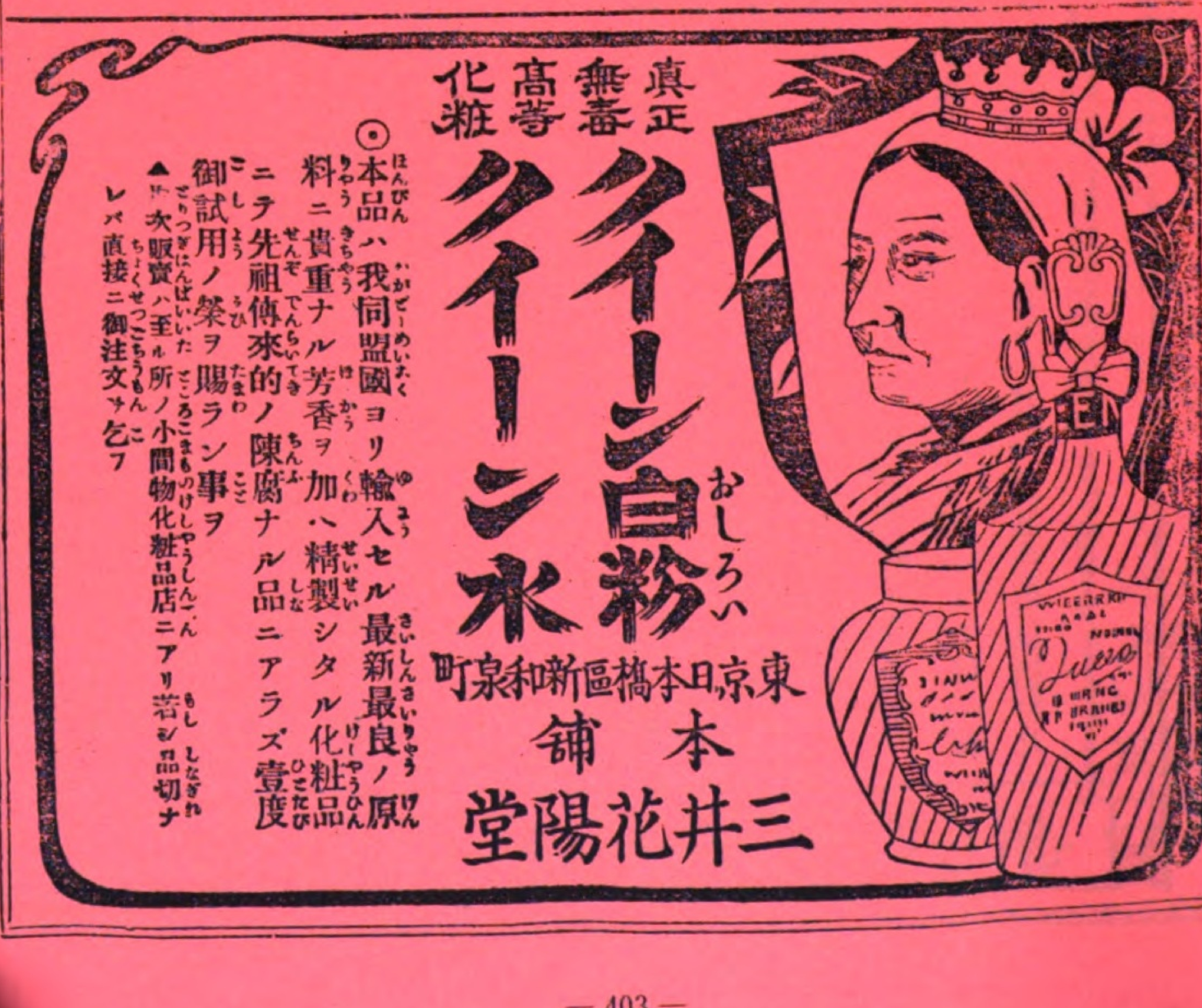
米國大統領の一族



恭賀新年



陸海軍諸官省御用
各博覧會ニ於テ賞牌受領
日本一据風呂
銅製
五徳竈
東京日本橋通油町
石川商店
電話浪花一四一六番
振替口座一二〇一八一番
商品目録郵税二銭送レバ呈ス



真正
無毒
高等
化粧
クイーン白粉
クイーン水
◎本品ハ我同盟國ヨリ輸入セル最新最良ノ原料ニ貴重ナル芳香ヲ加ヘ精製シタル化粧品ニテ先祖傳來的ノ陳腐ナル品ニアラズ壹度御試用ノ榮ヲ賜ラン事ヲ
▲取次販賣ハ至ル所ノ小間物化粧品店ニアリ若シ品切ナレバ直接ニ御注文ヲ乞フ
東京日本橋區新和泉町
本鋪
三井花陽堂

女(辛の一)

醫學士 石原喜久太郎君著

新編家庭衛生

近日發行

全一册

洋裝菊判美本

紙數五百五十頁

石原醫學士醫科大學衛生學教室に在りて斯學の研究に從事すること玆に多年、傍ら或は演壇に或は諸雜誌に、衛生思想の鼓吹普及に努力せらるゝは人の知る所、近者揭題の一書を完成して之を本館に授く、著者本書の目的として記する所を見るに、『一國の衛生を進めんと欲せば先づ一家の衛生を進むべし、一家の衛生を進めんには、家事の實行者たる主婦に衛生思想を鼓吹普及するに如くはなし』と、是れ本書の生れたる所以なるべし。

本書の前編『諸論之部』は衛生に關する汎論にして、後編『各論之部』は○住居之衛生○衣服と飲食物○季候と衛生○旅行と轉地○小供○姙娠と産蓐○病氣の七章よりなり、衛生上の諸題目を、凡て是等各項内に網羅して細大漏さず、殊に行文は平易通俗、論者は實地應用を主とし、敍事明晰、說明懇到、高尙なる學理をも難澁なく說示する底の面目は、確かに多年の蘊蓄深きを窮るに足る、之を家庭に備ふれば一家衛生の良指針たり加ふるに又、醫師、醫學生の良友、諸學校衛生教科の參考書たるに適すべし

發兌元 東京本町 博文館

(辛の二)

(女辛の四)

巴里の社交界



紡績工女の作法實習



京都鐘ヶ淵紡績會社の工女學校



同上

藤村島崎春樹君序
理學博士齋田功太郎君閱
農學博士稻垣乙丙君閱
田中貢一君著

花物語

洋裝菊判總クロース美本
紙數約五百頁
着色石版、繪十數葉
挿圖九十四個

近日發行

著者は、植物學者にして、當時農科大學に其が專攻の學を修めつゝありと雖も、兼ねて文學に對する趣味深く、其造詣の深き、往々世人の意表に出づるものあり。著者は、世の所謂科學者の思想の餘りに乾燥にして、一に組織的事實の歷史家に過ぎざるを慨せられ、花界百般の事項を、一般家庭はいふに及ばず、其道にあらざる諸學生、或は文學者、神學者、哲學者等と雖も、無量の趣味と、絶大の興味とを以て、覺えず卷を解かしめ、自然の美妙、壯嚴を味ひ得しむる樣、特に小說として發表せられたり、本書は、五月に於ける金鳳華孃の講話に始まり、翌四月の春蘭伯の物語を以て終る、書中、愛らしき花子、勝の兄弟と、美はしき此等由花との間に縷々として演出さるゝ光景の、如何に優しく、將た興味深きかをみよ！而して之が副たる幾千の由花の如何に書中に活躍たるかを見よ！書中の花は、悉くこれ活ける少女活ける紳士なり。花の聲は、悉くこれ活ける天の聲なり、其內容の豐富、該博にして記事の痛快、切實なる、此種の書類中未だ曾て見ざるところにして、優に、現時の自然科學界に於ける、破天荒の作物として推重するに憚らず。世の所謂文學と科學との調和を云々するの士は、先づ一度本書を繙かざるべからず、信仰なく、生命なき世の科學者は、先づ本書によりて活きざるべからず、哲學者、神學者、夢想家は、先づ本書によりて、自然の美妙に觸れざるべからず、而して一般家庭の自然科學界に於ける好讀物としては、實に本書を措いて他に求むべきなし、著者の豫言に曰く『我邦の科學界は、早晚此種の書類によりて、其蒙を啓くに至らん』と然り、而して花物語は實に之が魁をなせるもの、思ふに、本書が、やがては滿天下の人士の極愛者ともなるに至らんは、豫め期待するところなり、

販賣用電話 本局二六二〇
發兌元 東京日本橋本町三丁目 博文館
振替貯金口座 第二百四十番

（壬の一）

文學士 久保天隨先生精解

日本外史新釋

◉全部拾貳冊

◉毎月一回發行

毎編 和裝美本 紙數約三百頁

◉第一冊以下非常の好評にて既に數版に及ぶ

賴氏の外史は、その一生の心血を注ぐところ、世道人心を裨益せし功固より少からず、且つ漢文講習に益あること言を俟たず、これ家藏戸誦今に至りて尚ほ廢せざる所以なり。その講義の如き、坊間頗る是ありと雖も、その完全なるものを求むれば、遂に指を屈するに及ばず。天隨氏こゝに深く慨するところあり、乃ち平生の蘊蓄を傾けて、此書を著はさる、兎を搏つに獅子の全力を盡すは、適まその婆心の極めて深切なる所以、精該詳備、まことに賴氏の忠臣羽翼たるに負かず。この書一たび出でて初學幸に津梁あり、その業をなすに際して、唯だ易きを見て難きを見ず、將門の興廢を詳かにし、國史の大半に通曉すると同時に、讀書力の涵養に資するの便あるべく、一擧兩得勞半にして功必ず倍するものあらむ。

正價一冊金參拾錢 郵稅一冊金六錢

前金 六冊金壹圓七拾錢 十二冊金參圓貳拾錢 ◉外要郵稅

目次

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

（五の二）

伊達奥洲君著

女性觀

附 通人漫語

著者は日夕繁惱なる業務に從事せる某少壯事務家なり彼れが半生の世故風流の間に贏ち得たるもの之を「女性觀」幷に「通人漫語」となす、名の實に伴はざるは世間ありうちのことなり、獨り之を本著に於て怪むを要せず

三六版洋裝石版表紙美本
紙數約百八拾頁
定價金貳拾錢
郵稅六錢

上眞行君序　東儀鐵笛君著

音樂通解

近時吾が樂壇の興隆に伴ひ、音樂書の刊行日を逐ふて盛なり、然れども其多くは實際演奏用の樂譜の類か、若くは單に符號を說明したる普通の樂典に過ぎず。本書の如く音樂の全般に關し樂理と實際との兩面に亘りて西歐大家の名說を參酌し以て音樂の要義を解說せるもの未だ他に類例を見ず、殊に行文平易にして、何人といへども容易に音樂の趣味と智識とを修養し得べく、音樂家、音樂教育家は勿論、苟くも音樂に興味を有する人々に對して裨益する所、蓋し尠少ならざるべし請ふ一讀して本書の眞價を知り給へ

全一册

洋裝中判製本優美
正價五拾五錢
郵稅六錢

女(壬の三)

販賣用電話二六二〇番　東京本町　博文館　振替口座第二百四十番

（壬の四）

大日本淑女學會

會員募集

講義録は何時にても一號より送る

▲御自分のお宅に居って高等女學校の課程を講習しやうとする方は、本會におはいりなさい

▲本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義録を發行します。講義の親切丁寧なことは云ふまでもありませぬ。新式の教授法によって獨習に最も便利な方法をとります

▲卒業は二ヶ年で會費も低廉であります

▲會員には講義録の外『姫百合』と云ふ美くしい體裁の利益になる女學雜誌を毎號無料で進呈いたします

◉詳しい規則書は申越次第差上げます

◉東京神田駿河臺（電話本局三千四番）

大日本淑女學會

本會の講義録

▲大判三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は專門女子教育家也
▲科外講師は博士學士廿家
▲毎號科外講話を附録とす
▲純潔高雅の家庭小説あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期毎に修業證書を與ふ
▲講義録は貳ヶ年完結とす


女學世界
定期增刊
都會生活
第八卷第貳號
一月十五日發行



都會生活の婦人は長命なり

法學博士　新渡戸稲造

△都會生活は何故に長命なりや

婦人の都會生活と云ふ事に就ては、私は豫て『農業本論』に書いて置いた。勿論之を書いた當時は自ら新説を立てた積りであつたが、其後色々の書物で自分の説と同じ事柄を諷してゐるのを往々見受ける。それは詰り婦人は都會生活が宜しいと云ふ事に歸するのである。『農業本論』を繰り返すやうではあるが。女學世界の讀者は、よもや斯う云ふ書物は御讀みになるまいから、茲に統計や學術じみた點を除いて其の大體を話して見ると、實地に就て觀察しても、又統計上から見ても、婦人は都會に居る方が田舎に居るよりも遙に長生をするやうである。又同じ壽命を保つとしても、婦人は都會に居る方が病氣が尠ないやうに思はれる。

其の理由は判然せぬが、或は、田舎ならば勞働に撰擇の自由が少なく、從つて婦人と雖も殆んど男子と同じ仕事をせねばならぬ事が澤山あるが、之に反して、都會に來れば分業が行はれて婦人は輕い仕事をして居るからと云ふ事もあらうし、又一つには、婦人は男子と違つてお產と云ふ餘計な大難があるが、田舎では之に對して產婆或は產後の手當が十分行屆いて居らぬ爲め肥立が惡くても何とも致方が無い、然るに都會に於ては此等

に處する設備は十分に整つて居ると云ふ事も原因であらう。それに或は臆説であるかも知れぬが、女子は其の心理上、若し社交的の便利が無いとすると、甚く寂寥を感ずるものかと思はれる。

△井戸端會議の利益

平たく言へば、道徳上譽むべき事では無いが、彼の井戸端會議は、互に遠慮なく饒舌り立てゝ己が欝憤を晴らし、又聞かんとする所を聞くなどして、胸中の悶悶を吐き出す一つの設備であつて、女子の生理作用の爲には惡く無からうと思はれる。私は立聞をするわけでは無いが、婦人方の談話を往々傍で聞くに、其の十中の七八分迄は他人の噂で、而かも良い方面で無くて瑕探しである。無論之れは譽めた事では無い。併し此の饒舌ると云ふ事の生理的の效果は頗る宜いかと思ふのである。

と言つて私は決して他人の瑕探しを賛成するのでは無い。道徳上の教訓と生理上の效果とは必ず一致するものと思ふから、道徳上可かぬが生理上宜いとか、生理上可かぬが道徳上宜いとか云ふやうな事は無いと信ずる。乃ち他人の噂も惡口で無くしてするやうにしたならば、生理上の效能を保存して道徳上の惡い點を省き得るわけである。だから井戸端會議の如きも、人の惡口で無く長所を譽め謳ふとすれば益々效能があらうと思ふ。

△獨り居ては惡くなる

右は井戸端會議改良策を述た丈で、それ迄にするには尠なからず品性の養成を要するのである。併し其の養成が無ければ井戸端會議は全然惡いかと言ふと、左樣で無い。其れでも銘々が田舍に居て話し合ふ人も無く燻つて居るより宜いと思ふのである。尤も學問ある婦人は、田舍の靜閑な處で獨り居るが宜い、他人の惡口を言はうよりは深山隱れの身となつて此の塵埃の世を避けるが増しだなどゝ高尚な事を言ふかも知れぬが獨りを愼むとは餘程進んだ人の事で、或る程度迄進ん

だ人で無ければ、獨り居ては反つて惡くなつて來る。否寧ろ野獸的になる。が、田舍に居て野獸に化するか、都會に出て口惡るの女になるかは大に考へもので、孰れも良いとは言はぬが、一體人間進化の大勢に鑑みれば、人類が其の部落なり都會なり漸々に大きな團體的に生活する傾向あるは爭ふべからざる事であるから、其の大勢に合ふやうな人間が即ち進化するのであらうと思ふ。有りふれた言葉であるが、人間は社會的の動物である。今日は其の共同生活をなべらかに出來ないで「我」の元素が勝つて居るから、不愉快な事もあらうけれど、天の定めたる大法は、集合的に睦まじく共に暮すにあらうと思ふ。無論之れは男子も同じである。

△程善く刺激する

然れど、之れは心理學者の研究材料に供したいが、心理學を知らぬ私の憶測に依ると、男子の頭腦に印象する事柄は、都會に於ては女子よりは一層深く劇烈しく當る、男子は責任の重い丈けに腦髓を痛める事も多いので、餘程健全な神經系を有つて居る者で無ければ、長らく集團的の生活に堪えられない。故に長く都會に居れば、生理的に弱つて來て、子を生む力が弱くなつたり、或は發狂する者が多くなつたりするから、折々は都會を去つて、田舍に轉地し、海濱に行くなどして群集と遠かつて靜養する必要は男子に多いのである。之れに反して女子は頗る機敏な頭腦を有つてゐるが、其の外部の刺激に感ずる度合は甚だ淺いやうである。と云ふものは、女子は、例へば京橋區の眞中に居ても、家の外に出る事は甚だ稀れである。よし出るにしても町内の外を歩く事は月に數回に過ぎぬのであらう。即ち女子はたとひ都會に在るとしても、其の一家及び直接周圍の狀態は、田舍に居た時とは、男子程の差違が無い。言ひ換へれば都會の女子を刺激する具合は丁度程好く出來て居るやうである。尤も今後女子が益々社會の事に奔走し、男子同然に勞力するやうになれば、大に樣子が違つて來やうが、たゞ今の有樣にては、女

子は都會生活の方が好いやうである。然し之れとても代々續いたならば、必ず身體にこたへるであらう。即ち若い婦人が田舍から出て東京で子供を生み、其の娘の子が東京で暮し、其又娘も東京で暮すと云ふやうに、都會でのみ生れて育つと云ふことになれば、たとひ女子の身體にしても、男子と同じく好く無い影響を受けやうと思ふ。併し其邊は講究の餘地が澤山あるから、固より斷言は能きぬ。

△或る程度の裝飾

其他女子に都會が好いと云ふ理由は下の如くである。一體、つまらぬ事でも日々幾度となく繰り返して起る事程大きな結果を齎すものは無い。無味い米でも日に三度づゝ食へばこそ命が續くのである。月に一二回食べる紅葉館の御馳走は如何に美味いにしても、其れよりも毎日食べる豆腐汁、菜葉の味噌汁が遙かに勢力がある。其れと同じ樣に、婦人が都會に在つて毎日の暮しの中で田舍と違つて好いと思はれるのは身を飾る點である。無論度を過しては惡くなるが、或る程度迄之れが無ければ生理上却つて惡い結果を起すのである。私は田舍へ行つて見て何時も其樣思ふ。家内の掃除の不行屆な事は言ふ迄も無く、勞働するから止むを得ぬかも知れぬが、其の着物の着方のだらしない事、不潔な事は甚だしいものだ。髮なども櫛を何日前に入れたか分らぬやうな風をしてゐる。寄生蟲のわくのは當然である。然るに都會に來ると其れが能きなくなる。少し賑やかな處に居れば、毎日井戸端へ出るにでも、髮をかいて行かねばならぬ、着物はサッパリしなければならぬ、又姿勢も田舍に居る時と違つて改めなければならぬ。即ち此の心掛より起る生理的の結果は、女子の爲に大變に好いと思ふ。

△薄つぺらも宜し

尙は一つ好いと思ふ事は、都會に居れば、如何に微微たる境遇に居ても、田舍に居るよりも大きい事を聞く。國家の問題などでも號外なり何なりに依つて自然

話題に上る。其の代り田舎に居るやうに鳥の聲を聞いたり、花の咲くのを日々刻々眺めて居る事は能きない。然れ共、都會で聞く事は自然界の現象よりも社會的人類的の現象が多いから、我れも社會の一分なりと云ふ思想を知らず識らず懷いて來る。此はつまり良い事も惡い事も他人と共に分つのであるから、田舎に居るやうに悲しい時にも獨りで泣き、嬉しい時にも獨りで笑ふ事は能きない。泣きたい時に思ふ存分に泣き、笑ひたい時に腹を抱えて笑ふ事は能きない。故に都會は人の出來方が稍々深みを缺いて薄ッペラになる。併し薄ッペラになるのは好くないやうであるが、中流以下の者は此の方が却つて好いと思ふ。悲しい時には腹を破る、嬉しい時には雷鳴轟く、と云ふやうに、思ふ存分に泣いたり笑つたりする奴は實に偉い人物である。偉い人物は天下の大事に當る。そして偉ら云ふ人物は多く田舎から出て來る。然れ共偉ら云ふ者は國に幾人か有れば宜いので、其他の靜に笑ひ、窃に淚を拭ふやうな者が國の基礎を占めるのである。其れで好いのであらう。都會に生活して薄ッペラであつても、社會の一分と思ふて他の人と交際をする、世を渡つて行く。婦人には特に之れが好からう。だから何うしても婦人は都會に住むが好いと思ふ。

△去就の分界

と言ふと、田舎の女學生は忽ち都會へ出やうと云ふ考を起さうが、其れに就て尚は少しく述べて置かう。一個人の性質の差は暫く措いて、廣く一般人に就て言へば、生理上何か一ッの作用があつて、或る年齢に達する迄は矢張り田舎が好いとか、或は或る年齢以後は田舎は好いとか云ふ事は必ずあらうと思ふ。之に關した事は『農業本論』にも言つてある。弱い子供を養育するには、田舎へ伴れて行くと利目がある。判然言はれぬが詳しく調査したら右身體發育の程度に依つて女子の都に行くべきか鄙に行くべきかと云ふ事を決し得るものと思ふが、今日の心理學や生理學は未だ其れ迄に進んで居らぬであらう。其れなら右の問題は如何に

處分するかと言ふと、先づ田舍に居る娘さんは急いで都會へ出さぬが好い。都會化するは男子よりも女子が早い。又都會へ來たいと云ふ希望を懷つのも矢張り女子が早い。ちよと流行のリボンを見て直ぐ都會へ來たがる事は屢々目にする。が、父兄たる者は先づ田舍に居れと勸めて都會に來るのを防ぐが好いと思ふ。

△一家の事情

さうすると私は甚だ矛盾して居るやうだ。都會は好いと言ひ乍ら、都會へ來る事を防いで居る。然れど、果して都會生活が女子に適するものならば、人間の饑餓たる防禦策で止まるもので無いから、都會に行く志願が果して自然的に起るものならば、之を防ぎ切れずして女子に心理的或は生理的の病氣を起す徵候があらうから、其時出したら宜いであらう。たゞ之を識別ける事は却々困難である。此の願望を滿し得ざるが原因で病氣になつたか、或は他に原因があるか判り兼ねるから、他の原因を作らぬやうに一家を睦まじく、平和で、愉快にして、我が家を出るのは家を逃げ出したいからと云ふ事の無いやうにして置かなければならぬ。之れは繰り返して言つて置きたい。屢々聞く事であるが、都會の料理屋、宿屋、工場等に若い女が如何して來て居るかと言ふと、繼母が苦しいからと云ふのが十に六七分であると云ふ。彼の醜業婦になつて居る者等を調べたら、其九分通りは恐くは繼母が原因をなして居やう。左も無くば親兄弟等が家に在つて我儘をするから都會へ出たいのでは無いが家を逃げたいと云ふのが澤山あらう、學生などは斯る下等勞働者とは違つて居るが、尙ほ其中に休暇になつても家へ歸りたくない者は尠くない。之れは餘暇があつたら寬くり統計を取りたいが、今日東京に幾萬の女學生が來てゐるが、一一々家の事情を統計にして見たら、恐らくは一家の不和を厭ふて逃げて來たのが半分、單純な上京が半分でなからうかと思はれる。故に娘は家から出す事をせず、成るべく家に止めて置くやうな境遇を備へて、其れでも尙ほ都會の引力が強いならば、其時初めて國を去る事を許すとしたら宜からうと思ふ。（記者筆記）

都鄙生活の側面觀

農學博士　横井時敬

都會は試驗場

都會生活といふものは、元來男に取つても一種の試驗場であると思ふ。まして女子に取つては最も甚しき試驗の場處である。大いなる榮譽とか大いなる富とか、盛んな事業、高い地位とかを得るといふ方面には、都會の方が田舍よりも比較的機會が多いかも知れません、けれども然ういふ立身の機會の多いだけ、又墮落の機會も極めて多いものである。うまく行けば男女共にえらい出世が出來る代り、一つ間違へば墮落して見るも哀れな状態に陷るのが都會の生活であります。つまり都會は優勝劣敗——浮き沈みの劇しい處、敗れて谷底へ落ちた時の苦しさは一通りではないが、又忽ちにして勝者の地位に移ることも出來る、かと思ふと動もすれば又榮耀の地位を失ひ易い。恁樣に事が極端である。その所謂極端の無いのが田舍だと思ふ、都會は善い人も惡い者も澤山居る處、善い娯樂もあるに相違ないが、惡い娯樂も亦極めて多い。然もその娯樂が安價く買へて、殊に惡い娯樂が人を誘惑せんと努めてゐる。この惡い娯樂を惡い人とに關係するところから、遂に暗黑の淵へ引込まるゝやうになるので、又生活も田舍に比して極めて困難な處であるから、その點からしても屢々婦人が墮

落に近づく機會を生ずるので、何の方面から申しても、都會は言はゞ極めて危ない試驗場である。

何で失敗し易いか

よく男から女を見て、女といふものは屢々奢侈に陷り易い人格のものだと言ふ樣ですが、男にも隨分奢侈を極めたものがあるので、私は何方が何方だかと疑ふのであります。此の間も或る西洋人が、女子は趣味の劣等なるを免れないものである、獸の皮などを無暗に附け、鳥の羽などで飾り立てゝ得たりとしてゐる。殆ど奢侈が唯一の娛樂なので、這麽低い趣味より外はなく、到底男子と比較の出來る者ではないと言うて居たが、實は何とも言はれないので、男子も隨分婦人以上の奢侈をする事はなからうか。又婦人は男子よりもひどく虛榮心に富んだものであると言ふが、これとても一槪に婦人には限らず、男子の虛榮心も却々盛んなものである。然しながら矢張――奢侈を行ふ程度の何方が上であるかは兎に角――それに注意を奪はるゝことの甚しいのは矢張女子で、女子は往々にして全心をこれに奪はれて了ふ傾がある。然もこの奢侈と虛榮が都會には大流行するので、これが都會に居る婦人の比比として失敗する所以である。で、これが爲に兎角墮落し易く、墮落しても又小さな虛榮心を滿足させようとする。これは遂に婦人に附隨する一つの缺點かも知れない。

上京するは是か非か

もし或婦人が上京して一生最うその都會で送る事に決すべき事情があつて出てくるならば、それは早く上京するも可からうが、隨分中には必ず田舍に歸るべき運命を持つて居る婦人や、もしくは十中七八までも田舍に住ふべき運命のある婦人を、殆ど無條件で手放して都會の學校へ遣す父兄があるが、あれ等は寧ろ殘酷の處置であると思ふ。前に申した樣な失敗をして身を誤らなかつたらば、まづ儲け物位なものであらう。のみならず歸るさには、惡い奢侈の空氣を田舍の鄉里

へ持込んでゆく。奢侈は雅びるで、何時も都から來るに決まつたもの。その弊風を輸入して醇朴な田舍の空氣を濁すのは、毎時都歸りの婦人である。けれども其れ位の事ならばまだ可いのであるが、動もすれば又救ふべからざる瑕瑾を負うて、人目を羞ぢて歸る女子も尠なからぬに違ひないのである。西洋でも巴里などに徘徊してゐる墮落せる如何はしき婦人は、田舍から——女教師志願などで——出て來たものが餘程多いといふ事である。日本などにも例は既に澤山あることでありませう。然も又そんな墮落した所行をしてゐても、都會では一寸目に立たぬだけに猶困る。それでもまだ新聞に墮落女學生とかいつて出る内は頼母しいので、もう其麽事は珍らしくないといふので、出なくなるかも知れない。さうなつたら既うお終ひであります。元來日本では——西洋にもありますが——學校が餘りに大きな都會に集まつて、所謂中央集權になつてゐるのが考へ物で、大都會の學校は教師からが奢侈に流れてゐるのだから、生徒もさうなるのは寧ろ咎められない位なものである。又小都會とても、その場處が遊覽地ならば無論宜くないので、私は京都の樣な處はとても女學校を置くべき處ではないと思ふ。だからその地方々々に女學校があるならば、何も大都會へ出てくる必要は少しも無いので、それを今後益々女學生が大都會へ出たがり、そして都會の奢侈の風に染み、その惡風俗を田舍へ持込むといふ勢ならば、田舍を荒すといふことは、これは重に女學生から起つて來はせぬかと思ふ。さて、

最も注意すべき事

は、女學生が家庭を離れるといふことである。男子はまだよい——とは言ふ條。殊に中學程度などは男子とても善くないのに、況んや女子に於ては家庭を離るるのが第一に善くないことである。英國の或學者が近頃言ふたことに、何が教育の根本問題かといふ、その根本問題よりも更に根本の問題は、子供が親と自然とに常に接するといふ事である。といふて居ります。こ

れは獨り子供ばかりではありません、年を取つても女といふものは、親と自然とに接する機會が多くなければなりません。下宿屋住居で少しの學問をしたばかりで、家庭の眞の味といふものを教育されて居らぬ女子は、家庭に入る權利がなからうと思ひます。下宿屋上りの婦人を妻にする男子は、餘程惡い月日の下に生れたものに違ひない。實に下宿屋生活上りの妻君には恐れ入らざるを得ないのです。この頃の新聞？にさういふ妻君が、下駄穿きの儘で臺所へ上るとかいふ事が出てゐましたが、まあ其麽ものです。家庭的の訓練といふものは、下宿屋では出來ぬ、寄宿舍でも出來ぬ、家庭を離れずに學んで居らねば、良家庭の人にはなれぬですから女子を妄りに家庭から離すといふ事は、廣く言へば社會の不經濟であります。近來は又若夫婦別居論などを聞くやうですが、これも亦不經濟。といふのが金錢上の事を指すのではない。親の得たる家庭上の經驗を學ばずして、再びその失策を繰返すことをいふのであります。老夫婦と同居するは、又それだけの家庭の味があるのみならず、辛苦もなく其の經驗を學べるから失策もなく、從つて財政上に益あることも勿論である。凡そ何が不規律だといつて、若夫婦ばかりの家庭ほど不規律なものはありません。それが漸う規律の立つ時分には、さんぐ＼失敗を繰返してゐるので愚かな話ではありませんか。

傳説を改良すべし

老夫婦と若夫婦とが別居を好む樣になるといふのが、一つは謬れる傳説の影響だと言ふてもよいと思ひます。それは外でもない、姑は嫁をいぢめるもの、嫁は姑と衝突するものといふのが、つまり彼れは傳説になつてゐるので、世間で然うしたものと決めて了つて傳説的に語り傳へ聞き傳へるから、何とはなしに然ういふものに思ひ込んで了つて、さてお互に妙な感情を持ち合つて面白からぬ事が初まるのである。恰ど繼子の事と同じ樣なもの、繼母が繼子をいぢめるものだといふ樣な話を、小學校などでして聽かせるのは以ての

外な事だと思ふ。そんな風に傳説的に敎へられるから自分から嫌疑心を起して、僻んで、事毎に厭な擧動をする。繼母の方でも惡くなるといふ樣なもの。嫁姑の間も同じことだと思ひます。歐羅巴では妻君の母が婿をいぢめるといふ。日本で藝者の母がその藝者の亭主を苛るといふ樣なものですが、これも傳説的になつてをるのである。それは兎も角所謂下宿屋上りの妻君などには避易せざるを得ぬ、以上はどうしても婦人は家庭の味に養はるゝ樣にしたいので、實際料理のお稽古をして醬油がいくら、鹽がいくらと目方をかけてやつて見ても、それで庖厨がいくものではなく、裁縫も新らしいものゝ外は、繼ぎ洗濯は出來ないといふ樣な事ではだめな話。のみならず眞の家庭の味といふものを解するには、どうしても親や自然に常に接すべしといふ說の如く、常に家庭を離れぬが宜しいのであるから、都會などゝいふ危ない試驗塲へ出るが爲に、妄りに家庭を離れる樣な事はしたくないものと思ふのであります。此の意味から言へば『住まば都』などゝいふ傳說(諺)はよして了つて、住めば何處も都といふ傳說のみに改良したいと思ふのであります。(みし生筆記)

日記帳に題す

けふより初めて一年間の、出來事はいふもさらなりわが行ひたる事、わが思ひたる事、巨細漏らさず、あからさまに記しつけんとす、かくて除夜となりて此の日記帳に示すも恥かしかられば、こは我が行爲にうしろめたき事なきしるしなり。昔しの人は紅白の糸を結びて我が行の善惡を驗せし人もありとかや、わが此の日記つくるもまたその心なり。されば此の小册子は唯わが過去の記錄のみにはあらで、實にわが道德の晴雨計なり。昇るも降るもわが心一つにあり。愼めざるべけんや。

都會と田舍と 生活の眞味は何處にありや

地方人の思ひ違ひ

佐治實然

まづ田舍の人が都會を觀る見樣が、多くの人について經驗して見るに、餘程見當が違つてゐるやうに思はれます。それは何ういふ譯かといふに、東京といふ處は譬へて言へば三月の雛を並べたやうに、たゞ美麗な人が、善い衣服を被て立派な街を歩いてをる、何處の家へ行つても生活が優美で實に豊かに暮して居るものだといふ風に田舍の人は考へてをるのです。これはもう事實で、私が去年郷里へ歸つた時に姉などが矢張さういふ風に考へて言ふてをるのです。そこで却々さういふものでなく、東京は凡そ日本一の富豪からして、日本一の貧乏人まで寄り集つてゐる處で、今こゝで貴姉が然ういふ衣服を被てござるが、東京へ行つても其れ位なのは先づ中流の服装で、決して最下等ではありません……と段々東京の模樣を話すと、初めて合點が行たといふ顔付。然ういふものですから、先づ都會が人間の生活に與へる總ての點について、餘程考を要することであらうと思ひます。

アーヴィングの面白い喩へ

それで私は都會なり地方なりの生活が人に道德上の感化を及ぼすといふ事について、近頃考へてゐる事がありますが、まづ田舍の方を見れば、殆ど片田舍の山懐に五十戸若しくは七十戸と一村落をなして、昔から今日まで、靜かに農業や養蠶に從事して暮してゐるのであると、今日のやうに經濟上の變動が激しいにせよ――それは多少昔からの金持が貧乏になり、貧乏人が金持になることもあらうが、それは僅少な事で――餘り影響を蒙らずに、その五十戸七十戸の家族が、凡そ十年前も今日も其麽に桑田變じて海となるといふ樣な、ひどい變化を受けずに靜かに生活してをることが出來ませう。餘程以前に私が讀んだアーヴィングの「スケッチ、ブック」の中にあつた面白い譬喩を、それが餘程面白かつたと見えて、特に覺えやうとも思はなかつたが今に記憶して居るのですが、まづ日本で言はば天龍川とか大井川とかいふ樣な大きな川に、夏の事で強雨が降つて後、濁流が滔々として流れてゐる、川の中央の濁波の勢といふものは實にえらい勢で流れてゐる、けれども其の岸際に恁う岩角でも出來てゐる其の片隅の鳥渡とした處に實に靜かで、昨日見えた木片も浮んでゐれば、今朝見た木の葉も相變らず浮んでゐて、中流の影響を少しも受けずに、いとも靜かに水が澱んでゐる。田舍の生活は恰ど恁ういふもの、世界の大勢は日を逐うて變つても、田舍の生活は變らない。まことに氣安い面白いものだといふ事を、例の優美な筆で書いてありました。それを讀んで眞に然うだと思ふて今に忘れずに居るのであります。恁樣に田舍は經濟上の浮き沈みが極く少なくて安穩なばかりでなく、また、

一村悉く知つた顏

といふ樣な面白い關係がある。例へば縣道とか國道とかいふ樣な――地方ながら幾何か往來の頻繁な道路を前に見てゐても、十町なり十五町なり引込んで、山

の谷間に一村落を成してゐる處に生活して居れば、もし其の縣道國道まで出て行かなければ、一日の中に五町や十町の處を往來し徘徊してをるので、知らぬ人には一人にも出逢はない。もし或人に出逢へば、その兩親からその祖父までもよく知つてゐるといふ樣な人のみの顏を見るゆゑ、自然に血縁の繋つてゐないものであつても、何とも言ふに言はれない濃厚なる人情を持つて交際することが出來る。これもアーヴイングの書いてゐる事ですが、都會の墓地はまるで公園のやうなもの。墓地で人が始終遊んでをる。何度墓地へ行つても悲哀なんといふ感じは一向に起らない。然るに田舎では墓地を悲哀なる場處のやうに考へて、從つて田舎には、例の幽靈話しなどが爐邊でより／＼物語られるのを聽くが、これは尤な話。といふのは田舎の墓地へ行けば、哀れな一つの石碑があつて、それに俗名が書いてあれば、その何某の顏を村人は誰しも知つてをる。あゝ彼の人が何時やら斯ういふ風をして、田を耕して居つたとか、機を仕立て居つたとかいふ事が浮ぶ。その老爺さん老婆さんが此の下に眠つてゐるのだと思ふと、怖いやうにも、懐かしいやうにも、又淒いやうにも思ふのである。處が都會の墓は怎麼に花崗石へ大きな文字で書き付けてあつても、その姓名さへも知らず、勿論顏形も何も分らぬのであるから、その人の死骸が其處に横たはつて居ると思つても何ともないのである。と書いてありました。それも實に尤な話と思ふ。日本の都會——殊に東京などは人の葬式をまるで見物するので、葬式も提灯行列も同じ樣に、店先に立つて喋々と噂しながら見物して居りますが、これに反して田舎の村になると、いよ／＼葬式があつて今出棺といふ場合になり、鈴の一つも聞えて來ると、村中の人が仕事の手を止めて、愈々出棺かと、親類と他人とを問はず、又親しいと疎きとを問はず、皆一種悽愴の感を起すやうになつて居ります。これを見ても田舎の生活の方が人情の厚いといふ事が分るので、西洋などでは都會でも葬式に逢へば、これに向つて脫帽し、又田舎では旅人がそれに出逢へば、それを避つて墓地

迄附隨てゆくさうである。さういふ風ですから田舍では――と言つても決して邊鄙の一村落のみではなく、

私の鄕里姬路

などは全國でまづ中流の都會であるが、それにしても一町内の人の家が十年や十五年に然う變つて了ふ事は、昔は猶更、今日でもないから、從つて近所や一町内の交際も矢張鄭寧にやつてをる。從つて或家で夫婦喧嘩をして居つても、さういふ場合には向三軒兩隣は息をひそめて家に入つて靜かにして居る。そして其の中の年長とか長者とか、平素崇められてゐる樣な人が其處へ出て行つて「まあ〱……」といふ樣な事で仲裁を試みるのが常の事でありますが、それが都會になると、殊に東京は見物高い處ですから、隣や向うに甚麼事でもあると、例の喋々と店頭に立つて見物してをる、そして誰一人仲裁するものもないといふ有樣。すべて此の樣に地方の人の交際といふものは、都會の人情の輕薄なるに比して、ずつと醇朴で、その道德上の感化は都會と比べ物にはならぬと思うて居ります。又田舍では或は、

島の生活

などになると――伊豆の大島でもさうだといふ事ですが――播州姬路から海上三里を離れたる家島といふ處では、昔から盜賊といふものが無い。つまりその島の人間が居るばかりであるから然ういふ譯にゆくので、何の家でも絕えて雨戶を閉めることは無い。恁麼美風が今に傳はつて居るのであります。それで以上述べたやうな種々の事情を總合して見ると、勿論都會には都會相應の道德が發達するでありませうから、一概に都會を惡くいふことも出來ませんが、然し人間の性情を全うして、眞の生活の味を味ふには、どうしても田舍の方が優つてゐる。即ち人が眞の人らしい生活をするのは田舍に如くはないと思ふのであります。

都會の長所

然しながら都會について言へば、その良い所も無論

ある。まづ田舎の人は何う見ても所謂田舎者で、春の四五月頃に東京へ見物に出て來て、二重橋外などで宮城の方を向いて頭を下げてお辭儀をして居る――その連中の婦人などを見ると、實に何方から見ても田舎女に相違ありません。然も其のやうに東京を見物して、それから日光から善光寺へ廻つて歸るといふ樣な男女は、田舎では雇人も使つてゐる、まづ中流の人であるのに、それが其の通りの風采である。そこへゆくと都會では、隨分赤貧洗ふが如しといふやうな婦人でも、見た風がなか〱いゝ。言はゞ氣の利いた風である。從つて才智も田舎の人よりは餘程進んで居り、すべて起居動靜が田舎の人よりは優美である。これは何と言つても都會の男女の長所たるに相違ないと思ふ。けれども都會の男女が斯く、

眼付から顔付から

すべて何となく所謂都會然として、それだけ氣が利いた樣に見えてをるのは、どういふ處から來るかといふに、これは四圍の境遇が自ら然らしむるので、都會では兩隣りでも眞向でも、碌々話し合うた事もないと先に申した通りゆゑ、田舎の人のやうな心ばえで暮してゆけぬことは言ふにも及ばず、假に家を一歩踏み出して門前を通る人を見ると――繁華な處では勿論――私の家の樣な、都會とは言はれぬ程の場末でも、近來は開けて一時間について百人や百五十人は通りませうが。その内で三人や五人は顔を知つて居るが、それも見知つてゐるといふだけのことで、何處の人やら分らぬ。百中九十人以上は全く見知らぬ人が門前を通つてをる。私などは東京で世帶を持つてから既う二十年。その間幾分市や區の名譽職なども務めて、まづ馴染は可なり廣い方であるが、それですら東京市役所まで人力車で三十分の間、殆ど數千人の人に往來で出逢ふでありませうが、その中で脱帽して目禮して通る場合は二度か三度、多くて五度には過ぎません、恁麽話を、田舎の一村落に暮して朝から晩まで、祖父さんの代からの馴染の人にばかり交際つてゐる人々に話したら、

殆どこれ想像以外の事でありませう。恁ういふ目の廻るやうな、忙しい生活狀態故、從つて眞圓な、醇朴な氣風に暮さうといふても、それでは忽ち人後に落ちて了はねばならぬといふ懸念から、油斷してはゐられぬと、日夜四方八面に警戒を加へねばならぬから、おのづから眼付顔付までも變つて來るので、氣の利いたやうには見えますが、その實道德上から見て都會の男女は餘程、

性が惡くなつてゐる

と言はねばなりますまい。それは又始終接してゐるものに影響されるので、百姓の顔が平和だといふのも朝夕耕す處の農作物に始終對してをるからのこと。都會でもその通り。東京の銀座邊の店の小僧もしくは販賣掛の婦人などは、年は若くてもなか〳〵氣が利いてをりますが、それは朝から晩まで立合ふ客の中には、隨分まんびきも雜つてゐるので、其の張番をするので、自ら顔付も違ひ態度も違ふので、これで見ても人間は居場處によつて人格が違ひ、同じ處に居つても交際する對象によつて心操が違つてくる事は爭はれない事實であります。されば、その人々の境遇次第で、心安い田舍の生活を棄てゝ、險しい都會の生活に移らねばならぬ必要もあらうから、さういふのは止むを得ぬ事でありますが、唯だ金も都會の方が餘計取れる、人物も田舍女と違つて高尚になれると、前後も考へずにたゞ都會生活をしようといふ風になる事は、大きく言へば國家の爲、社會の爲、又人類の向上發展の爲に慨歎すべき事で、又その婦人の爲にも決して得策でないと思ひます。

米國歸りの人の歎息

此頃米國から歸つた人の話に、どうもニユーヨルクやボストンの生活の劇しく忙しいこと、實に堪らない程忙しく目まぐるしい。人間のまあ這麼にまでして生きてゐなければならないものかと思ふ程で、唯忙しくつて何の樂みもありませぬ。街を歩いてゐても突倒さ

れはせぬかと氣遣はれる有樣、勿論車道と歩道とは分れてゐるから、まさかに棍棒で背中を突つかれることもないが、十字街頭を横ぎる時などは容易の事ではない、殆ど命がけであるといふ話でありました。東京の生活なども先づこれに近いもの。それに比べると田舎の生活の方がどうしても趣味が深い。前に申した經濟の安穩や風俗の醇朴のことの外に、

田舎の自然

の景色といふものが、又都會では得られぬもの。私は庭が好きですから、錢もない癖によく庭をいぢるので、昨年の七月にも庭石を一つ据ゑましたが、それは格外の廉價で、殆ど無代價の樣な物だと言はれましたが、それでも其の石一つが百二十圓。ちよいとした椎の木を一本玄關前に植ゑたのが五十圓。然るに田舎の氏神の森へでも行つて見ると、東京の代價に見積れば何百圓といふ樣な椎の木が、幾本ともなく千年の綠に榮えてゐる。石にしても彼の位のものを東京の庭で見やうとすれば——いや幾ら見やうとしても、金錢では見られぬ、いかな富豪でもどうすることも出來ない樣な素張らしい尤物が幾らもある。さては冬の日に、南受けの藁屋の庇に、南天の實が累々とてし玉を鏤めてゐる處に、雀の鳴聲が晴れやかに聞える。這麼景色を思ひ浮べると何とも言はれない趣味が湧いて來る。その平和な境に、家中の者が各自に分業的に仕事をしゐる。家の一隅——物置には米の五俵や七俵は積んでゐる。味噌や漬物も一年中のものが蓄へてあるといふやうな生活。これを思ひ浮べると生活の眞味何れにあるかは言ふまでもないことで都會の生活が殆ど厭になりませう。然し物事は又、

鷹揚に考へねばならぬ

ものでもあります、都會の生活にも亦先に申したより外の良い處もある。即ち自由便利といふ事で、一方には家も狹し庭は無し、中央都市に住めば殆ど青い木一本見ることも出來ず、一疊一疊が家賃に積れば五十錢

以上も拂はねばならぬといふ様な事もありますが、その代り知合が少ない故暢氣な所もある。又何事も分業になつてゐる故、二錢銅貨二つ三つも投ずれば新鮮な肴も求められる、來客があれば遂近所ですべての御馳走が辨じて、手ぬらさずに賄ひが出來る。恁ういふ點は迚も田舍の及ばないところに違ひありません。けれども又さうして手ぬらさず取寄せたものよりも、我が家で手を立てゝ料理して、その風味を一つ試みて貰ふといふ方が、趣味の上からは遙かに優つて居ると思ふ。從つて、

家といふ趣味

を都鄙何れの人が多く抱いてゐるかといふに、どうも都會——殊に東京の人は、家といふ趣味が乏しいと思ふ。まづ家を旅籠屋、と言ひたいけれど、東京の借家人には旅籠屋よりも輕い。一年に五度も七度も移轉する。それが殆ど癖になつて了つてゐる。或人の話に自分は貸家の札を見かければ、その外見、間取り、便利不便利、家賃の高低等を、どうしても見ずには通り過ぎられぬと。恁麼風で東京の生活では、殆ど居場處が定まらない上に、又それが狹いので、道具調度も揃へる譯にはゆかぬ、從つて客が來ても物を外から取る様になるので、概して家の内に興味を持たずに、遊び場處が多く外になり勝ちである。從つて又家族に行き渡る人情にも變化を來すので、都會生活の家族はどうも個人的に流るゝ傾がある。恁様にして漸々家族の——春日藹々といふ様な興味が乏しくなつては困つたものだと思ふ。そこへゆくと、祖父の代からとも曾祖父の代からとも分らぬ程先からの土地に、祖先からの家を守り、祖先からの職業を取つて、子々孫々までも末長く、然もそれが安穩な醇朴な、そして自然の風致豐かなる處に安全に生活するといふ方が、心理的に道德の進歩の具合が違ふ、平たく言へば人間の氣立の違ふべきことは、實の證文を見るよりも明かな事だと思ひます。（芙蓉生筆記）

都會生活管見

明治女學校學監　福迫龜太郎

○或は田舍生活といひ或は田園生活などいへば、其響が何となく詩歌的で、朝夕天然の風色に接觸して長閑かに樂しそうであるが、又或意味に於ては活動機關の外側に居るやうに、時代思潮に遠ざかる氣がする、之に反して「みやこ」のくらしといへば、如何にも、都雅に聞ゆれど、近頃都會生活といふ言辭は直に活劇を意味し、油斷も隙きもあつたもので無い、最も激烈なる生存競爭の修羅の巷を連想する。

○夫も其筈である、都會生活は我國では即ち東京生活といふてよいが、其東京は今日は日本の東京より亞細亞の東京、進んでは世界の東京となりつゝあるので、東京人は或る意味に於ては日本の代表國民である、是故に東京は非常に活動發展の出來る代り、其反對に大いなる失落もある。

○扨て學術的の見解よりすれば、人間到る處に生活がある、生活ある處には必ず人生がある、已に人生ありとすれば、其身水村山廓の郷に在るも或は肩摩轂擊の巷にあるも、爲さねばならぬ事は爲さねばならず、勉めねばならぬ業は勉めねばならぬ譯合なれども、吾人凡俗の輩は何事も必要に追立てられて、初めて活動する厄介者なれば、生馬の眼玉拔く活劇場裡に生活してこそ、茲に生活上の苦味を知ることも出來れば、又此の苦き生活と奮鬪して人間社會の面白味を會得する事も能るのである。

○酒屋に三里、豆腐屋に一里、鶯のいと樂しげに囀づる小村落より、郡役所々在地の小都會、夫より縣廳所在地の都會生活、次で東京の生活と、小より大に進むに從つて生活上の活動の度合は次第に增加すれど、廻轉の中軸は靜止すると云ふ物理學上の定則の如くに、東京の社會は動中亦自ら靜なる所あつて、人間生活の兩極端を包容してゐる。

○ツマリ田舍の生活は單調で、東京の生活は複雜であ

る。「東京は仕事多くして仕事無し」とは能く人の言ふことであるが、この矛盾せる言葉こそ、能く東京の眞相を穿つものである。是故に一回の宴會費に一人數百金を投ずる贅澤な徒輩があるかとおもへば、他方には相當の手腕あり識見ある人物にして往々「生活難」に泣く者がある。是等は強ち御當人の罪のみで無くて、活劇場裏の常と云ふべきであらう。

○斯る大都會に在つて生活上の困難を嘗め且つ其の困難に打ち勝つて愉快を得んが爲めに、所謂「生活」なるものに對して如何の工夫を爲すべきかは、一家生活機關の全權者たる主婦の最も考究すべき問題であると共に、又他日の主婦たる女學生諸姉の考慮すべき問題であらう。經濟上の問題なりとて恥敷き問題では無い。詩的ならざる問題なりとて決して下品な問題では無い。

○虛榮を夢み、見えを張り、金時計、金剛石と良人の收入の大部分を贅澤品の購入に投ずる者は婦人である下男下女への心付けに手厳敷く加減するやうな極端な吝嗇に陷るのも多くは婦人の心持一ツである、所が東京は身分不相應の贅澤三昧も出來るれば其反對に非常な吝嗇な生活も出來る。於是乎程合よき中正を得た生活を考へる事は東京人に取ては最も大切な事となる。

○程合よき一家の經濟は主婦が本である。主婦たるものが先づ以て一家生活の程度を豫定して精密に家計豫算を立てゝ其の立てたる豫算をしつかり守る覺悟をなさねばならぬ。而して此と關聯して大切なるは平素何事につけても無精を警戒しなければならぬ。予が多年の實驗より觀察すれば、女子は其仕事を豫めかく／＼と計畫することの觀念に乏しく、且事を爲すに甚敷無精である。

○一例を擧ぐれば、學校の試驗期日が定まつて、學科目や試驗日割も既に掲示あるにも係らず、如何に按排豫定して復習すべき乎を考へないで、唯だ打ちよつて「何うしませうか」を繰返して可惜時間を過して了ふ。或は試驗用紙を持つて來ないでノートをブリ／＼破り取つて用ゐる。或は書簡の封筒に自己の番地を往々書き落すなど、一寸したことにも無精者の本性を表はし

て、物事を豫め算定する心掛に乏しいのは困ッたことである。

○去ればやがて一家の主婦となつても、事柄の大小輕重形式こそ異なれ、何時も無豫算と無精の習性が伴ふて來るに違ひ無い。そして其生活上に頭を勞し、體を勞し、手を勞し、足を勞することが人間の損失であるかの如く、或は耻辱であるかの如くに思ふて居るならば、此の變轉極まり無き都會に生活する良人の收入の變化に忽ち生活難を唱ふるに至るは必然である。或人は女學生の家を持つたものは來客に對しても甚だ無精だと言つて居る。まことに其言の如しで、折角の珍客に會ふとも料理は料理屋に命ずるか但しは刺身、そば等成丈け手のかゝらぬ簡便法を用ゐるが、是れは畢竟無精からであるので、小因大果の理大に注意すべきことである。

○周圍に奉侍せられて自己一身の始末さへも自分の手で爲さぬと云ふ事は、貴族的といへば貴族的なれど、如此き貴族的を夢想する人の末路は如何であらうか。一生の苦樂他人によるなどいふ句に該當するやうな無精なる婦人の運命の不幸に終ることは必然である。

○夫れ思想は山國にて成り、品格は都市にて錬られると云ふ。大都會に生活して始めて生活の意義を悟り、生活問題を會得して、茲に品格問題に到着するのである。「生活」とは實に婦人諸君の一考二考三思すべき問題であらうと思ふのである。

都鄙生活雜觀

女子高等實修學校々長　山脇房子

都會生活に就て、私に何ぞ談をしろとの御注文ですが、私は今迄東京に許り住つて居りましたから、果して都會生活が如何に好いか、惡いかといふことは、それと相對照する田園に就いて經驗が淺いので、一向要領を得た御談も出來ますまいが唯、私の感じた儘を些か申上げる事と致しませう。

私は教育者としての立場から、平素田園生活を慫慂致して居るので御座います。都會生活と申しますと

地方の人などは此上もない樂しい、美くしい、好い生活だと考へて居られる樣ですが、實際恁うやつて都會に暮らして見ますと、決して然う樂しい、美しい、好い事計りでは無くて、苦るしい、醜い惡い事も尠く無いので御座います。住まつて居る人に致しましても、上は王侯貴族から、顯位高官の方々や、朝野の名士達が雲の如うに集まつて居られるかと思へば、一方には彼の下谷萬年町乃至は四谷の鮫が橋などへ行つて見ますと、之れでも人かと疑はれるやうな汚い風をした人達が、群つて居ります、先日電車の內で某侯爵と乞食の樣な人とが、隣り合つて坐つて居たといふて『變ればかはるものですね、私等の若い時分には、土下座しても容易に其お姿は勿論、お乘物の影すら拜まれなかつた殿樣が、吾々と席を交へられるのみならず、見るも汚い人達と御同車遊ばすとは、如何に時勢とはいへ餘り勿體ないでは御座いませんかと、嘆じて居た老人がありましたが、成程古い階級制度を見慣れた人には、驚ろかれるのも無理はありますまい。此樣な出來事は地方では餘り多くありますまいが、都會では日常普通の出來事として誰しも怪まないので總ての事物が極端から極端に移つて、其變化が頗る劇しいので御座いますから、非常な成功をするものもあれば、又非常な失敗を招くものもあります。

東京は『土一升に金一升』と申しますが、實際現在の地價は、一坪幾百圓と申す處も尠くないので、普通の金ではなくて黃金と土と同じ相場にならうと云ふ勢ですから、浮か〳〵致して居りますと『生馬の眼を拔く』どころの騷ぎでなくて、人間の眼を奪ひ、魂を奪ひ、果は神樣の眼まで晦まさうとする樣になりませう却々安閑と致しては居られません。從つて都會の人は智ばかり發達して、德育や體育は自然疎かに成りますから、何うしても消化の宜い營養物を多く採らなければならないしすると、衣類にしても、住居にしても、其の慾望が段々高くなつて來るやうなわけで、都會生活は田園生活に比して、何うしても贅澤に流れる傾があります。然れ共此贅澤な華奢な皮相に幻惑して猫も杓子

も都會へ集まつて來ると云ふ事は頓でも無い心得違ひで御座います。

それで私は何故田園生活を慫慂致すかと申すに、都會は前に述べました如く、智力的競爭の舞臺であり功名の場であると共に又色々惡い所もあるので、志操の固まらない若い人は浮か〳〵すると、其惡い事ばかりを見習ひまして、終には墮落する樣なことになるかちで御座います。それ故私の理想としては若い時分は充分田園で德育と體育とを修め、而して後高等な智的敎育を都會で學ぶ樣に致したいと思ひます。年齡にしますと十四五歲位迄は、是非とも田舍に育てゝ置く必要があると信じます。田舍で充分身體を鍊り德操を修めた上ならば都會へ出ても危險が尠い理屈です。ですから私の敎育の方針として從來の如く形式的な事は成るべく避けまして、服裝の如きも人々の好々にして、身分相應な事を致させて置きます、之れは軈て各自が其身分に安んずる習慣を養ふ基に成るであらうと信じて居りますが、十萬圓の資產家の御孃樣ならば、十萬圓の資產相當な事を致すが至當で、又壹萬圓の家の御孃樣なら一萬圓丈けの事を成さるが宜いのです、十萬圓の御孃樣が縮緬の御召を召して居らつしやるからといふて、一萬圓の御孃樣も同樣に之れを眞似るのは誤りで、一萬圓の方は一萬圓相應の事を成されば宜いのです、然し夫れでは子供の心に僻が起つて人を羨やむ樣に成りは爲ないかとの御考へも出ますか知れませんが、若しも羨むからと云つて幼い時から身分不相應な眞似を致させますと、三歲兒の魂百までとやら、成人致しましてからも、何時も好いもの〳〵と贅澤に流れて、殆んど其際限が無い譯です、ですから此樣な事は若い時分に充分習慣的に覺らせて置く事が肝心であらうと存じます、終りに私自身の都會生活に對する考へを申上げませう。私は人樣から、時偶には避暑にも行たらどうか、禦寒にも出懸けたら宜からう等と、屢々御勸めに預りますが、私は靜かに田園で氣を落つけて暮す事の出來ない境遇で、其樣な時間も惜く金も惜しいので御座います。鳥渡熱海か大磯へ出懸けましても

家内中で參りますれば數百圓の費用がかゝりますし、そしてヤレ仕度だ何だと尠からぬ時間を費しますが、其樣な費用や時間があればいつそのこと此東京よりも今一歩進歩した歐米の都市へ參りまして、親しく彼地の文明の狀態を學んで參りたいと思ひます。如何にも無風流な女だと思召か知れませんが、之れが私の眞心なので御座います、山水明媚な田園などへは足腰も起たなく成つて、隱居でも致す樣になつたら參つて見やうかと存じて居ります。（文責在記者）

都市 交際界の暗流

蝸　象　子

△貴婦人の多忙

英國の交際社會は、婦人の最も幅の利く所であるが、其の英國の婦人をして御國自慢の話をさせると、斯う云ふ事を言ふ。英國の上流婦人は外見甚だ氣樂な樣だが、其の責任は却々重いので決して遊んで居るのでは無い。自分の家庭を十分幸福にする事に力めると共に外に對しても又夫々役目を持つて居る。第一が交際で巧く御世辭を振撒き、愛想よく客を待遇はなければならぬ。其れを如才無く遣るには、文藝の道にも一通りは通じて居らねばならぬし、音樂や舞踏や社會の出來事なども能く呑み込んで居て、客にパツを合はせ、塲合に依ては適當な題目を捉へて其席を賑はすなど、千變萬化の秘術を盡して巧く交際社會を切り拔けなければならない。若しもその心得が淺いか、或は粗匆をして一歩交際の方法を誤ると、夫れは〳〵酷い目に遇ふて了ふ。此の役目の外に又演說もやらねばならぬし、又貧民學校を見舞ふて幾程かの寄附金もせねばならぬ其他音樂會や慈善會、茶話會、夜會、園遊會などの催しにも一々出席して、それ〳〵其の社會の御機嫌をも取らねばならぬ。此れは却々骨の折れる役目で、一身の修行がつんで十分資格が出來上つて居ないと迚も遣り切れたものではない、で隨分面倒な事も持ち上るか

ら、つい大抵にして逃れやうと思ふけれども一旦顔を出した社會は容易に之を許さない。それでは始めから人と交際もせず、公共事業などにも冷淡で手出しをしなければどうかといふと、それでは當の貴婦人は勿論其の家族迄が擯斥されて悲惨な境涯に陷るのみか、新聞紙や雜誌は容赦なく其過失を發き出して痛罵を加へるのであるから。其の間に立つた婦人の苦心は迚も日本の人々の想像し得る所では無い。

△交際の巧拙

或は又恁う云ふ事を言ふ。曰く、英國の上流社會は殊に交際が頻繁で、毎日毎夜の如くに宴會や音樂會の催しがある、宴會や音樂會は交際を擴める第一の手段で、最初は疎遠にして居た人も二三度其席で顏を見合はせると、段々親密になり、從つて樂みの場所も多くなる。此際交際術の不得手な人程氣の毒なものは無い。之れが爲に當人は勿論、夫や子供迄が其の社會からも擯斥されゝば、世間からも疎んぜられて、遂には夫の仕事の上に迄も差響くので、上流社會の人々が世間から受ける毀誉褒貶は直接妻女の交際の巧拙に依て分ると言つても宜いのであると。此等の話を聞くと英國の交際社會は如何にも派手で、上流婦人は此の交際を利用して家庭の爲め或は世間の爲に盡してゐるやうに思はれるが、其れが果して眞實であらうか。曰く否。左に少しく其の裏面の暗流を述べて見やう。

△萬金の社交費

今日英國では米國と同じ樣に女子の獨立といふ傾向が餘程著しく爲つてゐる。之れには素より色々込み入つた事情もあらうが、其の重もなる原因は即ち社交である。と云ふのは婦人社會に此の社交なる事が非常に頻繁となり、爲に紅粉を彩け、綺羅を飾つて馬車を東西に驅ると云ふ見得の競爭もおのづと起つて來て、從つて一婦人の社交費に萬金を要するは止み難き勢ひとなつたのである、そこで妻帶と云ふ事は男子に取つては殆んど生涯の浮沈問題となり、結婚難は先づ男子側から叫ぶ樣になつて來たのである。すると女子の方面

では、若し滿足な結婚をしやうとするには少くも自分一代の社交費を辨ずる位の持參金が要る事となるが、之れは一通の苦勞では得られない。其れや是れやの事情から、寧ろ獨身獨立で暮す方が結句安樂だと云ふ氣まぐれ心が起て、茲に女子の方面からも亦た結婚難を唱へる樣になつて來たのである。即ち彼國の男女が結婚てふ人生の天分に遠かつて追々獨棲てふ不自然に出づる樣になりつゝあるのは、畢竟するにその原因は、此の社交に多額の費額を要するからの事である。

△婦人の生活難

社交熱に原因する此の狀態は、單に彼國の上流社會のみに止らずして、近來は段々と中流社會にも見えて來た。そして女子に獨立の傾を生ずると共に、其の必然の要求からして、女子の專門敎育を受ける者が段段多くなつて來たのであるが、其の專門敎育の趣味の爲にも亦幾分か女子の獨立の傾を强めて居るやうに思はれる。併し斯う專門の敎育を受けて獨立の職務を執つて居る婦人は如何云ふ風に暮して居るかと云ふと、親がゝりの間は自分の取る報酬で何うか斯うか生活を支えて行くが、いよ／＼親と別居して本式の獨立生活を營むやうになると、食と住とは辛うじて辨じて行くけれども、女の方からいふと所謂命から二番目の衣服に迄は及びかねるので、彼地の風習としてうら若い女が實用一遍の質素な風に滿足能ぬ所から何時とは無しに身を墮して不正不義の收入に綺羅を飾る者が尠くないと、云ふ事である。のみならず又或人の話に依れば男女の結婚難と婦人の獨立生活者が多く爲つたとの爲に、避姙をしたり私生兒をこしらへたりいろ／＼と生理上倫理上に忌むべき出來事が益々多くなつたと云ふ事である。

△相容れぬ現象

又以前は英國人は各自互に其の家門を誇り合ふと云ふ氣風があつたものである。即ち一方では他を許して彼は今こそ貴族であるとか何だとか威張つてるけれども素性を洗つて見ると、數十年來の成り上りに過ぎない奴であるなど罵り、他方では自分を持揚げて、我が

祖先こそは實にゼームス一世時代に譽れ高かつた貴族何の某であるなどゝ誇つて居たものである。今日でも尙ほ其樣云ふ風習が殘つてゐるか如何かは知らぬが、玆に其れとは全く相容れぬ英國貴族と亞米利加の富豪との結婚が頻りに行はれると云ふ現象は今日の歐米の社會に大に注目すべきものである。恁う云ふ事は勿論輕々しく批評は能きぬが、併し其の一面に金と名譽とが折合つてゐる丈けは確かであらう。で其の婚姻は果して旨く行くかと云ふと、彼地の風評では此の一方に黃金に飢えた貴族の花聟と、一方では名譽に渴ける富豪の花嫁との間は、大方久しからずして愛情も何も無くなつて了ふのであらうと云ふ。唯だ黃金の輝きに眼眩み、名門の譽れに心狂ひ、人と人との間に愛もたしなみも無くして結ばれた婚姻の、斯樣に不幸に終るのは寧ろ當然の成行であらう。此等も詮じ來れば浮華虛榮に驅られてゐる婦人の社交が一國の交際場裡を支配してゐるからかと思はれる。實に寒心に堪えないわけだ、去れば英國人の然諾を重んずる事、秩序の正しき事、進取の氣象に富んで居る事、或は常識に富める事等、我國人の彼れに學ぶべき事は多々あらうが、唯此の婦人の獨立とか社交とかに就ては、我れは專ら我れ自身の長所を發揮するが好いと思ふのである。

△我國の有樣

然るに今日我國の有樣を見ると、婦人の交際は年一年と盛んになつて行く。そして其の風潮は上流社會よりして段々下の方へ及ぼしてゐる。去れば交際場裏に奔走してゐる所謂貴婦人の中には費用の遣り繰り算段に隨分頭を痛められる方々もあるやに聞いてゐる。先づ今日婦人の會と云へば、愛國婦人會を初とし、曰く共立育兒會、曰く婦人慈善會、曰く護國幼年會、曰く東洋婦人會、曰く婦人敎育會、曰く音樂會、曰く何曰く何と數へ切れぬ程あるが、苟も貴婦人の數に舉へられる程のものは、十や十五の會に籍を置かぬわけには行かぬ。それが一つで月一圓宛かゝるとしても十圓や十五圓は要る。此の十圓、十五圓の出ッ放しで濟めばまだしもなれど、やれ評議員會だ、總會だ、何々殿

下の御入京だ、それ迎に行け。宴席に出よとノベツに集會に出なければならぬので、一人前五圓、十圓と負擔しなければならぬ事は月に幾度か知れない。それも貴婦人に成りたて――お仲間に加入たては幅が利かぬだけに失費も少いけれども、年一年と古くなつて來ると、あの奥様は故参だ、あの奥様を評議員に爲やう、幹事に選ばう、理事に頼まうと目ざゝれるやうになる斯う爲つたが最期、月々の交際費が嵩むのみならず、時としては會の借財を背負つて立たねばならぬ羽目にもなつて來る。そして互の往來が劇しくなると自然贈物が要る事となる、之れは貰つたものを外に廻すと云ふ便法もあるが、まさか深川の菓子屋のを麴町の人に贈れない。一見して流用と解つては情けない。又あの奥様は毎會もあのお召だと言はれるのがつらいから、衣類は勿論指環、ショール、ブローチ、櫛、簪に至る迄二通りか三通りは違つたのを具へねばならぬいよいよ苦しくなつて來る。

△貴婦人の立場

然かも貴婦人の收入はどんなものかと云ふと、實際憐れなもので、幾百萬の財産がある、出でも、否其樣いふ豪家は却つて窮屈で、一ヶ月何程と云ふ小遣の定額であつて、其外には容易に融通の出來るもので無い況んや二三百圓の月給取の細君で、貴婦人仲間に入つて居る人達は、それは却々苦しいものだそうで、主人の俸給の一割を小遣に貰へる奥様は餘程の腕であるそうな、旦那に向つて大勢力を有する者でも二割を割かしめる事は却々困難であらう。特に二三等の高等官甚だしきは大學の助敎或は陸海軍の少佐位の夫人で、女學生上りで少し許りは英語も使へる、舞踏も心得てゐると云ふので、一廉の貴婦人のつもりで交際されると云ふ事になると、二進も三進も動かない。愁う云ふ金を出す主人も苦しからうか、自分等も却々苦痛であるそこで多くの貴婦人中には、迅速で、確實で、且つ最も肝心の秘密が保たれるのを重寶として例の質屋を利用される方もあるさうです。諸姉は聞いて吃驚なさるか知れぬが、之れは實際であらうと思はれる。愁う云ふ思ひをしても交際をしなければならぬものか。又其の交際なる事に果して何程の價値があるか、なきか。或は之れに伴ふ弊害はなきか。敢て諸姉の一考を煩はしたいものである。

寶石の特質

◎金剛石　寶石の中で貴重なのはダイヤモンドである、ダイヤモンドは吾人人間が生活する世界に於て最も尊重せらるゝもの、第一である、其光澤の燦爛たる所謂金剛光にして甚だしく光線を屈折する性がある、彼の支那にて有名なる趙氏の連城の璧、和氏の夜光の玉などいつたのは即ちこの寶玉である、我國には往古印度から渡來した佛像の眼目に之を嵌入したといふ事であるから化合した結晶物であるので、其剛なる金剛石の特質は純粹の炭素である事は、他に比較すべきものはない其硬度は十度で比重は三、五である、他の貴金屬に比べては軽い方で之を摩擦すると積極電氣を起し、又これを烈火の中へ入れても毫も溶解しない、瓦斯を以てするも、電氣を以てするも矢張り其形狀を失はないけれども、只酸素ばかりを以てこれを燃やせば炭酸瓦斯となるのである。

ダイヤモンドは専ら指環、釦、又は時計、帽子等の飾りに用ひられるが、細末になつたものは、他の寶石類を琢くに用ひられ、又稜角のある物は陶器や硝子類を截るのに用ひられる、そしてこの寶石はどんな有樣で見出されるかといふのに、大抵は個々の豐石等に存するものは外部に必らず二三ヶ所の空氣孔があつて内部の空隙に通ずるものである、其包被石、即ち豐石は、又頗る堅剛なものである、そして河の底から出るものは、間々露體のまゝで現出することもある此等は積年の間急流の爲めに岩石に碎かれたものである、又其形狀は八面體若しくは十二面形のものもある其色は白色透明が第一等で、次は黄色、紅色、藍色又は褐色などがある、産地はブラジル、亞弗利加、喜望峰、東印度ボルネオ等である。

◎剛玉　金剛石に次いで剛いのは剛玉である、この成分は純粹の礬土で　、其剛度は九度である、今各寶石を硬度計で計つて見ると第一がダイヤモンドで十度。次が剛玉で九度。其次が黄玉で八度。次が石英で七度。次が長石六度、それから燐灰石、螢石、方解石石膏、滑石といふ順序になつて段々と堅さが減ずる。剛玉も金剛石と同じく脆い質で、其色は無色透明のものは稀で、多くは青色と紅色、又黄色なのもある、それ故青色のものを青寶玉と唱へる、むかし瑠璃といつて珍寶の中に數へたのもこれである、又紅色のものを紅寶石といつて指環等に嵌入して衆人の珍重する處ろである、産地は日本では美濃の惠那郡から粗末なものが産出する。

◎黄玉と緑玉これは珪酸礬土を含んでなつて一見水晶のやうであるが勿論、結晶の形狀は水晶と異つてゐる、黄玉の純粹のものは黄色であるが、これは甚だ稀で大抵は無色透明のものである、そして黄色のものは火に遭ふと色が變つて紅色になる、産地は飛彈又は美濃近江等である。

次に緑玉は黄玉と同じく美濃、近江、甲斐の諸國から産するが、堅剛の度は七度半から八度の間である、色は大抵緑色で、火に遭ふと變色する、尤も火の爲めに變色したからといつて實際寶石の本來の價値を失ふといふ譯はないが、兎に角幾分の光澤が失せてつまり寶石の特質を失つたやうな感じを與へるものであるから、自然價値もなくなるやうな譯である。

家のとゝのへ

△簞笥長持の整頓

簞笥長持などの中は、殊に主婦の注意すべき所です、衣物などの疊み様によつて其仕立方の頁いのも惡るく見へるものですから、袴には紙をはさみ、また紋模様のあるものには其所々に紙をはさみ、たゝみ様を鄭寧にして入れ置かれればなりませぬ、又色の變り易いものは、紙に包んで他の品物の觸れぬ様にして、平日繁々使用する品と互に混雜しないやうによく區別をなし、又種類によつて入れどころを定め置かれればなりませぬ。又押入などは空氣の通はぬところですから、下に枕木を加へて置くのがよろしうムいます。

△漬物部屋の整理

漬物部屋は時々掃除して殊に清潔にして置かればなりませぬ。漬物桶又は瓶などは、毎日其の外面を雜巾で拭ひ、又天氣のよい日には折々窓を開き、空氣の流通をさせればなりませぬ。それから漬物を出して後は丁寧にため直しをなし、壓蓋を蓋のやうにし石も載せて置かればなりませぬ。一體漬物の出し入れを粗末にすると、いつとなしに風味が惡くなるものです、漬物は何品に限らず始めよい風味のものも、其の貯へ方によりてどんなにも變るものですから注意せればなりませぬ。

△臺所の掃除

臺所は他の室よりも度々掃除し、清潔にして置かればなりませぬ。器物の汚れたものを其儘にして置いてはなりませぬ、鍋釜其外いろ〳〵の道具も、使つた後直ぐに洗ひ、器の大小によつて位置を定め、順序正しく並べ置かればなりませぬ。それから火箸や、菜箸などは棚の下に釘を打ち、これも種類によつて掛場所を定め、鉢類も取り亂れぬ様に棚の上に置き、拭巾は日に三度づゝよく洗つて、皺を伸ばして棹に掛けて置かればならぬ。

又臺所の戸棚は不斷食物や、鹽氣のあるものをいれて置く場所ですから、毎日丁寧に掃除をなし、皿鉢などの位置の亂れぬ様によく整理して、天氣のよい日には開いて空氣を入れるやうにせればなりませぬ、さうしないと兎角惡い臭氣の溜るものです。

△薪部屋の掃除

都會の生活では薪炭の買置きといふ事をあまりせぬものですが、それでも大家になると、一度に半年分なり、三月分位なりの買置をされますから自然に任せて置くと、兎角にそれが亂れます、ですからそれ〳〵置場を定めて積置れ、たやすく取り出しの出來るやうにして置かればなりませぬ。

又買込んだ時と費消つた數とを明細に記し、折々差引して調べる必要があります、さうしないと、婢僕の中に不正直なものなどあつて、隨分粗末に使ふ事のあるものです。

△浴室の掃除

浴室も大槪三日目位に掃除し、盥其外桶なども位置を定めて掛場所にかけ、手拭なども棹にかけよく皺をのばして置かればなりませぬ、殊に浴室は毎日戸を開いて空氣の通ふやうに注意しないと共に濕氣がこもつて桶類が早く損じるものであります。それから水除けは溝を深くして早く流れ、少しもなづまぬ様にせればなりませぬ。

都會生活と女子の職業獨立

都鄙生活狀態の差違、家族經濟と社會經濟

藤井健治郎

(一) 婦人問題は必ず起る

所謂婦人問題の歐米に初めて起つたのは十九世紀の初まりの頃まづ亞米利加に起りましたので、それは學校の教師として、或は醫者として、或は辯護士として政府の認可を得たいといふのが最初の問題で、それが總て婦人の權利に屬するやうになりましたのは、十九世紀の中頃一八六〇年代の事であります。次に婦人問題の盛んであつたのは英吉利で、獨逸は稍後れて此の問題が社會の各方面に研究されるやうになりました。かの有名なベーベルの「婦人」といふ著述の如きは、その先鞭を着けたものであります。かく婦人問題が社會に持上る樣になりましたのは何ういふ理由かと申しますに、米英獨各々その特徴もある事でありませうが、それ等に通じてをる一つの條件は經濟事情であります。それは經濟の逼迫から、夫の收入によつてのみ生活してゆく事を許さなくなつて、婦人自らも一定の收入を得ねばならぬといふ處から起つたに外ならぬのであります。それ故に

我が日本でも、經濟の事情がその時期に達したならば必ず婦人問題といふものが持上るので、今日とても婦人問題が日本の社會に起つて居らないのではありません。既に數年前からして社會の各方面に此の問題が現はれて居ります。然しながら日本に於てはまだ切實にこの問題を研究すべき機運に際して居らない、婦人方などもあまり痛切にこの事をお考へになりますまい。從つて其の解決等もまづ曖昧の狀態にあるといつて然るべきことゝ存じます。それは日本の經濟狀態が、これを歐米のに比べますれば、勿論甚しく哀れなものに相違ありませんけれども、また歐米ほどに生活費が高くなつて居りませんから、僅かな收入でも相應に家政を料理してゆく事が出來るからであります。然しながら日本の生活狀態が追々に外國との交通等によつて益々高まり、從つて生活費も多額を要するのに、收入は必ずしもそれに伴れて多くはならぬといふ時期に至りましたならば――又必ずさういふ時期が來るに相違ありませんが、その時には婦人問題といふものが、今よりも一層痛切に持上つて來ることであらうと信ずるので、現今の婦人方もこの事に御注意あつて然るべきことゝ存じます。

(二)　家族經濟と社會經濟との差別

とは申すものゝ、我が日本にも既に述べました通り數年前から婦人問題が持上つてをる以上は、多少生活難といふ樣な事實が既に存するものと認めなければなりません。今少しく私の觀察するところを――獨逸婦人のお話に入る前に一寸これを申すのが便宜でありますから――申して見ますると、第一經濟狀態といふのは、重に農業を營んで居る地方と、重に工商及び精神上の職業を營んで居る地方とによつて、大なる差別がありますので、これがやがて田舍の生活と都會の生活との違ふ理由であります。まづ重に農業を營んでをる田舍の家族は、その家族の成員を必ず澤山持つてをります。一軒の家に親の夫婦、長男の夫婦、次男

の夫婦、即ち三夫婦も揃つて生活して居る事が、必ずしも珍らしくはありません。さてそれは農業といふものゝ性質にも因るのでありますが、一つは次の事情に因るので、即ち田舍の家族に於ては所謂家族經濟の狀態を未だ全く脫せずに居るから、その家族の數の多い事を必要とするのであります。家族經濟の狀態と申しますのは、一家の內で一家の消費する色々の物を皆生產するといふ事で、例へば味噌、醬油等も自分の家で作るし、又酒の如きも自ら釀造するし、甚しきは酢の如きさへ皆これを作る。衣服もその通りで、自から布を織つて着るといふ有樣。かく家內に於て爲すべき事が澤山ありまするから、是非とも多數の家人を要する理合になるのであります。然るに都會の生活になりますと、米、味噌、醬油から衣服その他直ちに市場について求める事になる。又洗張洗濯等も田舍に於ては總て自分の家でするのに、都會に於ては之を洗濯屋に出して了ふ。裁縫も都會に於ては之を仕立屋に出して了ふ事になります。かく都會生活は所謂家族經濟でなくて社會經濟の狀態にありまするから、家族の成員の多い事を必要としない。唯夫婦子供があれば十分一家を立てゝゆく事が出來るのであります。つまり田舍は家族經濟ゆゑに家族が大きく、都會は社會經濟ゆゑに家族が小さいのであります。この家族の大小といふ事からして、或は經濟上に、或は道德上に、種々の大いなる問題が起つてくるのでありまして、所謂婦人問題の如きもそれから生じたのであります。

（三）田舍も都會も變動する

例へば田舍の家族の大いなる生活に於きましては、婦人の爲す事柄が非常に澤山ある。前に申した衣服を織る事縫ふ事洗濯の事等から、一切食物の製造、貯藏料理等の事から、又農業の一部分、或は鷄を飼ふとか食用兎を飼ふとか、或は養蠶をするとかいふ樣に澤山の用事があります。然るに都會生活に於きましては衣服の心配はいふに及ばず、又食物の製造、貯藏、料理等まで、悉くそれ〴〵の店にまかせて其店から求め

る事が出來る。その上夫の職業を助けるといふ事がありませんから、都會の婦人は殆ど或一定の職務なくして生活して居るのであります。强ひて田舍の婦人と都會の婦人との共同の職務を求むれば、子供を育てる事位であります。然るに若し經濟狀態が、常に家族經濟の有様で止まるものならば、田舍の家族は何時までも此の様で居りませうけれども、到底さういふ事には行かない。必ず國民もしくは社會經濟の狀態に進まねばなりません。現在の處田舍の家族を見ましても、最初申した様なのは餘程極端の有様で、今日では衣服を自ら織るやうな處は餘程少なく、これを呉服屋に求むるやうになつてゐるのは事實であります。即ち一歩を社會經濟に向けて居るのであります。又都會生活に於きましても、もし人間の生活狀態が少しも進歩しないものならば、何時までも平和な夢を貪つて居られませうけれども、先に申した如く生活が次第々々に進歩して參る、それについて夫の收入は增さぬといふ事になりますと、勢ひ自分も外へ出で衣食の爲に、多少なりとも働かねばならぬといふ狀態になります。これ今日都會に於て、種々の女子の職業が殖えて來た所以であらうと思ひます。即ち銀行會社の計算方、或は電話の交換、或はその他種々の手技が次第に殖えて參つて居ります。

(四) 結婚の爲に貯金

引續いて右の大家族小家族といふ根本の差別に深い關係のある家族主義と個人主義との事それの又動搖してゆく様子が、道德上の極めて重大なる問題でありますが、茲には煩を避けてこれを省きませう。そして又婦人が收入の爲に外に出て働くといふ事から、おのづと起り來る子供の發育及び敎育の困難、これも亦十分に考ふべき問題でありますが、これも省いて直ちに獨逸婦人の實際談に移りませう。

獨逸現今の狀態は、略前に申し述べた狀態の一層進んだものであります。田舍の農業を營む處では、其の妻は夫の農業を助けると同時に家政の料理をする。こ

れに反して都會の生活をなす婦人は、やはり何等かの職業を求めて夫に就くのであります。そして獨逸では……他の國も恐らくさうでありませうが——田舍の方が都會に比して結婚の數が多いのであります。然して工商地方即ち都會に於ては、比較的結婚が少ないのであります。何故田舍に多くして都會に少ないかと言へば、それは申すまでもなく田舍の生活は樂である、都會の生活は困難である。それ故若いものが夫婦になつても、若し將來生活難の爲に非常な苦しみを受けはせぬかといふ事に懸念して、結婚を差控へるのであります。殊に獨逸では女の數が男の數よりも多い。それ故女側の結婚難が男子側に比して一層甚しい樣であります。恁樣に生活が困難で從つて結婚が容易でありませんから、彼等獨逸の都會の婦人は、餘程の高い身分の家の令孃でも、皆外に働きに出るのであります。伯林の市中を通りまして、すぐに目につく事は、各商店の賣子が殆ど總て女子であるといふことであります。その他銀行會社の計算方なり



或は醫者なり、兎に角女子に相應しき職業で、女子の之を占めて居らないものは殆ど無いといふ有樣であります。彼等は斯く勞働をして、一定の結婚期に至るまでは、兎に角多少なりとも貯蓄をして、たゞ一概に父兄の厄介になるまいと心懸けてゐるのであります。これといふが一つには又獨逸婦人の結婚はなか／＼僅少な金では出來ないからで、日本でも一流の結婚には婦人自用の一切の衣服調度から、搔卷の夜具蒲團とか膳椀とかいふ物まで持つてゆくといひますが、獨逸ではそれは無論の事で、猶その以上に窓掛け、テーブル掛け、額、置物等の、室内裝飾品は總て皆持つて行かねばならぬのであります。その上子供が出來た時の用意の物までも持つてゆくのですから、なか／＼容易な事でありません。良家の令孃までも働いて結婚金を蓄めるのも無理のない事と察せられます。

（五）　獨立問題の由來

然し斯くして儉約をして貯金をこしらへ、働いて居つても遂に結婚する事が出來ないものも澤山あります結婚することが出來なければ、無論夫の收入に待つことは出來ませんし、又何時までも父兄の厄介になつて居ることも出來ませんから、そこで女子の獨立といふ問題が起つてくるので、彼等は獨立していろ／＼の職業を見付けてそれに這入り込む樣になるのであります所謂フラウ、エマンスパチオン即ち婦人の自由解放といふことは、概ねその邊から起つて參るのです。所謂自由解放の事は後に又一寸申しませうが……。そこで彼等獨立せる婦人は、いかなる職業に從事するかといへば、若い時分からの務めを其儘に繼續してゆく者もあれば、中には暫くの間職業を止めて結婚の機を待つて居つて、とう／＼よい相手方を見出さない曉に至つて、初めて又教師になるとか、或は從前他の婦人のまだ開拓してゐない方面に職業を求むるとかする樣になる。かの所謂老孃、五十以上七十歲にもなつたお孃さまがあるといふのは、恁ういふ事から生じてくる

のであります。然してそれ等一派の婦人は、獨立して自活してゆくといふ意味で女のエマンスパチオンと言はれて居るのみならず、その思想に於ても多少世間と變つて居て世間普通の從來の形式―傳説的の形式を破つて、所謂自由不羈の生活を敢てして居る傾が見えるのであります。



（十八）非常なる儉約

彼樣に婦人自身の生活に困難を告げて居りまするから、その平素に於ては、一家の主婦たるものは非常なる儉約をしてその娘の爲にならうとして、娘は又前申す通り働いて一廉の財産を作らうといふ位ですからこれも非常なる儉約をして居るのであります一例を申せば夫の一ケ年の收入二千マルクより三千マルク、即ち千圓から千五百圓位の年收のある家庭に於きましても、一名の女中をも使うて居りません。皆妻君が自分で食品なり洗濯なりをやつて始末して參

るのであります。魚類肉類野菜物なども東京の妻君の樣に居ながらに擔商人から買ふのでなく、皆妻君自身で市場へ、佩嚢の樣なものを携へてぞろ〳〵と買ひに參るのです。それも手近に市場があつても安價處を撰んで態々遠方まで電車——十ペンニッヒ即ち五錢——に乘つて出懸けて參ります。或書物に次の樣な事が書いてありました。獨逸の婦人は小さな一片の肉と雖も之を無暗に棄てない。必ずそれをソップに使ふ、ソップの煮殼の肉は之を棄てずに一定の料理をする、又彼等は小包郵便の上包でも又それを留めるピンでも、又一本の麻絲でも之を棄てずに必ず一定の場處に貯蓄し置いて他日の用途に充てると私の實際見ました處ではそれ程でもない樣でしたが、然し日本の中流の婦人等に比べて見れば、その注意の行屆く點に於ては實に敬服の至りでありました。妻君と娘とに關はらず、切々として儉約を努めて厘毛の微も之を忽せにしないと言ふは實に獨逸婦人の特性であります。されば世間に「獨逸の婦人」といふ諺さへ出來る樣になりましたので、「獨逸の婦人」といへば「儉約」といふ意味の別の語と解するのであります。これを英吉利の婦人等に比べると天地霄壤の違ひ。勿論英國婦人も其の規則正しきに於て注意細かきに於て、到底日本婦人の及ぶ所ではありませんが、獨逸婦人に比すればまだ〳〵と言はねばならぬのであります。

（七）英獨何れが美化せられたるか

その代り又英吉利の婦人の品のよいに比しては、獨逸の婦人は品が惡いといふは免れ難い弊であります。とは申せ、獨逸人に美術上の嗜みが無いなどゝ申すのではなく、その音樂を好む事は……實に音樂は獨逸人の嗜好の全體だと申してよい程ですが——實に甚しいもので、大抵の者はこれを奏することを心得、又悉く之を聽き味ふ耳を持つて居ると申して宜しいので、かゝればこそベートーベン、ワグナー、ストラウスなどいふ世界的の大音樂者も出た程でありますが、

然し總ての事が英國の如く磨かれて艶があり光があるといふ樣に美化されて居らぬことは事實であります。今の獨逸皇帝の母上は、英國のヴイクトリア女皇の娘であらせられますが獨逸へ御輿入の後も、衣服は申すに及ばず器具調度何から何まで悉々く英國から取寄せられたさうで、要するに皇后の身邊は總て英國製の物を以て裝飾され圍繞せられて居つたさうであります。それといふが獨逸製の物は悉くどうもお氣に召さぬ粗末で蕪雜で穢なくて心持が惡いといふのであります果ては浴室までも英吉利からの材料で新たにせられたと傳へて居ります。かく英國ほどにすべての事物が美化せられて居らぬに伴れて、婦人も亦英國婦人に比しては品が惡いといふ點は、疑もなく獨逸婦人の短所でありまするが、又その長所も茲にありますので、或歷史家は實に下の樣に申しました。獨逸がナポレオン大帝から蒙つた恥辱を、所謂普佛戰爭即ち一八七一年の戰役に於て、首尾よくも之を雪いで十分に敵を打つたその功績の一半は、獨逸婦人が之を要求することが出來る。その理由は彼の大戰爭に當つて、獨逸に軍資金の缺乏を感ぜしめず、外征の將士をして内顧の憂なからしめたるは、實に獨逸婦人の儉約が作り出したる富の賜であるから、と賞讃して居りましたが、これは實に味のある事と信ずるのであります。

（鳥居生筆記）

倫敦婦人の裏おもて

交際社會の事
流行界の事
中等社會の家庭の事

大隈信常氏談
玲瓏生記

△燦爛たる貴婦人

英國の貴族社會の婦人といふものは、殆どソサイテイー（即ち社交場裡）に入つて盛んに翺翔するのみが仕事である、と言つて宜しいのであります。尤も眞正

の社交季節といふのは、毎年四月の末まづ五月の初め頃から七月頃までゝありますが、その間といふものは殆ど夜會づくめで、彼等婦人は實に燦爛として光り耀く不夜城に、毎夜のやうに花の姿を競うて居るのであります。花といへば此の季節に咲いてゐるものは、公園などへ行つて見ると、クローカス（即ち番紅花）とか、チュウリップとか、ハイヤセンザとかフリジヤといふ様な草花が重で、紅紫黄白とり〴〵に色麗はしく、花の樹ではライラックなどが――其色はピンクと言つて先づ茶褐色の最つと赤味がゝつたやうなもので――その細かい花が簇り咲いて居つて實に美はしいのであります。芝の青々と心地よい公園の路に沿うて、此等の草花が美麗に配置して栽ゑられてある。其の公園へ例の貴婦人が良人と合乘で午後の散歩に來る。それは大抵三時頃からで、そして歸途にショッピング（商舗）へ廻つて買物をする。それは大抵裝飾品や被服品を買ふので、言はゞ白木屋三越へ寄る様なものであります。さうして歸ると略五時位になりますので、毎日定例のチイー（茶）を喫むので、このチイーといふもの――日本で所謂未刻食――は英國の上流中流下流を問はず一般に行はれて居る慣習であります。その詳しき次第は後にお話し致しませうが、兎に角これが濟んでから二三時間して即ち午後七時半か八時位に晩餐になるのですが、彼の貴婦人連の事ですから、自分の方へ招くか他へ招かるゝか、何れにせよ殆ど毎夜例の燦爛たるソサイチイーの中にあつて晩餐を取るので、その晩餐の開かるゝのが右の時刻ですから、それが濟んで更に會話談笑でもあつて、さて愈々舞踏が初まるのは最う十時に近いのであります。それ故散會は毎夜遲くなるので、その外劇場などへ行つても劇の濟むのが十一時で、それからサッパーと言ふて鳥渡食事するのが定例ですから、どうしても貴婦人の歸宅は十二時半から一時を過ぐるが常であります。以上がその燦爛たる表の方面で、さて着換へをして就床する二時頃からは、まづその裏ともいふべきで、前申す通りゆゑ從つて懸る婦人は皆朝寢坊をするのであります。良人が遊んで居

る人ならば無論、何か仕事を持つて居て朝出て行く人でも夫人は少しも關はないので、八時や九時の頃は無論床の中に居るのです。そして一種の習慣として、英吉利婦人は床の中で珈琲や茶を喫むのであります。で、中にする人はそれを喫んで其儘ずつと床の中に居て午頃になつて漸う起きて出でゝ、顔を洗ひ化粧をし服装を整へて出て來るのであります。其麼人は朝餐も午餐も一緒になつて了ふやうな譯になるのです。やがて三時頃になると例の散歩に――と言つても馬車を驅るのですが――公園などへ出かけるので、即ち又燦爛たる表の生活に入る譯。そして彼のソサイチイーは夜の事でありますから是等の婦人は全く夜を晝と申してよいのであります。



△女皇陛下は流行の源

この社交季節の間に五六回女皇の催される夜會がありますが（これをコート或はローイングと申します。國王の催さるゝのはレビーといひます）其の盛大優麗なること申すまでもありません。多

くのファッション（流行）といふものは、此處から起ると言はれるので、即ち女皇陛下がその流行の源となられるのであります。でありますから其の流行が實に上品で優美で、我が國のファッションが役者や藝者から起るなどゝは同日の談でありません。或時などは女皇の頸に灸の痕があらせられたので、それを蔽ひ隱すやうな頸飾を佩びさせられた處、それとは知らずに忽ちさういふ型の頸飾が盛んに流行を極めたといふ話があります。まづ此の樣な勢のもので、男子の方は又國王の嗜好が流行の源になるのであります。斯ういふ習はしから上品、優美なファッションの行はるゝは、實に結構な事と存じます。さて此等の夜會には上流の貴族は固より、中流の上位にある婦人も、紹介さへあれば出られるので、妙齡の令孃——普通十九歲位になつた令孃がソサイチィーに入る初めには、紹介を求めて此の女皇の催さるゝコート（或は國王の催さるゝレビー）に出るので、その折は無論女皇或は國王にも拜謁が出來るので、この夜會へ出れば其の後は何處の夜會にも招かれるやうになり、即ちソサイチィーへ入れるので、コートやレビーは恰ど社交界に入る關門のやうになつて居ります。以上が社交季節に於ける倫敦のソサイチィーの狀態で、即ち又貴婦人の倫敦生活でありますが、これ等貴族は大概本邸は田舍にあるのですから、シーズンが終ると其の閑靜な田舍へ歸り、往々その本邸で大宴會を催ふしたり、夏や冬は他の地方若しくは外國へ旅行したりなどして、年月を暮して居るのであります。

△殊勝なる中流婦人

前申す如く上流の婦人といふものは、全くソサイチィーに入浸つて居ると申しても宜しい程で、良人は朝から要件や勤務で他出するのに、一向その世話もせずに寢てゐるといふ位でありますから、內助などは思ひも寄らず、又午後はよく出あるき夜は夜會といふのですから、良人が晩景に歸宅しても夫人は家に居らぬといふ樣な場合も尠なくない。要するにこれソサイチィーの

婦人で家庭の婦人ではないと申さねばならぬ。のみならず骨牌遊び——然も賭博的の物を盛んに遣まして、夜の十二時過までも熱心に勝負を續けるなどゝいふ、良からぬ風習もあるのであります。菊地大麓博士が英國の貴婦人は家を外に浮れ歩いてゐていかぬと申されたのは、全く私も同感で、以上一端を述べたゞけでも略實狀がお分りでありませう。これに反して中流の婦人は殊勝なもので、ソサイティーに然う入込む事もなく、又出來もしないのですから何せよ朝寢



をすることもなく、いかにもよく立働いて居ります。(下等社會は所謂夫婦共稼ぎで、これ亦働くこと勿論ですが、それは何國も同じ狀態ゆゑ省きます)。雇人なども比較的少數でよく辨じて參るので、客室食室寢室なども室數も可なり多い立派な中流の家庭でも、大抵女中は二人でありまして、これは上を働くのと下を働くのと受持が瞭然決まつてゐて、擔任以外の事には手を出しません。即ち給仕をしたり取次をしたり臥床を作つたりするのと、庖厨の事をするのとの二つに別れて居るのです。

メードに就いて一つ快感を覺えることは、英國の女中は皆服裝が一定して居ることで、それが黑の服裝に眞白な上衣を着け、帽子にも白布を懸けてその末を後の方へ二筋に割つて垂したりして居りますから、黑と白で見た目に非常に鮮やかで、大變美麗に感ぜられるのです。標致までも立優つて見える思ひが致します。尤もこれは朝の中掃除などして立働いて居る間は未だ着けませんが、それでも濟むと此の服裝になるので、午餐に給仕する折などは必ず此の姿であります。給料も高い代り英國のメードは實によく働くものですが、然しそれに負けずに中流の婦人はこれ亦よく働くので、朝起きてから掃除などの事から朝餐まで濟んで了ふと料理人を相手にその日の獻立を一切定めて、それから買出しに自ら出掛けるので、肉、野菜、何でも命令れば屆けて來ますが、なかには自身で籠を提げて出懸ける婦人もあります。が、これは先づ中流婦人には少ないのです。さて午餐後になるとこれ亦訪問などに外出して——尤も訪問は午後三時以前にするのは失禮となつてゐるからそれ以後でありますが——さて歸つて五時頃に例のティーで、これはほんとに茶を喫むだけ、パタを附けた麵麭とか菓子位を一寸食べるだけの事であります。晩餐までには無論良人も歸る。中流でも善い方の婦人ならば、例の晩餐服、胸の開いてゐるヂコルテといふのに端然と着換へて、良人と相共に食卓に就く（小兒は小兒だけで兩親より以前に別に食べさせて了ふのが常習）それが濟むと別室に子供までも皆團欒して談笑したり、娘さんがピアノでも彈じたりなどして樂しむのであります。さて恁く朝から就眠まで、その主婦が中心となつて實によく働くのであります。

△簡單でよき社交

英國ではティー即ち茶の會に人を招くことを致します。前に申した通りの簡單なもの。ほんとに茶を喫むだけの事で、それで面白く話したり遊んだりして歸るのです。かういふ簡單な事で社交の出來るのは實に宜しい習慣と思ひます。又態々招かずとも在宅日——

日曜は致しませんので、英國の日曜といふものは實に截然したもので、外へ出るといふのは午前十一時頃から教會へ行く事位なもので、その外は靜かに家に居るのです――即ち水曜とか木曜とか其人の決めた日には必ずお客さんがあるので、ティーなどを饗應して面白く會話するのであります。

又日本などで一寸想像の付かぬ習慣は、所謂ファミリー（家族）に入るといふ事で、英國人でも又我々外國人でもファミリーに入りたい希望を新聞に廣告する幾らも應すべき旨の申込があるので、出懸けて行つて其家の夫人と談合して決めるので――これは夫人の全



權、すべて家庭の事は夫人本位で、客を招くのでも夫人が主になつて居るのであります――さて決まつて移轉てゆけば、その日から其の家族の一人となつたので晩餐後の團欒にも何にも加はつて、全然家族同樣になるのであります。それを又實に親切にしてくれるので、襯衣の洗濯から靴下の繕いから釦の離れてゐるのまで、細かに注意して世話をしてくれますつまり一つは中流婦人とはいへ多少の收入の爲に人を寓くのですが親切は實に至つたものであります。そして其日までも顔も見知らぬ者を、逢つて一たび直談したゞけで、善いと思へば直ぐに家庭

へ入れて少しも疑はぬ所、日本あたりの中流で一寸思ひも寄らぬ事であります。

△令孃はいかに

さて倫敦で直ぐに目に注いて奇異に感じます事は、令孃さんの服裝がごく質素で、年長婦人、老婦人ほど華美に着飾つて居ることであります。全く日本と正反對であります。皺だらけのお婆さんが眞赤な色や種々の眩く色を附けて、果ては白粉なぞを塗つて居るのに反して、令孃さんは淡泊な、清楚な、まづ白い色、或は大人しい黒い色もしくは、其の外の淡い色の服を着けて、帽子も被りますが、又それに羽根の飾りや中には珠なども付けて居りますが、それながらに總て淡つさりして居ります。そして日本では奥樣になると稍質素になりますが、それが反對で、英國の婦人は一たび結婚するとずつと艶美に盛んに飾り立てねばならないのであります。令孃さんでも十八九歳になつてソサイチィーへでも入る樣になれば又違ひますが、もつと若い中はそれは瀟洒なものであります。さて恁う申すと一概に娘さんがしほらしく感せられますが、どうして却々活潑極まつたもので、近來殊に體育が盛んで所謂姿勢などは愈々整つて實に良くなつてゆきますが、その代り運動などになると、全然男と同じ事で、ホッケーなどいふ遊びから、自轉車、漕艇……殊に近頃女子の柔術が流行するといふので餘は察するに足るでありませう。有名な經濟學者のマーシャル教授などは窃かに眉を顰めて居られた程であります。ケンブリッヂの中にあるニユーナムといふ女子大學などへ行つて見ると、その運動場にごろ／＼——あれが眞正にごろ／＼して居ると言ふのでせう。隨分お轉婆なものであります。然し又中流の家庭の令孃さんは家でもよく働きます。母親を助けメードを援けて、臥床を作つたり上げたりする手傳ひとか、ショッピングへ買物に行くとか、いろ／＼よく働いて居るので、それは感心なものであります。そして運動のみでなく、音樂と繪畫——殊に音樂は最も普及した趣味で、この二つが女子教育の

中心と言つてもよい位であります。さて男女交際の狀態を鳥渡申してお話を結びませう。例のソサイティー或は教會などで、この男と思ふ樣なのがあると交際を結ぶ、男が家へ遊びに來る、一緒に遊びに出る、二人きりで端艇漕ぎなどに行くこともある。それでやはり過ちが決して起らないといふのです。獨逸では母親が迚も安心して這麼事を爲せ得ぬので、必ず保護者を付けてやるのですが、英國では一切自由を許してあるのです。それで間違ひのあまり起らぬのは何故かといふに全く紳士と淑女といふ信念から來て居るので、所謂青春の血の湧く事も互ひにありませうが、「自分は紳士だ淑女だ。鄙しい淫奔をしては品位を失つて了ふ」といふ考へ、又「我が品位を落して了へば我が愛する人の愛を失つて了ふ」といふ考から、自重して過ちに陷らぬのであります。紳士及び淑女といふ考は實に英國社會の精神、即ち英國魂で、これある限り英國の品位、英國婦人の品位は失はれぬことであらうと思ひます。

虛榮心を去れ

現今英國婦人社會にありて最も痛切に生活難を感じ居れる者は下婢或は其他家庭用の婦女子等にあらずして反て其腦髓の力にて衣食の料を得んとする教育ある婦女子なり、小學女教師の如き其受くる處の報酬は實に料理人、御者等にも如かず、其他貴婦人の侍女等に至りては實に憫むべき狀態にあり、目下教育もあり禮儀作法をも心得たる立派なる婦女子の大多數は、一ケ年三四十磅の俸給ならば喜んで之に就くべきも、彼等は皆就くべき職業なきには閉口し居れり、然るに一方に於て加奈太にては又是等の婦人なきに苦しみつゝあり、家庭に於て農園に於て學校に於て、或は其他各種の方面に於て、無數の職業は空しく婦人の來りて就くべきを待ちつゝあり、されど働く事を好まざる貴女的婦人は此處には不必要なるを以て、若し此處に行かんとする者は須く其虛榮心を去り自己を單位に引下げて大に働きつゝ徐ろに自己の能力に適當したる職業を待たざるべからず、而して又彼等は加奈太に來るも敢て結婚問題を案ずるに及ばず、彼等が靜に其配偶者を求むるならば、夫れ〳〵幸福なる家庭を作る事を得べし、二十歳以下の女教師には始め一ケ月六磅を拂ひ、成績好ければ一ケ年一百磅を拂ふを常とす、而して漸次年と共に俸給も加はりて、遂には二百磅位に達すべければ老後の計をもなすべしと。

外人の眼に映じたる日本婦人

此の一節は曩に巴里より歸朝せられたる林穀陸氏が大日本婦人教育會にて講演せられし演說の大要なり。

◎余は去三十四年渡歐し、爾後五年間專ら巴里に在りき、其間談話、著作等に依り、彼等が日本婦人に對する批評に注意したるが、日本に遊びて歸國せる外人は一齊に我國を呼んで人を引付ける國なりと讚賞し、殊に婦人に就ては非常に讚辭を捧げ、日本婦人の美妙なる東洋的の目は世界一品なりと激賞せり、曾て某女優が渡佛したる時の如き新聞紙は筆を揃て其優雅なる目に就き稱美したり。

◎又曰く日本婦人の擧動は實に優雅にして人形の如く愛すべく、藝者などが小さなる煙草入より刻煙草を出して吸ふ有樣、實に自然に優かにして、外國婦人が葉卷をぷか〳〵吸ふの比にあらず、且日本婦人は外形のみならず、又精神も優雅にして自分を卑下して決して高ぶらず、外國の幼女などが人形を與へられても氣に會はざれば直ちに打ち棄てゝ仕舞ふに反し、日本婦人は自身よりも之れを大事がり、萬一の如き事ありて之れに背くは、實に美はしき事にて、此美德は延いて動物を愛する念、主人、父母友人に對する服從謙遜の念を形作るなり。

◎されば他の犠牲となる念も甚だ厚くして他の爲には如何なる事をも辭せず幼少の時は弟妹の子守をなして親の手傳をなし、長じては夫の爲に骨身を惜まず立働き、老いては子の爲に努め、一生を他の爲に働きて少しも之を苦痛とせざるは、外國人などには到底見られざる點なり。

◎而して先年戰役當時露國にて出版せるおとみさんと題せる小說を佛譯して巴里マタン新聞に掲載せるが之はお富と云ふ日本婦人某露國士官に馴染み、口には歐米婦人の如く猥りに愛情を語らざれども、其々の徑に某士官に一身を捧げて仕ふると言ふ事柄を描きたるものにて、最後に日本婦人は曾所の如く優しく、斯の如く美德を有すと斷案を下せり、而してこの美德の由つて來る所は古來の道德宗教習慣の然らしむる處にして、日本の振袖の如き、戸障子の構造の如き、擧動を優かならしむるやうに出來居り、外國婦人の男のやうに荒々しきに比して實に奥床しきものなりと一齊に日本婦人を稱揚したり、要するに外人の眼に映じたる日本婦人は頗る美はしきものなりと解せられしが如し。

婦人觀察

處女の描ける理想の人

峰子

冷めたい風の吹く夕方など私は獨りで机の前に凭り默つて茫然と考へて居ると平生種々な思ひが胸に浮んで來る。

○

先づ第一に自分の描いた理想の人の事ですね、けれど若しも誰れかゞ貴女の思つてる方は甚麼風な人ですなんて聞かれたら、まア何と答へるでせう、那麼洒落たんぢやア無くつてよ位で笑つて仕舞ひます一體私は斯う云つたやうな問を出されるのが何よりも何よりも一番閉口します、例令是れが親しい友達か何かで夫れこそ親にも話さない事を打ち開けて相談仕合つてるやうな間柄でも、私は返辭につまつて結局好い加減な處でお茶を濁して置くのです、何故つて夫れは自分が斯う云ふ人を理想にして居る等と放心云はうものなら、直ぐに生意氣だと斥して自分の身も考へて見る方が好いワなどろくな事は云はれないし、夫れかと云つて其樣な事を謙遜して置くのも何んだか餘り心外ですから私は今迄他人に對して一度もまだそんな事を打ち開けて云つた事はありません。

○

併し私の理想の人は斯う云ふ人物です等と自分で整然と定めて動かぬ積りであつても、月日が經つ間には自然と考へも變つて來るので、其時々と違つて行きます、私が最初好いと思つたのは、軍人でお正月御年始に來る人の中でも一番立派で勇ましそうでなど〻ホンの外見ばかりが目について全く單純な者でした、現今おや却々奈何して外見なんか二の次になつてしまつて第一性質が好くなくつては等と思ふやうになつて來ました、是れが普通なのでせうか夫れは兎に角私は恁麼風に變つてまいりました今後には又何んでもお金の事だなんて思ふやうになるかも知れませんよ。

○

で甚麼人が好いつて云へば、風采が揚つて居て、手腕家で、學問が出來て、等と云ふのは勿論、結構此上なしですが、那麼人は望んでも無駄ですから、私は第一に度量の有る、氣の大きい、物事に餘りこせつかない、悠然としたのが好いとおもひます、あの少さい隅から隅まで氣が付いたり、チヨコ〳〵されるのが何よりも厭ですね。

○

だから夫れに伴つて風采も何處か重みがあつて輕々しく見られないやうな人でなくては成らない、髯も成るべくは濃いのを生して貰い度い、野羊髯や朝鮮人、イ、エ決して串談ぢやありませんよね朝鮮人見たやうなのは餘りぞつとしないから何且カイゼル式で髮もふつさりと少し左へ寄せて分けて（尤も顏の細い丸いにも寄るけれど）縮らせたのは輕薄に見えるし、鼻筋から眞直に二ツに分るのは什麼にも鉢われの犬見たいで賤しく見えるし、クリームチツクも餘りコテ〳〵付けて貰ひ度くないです。

○

男でも何且瘦せぎすの秀削としたのが好いのかも知れませんが私は何處かと云へばでつぷりとした背の高い方を望みます、肥つてゝ餘り背が低いと洋服でも着た時にビール樽のやうに見えて見苦しいから、兎に角大きい人が好い、そして宅に居る時位は好いけれど外へ出る時は成る可く洋服か何かで、餘りバンカラおやアきまりが惡いから少しわ風采にも注意するやうな人で無くつては困りますよ。

何と云つても私なんか女の事ですから人が立派な着物着てめかして居らつしやると、私も手を通して見たいと思ふし、指環だつて襟留だつて流行の物は自分も欲しいとおもひますわ、那麼時に買へないと思つても矢張り遂いあゝ欲しいワ位口を辷べらして仕舞ふ事もないとは限りませんよ、然うすると直ぐに八の字でも寄せてあゝ女は實に虛榮の化身だ等と始めて深く感じたやうに歎息する人が有りますが私は其樣のが何より

厭です人の望む物は私だつて欲しいとおもふし又欲しい物なら買ひたくも思ふのが當然だと思ひます、夫れをなまなか私なんか欲しくは有りませんわなんて云ふ人は乾度多少心がひねくれて居るに違ひない、でなければ負け惜しみが強いんでせう、併し又他に藝術や何かに趣味を持て居て全く那麼事は欲がらぬ人も有らうけれど那麼人はまア豪いお方と全く別物にして我々凡人輩は例令虚榮と云れやうが、何と言れやうが尚且好い着物は好い着物として着度し、お洒落もしたいですよ、だから餘りめかすからと云つて歎息されたり愚圖愚圖云はれたりする人は好きませんね。



○私の知つて居る某學士の妻君が指環を買つて下さいと云ふと「オイ又買へか幾個も持つてるぢやア無いか」と怒鳴りつけてチヨツと舌打ちをしながら「女は是れだから困る」とあとは弗々獨言を云ひながら怒つて居ました、夫れ程女に困るなら妻君なんか貰はなければ好いのにと思ひながら見て居ますと溫順しい妻君ですから別に口返答しないで泣きさうな顔をして俯向いて居られました、斯ういふ人が得て虚榮呼はりをするんだらうと私は心で思ひましたよ。

○

買へないなら買へないと判然云へば夫れでも無理に欲しいなんて子供ぢやア有るまいし豈夫云ひはしませんけれども男の身になると屹度私の思ふのに、今金が無くつて買へないと云ふには何んだか負けたやうな氣がするから、夫れよりやアまア仕樣のない奴だとか困り者だとか云つて叱り付けるのです併し何も女の生れ付いた性質から攻撃して掛らなくつたつて好さゝうな物だと思ひます。

○

兎に角餘り憤りつぽい人は厭ですねと云つて憤りもせず唯だ何となくシンチリとやられるのも尚ほ更ら堪りません、夫りや少し位怒つても好から餘りガミ〳〵云ひさへしなければ好い、一つ事を何時迄も何時迄も繰り返し繰り返して云つたり、妙に當こすつたりしてツンケンされるのは辛くつて厭な事です。

○

私は何んでも淡泊した男らしいのを望みます、風采も其の通りで優しい貌立よりはキリツとした方が好い

何が嫌ひと云つて、よく女なんかに路傍ですれ違つたりする時に斯うおつな眼付をしたり、妙に衣紋をつくつて咳ばらひしたり、氣取つたりする那麼人を見ると全く氣持が惡くなりますね。

何もおつな眼をするからと云つて焼く譯でも何んでも無いですけれど、何んだか身に泌みて厭な感じがしますよ。尤も御當人はよつぽど樣子の好い積りで居なさるんだらうけれど私なんかは眞平です。

○

假に私の年を廿二とするなら、左樣餘り年を經つた人は難有くない、と云つて若過ぎても何だか弟のやうで厭だしまア廿八九卅止りで軍人と醫者と百姓は御免を蒙り度い、外交官は誰れしも若い娘の好む處ですけれども是れは又外交官の夫人となるにはそれ〳〵以前から其心掛けで語學なんかも確然やつて交際術の一通りは學ばなければ交際場裡に立つて活動する事が出來ないですから今からぢやア迚も駄目な事ですわ、私は實の處、政治家と實業家を最も自分の理想として

ゐる、けれども唯だ實業家、政治家ぢやア不可ない、多少文學趣味の有る、何も自分から文を作つたり和歌なんか詠んで奥れなくつても好いから、唯だ趣味に富んでさへあれば夫れで滿足しますよ。

○

文學と云つても日本の本を時折讀む位ぢやア困ります、少しは外國の小說位に目を通して一通り作の名前位は知つてゝよし評は出來ずとも相當に話が出來る位で無ければ不可ません、夫れから音樂も少しは聞き分けるし、繪畫も好いと惡いの見分が付く位の事は出來なければ困ると思ひます。

○

夫れから或る程度迄自由を與へて貰ひたいです、つまり餘り束縛されない事を希望するのです、と云ふと那麼我儘を云ふ人は夫れこそ何んでも出來なければならないのにと、ふツと私は思ふて急に氣恥しくなつて顏がカツ〳〵して來ました、ほてつた頰を兩手で押へながら「まア怎麼風な人が好かア無くつて？」と自分で自分の心に云ひました。

私の希望（若し如何なる良人を選ぶかと問はるれば）

志那子

人の女房となつて、仕へ難いのは、愚人と哲人だとか云ふ事が、雜誌に有りましたが、全くだと思ひます。と云つて私は何も、春早々に勝手な熱を吹くではムいませんが……。學校に在ツては、秀才の譽高く、社會に出でゝは敏腕の噂高い人を良人に持ちたいのは誰しも同じ事で、奈何せ一生に一遍亭主を持つならば、其人は、女房に優しくつて、男が好くつて、如才が無くつて、金離れが好くつて、着物でも帶でも女房が一言ねえ貴郎買つて頂戴ナ、と云へば、直ぐ、うん諾々と其美しい髯を捻り乍ら、鷹揚に頷いて、直ぐ夫婦並んで三越へでも行くやうなのは結構此上なしで、學校の友達の手前、親戚一同へも大自慢で居られやうが、私は何も敢て然う云ふのを望む、とは云はないが。何日

か私が勝手な事を喋舌つたら、お母さんが世の中はお前の云ふやうに然う旨くは行かないものだ。お前を強いて望むやうな人があれば知らん事、お前を強いて望むやうな物好はまづ有りそうにも思はれぬ。さうすればまア姑、小姑も有る事と考へて……、と云はれた時は、何だかえらう侮辱されたやうな氣がして、人！何も然んな事を考へなくつてもと憤然として怒つた、所が世の中は然う〳〵私の爲め許り計つて與れさうにも無いから、此頃は少し、眞面目に考へるやうになりました。が奈何しても私のは理想と云ふよりも、空想に走つて了ひそうで困るのです。で上を見れば限りが無いから、まあ私に相當な處を考へて見る。此頃は男は赤門出、女は女學校卒業者と相場が極つたやうです。

○

私の友達等には然う考へて居る人も少くはありません。だから、友達が結婚したと聞くと、直ぐに學校は？と聞くのです、で赤門なら、然う、と濟して居るが私立學校の方だと、アラ！然う、となつて了ふ。が赤門出身でも、三四十圓で毎朝テク〳〵電車で通ふ御人も有るのだから、學士の妻となつても、何も然う榮譽榮華が出來るではなし、却て困る方が多いでせう。ソレもずつと年が進つて學士でも中古の方なら知らん事新米の學士先生は餘り生活に餘裕がない。で誰しも贅澤はしたい、時の流行にも後れたくは無いが、然うは行かないから、マア仕方が無いと諦めて、私は其良人となる人について種々の注文が有るのです。

○

職業は極端な勞働者で無い限りはまづ何でも佳いが併し軍人と文學者丈は嫌ひです。軍人と云ふと私にはどうも疎暴なやうに聞えて嫌だし、文學者は、自分の研究するものや何かゝ面白いせゐか兎角妻への愛情が薄いやうに思はれる。友達の話に始終書齋に籠りつきりで、偶に奥様が行かれると、五月蠅い！何て云れるさうです。那麼人は少ないでせうが、私にはどうも學者は嫌やだ、何だか其人が冷淡なやうに思はれる。

○

文學者と軍人を除いて、其外はまあ何でも佳いとして、其人の人格が高くなくつちやあ困ります。然うで無いと、夫としても、何だか一寸馬鹿にして見たいやうな氣がする。良人なら良人として、妻に對して、夫れだけの威嚴が無くてはならぬ。何んでも彼でも、妻の顔色許り見て居るやうな、返事が口迄出かゝつても、妻の貌色を見てそれを變更する樣な人は實に頼しくない。又一寸女房の着物の袂に泥が着いたと云つては、はたいてやり、帯が曲つたと云つてはちよい〱直して遣るなんて云ふ風なのは、餘り難有過ぎて些少と恐れる。或は女房へは小遣も何も碌々は遣らず、財布は何日も旦那樣の内懐中に在つて、鳥渡半襟一つ買ふのにも、旦那樣の御機嫌の麗はしい時を見計つて、御願ひすれば、又かと云つて苦い御貌をなさるやうなのも困つたもので、斯う云ふ御方に限つて、女はどうも虚榮の塊だなど愚にも附かぬ事を言つて歎じて被居る。又少し學問の有る妻君を持つと憎らしくつて、奈何かして、へ、、コマしてやらうと考へる人も有るが、是れも厭だ。又女房が少し何かに口を出すと、其麼事は女の知つた事で無いから默つて引込んで居ろ、なんて怒鳴る人があるが一體女房を何と心得えて居るのか伺ひたひ。何も女尊男卑と迄には行かずとも、女は弱い者、頼り少ない者として



憚れんで、勢はつてやる位の心掛で居る人であつて欲しい。

○

何方かと云へば男はまあ、氣がつかない、と云ふ位が佳い、餘りよく御氣がつくと、眞實に女は堪りません。夫れ以上に、氣を付けなければならないのだから厭になるぢや御座いませんか。而して淡泊したのが佳い。又慍る時には慍つても、其れが解けたら、直ぐにも機嫌を直すやうな人が女は仕へよくつて佳い、其方が私達は男らしいと思ふ。夫れと反對に、イヤにチチチチした腹が立つ事が有つても、女房には然う面と向つて慍らずに、何か女房が物を云ふと、返事の代りに女の頭の先から、足の先まで見上げ見下して、着物の着方が拙い、と云はない許りの貌をして凝然と見て居られる、と女は堪らない程に辛いものです。而して襖が一寸位開いて居ても、奈何もなか／＼だらしが無いねえ。なんて妙に廻りくどく皮肉に云ふ人は嫌やになつて終ひますよ。乾度其麽人は女房に何も彼も打ち明けては云はない。イヤに隱し立てをする。が我等淡泊して打ち明けて呉れる人が佳いと云つたつて、以前離つてた女の話をされるのも堪らない。而して多少にもせよ、文學趣味を有して居る人が佳い。奈何も文學に趣味を持たない人は、其人が何處か野卑に見える。と私は獨りで然う考へて居る。が文學士と云ふ肩書を有つた私の友達の兄さんなどは、隨分々らずやで、紅葉が甚麽のだが、子規が奈何云ふのだか知らないので、「金色夜叉」は天外の作でしたか、と云はれたには驚きました。又美術も多少は知つて貰ひたい。十二月の女學世界に女子と美術趣味と題して、今の女が總體に美術心に乏しいから、最少し美術に趣味を持つやうにと、たしか出て居たと記憶するが、私は玆に良人として仕へるには猶美術に趣味を有する人であつてほしいと繰り返して云つて置きます。

○

年は餘り老つて居ては、奈何しても話が合はないから、成可く近い方が佳い。學校は——何處出身でも佳

いから、其人格が高ければ佳い。背は私が小造りの方で、餘り丈が高いと、並んで歩く時に、權衡が取れないから、中丈として、何方かと云へば、中肉——まア痩せた人が佳いやうだ。で此處で再び繰り返す。文學美術に趣味を有つた、氣象は淡泊した人で、妻を妻として遇ふ人。而して財産とか何とか云ふやうなものは餘り好まない。が是れは自分で考へた許りで。明日をも知れぬ人の運命。私が又何日奈何して、人に羨やまれる身分にならぬとも限らぬし、又奈何な氣が變つて、大文豪の妻とならぬでも無いから、今から好い加減に極めて置くのは、損かも知れない、が自分は平常斯う考へてゐる。

總て未來に屬する事だから、自分は唯、自惚れて、來るべき幸福を悅こんで待つて居ませう。（完）

客の來る時

◎來客のあつた時は取次の者まづ案内して、客室へ通し、茶菓など進めて後、主人が出て應接するといふ順序にありたいものです、これは客をして暫時落着かしめる心持でございます、けれどもあまり遲く出るのは失禮です、若し又目上の客であつたらば、取次ぐと直ぐに出迎へて挨拶するのが禮でございます。

◎客を送り出したらば、其人の行き過るまで見送り。姿の見えなくなつて後戶を閉めて這入るやうにせねばなりませぬ。若しさうでなく、客の戶外に出るのを待ち顏に、音高く戶を閉づるなどは、少なからず客の感情を害ふものでムいますから、かゝる輕忽な事をしてはなりませぬ。

◎客のある時お茶を出すには注意せねばなりませぬ。第一湯のぬるきを出すのはいけませぬ、又出しがらの茶など出すは失禮です。斯ういふ事は不斷主婦がよく心得て、下女などにも失禮のない樣に敎へて置かねばなりませぬ。

◎客のあつた時、偶然にも食事の頃になつた時は、殊更に料理屋などから、誂へ物して出す時は、客は却つて迷惑に思ふものですから、何なりと手がるく調へて、心易く待遇するのがよろしい、斯うすれば客も大きに滿足して親しく思ふものでございます。

炊事に便利なる臺所

◎臺所は食物を調理し、諸部を準備する所ろにして、家族の多少經濟の大小に應じてそれぞれ設備に繁簡の差は有べきも、人數多くして自然喧ましかるべければ客間、應接間、書齋などに離れ茶の間、女中部屋に接近すべく且つなるべく南向にして日光十分に當り、明るくして廣やかなるを要す、これ食品の鑑別、料理の善惡をよく見分くる事肝要なればなり、場所狹くば料理方の働作も差支へ、整頓あしく、光線十分ならずば、食品器物清潔になり難く、且つ水を多く使用すべき所なれば、自然濕れ勝にして不潔になり易く、又黴の發るべきバクテリヤの繁殖する事も多く、隨つて食物の腐敗、器物の腐朽を速かならしめ、衛生上に、經濟上に損失多かるべし、彼の乾物類にカビを生じ、刄物に錆を生じ、マッチ等の濕りて用をなさゞるは皆日當り惡しく濕氣多きが爲めなり。

◎されば若し家の構造上、臺所を南向にする事能はざれば、東、又は西向にして朝日か、夕日のあたる樣に設け、なるべくは正北に向かしめざるをよしとす、北向は冬季殊に寒くして薪炭の不經濟となること多し。

◎臺所は殊に秩序を立て、整頓し置かざれば、萬事不便を免かれず、其構造に就ては板敷あり、石敷又はたゝきつくりなるあり、立ちて働くあり、坐りて便ずるあり、いづれも一長一短あれども、なるべくは立ちながら煮炊の出來るやうに造るがよし、一々膝を突きて坐するは立居に不便なるのみならず、衣服の汚損する事も激しく且つ無精になり易きものなり。

◎臺所の壁は中側に羽目板、又はトタン板を張り、洗滌、拭掃除に便ならしめ、四方に棚を釣りて、物品を順序よく其所に上ぐるやうにすべし。

◎竈は日本風のものにても西洋ガマにてもなるべく臺所の中央に備へ、周圍より煮炊するやう造るを便とす　若し壁又は羽目板等に密接して置く時は誤つて火を失する虞もあり、且つ後方より煮物など爲し得ざる不便もあらん、又改良竈又は焜爐等を据える下にはトタン、ブリキ等の不燃性のものを敷き、火の下に落つるとも危險なき樣にすべし。

◎臺所の棚の下には釘を打ち、笊、篩、その他鍋柄杓など、水を切り置く必要あるものは不用の時かけ置くべし、釘は大き金釘に竪の軸のごとき竹を冠せてこれにかけたる物品の損じもせず且つ袖などの引きかゝらざる樣にすべし。

◎又膳立などするにも、なるべく棚を用ふべし、立居の人の袖たもとのこれに觸れ自然に塵埃等の入るべき虞なきのみならず、かくすれば狹き臺所も自然廣く使へる樣になるべし。



よしなし言

静子

今文壇に時めき給ふ皆様をとやかくと月旦ふはげに我が身知らずの恐なる業『まだ作物のかず〱も知らで、その様な事は御止しなされ』との御叱は覚悟の前に候へどもいさゝか屠蘇の機嫌に書き続けたるよしなし言。

◎三宅花圃女史

我れまだ小學の二年か三年、了解しがたき節もあれど尚面白くて、新聞雑誌の小説を隠し讀む頃花圃女史の御名しば〱見受けぬ、漸う〱進みて女學校に、清紫の筆の跡、讀む様になり今迄解り難かりし美くしき形容の詞等わかる様になりて、又四ッ五ッは讀みたり、御子様あまた在はせば、家事に忙はしくて、さまで物し給はぬにや、其とも我が慮りにや、取り立てゝ之ぞと我が心に記憶る程には讀まざりし、然れどしつくりとなされた、奥様風は作の上にも現はれて、斯る御方にや、との想像、はしなくもあたり、女學世界に御姿拝せし折、實に〱と首肯かれしも嬉し、君が作は大方文章體にすら〱と綴り給へる、何處迄も大和ぶりを失ひ給はず、御良人様も、同じ道の御方とや、さこそ興深く事も在はさめ、かゝる中に生れ給ひし御子様達の天晴名高き文士とやなりませんか。

◎大塚楠緒子女史

あの人の様になりて見度し、かゝる様に生活して見度しとの願ひは誰もある可し、或日學校にてこの道好む友だち集り、女流作家を評せし時その中の半以上、我は楠緒女史の様になつて見度しと心から羨やまし氣に言はれしを覺ゆ、幼きより何不自由なき家に生ひ立ち給ひ、蝶よ花よと慈み給ふ御両親の愛に飽き給ふ頃

には學高き良人の愛に醉ひ給ふ、實に多幸の御方なり『人にはその樣に見ゆるか知らねど、之でも其れ相應に苦勞も有ます』と、愚痴こぼし給ふかは知らねど一々立入たる觀察にあらねど只己が想ひよりのみぞ。良人の君は文學博士、むづかしき理論もて美の性質等研究べ給ふ御頭も美しく優しき君が傍へに在はして、慰勞ひ給へば倦みも飽きもし給はざる可し。直ぐなる家庭に育ち給へば御心何處迄も伸び〳〵と優しき作物も、すなほにて應揚なり、玉の井のお力、たけくらべの、みどりの如きは到底、君が作には出でざる可し、地の文も對話も凡て上品にて優かしき代りに奇拔なる塲なき樣なり、讀み行きてすら〳〵と可愛き塲に微笑み悲しき塲に涙は出づれど膓に染み入る悲しさは覺えず、歌にて言はゞ何處迄も竹柏の園ぶりを失ひ給はず晶子女史の鋭き其れにはあらじ。こは皆順風にすゝみ給ひし境遇の結果にて、長處も短處もこの中にこそあらんか然れどいかに一葉の如く鋭き世相の觀察得るとも傷ましき運命の鞭に打たるゝは辛らし、成る事ならば君の如き家に生れ、あの樣な良人にかしづき、その樣な文筆の才得たしと、大方の女性の羨望、理ぞかし。

◎正岡秋子女史

君が作を手にせしは今より五六年前「紅薔薇」と題せる短篇集出でたる時なりし、その折は只若き心に何氣なく讀み行きて大塚女史や花圃女史の練れたる筆には及ばざれど、作者は必らず孃樣育ちの人にあらで世の憂さ辛らさも知り給ふ御方ならめとの、同情の心からにや何となう君が作の好ましく御年は幾つ、如何なる方にや、又如何なる世をか經給へると好奇心切りなりしも相見る折もなく聞き知るよすがもなくて、作物のみ變らず愛でぬ。正岡夫人となり給ひしと聞き知りて、よき伴侶を得給ひつると嬉しかりしも又、切角進み行く君が筆の妻てふ職にゝぶくやならんと心に懸りぬ、然れどもそは、徒なる心づかひなりき、正岡秋子の名は文壇に消へず鈴木の姓、名のり給ひし時よりも力ある作出でたる樣なり、一葉の刺すが如き鋭どさには及ばねども讀み果てし人の心に痛みは必らず殘す可

し。前に記せる方々と一寸變りたる書き樣の、對話の言葉と地の文と調和したる讀みて心地よき程なり、殊に最も氣に入りしはこの年の始め頃、新小說？にのせられし女心てふ短篇なり、戀の爲には己が名も惜まず人の譏も顧みざりし。近が、愛する人の身の爲思ひては全く己が戀も望も捨て丶他の女に讓りしもの丶、男の情けにぶらんとする心を引かへし／＼す苦痛煩悶の狀、うらみなき迄に、寫されたり、せめて、御聲なりともと忍び入りし宵暗、



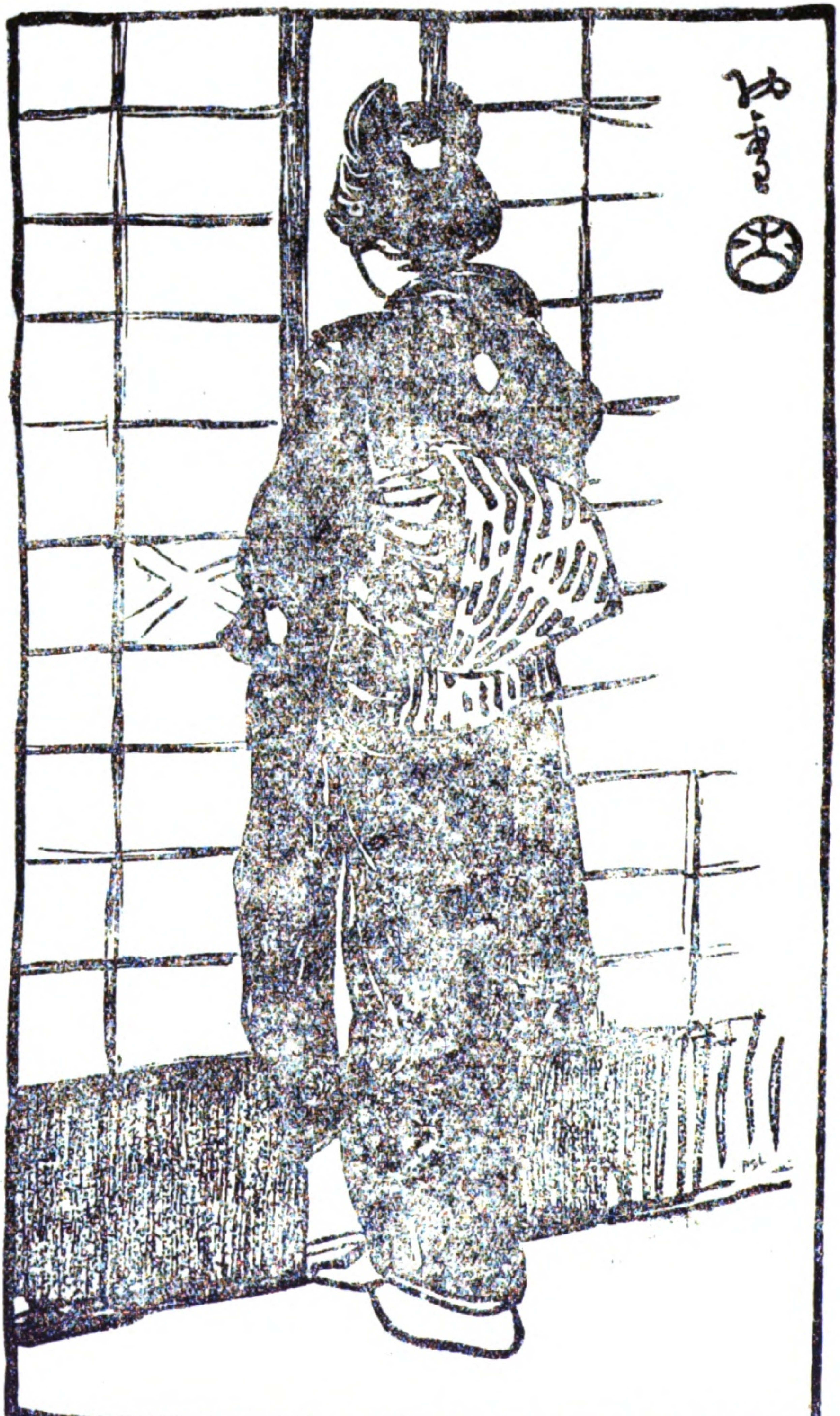
妻なる人に見咎められて、蔑の言葉聞きては、沸へ返る胸に憤りの抑へがたく誰が力にて得し良人ぞ、この心を知らば我が足下にひざまづきて感謝の言葉百度くり返すとも足るまじきをと口惜がる樣、優き中に勝氣の近が性格、充分に現はれたり、弱けれども強く、強けれども弱き、女心をよくも巧みに描寫されたる事よ、二度三度繰り返しても尙飽かざりき。

◎岡田八千代女史

御兄様は赤門出の秀才、御良人様は名だたる畫家春の朝秋の夕、さこそ、興多くおはさめ。お母様の、情にや優れ給はんか、御兄妹、揃ひも揃ひて豊富なる文才持ち給ふは、まだ御年も若く御姿も優しく美くしき御女ならむとこそ、思ひやらる、曾て住ひし麹町の家に、近き成女學校に通ひ給ひしときけば、朝な夕な同じ時刻の登校下校に行き逢ひし其の校の人の中に一度位逢ひ見し事もある可けれど慥かに其れぞと知る筈もなし、我が心に描ける君は、楠緒様にも少し肉をつけたる御顔形かと、……君とても世の愛はさまで知り給はぬ事を覺ゆるに、御年にも似ず、世の事に行き渡り給へる事よ、筑波正彌は、眞實ある俳優を寫されしとか、新紙に見えしが、まことなりや、この君の作も一寸風變りにて、骨ある様に覺ゆ、何處となく江戸子氣質あらはれて意氣と言はんか、上品なる點に於ても楠緒女史、花圃女史にさまで劣りはし給ふまじ、君が性質は、てきぱきとして、絶えず活動き、男の前にて恥らふ等云ふ事なく、快活なる御方と見しは誤りか。山手、下町、何れにても、當今、眞の東京女氣質の描寫は御手の物なる可し。

* * *

三宅女史、大塚女史の作は上品なる奥様風、八千代女史は意氣七分ハイカラ三分の娘風、秋子女史は、意氣四分、上品六分の滋味ある娘風との評當らずば許し給へ、其の他、佐藤露英女史、野上八重子女史、一ノ瀨初子女史等在はせど又も記さん一ノ瀨様は我が同窓の友、その折とりこの道御すきにて、自修室に敎科書は飾り物、前後の椅子に在りて、一句〳〵の取り遣り監督者の眼ぬすみて盛んなりき互ひに消息絶えて都の何處か知る由なけれどひたすら君の成効祈りつゝある我ある事を知り給ふや。一時北信の菫とて女學世界の賞によく入り給ひし御方、今は如何にかし給へる御消息きかまほし、今や文壇に女子の光漸う〳〵現はる、あけの明星となる人はそも誰ぞや〳〵。



獨身生活の苦樂

西洋畫家　神中糸子

昨年開館せられた文部省第一回展覽會で、西園寺首相の眼に留つた果物油畫の製作者、神中女史の噂は大分諸新聞紙の傳ふる所となりましたが、女史は日本に未だ洋畫が持囃されなかつた頃から斯道に志し、熱心精勵十年一日の如く技術を研磨された修養深き一婦人であります。（婦人記者記す）

▲幼時の感

私は初めから畫を以て身を立やうと志した次第でもなく、申さば自然の境遇で斯樣なつたやうなもので御座います。併し幼い時から天然の美を愛する事は深かつた方で、六歳位の頃夜分縁側に腰を掛て星を眺め、彼樣美しい立派な物を家の中へ持て來たら嘸良からうなぞと始終思ひました。又神社佛閣の繪馬堂を見るのが好で仰向て痛くなつた首を少し休めては又仰向て眺め入つた事なぞは四五歳頃からでありました。晩年中島歌子さんの御弟子になりました際、拙いながら和歌に神韻があると云はれましたが、矢張深く天然を愛する性情が現はれるのかとも考へます。工部省の美術學校へ入つて洋畫を學び始めたのは今より三十年前で學校を出ましてからは小山正太郎氏に就て學びました。

▲繪畫は父親の仕付け

父は和歌山の藩士で當年八十二歳になります。紀州は御承知の通り日本で一番早く兵隊を作つた藩で、父は此兵隊養成に就て盡力いたし、御維新の頃には東京へ教師を抱へに參つたりなぞ致した相で、斯樣關係から明治の初め士官學校に奉職いたし老年まで勤めて居ました。夫れで薄給ながら生活はどうか出來ましたし、兄も醫者を開業致しましたから私の學資位は心配もありませんでした、父も兄も畫が好きで私の稽古には大層肩を入れて呉れましたから誠に幸福でした。父は旅行や名所巡りに私を屢々同伴いたし歴史や風景の

趣味を敎養して呉れました。而して常に決斷力を奬勵して呉れましたのは、私が他日斯樣に生活すべき先見があつたものと見えます、父は幾何學的の人で規律正しく私や妹達を躾け、自分の命令は軍隊的に勵行させましたので私共のためには極宜しかつたのですが、御承知の通り洋畫の野外寫生は光線の都合に依り午後より初める物があり、此際はいつも歸宅が夕方に成りますので、父は之をいたく嫌らいむづかしふ御座いました。

△自殺したかつた場合

私も習畫時代に學友同志寄り合つて水彩畫の展覽會を催した事がありました。私は出品する畫に付て非常に苦心いたし永い時日を費やして居るのを、父はじれつたく思ひ毎日〳〵ブツ〳〵叱言を申し、私もつひ之を辯解致すために衝突も御座いましたのを妹達が氣を揉んで私を諫めると云ふ塩梅、私は若し製作品に高點を得なかつたら自殺する決心で居りました。

年若の頃は詰らぬ事に激して自殺したくなつたもので唯今考へ出すと馬鹿氣て居ります。併し婦人が生涯獨身で通すのは他から想像するやうに氣樂ではありません、複雜な關係の少い代りに慰藉も少く、考へると眼が肥える割に實際の事が運ばず、斯樣苦痛のある際唯一の相談相手と賴む人と意見が合なかつた場合など自殺したくなる事が御座いました。

△獨身生活の慰藉

私は寂寥や煩悶の非常な苦痛に對して非常な愉快が忽ち伴つて參ります。夫れは描畫の快味で之れに依て始終慰めを得て居ります。皆樣が夫や御子さんを愛されるやうに美術を愛し天然を愛し、皆樣が家庭の事に心を勞されるやうに描畫に就て苦心する間に言はれぬ樂しさが籠つて居るのです、文學なり藝術なり自分の執れる事に身を獻げて居るのは、獨身婦人の操行を守る生命で御座いませう。獻身の價は獨身婦人も一家の主婦と異つた處は御座います、畢竟獨身生活に成功し

た婦人は一家の主婦となてつも必らず成功致しませう。

▲公共的に就ての慰藉

日露戰爭の最中には私の仕事も暇で、夫れがため種種な煩悶も起りました。私は此煩悶を打消すために何か戰時の御用を勤めて見度と考へ、資産の要る事は迚も及びませんからせめて自分の手先で出來る忠勤者の肖像を畫かうと考へました。併し大分時日も掛る事で中々獨力では出來ませんから、有力の方々へ御相談致した處皆樣の贊成を得原料は寄附して頂ける運びになり、早速聯隊の方へも申し出て、聯隊から主なる忠勤者を選んで揮毫を托されました、其中特に寄附したい分だけは已に大鳥さんから頂いてあつた金で調製致しました。斯樣事業に働いて居る間は誠に愉快なもので御座います。

▲脫俗を衒ふの弊

獨身生活で通す婦人は荒い男勝りの氣丈者か、又は仙骨で世俗に拔き出た者が多いやうに世間から思はれ、特に美術家は自身も脫俗洒落に世を渡る事を好む處から自然この風采を衒ふ傾のある婦人も御座いませう。脫俗は貴い意味に違ひありませんが、無暗に外面に表はすのは婦人の愼むべき事と存じます。而して稍もすれば粗放に流れて描畫の上にも此弊が現れるものです、例へば柿の丸嚙りを爲ながら大道を歩いたり、細で縛つた澤庵をブラ下げて歩いたり、客膳の側に竹の皮包を推開いて毫も憚からないやうな行作を致して居る、農家を寫しても農夫を描いても唯汚らしく卑しい處が現はれ、詩的の精神が籠らないでせう、私は肌拔や細帶で畫架に對し度ない粗服でもキチンと爲て筆を執るやうに爲たいものと存じます。私は以前教育家の某老孃に會ひました時、其老孃が紺飛白の筒袖羽織を着て如何にも粗放な書生風で應對されたのを見まして自分も年取たら彼樣になるであらうか、嗚呼厭な事だと熟々感じました。男子でさへも年取てから書生風の

尚更此點に注意しなければならぬと存じます。

▲主婦と獨身婦人の相違

婦人の獨身生活も若い内は前途に大きな望を抱き、架空の想像を夢みて居ますから苦痛も餘り無いものですが三拾歳を超えて血氣が下り坂になりますと家庭と云ふ事に趣味が生じて夫や子に愛を捧げて見たい感じも起るものと見え、私なども其年頃には矢張其樣感じが御座いました。夫れから四十歳を過ぎ年寄の心持になりますと腹も据つてそんな念もなくなりました。婦人が獨身で通すのは何でも三十代の頃が一番むづかしいのでせう、我儘な良人に



壓制され自由を奪はれて居る主婦方は、氣儘に獨天下で暮せる私共を見て嘸愉快であらうと思はれるか知れませんが、私共は其獨天下、御主人樣が却々辛いので御座います寢て起きて食べて唯生てさへ居れば滿足が出來るなら氣樂に違ひありませんが、進歩發達とか名譽とか云ふ樂しみが無ければ精神枯死して了いますし、之を得やうと云ふには無一物では出來ません、年を取る程處世に經驗を積むだけに眼と考へばかり肥えて實際の技術も經濟も思ふ半分に進まず誠に苦痛で御座います。而して此苦痛を唯獨りでさばいて獨りで慰藉をしなければなりま

せん。又平常の雜用にしても總べて自から主となつて取扱ひますから此境遇に倦きて居り、偶々朋や友達と旅行でも致した際細事まで萬端取扱つて與れますと、俄かに荷が輕くなつたやうに嬉しい心地がいたします。申すまでもなく、婦人は止を得ぬ場合の他は人に嫁ぎ子を育てゝ、天職を盡すのが本分でせう。如何に苦勞が多いにしても之れに依つて益々婦人の眞價が得られることと存じます。

▲繪畫と裁縫

私は畫の勉強最中母を失ひ、幼少の妹も御座いましたから隨分母の役も勤めました。夫れに父が八釜しふ御座いまして臺所元から妹子供の世話、家族の縫物まで一人で受持ち、其暇に畫をかいて居ました。家事を執りながらの描畫ははからず興味を覺える事がありまして、早朝洗濯に掛かる折、庭の泉水に鏡のやうな有明月が浮いて居た事なぞ生涯忘れられぬ程趣味深く感じて居ります、斯樣生活を致した爲に幾分か家政にも明るくなり隨つて常識を養へたので、今日一戸を持つやうになつて少からぬ便宜を得、第一下婢を使ふに餘程同情を持つ事が出來ると存じます。裁縫も半年計り習ひ、其後上手な仕立屋が縫つた物をほどいて見て定り〳〵を獨りで研究し、數をかけた間にどうやら出來て參りました自活致すやうになつてからも描畫の暇さへあれば針を持ちましたから、自墮落に襤褸を下げずに濟みました。御針は畫學に比べると容易い上に却却面白い仕事で、私は少々氣分が鬱した時も御針にかかると、晴々する事が御座います。是はつまり仕事の變化に依つて氣力を養へるからでせう。

▲婦人が畫を心得た德

家事を執るのに多少畫心のある婦人は餘程便宜があると存じます。先づ御針に致しても布切の取合から褄形の格好又は着る人の柄に應じて行丈を調子よく見計らふ事なぞが器用に出來るものです、又料理の取合せ器物の撰擇などにも自然畫の趣味が働らくものと思ひま

す。恰で畫心のない婦人は是非初歩だけでも習ふ事が必要でせう。夫から深く入つた者は他人の美しい衣服髮飾を見た際にも、彼樣美しい風采を自分が畫に現はして見たいとか、彼の着物と帶は色の配合が如何だとかそんな方面に計り心が向ひ、徒らに盛裝に見とれて羨やむやうな卑しい念も起らなくなりませう。

豫言の適中

瑞西の或る田舍にポツシユといふ婦人あり、寡婦暮しをして味氣なく送り居たるが、齡若き時豫言者が、お前は四十を超えると非常な幸福を享けると言ひし事あれど、既に四十を超えたるも更に幸福らしき事に逢はず、貧苦に逐はれて淋しく月日を過しけるうち常には郵便などの來しとも無き家へ、珍しくも一通の手紙到着したり、手に取り見れど差出し人の名を知らぬばかりか、發信所も英國倫敦なるより、益々不審を起せしものゝ、兎も角もと開封すれば、中の文句に「我れは某の友人である我が友なる人は不幸にも去る月天國に旅立ちたり、彼を去るに臨みて遺産を受くべき人なければ、卿に十五年前途上にて病氣の介抱を受けたる緣故あるを以て百二十五萬フランの遺産を卿に贈るべき遺言を委托されたり、我れは亡友の遺旨を守りて今卿に其の金を銀行爲替にて贈呈するものなりとありたりポツシユは夢に夢見る心地にて幾度か其の手紙を繰返し〳〵して讀みながら、思ひ起して見れば成程十五年前、其の身が倫敦に在しとき、一日女皇陛下の行幸さるを拜觀せんとて、ヘツキンガハム宮殿の最寄に佇立み居たる折、側に同じく通御を拜せんと佇立みゐたる一人の紳士が、突然病氣を起して苦痛するを氣の毒におもひ赤誠をもて介抱し、近きあたりの醫師の許まで伴れ込み、懇ろに看護し、互ひに名乘合て袂を別ちたる事ありしも、其の後手紙の往復はなくて過ぎ其の事さへ既に忘れ果たる十五年の後、突然其の遺産の贈與金百二十五萬フランを贈られたるものにて豫言者は十五年の後に當れるなりき。

予の寄宿せし美はしき一家風

ドクトル　兒玉修治

たのしみは夕顔だなの下すゞみで、あい情さへあれば、はだかでも家庭の樂が得られぬことはなからう、けれどそれではたのしみが餘りに單調である。人間は心身ともに複ざつな要求があるものだから、これに對する經濟上の準備がなくては。永久の平和を維持されるものではない、尤も富も財產も程度問題で、餘り分に過ぎては却てそれが心のわづらひとなるのみか、延ては子女をそこなふ樣な場合もあるけれど、要するに最も幸福な家庭は上流奢侈の人達よりも、寧ろ恒產あり、敎育ある中流社會に多く見受けられるのである。で此種の善良なる家庭は我邦でも隨分少くはあるまいが、さりとて從來の家族制度には尙ほ幾多の改良すべき餘地があるだらうと思はれる。

私が海外に流寓して居つた當時知合の外人中には、頗る感服すべきいろ〳〵の家族もあつたが、就中異の文明的生活の模範とするに足ると思つたのは、米國エール大學の文科の敎頭をして居つたジユール、ルキアンといふ語學博士の一家庭であつた。

私は元來下宿風の生活を好まぬところから米國でも成べく正直な素人屋に同居したいものと考へて、其事を先輩に依賴すると、ルキアン博士の家族なら申分なからうとそこで、この良家庭に寄寓する事となつたのである。

家族は夫婦の間に子女が三人、雇女が一人、家内中の人はみな親切で秩序正しく、誠に羨ましい家庭である、主人は元と瑞西の產其性質は極めて溫厚で人格の高い學者であつた。

△景色のよい家

ルキアン一家の生活の模樣がすべて田園的に成立つてゐると共に、家の構造や室の設備も亦た閑雅なものであつた。其位置は市井の雜踏を離ることゝ一英里、後には老木の茂つた小山を背景となし、清明なる湖水

を前面に控へて、四邊は一面の芝草を以て掩はれ、林檎の木もあれば葡萄園もあり、栗鼠や兎などが心地よげに遊び戯れて、如何にも優雅の風趣を呈して居る。

この家は博士の細君が自分の財産で建てたので、どの位の建築費が要つたかはわからぬが、とにかく之を造具づきのまゝ他人に貸す日になると、一ヶ年二千四五百圓なら借人はいくらでもあるとの事であつた。

家の造はおもに夫人の考案になつたので、三層樓の下に地下室があるから都合四階になるわけである。第二階は前後共に外の方へ縁側が突出てあつて、その手欄の上には夫人が丹精をこらした稀らしい鉢植の草花が輪を綴つたやうに行儀よく列べてある。尤も一寸外から見たゞけでは左程驚くべきものはないけれど、親しく室内に這入てみると、一室でも無駄な間がなくて、しかも設備の便利なる點や装飾の配合等は實に巧妙を極めてゐる。

△器具とかざり

先づ入口の扉をあけるとどこでも同じ樣な立派な玄關で、こゝに大きな姿鏡と帽子掛とがあるだけで外に特色はない、次が應接間で、十疊ほどの廣さの中央に二脚の卓子を挾さんで、美事な裝飾を施した屏風が据ゑてあり、壁間には希臘時代の人物畫と風景畫とが調和よく掛けられて、客を飽かしめぬ手すさびには、感心される、室の一隅に中形の洋琴が備付けてある。これと並んで凡そ二三十人も這入られる大きな室が客間で、其中に最も人目をひくのは裝飾用の煖爐であるが、之は綠と黒と白との三色の斑が入つた極めて光澤ある大理石を彫刻したものだから大に光彩を添へて居る。そして飾棚の上には精巧なる彫像や花瓶其他各國の粋を萃めた美しい美術品が飾られて、一方の唐木造の書棚にのせてある、各國の文學繪畫等に關する澤山の書籍と相對して、一種優雅なる對象を示してゐる。單にこれだけなら何人にでも出來る業であるが、私の感服したのは器具の好惡よりも其配合美に注意してある點で、總てどの室に論なく、卓子でも椅子でも安樂椅子でも、一つ所に同じ形の物をいくつも置くといふ事は爲ない、種々の形をした椅子に家族の者や來客が、思ひ〳〵の服裝をして坐して居る處を見ると、實に似付がよくて繪でも見るやうな心地がする、それと今一つは窓硝子の色合と窓掛の模樣とに精密な意匠が凝してある事で、例へば硝子か綠色ならカーテンを純白な透し模樣にするとか、窓掛が紅梅のレースなら艶消玻璃を用ゐるといふ工合に、何れも皆な裝飾上の缺點を示さぬものはない。

△共同の室と個人の室

次に客間の玄關とに隣つて大きな食堂がある、一間に二間位な食卓が中央に二脚据ゑられ、左右の壁際には美しい食器戸棚があつて之が實用の外に此室の裝飾を兼ねてゐる、室の配置はザッと右の通りであるが、一體西洋人は一家内に於て、めい〳〵の事と一家共同の事との間には區別があつて、一面には飽までも各自の獨立性を發達せしめると共に、他の一面には共同的生活を圓熟ならしめんと努めてをる、隨つて其習慣を養成するには、家屋の構造と大なる關係があるので、この家では、即ち一階の諸室を共同生活の用に供し、二階は全然個人的に分離して獨特性を發揮せしむるやうに出來て居る。

二階へ昇ると直ぐ大廣間になつて其突當りに浴室と化粧室とが設けてあるが、湯槽や手洗鉢は何れも大理石と金屬とで製し、而して二條の螺管から湯と水とを自由に吐き出される樣にしてあるから、便利な上に、清潔である。

△各自の特色

右の大廣間の左右兩側には四個の室があつて、之は家族の者が一人々々に獨住する所で、寢室をも兼ゐるのだから各々金屬製の寢臺が一つ宛置いてある外に、戸棚、簞笥、テーブル、長椅子其他いろ〳〵な裝飾物を要するのだが、此配置方に就ては住む人の趣味によつてそれぞれ好みを異にし、夫人の室には裁縫器械が据付けてあれば、令孃の所には書架や樂器が飾つてあり、又令息の室には速記活字器や撮影器械の類が置かれてあるといふ風で、自然に其人の特質が顯はれて居るから面白い。さて又三階であるが此處は、小なる私立圖書館と博物館とを兼れ合せたやうなもので、諸國から蒐めた幾多の書籍と數百種の博物とが二つの大棚に體裁よく陳列してあつて、之は每月一回乃至二回、知人の爲めに應じて公開する事になつて居る。

此家屋に於て最も愉快な特色は、以上の諸室を通じて衞生上の換氣法と寒時の煖室法とが充分に行渡つてゐる事である。暖房器は地下室にあつて、寒冷の空氣を温めては瓦斯管の樣なもので之を各室に送る、受ける所ではこの空氣の量を調節する裝置がしてあるから室内の溫度は何時でも適宜にする事が出來る、だから暖爐の如きは實際要らぬのであるが、併し大雪でも降つて外界が如何にも寒げに見ゆるとか、或はクリスマスの晩など多勢の人が團欒するとかいふ場合には、唯だ裝

かいのみでは興味が薄いから、一種の景氣附けにドン／＼火を焚いて其紅の光に心目を娯ましめるのである。

△獨特の生活法

ルキアン博士は（この博士は私が世話になつてゐる間に逝去された）其生前に、己れの遺産を細君と三人の子女に分配して、何れも獨立の出來るやうにしておかれたので、此家の生活法は一種特別なものであつた。固より親子の間だから當分は一家に住つてゐたが、會計は全く分立で、唯だ當時獨立の年齡に達せぬルイス孃だけは別として、長男と次男とは私の滞寓費と同額の、室料三十圓食費四十圓、都合七十圓を毎月その母に拂つて居る、といふ次第、母親はその請取つた金を息子の生活費に宛てゝ、不足の塲合には自身の財産で多少の補ひもするけれど、表面はどこまでも別勘定で、途中で一緒に電車や馬車に乘つたその賃錢までも各自に支拂はせると云有樣であるから、貸借はお互にせぬ事にしてある。此經濟分離主義は一寸日本人の眼から見ると親子の間柄にしていかにも冷淡のやうに思はれるが、實際は決してそんな心配はないばかりか、却て相互にいろ／＼な面倒や遠慮がなくて圓滿に治まつて行くのである。啻に經濟上に於て獨立して居るのみならず、日常の生活に就ても自己一身に關する事柄は、細大となく一切自分に仕末して、敢



て他手を借らぬことにしてある。といふのが、矢張良い習慣のたすけである。

日本では少し門戸を張るほどの家になると主人は勿論、多くの子女等が一日中にどのくらゐ他人に手數をかけるか解らない。まづ朝起ると顔を洗ふ湯水をとらせる、煙草ぼんを持て來い、癖直しの湯をくめ、新聞はまだか、着ものはどうした、車を命じて來い、下駄を出せ傘はどうしたとまるで手足のきかぬ人形同様で、自身の始末を人に頼むのが名譽のやうに心得て居るから、主人や子供の爲に一家の者が大騒ぎをせねばならぬ。西洋では餘程の上流社會でもこんなのはない、殊にルキアンの家では一身の爲に他を煩すなどは殆んど皆無である、毎朝家族のものゝ寢所と各室の掃除とは、母親がむすめさんと女中を對手にして行るので、これだけは主婦の受持であるが、其他の事は凡て各自で所便すると定つて居るから雇女はたッた一人で間に合つて、而も餘り忙しい方ではない。然れば一家の主婦が家政を處理するの外、尚ほ充分の暇をこしらへて精神の修養や樂に身を委ね、且つ世間と往來して其見聞をひろめることが出來るのは、つまり家族のみんなが獨立的で、無益の累らひを他人に及ぼさないからである。

△主婦の人格

年齡は五十三虚飾やお世辭の無い人で、唯だ誠實を以て押通す方であつた。殊に感心なのは其言葉遣で、不斷家族の者と話す時でも立派な文章語を用ゐて、彼の輕薄なる流行語や畧語などを使つた例はない、曾て次男のヒューと云ふのが、未だ學生の身分で毎も亂暴の言詞遣ひをする男であつたが、或時學校の課題で文章を作り、食後母の前で大得意でそれを讀んだ處が、夫人は「大層よく出來ました、お前の話振もさういふ風だと結構なのだが」と謂つて諭した事がある。されば如何に情の激した時でも、聞苦しい腹立聲を出す樣なとはなく、擧動は飽までも靜穩で米國流の輕率なる點は露ほどもない。

ルキアン夫人が平生最も忌嫌つたのは、慈善とか宗教とかを看板とする一種の偽善者である、米國では宗教上に籍を置かぬものは殆んど人間でないかの如く攻撃せられるのであるが、この家庭ではそんな形式に束縛される事を好まぬ。

△有益なる一日

扨又夫人は其日〳〵を如何にして暮すかといふに、先づ朝は五時半に起き、珈琲を喫したる後女中とルイス嬢とを相手に家中を掃除し、次に庭園の植木などを手入れして朝餐となる、それが濟むと自轉車を驅つて食品の材料其他の日常品を市へ求めに行く、尤も文通で間に合ふものは前日端書を出しておくが、爾うでない所は自分で出掛けるのである。それから歸つて來ると同時に自己の室に入つて、讀書をするとか或は家内中のシート。シャツ手拭、寢卷類の洗濯物に火熨斗をかけたりして成だけ洗濯屋の手へかけぬ方針をとつて居る。やがてする中正午になるから再び女中を指揮して中食の仕度をするといふ風に毎日午前中の夫人を見ると世話女房である。



けれども學者の未亡人として、子女教育の監督者として社會に後れないとするには、家事以外の智識を他に求めればならぬ、そこで午後から夕方までを精神修養の時間に割宛てゝ、一面には自家の圖書室で、新刊の書籍を漁り、更に又公開の學術講習會に臨み、或は知友の

婦人間を往來して、世間話の外に實用向の見聞を廣めるやうに努めてある。

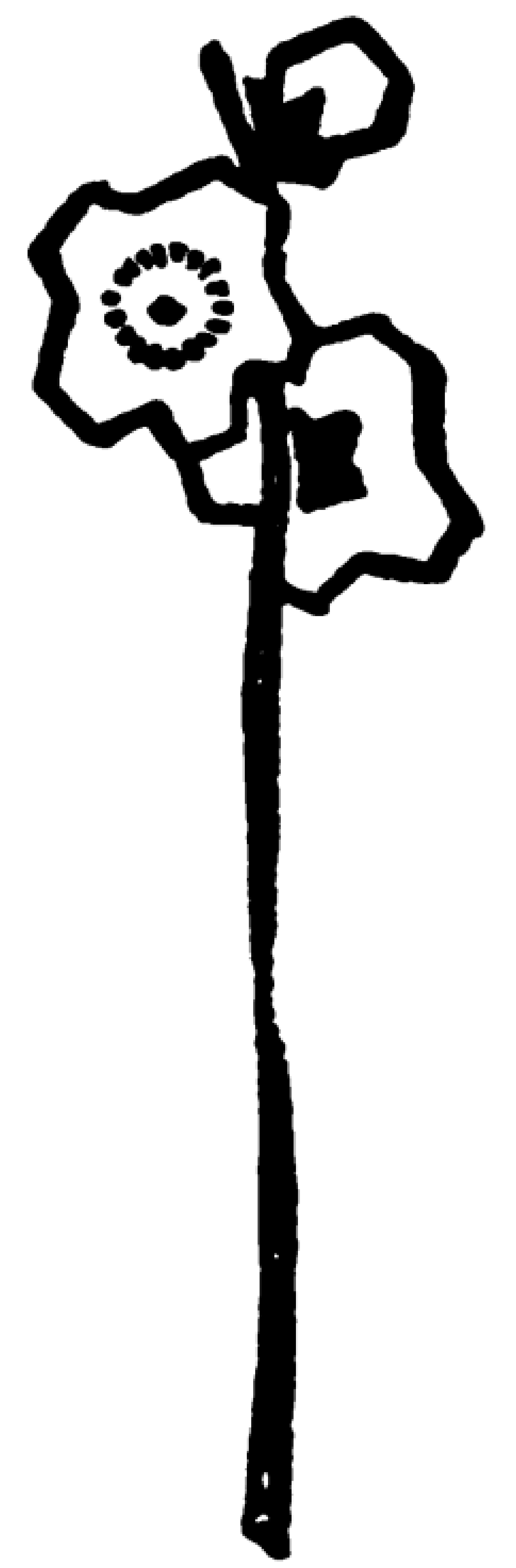
△家庭の花

善良なる夫人と共に其一家をして春の如く賑かならしむるものは、本年十七歳になる一少女である。血統上から云へば父は佛人系、母は英人系に屬するのだが、彼女は佛蘭西風の浮華なる所は更になくて矢張母親と同じく、淳朴なる英國風の娘である。隨つて姿や容貌も其方に傾いて、氣取るとか媚るとかいふ樣な嫌味は少しもなく、誠實で無邪氣で子供らしい中にも何となく凛とした處がある。又服裝には、特別の嗜好があつて、白色か黒色か鼠色かの三色に限り、曾て麗々しい色のある衣服を着けた事がなく、何時でも無地物である。西洋では老年の婦人が隨分思切つて派手な服裝をして衰へた顏の色を衣服で埋合せるといふのもあるが、娘が恁那地味な風をするのは滅多にないことで、而も此方が寧ろ氣品が高く見えて奥床しいやうである。母も此子を教育するには骨を折つたものと見えて、學問以外の素養は却々に發達して居る。或時わたくしが歐洲旅行中にあつめた繪畵や、彫刻などの寫眞を見たいと云ふから、出して見せると、それに就て一一痛快な批評を下した、之を我國の同年配の女子に比すれば、はるかに知識が廣く涉つていろ／＼な事に興味をもつてをるから、來客などの相手をさせても決して人を飽かしめぬのみか、家庭にあつては優美なる一朶の花として愛でられるのである。

華美なる英國の社交界

近頃歐洲より歸られたる有賀博士は、來客に語つていふ各國王室の美なるとは、東西古今を通じてあらゆる形容詞に盡される所だが、英國宮廷の行樂は寧ろ浮華を避けて質實素朴なるには驚き入つた、之れと反對に英國上流社會の夜會に於ける婦人の服裝は、善盡し、美盡し只々驚き呆れる外はない、金剛石は其一粒を指環の中に鏤めてさへ我我の尙ほ貴重する所であるに、英國の貴婦人は拳大の寶石、金剛石など惜氣となく身に飾り立てゝ、光輝燦爛人目を眩するばかりである、是れは如何に巨額の金を投じたとて到底一時に購ひ集め得らるものではない、祖先累代の珍寶を併せて裝飾するからこそ、始めて爲し得る事であつて是れぞ英國の富と寶である。

支那風俗 花嫁の化粧



日本では化粧するものは若い女に限つたやうであるが、西洋では頬ざかりの者はあまり作らないで却つて容色の衰へかゝつた中年増が殊に身綺ろひをする、ところが支那は日本流でもなければ又西洋風でもない即ち娘もあまり作らなければ、老婦人も左ほど粧ひに金を入れないで、花嫁の境遇にあるものが一番化粧に身を入れるのである。

然らば新婦の化粧はどんなものかといふに、まづ朝は大抵七時頃に起きて顔を洗ひ、嗽をする、尤も西洋風の歯楊枝で、歯を磨くのはまづ少い方で口中の掃除は極めて等閑にされてゐる、で手水が済むと直ぐに髪を梳きはじめるが、髪は毎晩こわして毎朝結ふ習慣である。

◎頭のおつくり

髪のとゝのへが済むと今度は顔の化粧にかゝる、これは大變に面倒なやり方である第一初毛を剃るのに日本流に剃刀を當てるといふ事はなく、一尺ばかりの絹糸につよく縒りをかけて、それを顔にあて、上下へ引しごくのである、こうすると、初毛が縒りのつよい絹糸にからまつて綺麗に抜けてしまふ。それゆゑ顔は舐めたやうに滑らかになつて、滑りがよくなる、支那婦人の顔のつるつるして見へるのは全く其の所爲である、化粧師傅に剃刀で顔をあたるのは肌理を荒らすものだとしてあるが全くそうである。

◎下化粧

右のごとく糸で滑らかにして置いてそれから下化粧をするのである、それには白粉と紅と、脂とを混ぜたものを手の掌にのせて充分に揉みつぶして顔一面に塗り、其上を幾度となく手の掌で撫でるのである。

◎本化粧の仕方

下化粧が済むと今度は本化粧にかゝる、本化粧は眼の縁から頬へかけてべつたりと眞赤にして唇にもこつてりと紅脂をつける、誠に濃厚づくりで京都式以上の化粧で白壁これを見ると少々厭な氣がする、併し、是等は大概中流の社會でする化粧風であるが、上流社會の貴婦人になると矢張り薄化粧の方で、所謂牡丹の濃艶よりは、梨花の清楚を尊ぶのである、但し芙蓉のまなじり、丹花の唇といふ美人の形容のごとく支那小説の描け通り、どちらかといへば濃艶を化粧の本位としてゐるやうである。

本化粧が了ると今度は衣裳の着替へである、肌着から、襦、それから、下着、上着といふ順でまづ身粧をするのに約二時間位はかゝるのである。

◎燕脂と白粉

さて彼等の用ふる紅、白粉油の類はどんなものであるかといふに矢張日本の燕脂で、小さい茶碗に塗つたものである、白粉は多く鉛入りの粉な白粉である、又梳油は原料を胡麻から取つたものに桂の香を移したものである、それから彼等は化粧する時にいろ〳〵の香料を使ふ習ひであつて、小さな粒に造つた香を手の掌にのせて揉み捻いてそれを顔や手足に擦りつけるのである又彼等が髪を結ぶのには元結といふものは使はず、唯絹糸で造つた小さい打紐を使ふ、そして妻、寡婦、處女、いづれもこの打紐の色で區別されてある、即ち處女は桃色妻は赤色、寡婦は青色である。

◎頭のかざり

右にて大略顔の造作を終れば、今度は顋より頭、耳、腕、指、等の各部にそれ〴〵粧飾を施すのであるが、首には玉或は金屬を以て造つた花の形ちを繋き合せたものを纏ふのである。

それから頭には珠花と唱へた金屬で造つた玉鬘の瓔珞を髪の左右及び後頭部に垂れ下るのである。

次に耳の飾りは鉗子と唱へて矢張金屬にて造り寶石類を嵌めたものである、成年以上は足の長い丁字形に曲つたものへ寶石類の小さい環を加へ、幼年の者は七寶で艾の葉の形したものを用ふる。

◎腕環と爪帽子

其次は腕環であるが、これは西洋婦人の用ふるものと大差はない金銀又は翡翠で造つた至極美麗なものを箝める又支那人は男女共に指爪を長く伸ばすのを貴人の表徴として尊ぶ習慣であるから二寸も三寸も爪を延ばし、それに嵌める帽子が又粧飾品の一つで金屬で製し其形は爪形のもので贅澤なものになると細かい寶石の象眼を施したものがある。

◎花　挿　頭

それから支那婦人は老若共に花挿頭をさす風習で多くは絹製のもの花は薔薇牡丹等いろ〳〵の花をつくり髷の附根から前へ突出して左右に挿す時は殆んど頭一面を蔽ふてゐるやうである。

女學校の草分

班鳩子



東京市は固より、いづれの地方でも、大抵高等女學校の設立を見ない土地は無い。女學校の隆昌は旭日の騰るが如き勢である。併しながら、明治初年にさかのぼると、普通の小學校すらもなかつた位、舊幕時代のその儘の例の寺小屋で、今時の學校らしいものは一ッも見なかつたといつてもよい、尤も江戸時代より引き續いて、吉田賢輔、芳野立藏、川田甕江、島田重禮、大沼枕山、林國太郎などゝいふ、儒者の漢學塾は景氣を現はしてゐる傍らに、福澤諭吉、箕作秋坪、村上英俊、尺振八、福地源一郎、伊東昌之助、鳴門二郎吉等の洋學塾は、年々に景氣を増し、特に福澤先生の慶應義塾と、鳴門先生の洋學塾は、明治の初年に生徒の數二百名以上に出で、その出身者は、さしづめ奏任官といふ格で大いに政府に用ゐられて肩で風を切つてゐたが、之は社會の一少部分で、一般の人民はといへば、舊幕時代と違つたこともなく、依然として市中各所に散在してゐた怪しげな寺小屋式の手習所に出入してゐた位ゐなものである。一般の有様が斯うであるから女學校などゝいふものは夢にも見る事が出來なかつたのである。——然るに、此の草創たる明治の初年に、横濱に一種の女學校が創立されたのは、今日から見ると何んでもないことであるが、當時は異常の眼を以て迎へられたのも無理のない次第である。それは山ノ手二百十二番の共立女學校である。恐くは此の共立女學校は我國で最も早く創立された。最も舊い女學校であらうと思はれる。

▲濫觴はアイノ兒の教育

如何して明治初年に、當時ほんの新開地であつた橫濱に、女學校の類が出來たか。例令西洋の文物が最も早く輸入つた玄關口とは言へ、異常の事共であると詮索すると、西洋人の手で出來たのであるから、不思議はない。今も橫濱の故老に出會すると、何時も出る言葉であるが、明治一二年の頃は、維新の改革後とは言へ、まだ攘夷の風習が遺つて、西洋人を見ると、一と口に毛唐人と貶しつけて得意がつて居たものである、氣の迅い連中は拳を固めて突ッ掛り中には商館に出掛けて亂暴狼藉に及ぶ物も珍らしく無かつた。で、橫濱に來てゐた歐米人は、おの〳〵公使館に依賴し、兵隊を以て居留地を警衞してゐたほどの有樣であつた。斯んな風であつたから、日本の商人でも唐物屋の類は、最も迫害を蒙り、油斷してゐると、何時も亂暴者の見舞を受けたものである。併しながら、維新の幕が開けると共に、西洋人の來航は月每に加はつて明治二三年頃になると早くも何百人といふ數に及んだ、世の趨勢は恐ろしいものである。で、幕末當時より居住してゐた外人は、日本の女を妾にしたのであるが、その間に澤山「アイの子」が出來て、明治の初年には、此のアイの子は、其處等に殖へて來て、みんな、野生の儘に棄てられてあつた、といふ風。實に明治初年の橫濱港は冒險心に富める外國人と、足一本脛一本の旅商人と、洋妾と、アイの子の群集地であつたのである。

▲彼等の眼に映じたる日本

此の風敎上の亂雜なる狀態を見て、女學校の設立を思ひ立つたのは、北米合衆國人、ゼームスバラといふ宣敎師である。

バラ氏はアイの兒の境遇に同情を寄すると共に、我國の現狀に無限の遺憾を懷き、紐育所在の米國女子一致外國傳道協會に希望を申送つたのである。

同協會は、女子の外國傳道に從事する宗敎團體で、然かも、布敎の方針は宗派の如何に拘泥しなかつた。けれど當時の我國は歐米人の眼には丁度今の亞弗利加乃至は濠洲南洋等の野蠻未開の土地と同樣に觀、當時の

征夷大將軍樣も彼等の眼には一個土蠻の酋長位に見て居たほどの仕末であるから進んで日本に渡航せんとする者は、冒險な山師商人の外は極めて尠かつたといふ。そこで傳道協會では、その人選に苦んでゐると、茲に特志の婦人が現はれた。一人ならず、三人まで現はれたのは我國に取つて非常な幸福であつた。即ちプライン、ピヤソンの二婦人と、今一人は目下共立女學校總理の地位に在るクロスビー孃で有つた。プライン及クロスビーの二婦人は、三十前後の壯齡であつたが、プライン未亡人は四十以上で故國には幾人の子供が居つたの



を振り切つて、危險多き半開國、米人の眼には一種の野蠻國と見られてゐた日本の國に來たのである。横濱に着港したのは、明治四年の六月であつた。

▲共立女學校の初代

この特志なる婦人等が横濱に到着するや、山ノ手四十八番に假校舍を設け、直に敎授に取り掛つたのである。年長のプライン女史は敎授に與らず、專ら學校の經營と寄宿舍の取締等に當り、クロスビー女史は會計の任に當り、その傍ら敎鞭を取り、博學の名高きプライン女史は校長の職に就いて、敎授の方を擔任したのであるが、何をいふにも未だ秩序の整つ

て居ない明治初年の事であつたから、無論規則などの設は無く、我國人に女子教育の必要を認めしむるに全力を盡した。けれど教育には殆ど風馬牛であつた、我國人に女子教育の必要を覺へしむる迄に長き日月を要したので、ブライン女史等の骨折は一と通では無かつた。最初はアイの兒を集めて教育を施してゐたが、我國の婦人で入校する者は、殆んど無く、流石忍耐強き同婦人等も幾度か我國人の曚昧なのに嘆息を洩らしたと聞いてゐる。

▲男子部を置く

で、窮餘の一策として、女子教育の傍ら、男子に英語教授を始めた。旨く圖に當りて、それからといふものは、續々として日本人の入校を見るに至つた。子爵長岡護美氏の如きも矢張入學者の一人で、その後、同校の幹事と爲り、同校の發達に多大の助力を與へた熊野雄七氏（現明治學院教授）の如きも、矢張當時入校した一人である。男子は續々として入校したので、教授時間を午前午後に分ち男子部と女子部とを別にして熱心に從事した甲斐あつて、一年を越えて、明治六年になつて、校舍の狹隘を告げ、現在の二百十二番に移轉するの隆昌に進んだ、尤も此の共立女學校が、斯く隆昌に爲つたのには、次第が有る。

▲卒先者は老儒の夫人

それは此の共立女學校に有力なる助力者が現はれたのである。即ち後に高等女子師範學校々長として女子教育に非常の盡力があつた中村敬宇先生の眼に留つたのである。偶然の機會から、敬宇先生は同校の創立由來を知りピヤソン女史の熱心を殊勝なりとして、世間に同校の紹介者と爲られたのみならず、自身の令閨と娘御を入學せしめて同校の發展に大なる助力を與へられた。社會に信任多き中村先生の令閨令娘等の入學は、一部の女子を刺激して、その後は日本女子の中でも、入學する者出で、遂に二百十二番の現在の場所に移轉するとと爲つた、共立女學校の隆昌と爲るにつれて

西洋婦人の中にも、共立女學校に倣ふて、女子敎育に努むる者が起つた。ヘボン氏の夫人も小規模の女學校を設け、フヱリス女學校の前身であるミスキダの女塾も、皆此の共立女學校の開拓の跡を追ふて起つたのである。而して明治七年頃に至ると、東京にも竹橋女學校が出來、お茶の水橋に女子師範學校が出來るやうに成つたのであるが、いづれもプライン、ピヤソン、クロスピーの此の三婦人の先鞭に依つて、女學の風潮を作つたので我國の進歩と伴へる自然の結果とは言へ三婦人の卒先の力が與つて多いのである。



▲敎師の人格

我國の女子敎育に先鞭者の名譽を負ふてゐる此の三婦人の人格を紹介すると、プライン夫人は、年長者であつた故でもあらうが、優しい、溫厚の婦人で何時も頬邊に微笑を湛へて生徒に接してゐたから、基督敎者間の尊敬は、一に此のプライン夫人に集つた。

前にも言つたやうに親しく敎授に與らなかつたが、共

立女學校の美點と特色とが日本人の前に明らかに爲つたのは、溫厚な親切な、此の優しいブライン夫人の力が多い。十二三年の頃一ト度故國に還り、再び日本に歸つたが、二十年の頃病を以て故國で歿く爲られたのは、殘念である。クロスビー孃は、今日七十幾歲の老齡に爲るまで獨身を通した婦人丈けあつてブライン夫人と打つて變つて、極めて激しい氣性の婦人で、若し生徒等に過失怠慢があるとガミ〳〵叱責すると云ふ風であるから、一寸見た丈けでは非常に恐い婦人に見へたのも無理はない。けれど、深く親むと、その恐い顏の裏に、優しい溫情が籠まれて居つて、道理が判ると、釋然と顏色が解ける。嘗て賄方を兼ねて通辯に雇ふてあつた日本人某が、千四百圓ばかりの金を遣ひ込んだとがある、例の氣性であるから、激しい處分があらうと助敎の間にも放逐說が專らであつたが、遣ひ込みが他人の罟に罹つた結果だと判つたので、校中の評判に耳を傾けず、相應の辨濟方法を定め、その儘學校に在職せしめたのを見ても、クロスビー孃の人物がわからう。であるから、氣象は激しいが、能く道理の判つた婦人で、特に事務家としては著しい才能を備へて、共立學校が四十年の年月を經過して、今日に至つてゐるのも、全く同女史の事務の才に依つたものと言つて良い。

ビヤソン夫人は、ブライン夫人やクロスビー孃などと違つて、學者肌の婦人であつた。その學は深く、博く、文學や哲學に精通してゐるかと思へば、物理化學數學の如きにも造詣深く、頭腦が餘程確乎してゐたものと見え、加減の暗算の如きは百發百中、何人も舌を捲かぬ者が無かつた。化學の敎授などには、一々實物を出して分析を試み、生徒をして腹の底まで合點せしめた。器用は之のみならず、繪畫も巧妙であれば、乘馬も器用であつた。朝は未明に起き、授業前に日本語の稽古、敎授終ると傳道に出掛け、夜間は文學哲學に思を潛めてゐた。經營の才に於てはブライン及クロスビーの二婦人に讓るが、學殖の深きと、精力の不休なのには何人も驚嘆しない者は無く、內所では「ビヤソン夫人のやうに働いても困る」と陰言されたのを見て

も、あら〳〵人柄が判らう、惜い哉、今より十年ばかり前に横濱で病歿したが、啻に女子教育家としてのみならず、婦人宣教師としても、文學哲學理化學の學者として、此のピャソン夫人の如きは必傳の人であらう。

▲始めて日本人に認められる

共立女學校は右の如き婦人達に依つて創立せられ、經營せられ、成長したのである。そして最も光彩を發揮したのは、明治十八九年の、歐化熱の絶頂に達した時で、外國語、或は外國文明に觸れんとせる我が國上中流の婦人は、翕然として同校に赴き、ピャソン女史等の教授を受けた。地方紳商豪農等の令孃が入學せるのみならず、既う東京にも二三の女學校が出來てゐたにも拘らず、汽車で横濱に通つた者は、二三人では無かつた。福澤先生の令孃も、矢張生徒の一人であつた。なんでも、生徒の數は三四百人以上であつたやうに覺へてゐる。

▲女學校の新曙光

此の共立女學校は、英語の練習に特色を現はしてゐたので、目的は西洋風の普通教育であつたから、餘り著しい婦人を出して居らない。けれど、横濱東京等の中流以上の家庭には、其卒業者は尠くはない。女子教育家では櫻井女塾の櫻井チカ子女史などは著しい方であらう。……要するに、今日の我女學界では、此の共立女學校の存在は、左まで大した勢力ありとは覺えないが我女子教育史に占むる同校の地位は、非常な勢力で、今日女學の隆昌は、實に此の共立女學校に依つて端緒が開かれたものといつて良い。即ち、ピャソン、ブライン、クロスビーの此の三婦人に依つて、さつと黑幕が落されて女學の新曙光は輝き始めたのである。



クリスマスの餘興を見る

明治女學校にて　翠子

十二月廿四日　巣鴨なる明治女學校のクリスマス祝賀會を見ました。

會場は六十疊もあろうと思はるゝ日本風の大廣間で、柱も鴨居も悉く常盤木の葉で装飾られて、天井には萬國の國旗が交叉され、華燈映ゆく室内は照らされて居ました。

午後五時の開會でプログラムを見れば、活人畫、演劇、奏樂、演説、英詩、朗讀などの餘興が二十八番までもあつて其の多趣味、多藝には鳥渡驚いたが、一つ一つ書くには困難ゆへ、深く記者の頭腦に印象されました一二だけをこゝに紹介して見ませう。

まづ開會の辭があり、青柳有美氏の演説があつて後

生徒一同がクリスマスの歌

我が慕ひまつる、エス君の美はしさよ

を唱ふ、大勢の生徒の相集まつた美聲は、オルガンの音を壓するばかり高く響いて、いと高き天なる御座にまでも傳へゆくかのやうに感せられました。

活人畫はキリスト降誕の場であつた。

さつと襖が左右に開くと、白衣の天使が數人、天を仰いで神の子降誕の良き日を讃美して居ると、その眞中にマリヤが是も白衣で一段高く立つて、生れましたキリストを抱いて居るのであつた。

「永井先生も河原さんも居るよ」

と來客の一人が私語いたが、是等人間が天上人に扮するのだから、稍々崇嚴の缺けてるやうに思たが、マグネシユームの光に白衣が輝いて鳥渡をどかされて居た

狂言馬鹿三人は面白かつた。

第一幕はテーブルを圍みたる三人の女教師、中のは

西洋婦人であつた、西洋婦人の服裝はといへば、ほんの當座の誂で、擬つた洋裝もして居なかつたが、その言葉遣ひが頗る巧妙で、彼の西洋婦人が日本語を操つるに、アクセントを妙にするがよくその癖を眞似て思はず聽者をして抱腹させるのであつた。

今しも三人の女教師は明日の歴史の試驗問題を定める協議中であつたが、西洋婦人の教師が口を開いて

『よろしいヴイクトリア女皇傳しませう』

とあやしい日本語を言ふ。

次に幕代つて、机によりたる一人の女生徒あり、机の上には、字書教科書など置かれたるが自分は頻りと編物をして居る『あゝ忙がしい事だ、もう試驗も直きだしクリスマスの用意もしなければならぬ』と獨言いひながら忙がはしそうに編物して居るが、氣に懸ると見えて時々教科書を見る。

そこへ友達二人來たが是も試驗の噂して、明日の歴史の試驗の問題は何が出るか、教へて呉れといふ、以前の生徒は頗る自信があつて、明日は乾度クレオバトラの傳が出るのだと教へる。

二人とも打喜でそれではもう明日の歴史の試驗も心配がないと云て立ち去る。

今度の舞臺は學校の教室で、黑板テーブルの配置よろしく生徒の机腰掛が並で居る、多數の生徒は今日の試驗問題はもう直に目論で居るのだから間違なく滿點よと喜々滿面に現はれて居るとやがて例の西洋人の教師が這入て來る、立禮も終り出席簿もつけて後女教師は黑板に今日の問題、ヴキクトリア女皇傳とかいた、生徒一同默思の樣であつたが暫時たつて。

『皆さん出來ましたか』と教師が催促すると一人二人手を擧げる。

『松村さん　よみなさい』と師が云ふと、

『クレオパトラの傳クレオパトラは埃及の人にして容貌類なく……………』

云々と一章を眞面目に淀みなく朗讀した、讀み終るや教師は、よろしいと蔑むやうに云て今度は柳田さん御讀みなさいと云ふとまた生徒が立つて、

「クレオパトラの傳クレオパトラは埃及の人にして
と讀む、敎師は大喝してよろしいと云たが、眉根を顰めて自分のかいた黒板の方を見る次にまた花山さんと呼ぶ。

「クレオパトラの傳クレオパトラは……」

と同じ間違ひを濟まし切つて讀むと、女敎師は讀み終らぬ中に「もう、よろしい、うるさい」

と大喝叱聲したが、荒い息して罵倒りながら、

「皆さん勉强足りません、駄目あります」

と口惜しそうに云て、口を閉ぢたが目を細うして、

「あゝ在天の父よ、是等迷へる小羊を憐み給へ」

と飛んでもないところで祈禱をする、天を仰いで祈るさまの却々滑稽であつて喝采の中に終りました。

次は歌劇、配所の月である。

歌劇と云ふのは、ちとをこがましいが、ふりつけ唱歌といふたら適當であらう、歌をうたひながら舞をまふので極く嶄新な趣巧、當學校の堤先生が巧案になつたもので御座います。

と前置の說明があつた。

と見れば、舞臺は薄暗くなつて居て、一輪の月魂萬頃の上に冴え渡りたる背景を圍らし、前には枯尾花の叢燈心の灯幽かなる燭など置かれて配所の侘住居を忍ばせる配置である。

まつはる藤のはびこりて、時を得顏に咲きほこる

と唱ひ出たる女生徒のやさしい聲と喨々と鳴り出づる妙技オルガンの音色とが徐ろに奏し出した。

臣道眞の一命は君に捧げてなきものと神に誓ひし我身なり、身にふりかゝる禍は豫ねて期したる

響き出づる樂の音、唱ひ出づる肉の聲相伴なつてその妙なる調はよく聽者の胸の琴線を叩く、折から道眞になぞらへた一人の直衣姿、烏帽子被ぎて現はれたが、歌に合せて、扇かゝげて月下に舞ふ樣、花に胡蝶の舞ひを添えたるやうで一層の面白さであつた。

二人とはなき忠臣も今はつくしの侘住居

といふ歌の意に懸ると、樂の音益々切なる思を語り、舞ふや直衣の袖も涙にしほるゝかとばかり、一揚一抑

情と樂とがよく入れ合ひて儚なき浮世の緣を唱ふさま漫ろに菅公が盡きざる悵恨の情を思ひ浮べるのであつたが、ます／＼佳境に進んで、

　去年今夜侍淸凉　秋思詩篇獨斷腸

と唐詩になると生徒の聲ははたと歇んで堤敎師一人の美音が嚠喨とこの場内の空氣を震はせる、オルガンの音はそれに連れて細く嫋々として絕え入るやう、その音、その聲が森と水を打たやうな滿堂に悠々と冴え渡ると其時扮したる道眞は、賜衣を載せたる三寶の前に恭々しく跪いたが。

　捧持每日拜餘香

と吟ずる時には高く三寶を捧げて、いと畏みつ頭を低れて深い／＼感慨に打たれるといふ樣。

　その妙技卓絕見る人の心もチャームされて、罪なくして配所の月見る忠臣が至誠の一斑が窺ひ知られて、思はず渾身の血を沸かせるのであつた。

　松風の聲、さつ／＼そう／＼今も昔もと曲も終はつて、拍手の裡に幕は下ろされた。

　人々は眼が醒めたやう吻と息をつく、恐らく今夜の餘興第一の呼び物であつたろう。

　次は茶菓の饗應があつて、色々の談話が交される。

『あの今日は何々さんが見えませんね』

と靑柳先生が一人の生徒にいふと。

『ハー、彼の方も立派な奥樣にもう御成りですから却却御出かけにはなれません』と生徒が答へる。

『左樣ですか、そんなに立派な奥樣になつては、もう僕などは路で逢ふても御辭儀して與れまい、どうも女といふものは兎角は辭儀が嫌ひで、先日も某夫人に電車の中で會たが知らん顏して居るから此方から挨拶して遣つたのです』

と例によつて靑柳先生一流の女排斥論をうちかける。

『それでは、先生があんまりハイカラにお成りになつたので、先方で見違へたのでせう』

と生徒一本先生をやりこめ參らすと。

『それは奈何も忝じけない、今日は是でもクリスマスの爲に髮も刈て來たので餘程ハイカラになつた積なのだから褒められても差支ひないです』

といふと皆が哄と笑ふ。

　百に足らぬ生徒であろうが人數が尠ないだけに師弟の間も濃やかで、學友も姉妹の如く睦び合ふ。

　あゝ淸興を盡した此集合外には木枯の風寒く／＼ともこの一團は和氣藹々として嬉しかつた。



女學生今昔物語

某老女史の談

▲十年前と今との相違

私共の學生時代（この老女史は今の高等師範の前身竹橋女學校に在學された方で、竹橋が東京府女子師範學校になり引つゞいて高等師範になるまで在學せられた方です）と申すと、明治十年頃より十三四年頃でしたから、今から丁度三十年ばかり前で、薩摩の戰爭で世間がなんとなう殺氣を含んでゐた時でした。その頃はお茶の水の女子師範位のもので、女學校らしいものは他には無かつたのです。先日も左る奥様に誘はれて目白の女子大學を參觀しましたが、私共の學生時代と比べると、天地の相違、吃驚したのでございます。ハイ、皆様の立居擧動は、何の方を見てもオツトリとして居らつしやるには感服しました。寄宿舍も拜見しましたが、その室も綺麗に片附いて、私共の時代とは雪と炭のやうに違つてゐるのです。

▲着物は木綿、髮は唐人髷

私共の時代は、それは〳〵亂暴なものでございました。此頃の女學生は瓦斯織は質素な方で、大抵銘仙物を着て居らつしやるやうだが、私共の時代には十人が十人迄木綿で絹物を着てゐると、オシヤレだと蔭口を利かれました。腰板の無い、廣い縞の袴を穿いて、大道を練つて歩いたものです。髮は唐人髷――髮といふと、當時私共の間に髮の結ひ手が尠く、日曜日に爲ると、髮のお上手な方に、そつと袖の下を仕て、結つて貰ひ〳〵しました。賄賂といつても、お薩か豌豆位なものです。そのまたお薩や豌豆は、此上もない珍味で授業時間などに、偶とお薩の事を思ふと、喉の奥の方

がゴロ〳〵と鳴つたものです。猫のやうですね。

▲外出の樂み買物と食物

年月は忘れましたが　皇后陛下が學校へ行幸に爲つたとが御座いました。翌日は授業が無かつたので、皆な大喜びでゐると、幹事は此日に限つて外出を許しませんのです。寄宿生一同勢揃ひして、幹事の室へ談判に出掛け、種々と理屈を列べて、遂に理屈を通して外出するとと爲つたのです。東京に家のあるお方は、家に歸るのも快樂でしたらうが、十人が九人迄は、外出は買食と極つてゐました。お薩と豌豆とを五六圓ばかし買ひまして、えんやらやつと小使に持たせて歸つたともございます。

▲佐方女史と間食黨

今の佐方鎮子さん(高等師範の教授)は、學生の頃もキチヨウメンな、謹直な方で、何時も書物と首ッ引の勉強一方の方でした。間食の仲間にお加入が無いので「佐方さんと同室すると空氣はできないと」皆さんが大不平でしたから、亂暴組の隊長であつた私は、空氣のできないやうな方は駄目だ、といふ見幕で、或時佐方さんと同室してゐたのを幸機に、摺つたもんだと理屈をいつて謹直な佐方さんを空氣組に捲き込んで仕舞ひました。その頃は間食の事を空氣といつてゐました(食ふ氣の洒落か)屈托といへば間食位の事で、見得も修飾もない洞然としたものでした。

▲昔の女學生は士族の娘

女子大學邊では地方の大地主、或は大商人の令孃が多いやうだが、私共學生時代は、十人が九人迄は士族の娘で、特に漢學者の娘が多いやうでした。ですから、中には先生も舌をお捲きに爲るやうな方もございました。それに第一期であつた故か、年齡も不揃で、十八九の方もあれば、二十六七といふ方もあり、。混淆してゐたから、今の女學生に比ぶれば、眞面目に勉強する方は尠く、漢學の出來る方は、片カナの書物に本氣に

爲らず、作文好の者は算術にヅルけるといふ鹽梅式で寔に不規則なものでございました。今の菊地博士夫人高木博士夫人、有賀博士夫人、佐藤リクといつた相馬永胤さんの奧樣などは、皆第一期の卒業生で、中にも青山さんといふ方は、何時も上席で、學校では評判な方で今は千葉縣の方へ片附いて居らッしやるそうですが、その後はトントお眼に掛りません。鳩山春子さんはずつと後で、第四期頃かと思ひます。

▲第一が官吏、次が學者

今の女學生は賢母良妻のお主旨通り、卒業後は家庭の經營に專一だそうですが（尤も女子の獨立などいつて居らッしやる方もあるが）、私共の時代は、皆な男子のやうでしたから、家庭などいふ事を思つてゐる者は有りませんでした。今日に爲つて見ると、大抵身を定めて居らッしやるが、その頃は何んだか、一本立に遣つてかうといふ人が多うございました。尤も師範學校であつた故もありましやうが、私初め學問で通ほすものと、アヤフヤの中に極めてゐました。例令緣付くにしても商人や何かは七里けつぱい。第一が官吏、次が學者それから會社員などに嫁ぐのはまあ不見識とした位でした。それが今ではまるで反對で、第一は會社員技師で、學者といつても、醫學士、工學士で、同じ會社員でも支店長といふ位置が呼物だそうですから、私共の時代とは、餘程變つて居ります。

▲遺產がないと困るぢやないか

先日も或學校の卒業生が見へて、軍人の口はあるが如何しましやうと相談しますから、結構でしやうと答へると、戰死された後で、遺產がないと困るぢやありませんか、といつたので、私もほと〳〵感服しましたそれから見ると、私共の書生時代は暢氣なもので、偶偶其樣な事を思つて見ても、直ぐ忘れて、先生の惡口を駢べて笑つてゐました。尤も中村敬宇先生は賢母良妻の御演說があつて、先生の前丈けは、殊勝に耳を傾けてゐましたが、腹中ではなんだか窮屈だと思つてゐ

ました。校長さんは右樣な御主意でしたから寄宿舍でも料理の稽古が初りましたが、身を入れて稽古した者はほんの數へる位。お三ドンのやうで、本氣になる氣がありませんでした。

▲むかしの寄宿舍と今の比較

寄宿舍の食物なども、今から見ると粗末なものでした尤も最初の間は、一ヶ月の食料八圓、今の女子大學邊と相違は無かつたやうです。八圓は七圓と爲り、六圓と爲つて、それに準じて食物も粗末と爲り、お仕舞には衣服も自辨といふことに爲りました。ハイ、師範の方は皆な官費でございました。衣服自辨といふのは意を得ないといつて、文部省の濱尾さんへ押し掛けたこともございました。女子大學邊は自治制度で、副食物など自身で見計らツて、窒素が多いとか酸素が尠いとか化學的に分解して、遣つて居らツしやるそうだが、私共にはそんな頭腦がございませんでした。寄宿舍内の寢起は今と違はず、夏は朝五時、夜は九時、冬季は六時に起きて、十時に床に入りました。ストーブあり、寢室あり、就寢時間の十分前に、鐘を撃つたものです。

▲黒板に惡口の地圖

高等師範第一期頃の職員は、中村敬宇先生が校長で那珂通世、永井久一郎、宮川保全、その他地理の先生にオロスと綽名した秋山四郎といふ方が居らツしやるし、坪井玄道さんも通辯を兼ねてお出でゝした。雪降りの日など、三十人も五十人も集り、雪投げを初めて先生達を苦めました。惡戯が嵩ずると、五尺も一丈も雪を積んで、雪の中へ先生を埋めて、わつと喜んだ者です……斯んなこともございました、誰さんでしたか、黒板に見事な地圖を描いたものです。それが皆な先生達の惡口で、中央市府の中村府は立派な都會であるとか、宮川といふ川は良河だが、一年一度洪水ありとか中には皮肉な惡口もあつたのです。お蔭樣で、組の者殘らず幾週間だかの禁足に遭ひました。ですが、卒業して、學校を退きます時は、皆な泣いて別れました。師弟の情誼は厚うございました。

装飾の秘傳

◎器物の配合が時候と大なる關係を持ち居ることは勿論であるが、それのみならず風土、場合、器物などゝも大切な關係を有つてゐる。九州の端や琉球邊では團扇も裝飾の一つであれば、籐椅子も裝飾上の立物となる、盆栽の如きも、蘭科植物の花や、棕梠竹なども大切である、芭蕉も椰子樹も土地相應のものを要する、又青森や北海道あたりでは、同じ敷物でも窓掛でも色合の濃い、地の厚い織物や、熊の皮の椅子掛や、飾暖爐なども裝飾の一つとして用ひられるゝ。婚禮などの場合には調度は可成色の麗はしい芽出度いものが好い、餞別や離別の席上には織物を掛くるにも花を一瓶挿むにも似合ひのものを選ばねばならぬ。

◎日本では時々座敷の掛物も屏風も取り代へれば棚や飾机の類まで取代へるがこれは氣候の變化の多い國であるから自然にその感化が人心に影響して變化の必要を見るのである、それは我國ばかりでは無い以太利でも何所でも島國では時候の變化が多ひから どうしてもそうなるのである。

◎概して申さば歐洲風の裝飾は濃厚で、日本風の裝飾は淡然として居る、勿論貴族の書院飾りなどは却々艷麗で、西洋流にも負けぬ位であるが、先づ日本風の裝飾の特長は淡雅なる方で、歐風のは濃艷である、これは畢竟風土の關係もその原因であらうし 又當時の文物や宗教なぞも原因となつたので、日本でも王朝時代の裝飾は艷麗で、そして氣品も非常に高い、鎌倉時代に至つては簡古清趣といふ 方で一寸申さば澁い方である、それは全くその時代の文物、宗教、政治などの關係から來たのであるが、鎌倉時代の如きは最も宗教上の感化を受けた事が多い、所謂禪林の清規なるものが居室の裝飾の上にまで侵入して來たのである。

◎そこで 裝飾は淡雅な方が面白いか、濃厚なのが好いかと申すに、兩方ともに風情もあれば趣味もあつて、それ〴〵に面白味を具へて居る、譬て云ふなれば牡丹や海棠は花の形も、色も奇麗で派手やかであるが、その派手で奇麗な所が彼れの見所である、又寒蘭や梅の樣なものは淡然として滑らかな所に云ふにいへぬ氣品の高い所がある、それでその妙趣はそのものに就て味はねばならぬ、御厨子や黒棚を置いて、文庫や、手箱や、香道具の樣な麗はしい調度を飾つて、狩野家か土佐の畫幅を掛けて、琵琶など飾つた 御殿風も面白い、丁度朝日に匂ふ山櫻とでも申したい樣な風情がある、消息か短册を更紗表裝に竹軸と云ふ澁い仕立にして煤竹の手籠に寒牡丹一輪、傍への春日卓の上には一二卷の經卷でも載せてあると云ふ極々侘びしい隱士風とでも申すやうな裝飾も却々面白い、して見れば何れが好いの悪いのと申すことは出來ないのである。



令嬢日記

妹、治子

十一月二日。土曜日、晴れ。

父様の御飯の御給仕をして部屋へ入ると姉様が、一昨日三越へ母様が葉書をお出しなさつた。と仰在る。私の胸は騒がしくなる。

サア誰の着物が出來るのか。父様のかしら? 母様夫れとも美代ちやんのか、組ちやんか、私のか、豈夫に私達のでは有るまい。私達のなら一應母様からお話の有るべき筈だ。などゝ飛んだ事を苦にして居ると、恰度十時頃、奥様が鳥渡御出で遊ばせと仰在います。と清(女中の名)が云ひに來る。姉様と二人。何かしら? と思ひ乍ら廊下を辿つて行くと、母様が御部屋に御一人火鉢の前に坐つて被入る、片手を火に翳し、煙草を喫んで被居つた。

「何か御用?」と一寸薄氣味悪そうに云つて坐ると。

「否、何でもないがねえ。私が大變に不快かつた時に二人の世話になつたから父様にお願して着物を一枚宛三越に云つて持て來さしたから何れが佳いか御覽ん」と仰在つて傍に有る反物を御出しになる。火鉢の陰にかくれて見えなかつたのだ。

「あらッまアー難有う御座います。」と二人一緒にお低頭をする。

御召縮緬と糸織。「治さんには之が佳いと思ふが。」と下の方から引出して私の目の前に御出しなさる。御召の好い柄。併し私のにしては少し柄が質素過ぎる。姉様に恰度佳い位。

「然うで御座いますねえ。佳い柄。」と母様には佳いやうな事を云つて、せつせと次ぎ〳〵と反物を見る。が何れも〳〵質素なの計り。まア〳〵今母様が仰在つたのが一番華派。一體私は極く我儘で少し氣に入らない

のだと、誰が何と云つても嫌や〳〵で通し、其結果母樣や姉樣と衝突してはよく私獨り買ふのは中止め。と云ふ事になつたのが幾度か有る。だから私は今でも姉妹中一番着物の數が少ない。其代り柄は佳いの許しだとでもまア〳〵氣休めに思つて我慢してる。が此頃は急に慾張りになつて、少し位氣に入らない柄でも母樣が之におしなと、仰在れば、ハイ〳〵。と溫順しく出る。而して一枚でも餘計にこしらつて頂く事にした。此方が餘程得だと考へたから。で今日も其傳で到頭少し質素だが堪えて夫れに極める。裾廻しは桔梗色姉樣のは浮織御召。

「ぢやア寸法を書いてお置き。」と仰在るので大急ぎに寸法を認めて、母樣にお渡しして、難有う御座います。と叉丁寧にお低頭して私達の部屋へ引下る。今しがた一體誰の着物かしら、と云つて氣を揉んで居たのがお互ひに極が惡くなる。私が、

「誰のかと思つたら、ほゝゝゝ可笑しくつて。」と云ふと。「嬉しくつての間違ひだらう。」と姉樣が仰在る。

「御自分だつて……。」と云つて一時に笑ふ。縫ひかけの組ちやんのメリンスの被布は針箱と一緒に私の膝の前には有るけれども、針箱のふたさへ未だ啓けて無い。

「今日の髪は好く出來てねえ。」

「然う其麽に好く出來て？どれ〳〵見て來ませう。」と云つて三疊の間へ云つて鏡臺の前に坐つて合せ鏡をして見る。成程好く出來て居ると獨りで自惚れて居る。

午后から美和子さんが被入つてブラ〳〵其處等を散歩しないかと誘つて下さる。姉樣は何方かと云へば出不精の方だけれども私は其に反して隨分な出好き。「えゝ。」と二つ返事で母樣に伺ふと可いと仰在る。「ぢやア一寸待つてゝね。」と賴んで私は着物は節糸のあらいのに、帶は羽二重絞りの褪紅色のにする。

「もう傘無しで佳いでせうか。」と聞くと、

「未だ傘無しぢやア暑くつてよ。」と云ふ。

「ぢやア仕方が無い。嫌だけれども。」と赤い傘の箱から紫紺の地に白で横縦の縞の日傘を出す。此日傘は私が女中を連れてわざ〳〵仙女香迄行つて買つて來た品

散々彼れか是かと迷つた末に、漸つと極めて歸つたら「然うねえ……。」位で餘り評判が好くなかつたから、私もぐつと嫌氣がさして、一寸その事止さうかとも考へた位。夫れでも嫌や〳〵乍ら騒して居るが、早く惡くなれば可い。而したら又來年買つて頂ける位に思つて亂暴に騒してやる。

「早く御歸りなさい、待つてるから。」と姉樣の優しい聲を後ろにして二人出かけたのは一時半頃だつたらう冠木門の續く邸町を拔けて裏通の田甫の方をブラ〳〵歩く。

晩稻は未だ刈らずに有るが中稻はもう刈り取られて、ずつと見渡す田の面の處々には掛稻も見える。二人の足音にパッと羽音高く空に向つて立つ稻雀が、奇麗だ。初冬の風の寒い。



「あれ野菊が。」と美和子さんが摘む。

「あら佳いのねえ。私も欲しいわ。」と云ひ乍ら少し行くと直ぐに一輪、美和子さんのよりも濃い色、風にサラ〳〵と稻の音、佳い物だと私のやうな者でも一寸詩的な感じに打たれる。德利に目鼻が付いたのや、妙な傘を被つた案山子が澄まして顔して立つて居るので、私達はくす〳〵笑ふ。時計を見るともう二時。日射

が何だか大分西の方へ傾いたやうに思はれる。先に立つて行く美和子さんが強い日光を斜めに翳したオリーブ色の日傘で避けて。藍色がゝつた派手な着物に、目に立つ帶、淋しい畔道に浮き出たやうな姿は一寸小說の口繪にでも有りさうだと思つた。

「此花ねえ。可愛いゝでせう？」と私の目の先に突きつけるやうにする。

「えゝ、犬蓼の花でせう。一寸奇麗ね、赤の飯と云ふのね。よく少さい時分お飯事に使つたんですもの。貴女は然う云ふ名の知れないやうな花がお好き？ 然うよ。乾度、詩人は名も無き花を愛するからでせう？」と一寸冷やかして見る。

「あら隨分……。」と美和子さんは眞赧になつて切角摘んだ花を遠くの方へ捨てゝ了ふ。

「オヤ〳〵。」と私も笑ふ。

宅へ歸つたら四時――姉樣が「面白かつて？」と御聞きになつたから「えゝ。」と答へて置く、宅が近いから美和子さん夜迄遊んで行く事に極める。御飯が終んでから、私達の部屋で、姉樣美和子さん、私、美代ちやん、從兄が二人と六人してトランプをする。八疊の部屋が一ぱい散らかつてる。八時を打つたので美和子さんは驚ろいて歸る。女中をつけて上げる。中山さんから奇麗な繪葉書が私の處に來た。十時に寢る。

九日。晴天、土曜日。

夢かしら？ と思つて何だかうつら〳〵して居ると時計が五時を打つ。と目が覺める。頭を冷やして頂いた夢をみて覺めると全く頭が痛い。如何したのだらうと思ふ。左の手を夜具の外へ出して居たので冷たいから額に加へて見ると良い氣持ち。と其儘又うと〳〵して了つて今度は六時に目が覺めた。頭は相變らず重い寢て居ても堪らないからえゝ儘よ事その事と飛び起きて終ふと思つて大勢ひで飛び起きて見たらフラ〳〵して思はずも蹌踉ける。

「まア治さん如何したの。顔が眞蒼よ。」と姉樣漸々起きられたのだらう。今迄深く夜具に顏を埋めて被居つたのが何時の間にやら目をパチリと開けて私の方を見

て被居る。
「頭痛がするつたら變よ。曉方から通して、寢て居ても堪らないから起きて終つたの。」
「ちやア今日終日寢て居たら？」
「だつて這麽佳いお天氣なのに寢ては居られないわ。」と云つてさつさと床を上げて顏を洗ふ。鏡に向つて見ると全く蒼い嫌な顏色。髮を結ぶのも何だか氣が進まないが今日は父樣と姉樣美代ちやんと四人して美術倶樂部へ書畫骨董の展覧を見に行く筈ゆゑ癖直しをして束髮に結んで置く。
「餘り氣持が惡かつたら止した方が佳いよ。夫れに治さんは電車が不可ないのだから。」と母樣は仰在る。
「如何して？　止すかい。止すなら私も止すから。」と姉樣內々に被入るのが餘り嬉しくないのかも知れない
「否。だつて這麽日に終日宅に居ても何にも出來やしないんですから外へ出た方が却て氣持が好くなるかも知れませんから行つて見ませう。」と云つて行く事にする。書生が一人と五人して九時半頃宅を出る。本鄕から電車で行く。向ふへ着いたのが十時過ぎ。比較的人が少ない。が午前のせいだらう、午後になれば人が來るだらうがと父樣は仰在つた。
第一席と云ふのから順々に見て行く。父樣は一生懸命に見て被居るが私にはトント佳い惡いが分らない。蒔畫の硯箱や煙草盆や文箱が有れば奇麗だと思ふし、花瓶、お菓子皿、鉢等は唯ぢつと見て、姉樣と美代ちやんと三人はずん／＼行く。西洋人が四五人、熱心に花生や德利を捻つて居る德利等、ずらりと列んだ事／＼可笑い位。名を聞けば難かしいもので今から凡そ何百年と云ふ古いものだそうだが私達の目にはホンの蕎麥屋が持つて來るお醬油つぎ位にしか見えないのを、捻つては首を曲げたり何かして居るのが可笑しく見える
「二三錢出せば這麽德利は幾等でも有るナア。」と書生は云ひ乍ら此方へ來る。
別席と云ふのに行つてお茶を飲む。
其隣りの座敷に澤山の書畫の卷物、掛額、帖等が有る。掛物も澤山有るが中で私達の目には一番抱一が好

く見える。容齋の山水畫も佳い。歌麿、豊國の浮世繪も見てだん〳〵行く。屏風の中では雲谷等顏とか云ふ人の書いた金地に鳴戸の畫の六枚折のが六双有つたのは奇麗だ。

蕪村の奥州紀行、扇面十便と三十六俳仙の圖を中では一番面白く見た。

十二時と云ふのでお辨當を食べる。隣の座敷で西洋人が何か話して居る。大な聲だ。

障子を啓けて向ふの方を見ると河の向ふには電車が絶えず往來して居るし河には河蒸氣が走つて居る。と汚ならしい帆かけ船が來る。十一月九日の空は澄み切つて心地が佳い。何うやら私の頭痛も全癒つたやうな氣になる。新らしい普請の廊下も何も奇麗で踏むと何だかギイ〳〵云ふやうに思はれる。新らしい家だから一入明るいやうな氣もする。少し逆上せて來た。父樣について第四席と云ふのに入る。何だか肥つた人が着物を窮屈そうに着て二三人と掛物を見て居る。誰かと思つたら何とか云ふ華族だそうな。女は私達の外一人も居ない。紅葉館に有つた時大分女の人も居て面白かつたが此度は一人もなし。皆んな熱心に見て居る人計り、私達のやうにうろ〳〵して居る者は無い。父樣はお急ぎになるのでお午過ぎると直ぐ歸る事にする。恰度其時分からボツ〳〵人が見え出した。美術倶樂部の門を出て直ぐ電車に乘る。歸るとお留守番をして居た組ちやんと豊ちやんがメリンスの着物に着替へて待つて居た。團子坂へ行く約束をして居たので。

「お歸りなさい、團子坂へ行きませう。」とヤイ〳〵云ふ。「ハイ〳〵。」と大勢ひで引受ける。女中を一人連れて行く事にする。途中菊の作り花や木兎のやうなのに豊ちやんが一々立ち止るには閉口。番附を突きつけて「お孃さん何卒御入り下さい。」と低頭をする極が惡くなつたから入る。よく私の友達等が「菊になんか塗りません。」「彼麼處は好きません。」と云つて貶す人が澤山有るが奈何して嫌やなのだらうと不思議に思ふ。入ると何とも云へない菊の薫りが冷たく芬と匂つて來て菊の花の着物を着た人形が澤山。奇麗だと思ふ。私は

好きだ。女學生のやうな人は少ない——處ぢやア無い二三人しか見えなかつた。何故嫌ひなのだらうと可怪しく思ふ。之も私の俗物のせいかも知れないが。兎に角私は好き。宅へ歸つたらもう灯が燈つて居た又〱頭痛がして寒氣がする。大方風邪を引いたのだらう。自分勝手の時計り全癒つてゝ宅へ歸ると又痛み出す、隨分虫の佳い頭痛だと思ひ乍らも起きて居るのが堪えられなくなつたから床を敷いて寢て終ふ。頭を少し冷やして頂く。

十日。日曜日、晴天。



風邪を引いたのだらう。嫌な氣持ち。朝一寸起きて髮を結つてから机の前に坐つて見たが何にもする氣が出ない。頭痛はする。寒氣もする、で堪らず此の佳いお天氣を宅のしかも一間に籠つて居るのは辛いが仕方がない。寢る。障子は硝子が入つて居るので仰向けになつて居ると澄み切つて瑠璃色の空から、風が吹くとハラ〱と櫻が落葉するの迄見える部屋が何だか莫伽に明るいやうな氣がするので、屏風を立て廻して頂く斯うなると扨急に病人染みて來て嫌になる。今日の新聞を隅々迄面白さうな處は披かさないやうにして讀ん

だ。公設展覽會の中村不折の「白頭翁」が出て居た。

小說も讀み度く無く、唯凝然と斯う茫然して居ると種々下らない事を考へ出す。終いにはもう氣がくさくさして終ふ。で、

「あゝ不滿らないこと！」と大きな聲で云ふ。

「如何したの、頭痛がひどくするの。」と傍に坐つて被在つた姉樣が縫ひかけの私の長襦袢の針を止めて此方を氣遣はしそうに御覽なさる。私は其返事よりも、あゝ佳い柄だ、矢張り私の見立てが一番旨い。と自慢しながら。「佳い色氣ねえ。私然う云ふ色が好きよ、濃いのも佳いが淺い空色見たいなのは全くいゝわ。」と云ふ。

「あら何の事だらう。切角私が云ふのには返事もせずに、もう全癒つたのかい？」

「否未だなか〳〵全癒らないわ。」

「ちやア冷やそうか。」

「結構〳〵、冷やして頂かないでも斯うやつて居れば直ぐに全癒るでせう。もう明日は起きるんだから。」と病人に似合ない大きな聲で笑ふ。「姉樣濟みませんがねえ。一寸其處に有る蕪村でも一茶でも宜う御座いますからとつて頂戴。一つ讀んで見ますから。」

「ハイ〳〵。」と笑ひ乍ら四五冊枕元に來る。

「此病人なか〳〵威勢が佳いでせう？」と私も一寸極りが惡くなつたから照れかくしに云つて見る。古人の句は無論佳いのだらうが私には今の日本派の人の俳句はつく〴〵佳いと思ふ十句許り書きつけて見る。

今日を佗び明日思ひ寢の布團かな　碧童
牡蠣船に大阪一の艶話かな　碧梧桐
冴ゆる灯や書院九尺の白襖　六花
曉明の軍の動きや玉あられ　六花
寒月や平安城の御いらか　碧童
寒月に雲飛ぶ赤城榛名かな　碧梧桐
一峯の露領限るや冬の月　八重櫻
襟巻や蒲柳の質の貌よけれ　六花
俳想を天井に描く蒲團かな　句佛
夫婦瀧春かくれ行く若菜かな　碧童
白綾の衣の青みや冴え返る　師竹
この聲をきけと云ふよに唄朧　師竹

まだ〳〵云ひ出したら限りが無いから止す。

うと〳〵と終ひして了つたのだらう。何時かしら。十二時にもなるかと思つて居たらもう二時――。

「只今姉様お不快いの？」と美代ちやん友達の宅から歸つて來て聞く。「其麼に不快かないの。唯風邪を引いたばかし。」

「然う。あの途中で村田様に逢つたの。宜敷く。」

「難有う。寫眞とつて來て？」

と美代ちやんが開けやうとするのを待ち切れず引たくるやうにして見る。（先日姉様と美代ちやんと三人して寫したの）私は一目見ると。「まア嫌だ事！」と云つて叩き付ける。二人は立つて私が腰かけてる。迄は佳いが恰で何とも譬へやうのない。私と來たら汐吹のやうだ。もう見まい。と思つて一枚蒲團の下にかくす。姉様はよく撮れて居る。美代ちやんもお氣の毒の部だ。

「御飯食べて？」と姉さんが仰在る。

「奈何しようと考へて居るんです。餘り食べたくもなし。佳いわ晚に何かして頂戴子、然うすればお晝は我慢して置くから。」と恩がらす。

「然う、ぢやア晚に御馳走をしやうねえ。」

「えゝ何卒。」と晚を樂しみにして居た。

美代ちやんと話をして終ふ。

晚は姉様がキヤベツ巻にオムレツをして下さる。但しオムレツは私が特にお願ひをしたもの。七時頃から從兄が尺八を吹き出した。聞いて居ると佳い氣持ち。私は音樂の中で尺八が一番好き。其次ぎがピヤノ。琴やバイオリンは餘まり好かない。

十五日。金曜日、晴天。

今日は十五日、豊ちやんは七つの御祝ひで昨日からもう大喜び、明日〳〵と待ち構へて居た日。母様から御苦勞だけれどもリボンと草履を買つて來て遣つて御呉れと頼まれたので、餘り行き度くもないし、今日は一寸用が有るのだが、まア仕方が無い、豊ちやんも喜ぶ事と思つて女中を連れて買物に行く。道に龍田さんに逢ふ。丸髷に結つて被居つた。何だか餘り若かくつて、私達の目には惜しやうに見える。

リボンは赤いの、草履も赤いの。

「これは〳〵まあ奇麗〳〵。」と母樣が仰在る。豊ちやんが初めて白粉を塗ける。私は顏を拭いて遣つて、姉樣が塗けてお遣りなさる。塗けつけないから幾程塗けても〳〵ムラが出來て旨く行かない。何だか顏違ひがして可笑しい事！「大嫌やだ。恰で何とかのやうね。」と私は餘り可笑しいから傍から冷やかしてやる。

「否、豊ちやんは奇麗になりました。佳い事ねえ。治さん。」と私の方をお向きになるから。

「如何でせう？」と故意と首を傾げて。

「嫌な兒になつたわ。」と小さい聲で云つて聞こえまいと思つて居たら眞實に聞こえたと見えてワアッと泣き出す。惡い事が聞えた。と思つたから。お世辭を遣つて。

「オヤまア豊ちやんは這麼事に泣くの。可笑しいのねえ。嘘言よ今云つた事は、眞實は佳い兒。可愛いゝんだけれども故意と笑談に云つたのだからもう泣くのは止すのね。」と云ふ。

「もう泣くんぢやア無い。治さんは惡い女ね。ソラ餘り泣いたもので切角の白粉が剝げて了つたわ。オヤオヤ。」と有繋眞面目を粧つて被居つた姉樣も處々剝げた顏を見ると堪らなくくすりと肩をすゝめて笑つてお了ひなさる。私も笑ひ乍ら。

「一寸御覽ん。切角の佳い兒が泣いたので這麼になつ了つたわ。」と云ふと豊ちやん延び上つて鏡を見る。可笑しな顏が泣きしやくりしながらうつる。

「サア姉樣がもう一度よく拭いて上げるからもう泣くのは止してね。」と熱いお湯で搾つた手拭で悉皆り拭いて了ふ。姉樣が又白粉の塗け直し。先にこりて今度は奇麗〳〵と褒めて置く。お晝は赤の御飯を焚いてお祝ひをする。豊ちやんの着物を着替へさせるので又一騷動。薄色の地に秋草の華派な友禪に紅の裾で。帶は赤い繻珍で竪矢の字に結ぶ。髮はお下げ。草履は玄關に下して置く。半帕には私の香水をつけて「佳い匂ひ。」と悅こんで居る。清も仕度が出來たので、豊ちやんは清と一緒に、車に乘つて行く。時間が少し後れたせい

かも知れないが御祝ひの人は一人も居ない。妹の手を曳いて鳥居を潜つてずつと神殿の方へと敷き詰めて有る御影石を踏んで行く。後ろから樣らしい女の子や子守が十人許りゾロ〱従いて來る。清が其處に居た男に何か二言三言云ふと。

「お祝ですか。おやア何卒御上りなさつて下さい。」と云ふ。で三人して上る。

神主が恭々しく祝詞を上げて、榊で妹をサラッ〱と拂つて下さる。お三寶を妹の前に置いて、お盃を持



たしてお銚子を神主が持つて、お神酒をついで下さる妹はキチンと坐つて恐はそうにお神酒を戴いてお返しする。お守りをと云つて頂く。御神酒料と書いて水引をかけたのを置いて歸る。飴屋が二軒。先の方ので袋を買つて車にのる途中で小母さんの御宅へ一寸御寄りする。格子戸を啓けると鈴の音が烈しい。

「オヤ〱まア豊ちやん立派になつて。好く來ましたねえ。サアお上り。」と仰在る。ずんずん上る。

「今日は生憎皆んな留守でねえ。」と仰在り乍らお茶を下さる。少しの間話して歸る。

「御苦勞樣。」と母樣は莞爾〳〵して被入つた。

「否、何にも。」と云ひ乍ら飴をお渡しすると皆んなに分けて下さる。豊ちやんは氣取つてゝなか〳〵飴處の騷ぎぢやア無い。私は部屋へ歸つて着物を着替へる。

鈴木さんから手紙が來て、明日遊びに來ると有る。久濶くだから種々と面白い話も有るだらう。女中が來て着物をたゝむ。御湯に入つて佳い氣持ちになる。何にもする氣が出ないから女學世界の古いのを出して見て居たが何だか寢むくなつたから九時半に何日もより早いが床に入る。

別に草臥れる譯も無いが何だか萎頓したやうで床へ入ると直ぐに前後も知らず寢入つて終つた。何日もよりは少し暖たかい夜。（完）

果報な女

米國ミルウオーキーのリデア、ベシユケ孃といふはツイ此頃まではポール、ローゼンメールなる人の夫人なりしが、離婚して又孃と呼稱することを許されたるが、孃の知人にシー、イー、ジヨーンスなる人あり本年五月商用を帶びてメキシコに赴くことゝなりしが、其際孃と其子供の寫眞一葉を貰受けて旅程に上りたるこそ抑々孃が大財産を贈らるゝの基を爲したるなり、ジヨーンス氏はメキシコに到着後、商用上不圖マンダなる人と交際を結び互に訪問を交換するまでになりしが、一日ジヨーンス氏を其私室に訪問したる際マンダ氏は不圖マンツルピース上にベシユケ孃の寫眞あるを發見し、眺むれば眺むる程其の美しさの優り行くが如くなるに愛慕の情禁ずる能はず、未だ顔を合したるともなき孃に向ひ書を寄て熱切なる思ひを通じたれど、更に返書の來らん氣はひもなく、獨り此方にて慕を焦す中、病の襲ふ所となり遂に立たざるを知るや、狀師を招きて遺言を作成せしめ、其財産八十萬圓は之を米國ベシユケ孃に與ふることゝなしたる次第にて孃はマンダ氏の死後狀師より遺產贈與の報に接して夢かと許り驚き且つ喜びたりといふ。

毛髮の衛生

△有益なる髮油――伊豆の三宅島の婦人は月に二回位は椿の油粕を煎じて毛髮を洗ふとので、之は毛髮の艶を出して其發生に非常な力のあることは確な事實であります。近來は白毛を染めることが盛に行はれてゐますが、染髮の藥品は種々有害な物を含んでをる爲に、藥品は毛髮を傳つて頭蓋の表皮にまで、浸み込み遂に血管を侵します。其爲に種々なる病を醸しますが、最初に椿の油か或は揮發油やウヰスキー、アルコール、ブランの類を塗つて置きますと左程に害はありません。普通の椿油には二割乃至四割のシラシボリ油が交つて、純粋なものは殆んどないのですが、兎に角椿と云ふものは毛髮には有益なものです。

△髮油の種類――毛髮の美を保つには内部の營養即ち滋養物をとることが必要です。内部に滋養があれば髮には自然に脂肪が傳はつて來る。然れ共之丈で丸で油をつけないと云ふことは出來ません。何故なれば毛髮は彈力性を有つて居る故に多少油をつけて柔化しなければならないのであります。それで日本製の油としては前に述べた所の椿油其他には弁貨油などが有効です。又西洋式の油では御園香油パール香油、ゴールドオイル、日の出香油等です。

△輕便な髮洗法――二三の刷子を用意して置き、三四合許の熱湯に凡そ五匁許り硼酸を溶し、此中に前の刷子等を浸して髮も其中に入れ、毛髮を洗ひ或は梳で或は梳く時は毛の垢も落ち皮膚も清潔になり、左程時間も要せず、至極輕便であります。洗滌後はなるべく強い櫛で梳るが良い。

都會に於ける勞役婦人の樂天地

天籟

今日、工女を使つてゐる多くの會社の中には、隨分ひどい待遇をしてゐるものも無いではないが、併し以前と較べると餘程變つて來たやうである。此の十四五年前迄は、何處の會社でも、工女は募集しないでも本人が進んで志願をして來たもので、會社の方では親の保證を取る、身元を調べる、そして言ふ事を聞かなければ解雇すると云ふと、工女は縮み上つて居たものだだから待遇が何程惡くてもどうか恁うか治まつて居たが、今日はそれが倒になつて、ぐず／＼言ふと工女の方で出て行くと言ふ。行かれては困るから會社の方では成る丈け厚遇してゐる。特に彼の鐘ケ淵紡績會社の如きは、工女の爲に女學校を迄も設けて彼等の便利を計つてゐる。で茲に最も好き待遇を與へてゐる一例として同會社の工女の生活狀態を記して見やう。

△晝勤と夜勤

鐘ケ淵紡績會社と言へば、御承知でもあらう、殆んど東洋一の大紡績會社で、從來神戸、東京、關西、九州に都合十四ヶ所の工場を設けて、專ら綿糸紡績のみを遣つて居たが、舊臘よりは京都にも更に一大工場を設けて絹糸紡績を遣る事になつた。玆には就中神戸の工場の有樣を記して見やうと思ふ。此の工場は神戸市兵庫東尻池に在つて、女工は三千四五百人も居るであらう。で此等の工女は普通如何云ふ勤め方をしてゐるかと云ふと、晝勤工は朝五時の汽笛で起きて六時に工場へ入り、朝の九時に十五分、正午に三十分、午後三時に十五分の休憩があり、夕の五時の汽笛で夜勤工に引き渡すべき準備を爲して、六時に退出する。夜勤工は夕の五時に起き、晝勤と同じ休憩時間を經て朝の六時に退出する、そして一週間毎に一度休業日があつて此の日を以て晝夜交代させるやうになつてゐる。併し新に入社した、工女に田舍の生活から窮屈な工場生活に急變させるのは德性涵養の上からも健康の上からも

善ないと云ふので、仕事に熟達する迄は就業時間も短縮して毎日午後四時から、二時間づゝ會社の現狀から作業の模樣等を蓄音器やオルガンなどの興を添へて物語ると云ふ事である。

△いたいけな幼女

扨て又彼等の賃銀は如何と云ふに、最初は十三四歲の女で一日十五六錢、十七八歲の者は十八錢位であるが、仕事を覺えて來ると請負になるので、平均二十七八錢から三十錢位、多いのは五十錢位も取るさうである、此の會社では、成る丈け幼年者を使用せぬ方針を取つて居るさうなれど、母や姉に伴られて入る者があるから、さう云ふ者は特に親切な老工女を添へて一室に十人程づゝ寄宿させてゐるが、時に四十位の老女を取り圍んで十二三歲のいたひけな子供が優しくお話を聞いてゐるのを見ると、何とも言へぬ感に打たれる。

△女禮式の大教場

此等の可憐な工女や社宅に住んで居る幼年者の爲に工女學校と云ふを設けて、朝夕二時間づゝ讀書、算術裁縫、造花、唱歌、茶の湯、活花などを教へてゐる。此の設備は今度出來た京都の工場にもある筈である。學校は洋風の建築で、普通小學校の教室式に出來てゐる、裁縫や女禮式などは寄宿舍の大廣間で教へるが、此處は又非常に立派なものだ。室は百四十疊敷で、西の正面にお寺の本堂にありさうな大佛壇が安置してある。と共に死んだ工女の位牌から、經机、木魚、銅羅なども並べてある、此處へ本願寺から折々布教師が來て說教をする、修身講話を遣る、工女は每朝こゝへ來て禮拜する、勿論表面ばかりの者もあらうが、中には涙を流して親の無事を祈る者もあるさうで、賽錢などが澤山にあると云ふ。實に優しい心掛である。東の正面には板の間の上段がある。紫の幕を絞つて、墨繪の虎の掛物に白梅の大花瓶を置いてある、女工の手に成つたらしい生花が三ツ五ツも置いてある。孰れも上手に出來てゐる。座の中央には霰釜に風爐がある。水屋がある、簞笥がある、裁縫の道具がある。此處で女禮式を習つた女工が、やがて郷里へ歸つた時は、定め

し得意な事であらう。

△寄宿舍の夜景

此の寄宿舍と云ふのは、中庭を隔てた二階建の總廊下で、四十疊敷の部屋が一棟に三十二室ある。廊下には兵營式の洗面場があつて、中庭はずつと花壇になつて居る。舍內に女の物書屋さんが居て、無料で手紙などを書いて遣る、部屋は二疊に一人の割で、各室に室長が居る。廊下に面した處は障子で、左右は二段の棧戶棚がある。電燈の下に本を讀むもの、編物をするもの、手紙を書くもの、話をするもの等色々あつて、一寸見られない圖である。此外に幼稚園を設けてある。工手の兒女で三歲から七歲迄の者を無料で世話すると云ふ事である。又幼兒保育舍と云ふものがある、夫婦共稼の者は子供が足手纏ひになるから其れを預つて遣るのだと云ふ、之れは一年以上勤めた者は無料、其他は幾分の保育料を取られる。

△食堂の異彩

食堂は實に立派である、夕餐時に行くと、電燈は白日のやうに輝いてゐる。食卓は六列に目の屆かぬ迄に並んで、其の間にレールが通じて居る。一定の入口から束髮、銀杏返し等態々の工女が續々と入る。茶碗と箸とを持つて菜を受取る、菜は鰶の滓まぶしに人參牛蒡、昆蒻などがあしらつてある。一寸旨さうだ。それに澤庵漬が五切程添ふ。食卓の上にはお櫃が幾個も並べてある。六人で一個を占領して召し上る。此の賄料が一日十一錢五厘につく。食事時は以前は隨分騷しかつたもので、譯の分らぬ田舍歌を謠ふもあり、菜の取遣りで喧嘩をする者もあつたさうだが、近來は大さう風儀が善くなつたと云ふ、食堂の四圍には花壇の設けがある。竹箒の古いのゝ端を切つて竹垣が作られてある。廢物の利用も却々風流である。賄所は最も衞生的に出來て居る。四方の窓、入口等を悉く網戶にしてあるから、一匹の蠅も這入る事が能きない。飯を炊くのも却々工夫をこらしてある、即ち一間の鐵の戶棚に、八段の棧棚を作つて、其の中へ銅製の角箱を入れるが、之れには三升づゝの米が入つて居る。此の器三

十二個を入れ、觀音戸を閉めて蒸氣をかけると、四十五分間で一石五斗の飯が出來る。五十貫の薩摩芋は五分間で蒸せるさうである。

△着替室病院　近頃は大分衛生がやかましくなつて、工女の中に病人が出來ると直ちに會社の損害となるので、何處の會社も隨分力を盡してゐるさうであるが、此處には其の爲めに特に着替室を設けてある。作業中の服は綿屑で穢れるから、通勤工も寄宿工も着替室で着替へさせる。それには婦人の世話役が附て萬事の世話をする。



何しろ三千幾百人の工女が着替をする所であるから、

規模の大いには一寸驚く。棟の高い板の間で、板の下部には開閉自在の格子があつて、空氣が其處から入り代はる。そして掻餅棚のやうな棚を七つ八つに組んで其上へ番號の附いた衣服籠を置くから、宛然養蠶所のやうである。外から來た者は此處で作業服を着、工事を終つた者は此處で脫ぐ。其の作業服は看護婦服のやうなもので、會社から貸して居る。風呂は工女が一月中の最も樂しく思ふ仕事の一つであるから、却々立派に作つてある。寄宿舍用、通勤用、社宅用の三つあるが、孰れも蒸汽機關で沸してゐる。病院なども一寸した私立病院の及ばぬやうなのが出來てゐる。小松原の中に洋風の二階建があつて、醫員六名と看護十三名とが斷えず詰めて居るが、治療費、食費、滋養品等皆會社持であるさうな。病室を見ると、白い蒲團を敷いたベッドの上に、患者が淋しさうに寢起きして居る。中には他人のベッドを訪れて故郷の話をしてゐるのもあれば、枕頭に挿したる梅の薫りに僅に慰められてゐるのもある。病室の一部に娯樂室があるが、こゝには繪葉書、書籍、樂器などを置いてある。

△共濟機關の整備

此の會社には共濟組合の設けがある。社員職工悉くが其の組合員で、毎月一定の醵金をすると、會社からも其れと同額を補給する。社員職工の支出額が千圓あると會社からも千圓出す。此の共濟金の中で、病氣で勞働の能きぬものへ四日目から三箇月間給料の半額を遣る。負傷した者へは、全癒する迄醫藥を與へ別に給金の全額を遣る。勞働に堪へず退社する者へは五百圓以內の手當を給する。病氣で死んだ者へは葬式料を十五圓以內、遺族へ百圓以內、本人が勤續年金を受ける資格があれば特に三百圓、負傷して死んだ者へは此の以上を與へ、尙ほ姙娠や產後で休業すれば病氣と同額を與へる。病氣で國へ歸りたい者へは附添人を附けて歸へす。父母の死んだ時は國許へ香典を送る。國許から病氣見舞に來た者へは往復旅費を給する。

△何でも廉く買ふ

又消費組合の組織になつてゐる物品引換所と云ふも

のがあつて、米、青物、魚類、呉服太物、化粧品、菓子等種々なる物品を元價で賣つてゐる。之れを買ふ者は皆な金券を使ふのであるが、此の金券は月給高に應じて會社から渡す。廉物が買はれるから社員も職工も幾割か收入がよい理になる。其の賣店は言はゞ小さな勸工場で、廂髪が算盤を彈いてゐる。側に市松人形を置いてある。一寸やさしい光景である。別に煮賣青物屋があつて、炊事の能ぬ者は、此の店で辨當を調へる。又菓子の製



造場があつて、ハン、饅頭、大福などを廉く職工に賣つて呉れる。併し職工は此の新しい廉い菓子よりも構外の駄菓子を喜ぶさうである。

△貯金の奬勵

日本の工女は西洋の樣に一生涯遺るものは無くて、嫁入支度が出來ると直ぐ歸つて行く。之れは勿論好い事であらう。而かも都會の風に染むと兎角贅澤をしたがる。それ故會社では浪費を制する目的で、一時預金の制を設けて、預つた金に對して年一割の利子を附けて

ゐる。のみならず國許への送金に就ては、爲替料も郵税も悉く會社から支辨する。で工女はどの位貯金をして居るかと云ふと、毎月八圓づゝ預けて四箇年間に三百五十七圓三十四錢を蓄へた者を筆頭にして、毎月三圓七十錢づゝ預けて十年間に四百五十圓六十九錢を蓄へたもの、同じく三圓七十錢づゝ預けて六年間に三百十一圓十錢を蓄へた者などが最も多い方で、職工全體に係る貯金總額は實に二十四五萬圓の多額に上ると云ふ事である。

△娯樂と風儀

定期の休業日は毎週一度、大祭日、年末、年始、于蘭盆等で、此の日は芝居、手踊、活動寫眞、蓄音器等を催し、三大節やお正月には運動會、園遊會を催すが活動寫眞や蓄音器はもう飽きて面白くないと云ふさうだ。だから會社では此頃構内に劇場を新築中である。建坪は二百四十坪、費用三萬五千圓、最新式の洋風建で、晴天には中二階の舞臺で演じて廣場から見物するやうにし、雨天には舞臺で演ずるやうに作つて居る。三府五港何處を探しても恐らく恁んな劇場はあるまい役者は臨時に雇ふので、壯士物よりは舊劇を喜ぶと云ふ事だ。扨て又風儀は如何かと云ふに、勿論嚴重に區別されては居るが、遠くて近いものは男女の交りで、どうかすると醜行が外に漏れる、それには嚴重な處分法がある。然し正當な順序に由つて結婚する場合は會社でも十分保護をするので、工務長などが媒介人になつて雙方の親父へ紹介を爲し、會社から祝儀の金を贈り、勤續年限の長い者には簞笥の一本も買つて遣つて寄宿舍の二階で儀式を擧げさせる。恁ふ云ふ事が月に三四度はあるさうで、新婦新郎相携へて出勤する者が澤山ある。

△宛然たる一小都會

此の工場の社宅は、甲乙丙の三種に區別されて、家數が四百六十三軒、此處に居住する者が二千餘りもある。二階建の風流な家もあれば、廣い庭園に花壇を設けたものもある。小さい家は九尺二間、最下等のは四疊に三疊の二間位。家賃は諸式附一箇月七十錢から三

四圓位であるが、夫婦共稼の職工、親子同胞の職工等一家から澤山の職工を出すほど家賃は廉くなる。そして面白いのは借家人の懸賞で、家を綺麗にする者、庭園の手入を善くする者には、一等十圓から十等一圓迄の賞與を與へて居る。之れは半期々々に審査員が審査するので、若し家を穢くする者は罰として段々悪い家へ入れられる。此の社宅町を巡つて見ると、赤硝子の門燈を掲げたお醫者様が居れば、札場には流行病の注意、或は賃銀は代人なく自身で受取りに來いなどゝ云ふ掲示をしてある。床屋は一人が三錢、洗湯は八厘曲り角に社宅注意函と記した函がある。社宅町を拔けて煉化造りの間を行くと遠く白帆が見える。正面に六甲山が聳える。枇杷葉湯が通る。郵便配達が行く。生鯖五六尾さげた老人が通る。孕女が水道で洗濯をする人夫が追分節を謠ふ。宛然たる殖民地の趣がある。

屑拾ひの所得

屑拾ひの所得と其生活の有樣とは、屑拾ひ專門惡事兼業及び惡事專門の種類によりて各其趣きを異にするは言ふ迄もなき事なるべし、先づ屑拾ひ專門の者に就て記さんに假に當時の相場に準じて紙屑一貫目十二錢となりても一日一貫目を拾ひ得るは容易の業にあらざるべければ單に紙屑のみにて一日十五錢を得んこと思ひも寄らぬ所なるべし、故に彼等は此紙屑の外に襤褸、假葉宗縷、古下駄、古傘、空俵、古鬘又は拔毛、硝子又は瓶の毀、炭薪、野菜、瀨戸物の壊れ、殘飯など見付け次第に之れを拾ひ取りては問屋に鬻ぐなり。左れば彼等は大抵朝の四時頃に其巣を立出で我先にと市內を駈廻り、里程凡そ五六里以上に相當する場所を拾ひ歩きて辛じて二十四五錢位の稼ぎをなすよし尤も時として思はざる所得あることあり幷は或家の轉宅したる跡に不用の遺棄物を拾ひ又は町家の煤掃きに際し下婢小僧等の不注意によりて棄てたる物を塵芥函より掘出し又は商家の手代若者等が押入の隅或はよげ蓋の下へ投込み置きたる古下帶、汚れたる衣類等を惠まるゝ事もあるべし、斯る場合には一日の稼高十五六錢より六七十錢にも當ることありと云ふ。

左れど此は血氣盛りの稼ぎにて其他の輩は大抵七八錢より十錢止りを通例とす小兒若くは不具の者等に至りては其稼ぎ高少きが故に已むなく紙屑拾ひを表面の業となし實は人家の門前に立ちて殘飯等を貰受け露命を繋ぐもの亦多けれど惡事專門の徒は然らず勿論其所得は一定し難く、或時は一日一錢を得る事能はずして親分より小遣錢を借受くることあれど又た或時は眞鍮、又は銅の金盥、洗濯衣類、靴下駄の類をカツパラヒて、案外の仕事をなし、早仕舞に切上げて此品をばハタシ屋にコカシ附け、急に懐中の暖きがまゝに、取敢へず大福餅の暖かき、鯛の潰たて、或は燒芋なんどしたゝかに買ひ込み、之を仲間の者に分與へて、得々として例の卷煙草、或は朝日などを燻しつゝ、日當り好き場所に胡坐掻いて同類に番頭の虱などを捕らせ、妙に全盛風を吹かすも亦面憎き次第なり。

時世観

田舎翁のくり言

地方來住者の自白

百二三十里ばかり隔れる北國の僻地より、東京に移住せる某といへるがあり。地方にては相應の位置を占めて、家格も卑からざりしが、三四年前、一家を擧げ來り、神田の左る所に小間物店を開きぬ。郷里にはなほ若干の田地を遺こし居れど、漸次手放し居るよしなれば長く都會生活を續くる覺悟と見えたり。左に掲ぐるは、東京に來りし因由を說けるものにて、言ふ所、悉く理に當らざれども、流石に身上を語れるをとて、地方中流者の狀態を說き得て眞に迫るを覺ゆ。以て地方中流者の現狀に充つべく、亦た都鄙生活の比較とも見るべし。

▲表面は娘子供の爲め

「如何して東京へ移つて來たと？　此奴は困りました實は牛に曳かれて善光寺詣りで、二番の娘が頻りに東京へ出たいと言ふものですから、親類に異議を稱へたものもありましたが、振り切つて東京へ出て參つたやうな次第。御存じの如く、私共の故郷は一二年前に漸つと鐵道が架つた僻地でございますが、如何したものか、四五年來といふものは、高等女學校へ入るのが流行だして、此處の娘も那處の娘も、六里ばかり隔つてゐる○○市の高等女學校へ入るのでございます。私共の二番も、御多分に洩れず、高等小學を卒業すると、旣う氣違のやうに高等女學校に入りたいといふ騷ぎ、嫁入仕度に小千圓の金を棄てるよりはと、子に甘い譯ではありませんが、二番の要求に從つて、監督かたがた東京へ出て參つた譯なのです。……左樣です、地方で、私共の身分位では、嫁入仕度に少くも五百圓七百圓、まア小千圓は要るのです。それに盆正月の附け屆け、いや、之は大したとではありませんが、私共田舎の習慣として、嫁に遣つて四五年、子供の二人位出來る迄は娘の衣類は固より、子供の衣類等は一切此方で仕送る風習でございますから堪りません、高等

女學校の費用などは、嫁入仕度に比ぶると、何んでもありません。で、篤と相談の結果、五十幾ッの白髪親父に爲つて、此の目眩しい東京へ遣つて來た譯です。」

▲田舍の分限者は小金を百姓に貸し附けてゐる位が事業

「まだ東京へ來た譯が外にもございます。私共の郷里は、戸數は二千もあつて、郡役所もあり、稅務署もあり、郡中では第二と下らない町でございますが、在所を相手に商賣を遣る位が關の山で、外に大した事業もない寂しい町ですから、町の分限者といへば、酒醬油の製造を遣つとる位が、第一の商賣で、その他は祖先傳來の田地を小作に卸ろしてゐるか、乃至は小金を百姓に貸附けて、利息を見てゐる位のもので、外に斯うといふ商賣はトント無いのです。尤も田舍流儀に、質業に遣つて居れば立ちゆかない譯もありませんが、田舍はまた田舍相應に種々と面倒な事件が起つて參るのですから、八九年ばかり前から、旣う田舍は駄目だと見切を附けて居りました」

▲田舍の雜用負け

「中以下の身分であると、職業が尠いと言ふ丈けで、炭でも薪でも、諸式が廉いから、生活が其樣困難でもありますまいが、中以上に爲ると、第一家格といふものがあるから、婚姻の場合は固より、祭禮でも、法會でも、家格が先に立つて、苦痛を忍んでも、相應の外見を張らなきアならぬ破目に出會することが多いのです。祭典や、法會はまだ好いが、縣會議員や郡會議員などの選擧騷擾が起ると、世間並に有志者騷動を遣らねばならず、少し身體を入れ過ぎると、直ぐ縣會議員の株を持つて來られるといふ鹽梅式。私共は斯う店に坐つてゐると、お客樣は、那邊の木偶の坊かと、眼にもお留めに爲るまいが、之でも地方に歸ると、一ト廉の有志者で、十幾年續いて町會議員の椅子に凭つてゐたものなんです。ナニ、議員に爲るのが名譽だらうと、なるほど名譽でございましやう。けれど、此の名

譽職は、百圓二百圓の運動費の掛つた名譽職ですから、餘り有難くありません。」

▲世間の附合と緣者の迷惑

「名譽職の御附合ばかりでなく、默つてゐると、遊廓の出入迄附き合はねばならない。一體、北國地方は、雪國であります故か、或は事業のない故か、老年も、青年も、交際だといつて、遊廓に出入する。いや、冗談ぢやありません、實際の說話です實に風紀上容易ならん事です。ですから、東京から、學者名士がお出でに爲つても、矢張遊廓で懇親會を開くといふ景氣、驚いたものでございます。地方で、中以上の身分に爲ると、斯んな事にまで附き合を仰せつかる。之は世間向の事ですが、內部に入ると、乾度どの家にでも、二三軒厄介な親戚が在る。私共にも、面倒の多い親戚は、二軒あつたのです。日常は餘り大したとも仕ませんでしたが、それでも、一年に二度や三度は難題を持ち掛けられたのには、何時も憮然しました。薄情のやうにお聞きでしやうが、生活費が嵩んでへこたれてゐる矢先に、度々之に出會するのですから、實に苦しいッたらありません。けれど、放つて置く譯にもゆかず、內心困りながら、矢張相應の義理を立てる。若しか棄てて置くと最期、ヤレ不人情だの、ヤレ義理知らずだのと世間の噂が煩いので、いや／＼ながらも、義理を立てるのです。それは／＼地方ほど煩い處はない、一ッの噂が一ト月も二タ月も、否、一年も續くから恐れ入ります。地方には說話の材料が無いからでしやう。」

▲田舍を出るのは容易でなし

「地方から東京に參る者は、大層な樣でございましやうけれど、係累のない、一本立の青年は兎も角も、一家を擧げて東京に參るといふとは容易なものではありません。鎭守の社に立つてゐる杉の木でも、裏町の半程に架つてゐる橋梁でも、皆な多種多樣の記憶が刻まれてゐるのですから、其處を通つた丈けでも、特種の興味が伴つてゐるといふもの。特に私共のやうな、

地方丈けでは、まア相應の位置に居つた者はなか〳〵容易に出られたものでありません、けれど、年々家の費用が嵩んで、ちよと油斷してゐると、何んだか斯う一家の内部が見すかされるやうな心配もありましたから、娘が高等女學校に入りたいと申すのを好機に、思ひ切つて東京へ出ましたやうなわけ、ですから、娘の修業は表面の看板で、實際を白狀すると、生計上餘儀なく出たといつた方が虛飾のない所です。他の地方はどんなものか知らぬが、私共の地方は、如何考へて見ても、見込のつく事業は見當りません。ソリヤ食つてゆく分は、何でもありませんが、従前の家格を張つて、見識を通してゆかうといふには相應の事業は如何しても見附からないのです。」



▲氣の毒が通り過ぎて可笑しい位

「地方では下等の社會よりも、中以上が難澁です。勞働者であるなら第一地方は米の値が廉い魚類や野菜類も十錢位奮めば結構、屋賃なども一圓五十錢か二圓も出せば、表通りの二間間口の家が借りられるから、それを言ふと、田舍の生活は暢氣なものだ。特に諸拂が三ヶ月勘定と來てゐるから、大に助かる、左樣です、酒屋、醬油屋の類は、大抵顏が利くのです、例

令病人があつても、毎日〱藥屋に屈托しない丈けでも、田舎が好い。けれども、之は中以下の事で、中以上に爲ると、前に申したやうに町の交際が殖へる、諸税は上がる、一家の雜費は增すといつたやうな具合で、生活が難澁と爲つて來ましたから、都會に比べると、よほど生活は困難のやうです。だが奮發は出來ないものと見へ、中以下の勞役者は、日增に都會へ移りますが、中以上の者は、之では良くない〱と言ひ〱、矢張地方にへばり附いてゐるのは、氣の毒が通り過ぎて可笑しい位です。東京から見ると、都會へ遣つて來る者は、十人が九人迄は中以下の勞役者だから、中以上の者は無事太平のやうに見へましやうが、實際は却て中以上の者は難澁して居るのです。」

▲都會生活は簡易の生活なり

「生拔の東京人は如何かは知りませんが、地方から出た私共から言ふと、都會の生活は、地方よりも遙然と簡易です。ソリヤ物價は高い。私共は未だ夢にも見たとのない家賃といふものはあり（地方では借家住居の者は、極細民か、他所から來てゐる郡吏或は警官等の外殆ど無い）寄席芝居などいふ贅澤なものは多いがその代りに家柄だの行つたのといふ者は無く、近隣親戚の氣兼も尠く、私共のやうな者には東京の住居は亞極安氣です。ですから、田舎から此の東京へ出た當座は、陰に籠つた薄暗い室から、廓然とした廣野に出たやうで、氣が晴々しました。如何して、今まで地方で愚圖〱してゐたかと後悔してゐる位であります。」

▲事業が顯がつてゐる

「東京は、其處等中に事業が顯がつてゐるやうに思はれるのです。既う齢も取りましたから、事業に取り附かうといふ山氣はありませんが、何んでも路上を通つて居ると、其處等中に事業が顯がつて居るやうに思はれる。路人の顔を見ても、皆な活々してゐるやうですから、自然と私共の胸裡も春めいて、三ツも四ツも若返つたやうな氣分に爲つて居ります」

▲忙しいので良い

『それに東京は忙しいので、尚更氣が勇む、斯んな小いぽけな店なれど、商品の仕入やら、何やら彼やら、日々くるくる廻つて、忙しい思を仕て夢中に日を送つて居りますが閑暇が多い地方の生活に比べると、倦怠が無い丈けでも、遙然と身體が健康に爲りました。地方より尋ねて參る者は之では身體が續きますまい、と言ふ者もありますが、私は忙しいから良いのだと家内と笑つて居るのです。』



▲都會と地方との商賣振の相違

『地方と東京と商賣振に相違があるかと? ソリヤ大變な相違です。地方だと商物さへ廉いと、廉いのが評判に爲つて、十町でも十五町でも廻り道して、購客が有りますが、東京は廉いといふ丈では何にも爲りません、廉いのよりも品物が良いといふ評判が店の繁昌の基らしい、東京では一錢二錢の廉いが、眼に留らぬものと見へます。ですから、地方は同業者の尠い場所は好いやうですが、東京は同業者の多い處が好い。例令ば雜誌

店なれば、神田神保町小川町、本鄉なれば、四丁目五丁目、或は本富士町邊は良いでしやうし、西洋小間物店なれば、神田は小川町通り、本鄉なれば四丁目邊は好うございますが、地方だと、同業者の尠い場所が同町内の眼を奪います。地方から參つて、商賣を創めて隨分失敗して居りますが、つまり田舍流儀に創めるからだらうと思ふのです」

▲一ッ困つたとあり

「東京に一ッ困つた事がございます。それは子供の敎育です。いや立派な學校が揃ふて居りますから、地方とは比較に爲りませんが、二番は東京へ出て參つてから、贅澤な事を言つて仕樣がありません。殊に衣類には種々な文句を尉べるので時々大目玉を食はせてゐますが、之丈は私共の地方は好うございました。尤も地方に依りけりで○○市などは、東京の風儀とそつくりその儘だそうですが、なんとか雜誌の上でお叱りを願はれますまいか。勝手な事を尉べますが……」

秘露人の風習

秘露人の日常生活中、一の奇習あり、中等階級以上の家族にては、必らず料理人を雇入るゝを例とし、主婦は毎日其日に入用なる食料品を買入るゝ爲め、若干の金子を料理人に渡し、料理人は之を受けて市場に至り、肉、野菜、麥粉、バタ等より、石炭木炭の末に至るまで當日の必用品一切を購入するも、料理人は此間に立ちて必ずコンミッションを私するを普通とす、然れど、是れ一般の習慣なるを以て、敢て咎むるものなし、而して當日使用せる殘品は悉く之を各自の家に持ち歸へるを怪まず、秘露人一日の費用は四人の家族にて、三四ソル(約三四圓)を通常とし、料理人の給金は、一ヶ月約三十五ソル乃至四十ソルなれども、外國人の家族に雇はるゝものは、其給金も高し、隨て一日の經費も高まり而かも其雇入れたる料理人は、充分の勤勞を惜むこと常なり又秘露には日本の如き家族生活なるものなし、蓋し秘露人の家族生活は、恰かも下宿屋生活を營むが如きものなればなり、是に於てか屢々料理店或は旅館等に入て種類の多き料理を食し、以て無上の樂みとなせども、非常の高價なるを以て之を爲すは、富者が其富裕を誇らんが爲めにするものなりと目せらる。



むかしの人の食膳

考古博士

▲精げざる米、炊かざる飯

豊葦原の瑞穂の國と唱へまして我が日本は神代のむかしから既に五穀を作りまして、國民日常の食物は今日と同じく米、麥、粟、稗、大小豆などを重なる食物としたのでございますが、中にも米はうましねと唱へまして最も尊重したものでムいます、但し其の精げ方や、炊き方は今日の如き様々な手數をかけたものではなくして、極めて簡單な方法によつたものに過ぎませぬ、即ち高貴なる人々を除くの外一般の人民は多く籾から離れた玄米の儘を陶器の釜で煎つたり、或は甑に入れて蒸したりして食べたもので、まだ今日のごとく水から炊ぐといふ事はしなかつたのでムいます。

▲調味料は唯鹽のみ

日本上代の國民は大陸地方の民族と同じ風習で、野生の動物を盛んに食べたものでムいます、即ち猪、鹿、熊の類から、牛、馬、乃至は雁、鴨、雉子、山鳥の禽鳥類から、水邊に產する、魚介のあらゆるものを食べました、又或る地方では今日巴里の珍食社會でもてはやされる蝦蟆の肉や、蟒蛇の肉などを賞味したのもあつたといふ事です、但し、食品を調理するのに鹽の外他の加味料といふものは未だ殆んどなかつたのである、又其の鹽といふのも後世の食鹽とは大ひに外觀の異つたもので、唯、海水を煮たもの、若しくは山鹽を掘り取つた丈けのものに過ぎなかつた位でありますから況や醬油、味噌、酢などは更らになかつたのであります。

次に果實は天然野生の到る處ろに生熟したもので、栗、柿、山葡萄、胡桃などがありました。

▲酒は濁醪、飴もあり

それから飮料としては神代のむかしから酒がありました、尤も酒は後世行はれたやうな清澄たものではなくて、白濁酒に過ぎなかつたのでムいますが、其の醸り方も又今日のやうに器械力を用ひたものではなくして丁度今日南洋の土人がする樣に果實を口に嚙みつぶし、其の汁液を酵母にして發酵させたものでムいます、素戔嗚尊が八岐頭大蛇を退治した時、大蛇に飮ませた酒なども無論この濁酒に過ぎなかつたのでムいます。

この頃はまだ、菓子といふものはありませんでしたが、それでも麥の發芽から飴を造る事は旣に發明されてあつたのでムいます。

▲食器は土器と白木

次に申たいのは飮食の器具でムいます。これは専ら土器を用ひたものですが、又植物の葉を縫ひ合せて皿の代りに用ひました、即ち萬葉の古歌などにも飯を椎の葉に盛つて食べる事など歌ふてあります。

又物を煮るには多く鍋を用ひたのですが、これも矢張り素燒の土器でムいました、又魚獸の肉などを燒くには専ら木の葉に包んで火の上に炙り燒にしたものです、土器の事を古言にすゑものといつたのは物を入れて据へ置くところから出たものだそうで、器皿に魚、菜、又は酒などを盛つてこれを白木の机の上に排列して神にも供し又人も食ふたもので、今日神葬の式に用ふる祭具のやうな按排でありました。

▲生活狀態の一變

神代のむかしから神武東征の紀元を歷まして數十代、凡そ千年の間といふものは一般の社會狀態に非常なる變遷もなければ、國民の衣食住、就中日常生活に格別の進歩もなかつたのでムいます、彼の三韓征伐以來、高麗と交通は頻繁になり、隨つて大陸の文明も高麗を通じて移植されたには相違ありませぬが、それはたゞ國家の一部分の影響で廣く日本國全體から見ては矢張り神代のむかしと文明の程度に大差はなかつたのでムいます、併し推古の朝に及び佛敎の渡來となり隋唐との交通がある樣になつてから、日本の文明は、始めて曙光を開いて生活の狀態に至大の影響を與へま

した、就中衣食住は最も著しく進みまして、奈良朝を經て平安朝に入つてからの日常生活の進歩といふものは驚くべき有樣で、神代の草昧なる面影は爰に至つて全く趣を變じて參りました。

▲上流婦人は姫飯

平安朝時代の日常の生活は矢張米を主食としたに過ぎませぬが、其米は甑で蒸したものを本式として、これに粥と唱へて、後世の米飯の少し軟かいものを高貴の人達は朝食に用ひたものである、又姫飯と唱へて專ら上流婦人の食したものは今日の飯であります、それから遠旅をする時、或は山野に出遊する時、又は軍旅の時などには、糒飯を携へたものである、これは、食する時に水に浸して柔らげ、冬時は湯漬と唱へて湯に浸して食したものである。

糒の製法は玄米を甑で蒸しこれを日光に乾かしたものである、それから此時代に屯食といふものがあつた、それは今日の握飯のやうなもので、客を饗應する時、その從者に食はしたものだそうな。

▲總菜のはじまり

魚類野菜の副食物は此時代には却々潤澤であつた、まづ河魚では鯉、海魚では鯛を最も尊び、其外鮭の楚割、鮎の火乾、漬鹽、鮒の鮨、煮堅魚、鰯鮨、鯖鮨等いふものがあつた、楚割といふのは、干した鮭の肉を割ほぐしたものである、又鮑にはいろ／＼の製法があつて乾鮑、熨斗鮑など大に賞翫されました、章魚、海鼠なども乾製にして賞味されたものであります。又此時代に入つて佛教の勢力が普及したと同時に牛肉を食ふ事は禁じられましたが、他の野獸、野禽を食ふ事は上代と少しも變りはなく、鹿、猪、雉子、鴨、雁などは最も尊ばれ、又牛乳をも用ひられたのであります、隨つて蔬菜類も潤澤となり、夏は瓜、茄子を始めとして、冬は大根、胡蘿蔔、春の早蕨、筍、秋の初茸、芋など季節の總菜として、種々の蔬菜を食用する樣になりました、のみならず、瓜は此時分より既に糟漬または醬油づけとして用ひられ、又乾干瓜として貯藏され、當時の首府たる平安城の辻々の露店や又は町家の

店頭に是等の魚類、野菜の乾製した品々を賣るやうになりました。兎に角一般の庶民が飯に總菜を用ふるやうになつたのは平安朝の頃からでせう。

▲始めて菓子をつくる

此の時代に於きまして野生の果物は柿、栗、梨子、桃、橘、蜜柑、胡桃など盛んに食用されましたが、就中栗と柿とは普通に行はれ、搗栗、甘栗、燒栗などに製られ、柿は干柿、熟柿、串柿等に乾製されましたが、當時既に樹に生つたものばかりで滿足されず、唐の風習に倣ふて米麥の粉を固めて菓子を製ることを考へ、餅と飴、蜜などを材料にしていろ〱の品をつくりました、その種類にはまがり(糫餅)といふもの、ふと(餢飳)といふもの、饂飩、てんせい(黏臍)などいふものがありました、但し當時いまだ砂糖といふものがなかつたので、甘味をつけるには專ら飴でした、中には、甘味のある植物を煎じて其汁を取ッたものもあり、又は蜂蜜を使ふたのもありました、飴は麥芽からつくつて糯を交へたものでありました、そして菓子の調味料としては、胡麻、生姜を使ひ、且つ餅は大いに行はれて祝賀の時などは大抵餅をつくりました、その餅の種類にもいろ〱あつて、ちまき、くさもち、大豆もち、小豆もちなど專ら行はれました。

▲食膳に技術を應用す

神代に於て單に煮、または炒りて食せしものも、平安朝の頃から、樣々に調理法が行はれて、食膳に生酢(膾)あつもの(羹汁)が賞味される樣になりました、羹汁には、鴨、雁、雉子を材料にしたもの、芹、松茸、平茸、茄子、豆腐、わらびなどを實にしたもの或は蓴汁なども出來る樣になりました、王朝の盛りを過ぎて鎌倉時代に入り、更らに室町の代に及んで庖厨に一段の進歩を來しましたのは料理法に一流の技術を應用する割烹專門家の出來た事であります、それは彼の四條流、大草流とて、近代まで禁裏の御膳部を司どつた御食人であります、それが專ら足利將軍家の庖厨を支配して大いに珍味の調進を致したのであります。駒圭町

時代より戰國を歷て德川の盛世に至るまでの變遷は次號に述べます。

臺所心得艸

△鍋釜の鏽を止める法　鐵の鍋釜類は或は内面に錆を生し易きものなれば日々使用せざるものには、明礬一匙を清水一升ほどの中にて溶かしたるを塗り置くをよしとす。

△鐵鍋釜の鐵氣を拔く法　これは薩摩芋、又は糠を入れてよく煮るなり、金氣の拔ける事妙なり。

△錫器の注意　錫の器は濕氣のたまりたる處ろより鏽を生ずる事早きもの故常に拭ひ乾がし置くを要す、又錫の茶入又は德利等のくぼみを生じたるは其中に大豆を入れ水を注ぎ置く時は原形に復するものなり、但し大豆の量をよく其の器に應じて加減せざれば其器物を張り破る事あり。

△銀の器磨き方　銀の器物を磨くには炭酸鐵を布片につけて磨くなり、但し油氣ある物は先よく油を拭ひ取りて磨くべし。

△漆器の臭氣を去る法　重箱、辨當箱等新らしき漆器には米のとぎ汁をぬるま湯となし半日ばかり其器に入れ置けば自から臭味去るべし。

庖厨

臺所の新智識

和洋割烹塾　塚間つね子

△調理人の心掛け

衞生思想の發達した今日では、黴菌は不潔處に湧くものだから臺所を清浄にして、流元や井戸には殊更注意をせねばならぬ、と申すやうな事は既に何人も御承知でムいませうから、玆に説明を省きますが、然し厨房の設備や食器其他の器具ばかり清潔に致しましても、肝腎のお料理をする人の身邊が穢なかつた日には、謂はゞ前門の虎を防いで後門の狼とやらの比喩と同じことで、結局何にもならぬ譯ですから、平生厨室に出入する人は、調理をする前に先づ自分の手足や髮や服裝を淸く整へる必要があります。と云つても、毎朝髮を結ふて、湯に入つて身體中を磨立てゝ、美顔水やキレー水を塗付けてから着手なさいと申すのではありません。唯だ衣服の埃や手の垢や髮の毛などが、食器や飲食物に混らぬやうに豫防するのです、

△毛織物の保存法　羅紗、フランネル等すべて毛織物は平常收め置く其の間々へ樟腦をはさみて置かざれば蟲に喰はれて廢物となる事あり、故に箪笥長持、葛籠など、防蟲法として樟腦水を小刷毛にてむらなく塗り置くをよしとす但し樟腦は自然消滅するものなれば六ヶ月ほども經たば更に仕替ふる事を忘るべからず。

△襟垢を落す法　白き絹の襟垢を落すには、搗き立ての餅にて幾度も擦すれば洗はずとも清潔となるなり。

△酒のしみぬき法　酒の衣類にかゝりたるは速やかに灰をふりかけ置き乾きたる時灰をふるひ落すべし其既に汚れとなりたるは半日ほど大豆の煮汁に浸し置きて後ち水にて洗ふべし。

△インキのしみぬき方　インキの衣類につきたるは醋酸二三滴を清水一合中によくかきまぜたるにて洗ふべし、醋酸の代りに梅酢（色をつけざる）又は普通の酢にてもよしいづれも其後をよく洗ひ出すべし。

△墨の汚點拔き法　白布などに墨のつきて數日經たるものは糊又は飯粒に水少し加へ、あら塗りしたるを其の汚れたる處ろにつけて幾度も取かへつゝ氣永く靜かに揉

これとて別段手數のかゝる事ではなく、朝起きたら第一に頭髪を理め、洗面の時は必ず手と指頭を石鹸で綺麗に洗つて、次に平常服の上へ庖夫の着るやうな白い上衣を被るのです。

此白い上服を用ゐるのは、單に衣類の汚れるのを防ぐばかりでなく、襷をかけずとも起居振舞を自在ならしめる上に、穢物や塵埃が直ぐ眼につくから、どうしても不潔にしては置けず、臺所仕事をする人には是非とも之が必要です。それから又忽にならぬ事は頭髪の手入で、朝髪の毛を掻上げるくらゐは婦人として當然の嗜みですが、唯だそれだけでは不充分ですから、櫛巻でも梳髪でも何でも宜しい、兎に角皮脂や髪の毛が飲食物に這入らぬ様に能く撫付けて、其上へ新らしい手拭か又は白い巾でも冠れば、申分ありません、尤も毛髪は煮ても溶けない物ですから、一筋でも眼に付けば其儘取棄てるのは容易いですが、併し食事の際に發見ては不快なものですから、若しそれがうつかりお客の碗の中にでも這入つて居たらそれこそ主婦の耻でありますから、平素の身嗜みには餘程氣を注けねばなりません。

△料理法と身嗜み

料理をするに最も多く觸れるものは手で、其手の中でも一番油斷のなら

み落すべし其跡は石鹸にて洗ひてよし。

△鏽のしみ拔き法　鐵鏽の衣類につきたるは、小桶など適宜の器に極めて熱き湯を汲み入れ其鏽のつきたる布を兩方より引張りて湯とすれ〳〵に擴げ其上に硝石の粉末を置けば湯氣の爲めに硝石溶けて鏽はぬけるなり其後よく洗ひ出すべし。

△ペンキの汚點ぬき法　ペンキの衣類につきたるは揮發油にて洗ふべし、洋服などすべて羅紗地にペンキのつきたるは刷毛又は布片に揮發油を浸して幾度もこすれば容易く落るなり揮發油の汚點は百度ほどの熱湯にて二三度ほどふり出して後遠火にかざせばこれも跡なくなるなり。

△油垢のつきたる布洗ひ方　髮掛中襟の類の垢つきたるを洗ふには揮發油に入れて柔らかに揉み、油氣の拔けたる所ろにて搾りあげ、白湯にて二三度ふり出して新聞紙等にて包み輕く火熨斗をかくべし。

△衣類に石油のかゝりたるを落す法　石油の衣類にかゝりたるは遠火にてそつと翳さし漸々油氣を蒸發せしむべし、若し毛織物なる時は熱灰を布片に包みて汚點の上を輕く押すべし、熱灰は幾度も取かへるをよしとす。

ぬのは指の爪であります、頭を掻けば膏と垢、耳を掘れば耳垢、といふ工合に、何でも彼でも爪の間へ浸入して種々な黴菌が溜る、其手で以て飲食物を取扱へばそれ等の不潔物は悉く葱や大根に混つて遠慮なく胃の腑へ這入る譯ですから、手は丁寧に洗ひ淨めて、爪は隔日位に剪み、少しでも垢を溜めないやうにせねばなりません。

そこで料理法の嗜みが一通り濟んだら今度は調食中に於ける擧動です、世間のお臺所を見ると、お料理をしながら、笑つたり巫山戲たりして、唾沫や細埃が煮物の中へ飛込むのも知らずに居るお爨なぞがありますが、之は些細のやうですけれど、衛生上決して等閑にはなりません。ですから私の塾では、調理中の擧動に就て左の如き規則を設けておきます。

一調理者は用談の外なるべく談話を交へぬこと。

一可笑しき事ありとも濫りに吹出さぬ事。

一唾、痰、は勿論、咳嗽、クシャミ等も成べく其場にてせざる事。

一若も止み難き場合には場外へ出で、これを爲し決して食器食物のある附近にはなすべからず。

尚ほこの外に、急に痛い所や痒い處があつて其處へ手を觸れた際は勿論、汗を拭いた時でも其都度手を洗ふ事に定めて置きます。之は一寸窮屈のやうに思はれますが、馴れて了へば何でもないことで、而し又この位に注意

△衣類に蠟のつきたるを落す法

これも又熱灰を紙につゝみたるをあて、其紙にしみこませて取るなり、もし多くつきたるは其蠟の上に紙をあて、程よく火熨斗をかくべし、但し其紙は幾度も取かふるをよしとす。

△醬油の汚點ぬき法

醬油の衣類にかゝりたるは其汚點の所を兩方より引張りて上より湯を濺ぎかくべし、但し少しばかりなるには口にてよく吸ひ取りてよし。

△油のしみぬき法

油の衣類にかゝり絹物にて水に浸し難きものならば其汚點に滑石の粉末を振りかけ、其上に紙を置き氣長く火熨斗をかくべし、又洗ふ事を得るものならばおろし大根の汁を塗りて後熱湯にて洗ふべし、又汚點の所に海蘿をつゝみ湯につけて徐かに揉みてのち清水にて洗もよし。

△衣類に血のつきたるを落す法

もし汚點が少しならば唾液を浸したる燈心の小口にてこすりてよし、又多くつきたるは冷水を口に含みそれをそゝぎかけつゝ燈心の小口にてあらふべし、但し燈心は度々取かへるをよしとす。

△白紙に墨のつきたるを拔く法

これは大根を薄く輪切にし其切口に墨のつ

しなければ到底食物の清潔を保たれるものではありません。

△生腥と精進との區別

大抵の家では庖刀や爼板は精進と生臭との區別がしてありませうが、猶同時に料理する時は手を區別する必要があります。例へば魚や肉類を調理した手で直ぐに野菜を扱つたり、又葱のやうな香ひの強いものを切つた手で其儘他の食物を取扱つたりすると、忽ち臭ひがそれに移染つて折角の珍味佳肴もその爲に臺無しになるといふ例は尠くありませんから、割烹時には勿論、出來た物を食器に盛る塲合にも一々手を洗滌つて、生臭物と精進物との味が混らぬやうに注意しなくてはなりません。其他庖刀でも爼でも箸でも杓子でも、總て香ひの高いものや脂肪氣の物を切盛する際には、それ〳〵器具を更めるか又はシャボンで清淨に洗ふかして、食物の眞味を失はせぬ工風が肝腎です。それから庖刀を研いだ時は、それを直ぐに使ふと砥石の臭いが食物に移つて可けませんから、必ず暫時水へ浸けて置きそれから用ひるやうにしなくてはいけません。

係様に清潔を主とし、入念に料理をするに、暫時も離されぬものは『手拭と布巾』ですが、併しそれが汚れたり色が變つて居たりしては、却て無きにも如かずですから、之は殊更清潔にしなくてはなりません。

きたる處ろをのせ、又其上より他の大根の切口にて輕くたゝくべし、但し大根は幾度も取かふべし。

△疊をきれいにする法　疊に垢のつきたるは橙を横二つにし、これにてよくこすりて後、淸水にて拭ぐひ置くべし、又揮發油を布片に浸して拭ふもよけれどこの法は取分けて其のあとを最も丁寧に水拭をなし置くべし。

△疊の墨を落す法　これは少しならば直ちにぬぐひ取りてよし、多くつきなば直ちに水雑巾などにて拭ひ取らんとすれば疊の目へ浸み込みて見ぐるしくなるものなり、故に濡れたる疊は柔らかなる紙か乾きたる布にて靜かに吸ひ取らせ決して、拭ふ事なく餘は其儘になし置て十分乾燥せしめたる後、新らしく水氣なき藁たわし、又は新しき藁草履などにて擦り落すべし。

△疊の油を落す法　疊に油のつきたるは滑石粉を其汚れに厚くふりかけ置き、其上に新聞紙などを置き重き壓をなし置くなり。

△疊のインキを落す法　これは職工用の鹽酸を十倍の淸水に溶かしたるものにて拭ひ、猶其跡を能水雑巾をかけ置くべし。

△新らしき疊の拭き方　新らしく疊

△魚類の鑑別法

身嗜みと器具の使方をも心得たら、今度は原料の撰擇方が大切です、人間でも容貌と姿で大抵其人物が知れると同じやうに、野菜でも魚類でも、其形と姿で味の美い不味が解ります。此鑑別法は一々詳しく述べると際限がありませんから茲に、一二の例に止めますが、先づ鯛なら、肉の肌理が細かく充分に膏が乘つて、骨は一帶に細く鱗が引締り、頭が小さく角立つたところのない、喩へば繪に描いたやうな姿をしたのは必ず美味い、さうして刺身にすると、旨いのは奇麗につくれますし、不味のは肉が荒れてゐますから如何に新鮮でも美事に出來ません。次に鯉は生洲物と川育ちとの二通りがあつて、生洲物は頭が小さく身體がよく太つて一寸好い姿ですが、よく見ると肉や鱗の締りがなく、それに色が淺黄ッぽくなつて居ますから直ぐに分ります、そこで川育ちの鯉は色が赤黑くて、頭の大い割に體が細く瘦せてゐますけれど、肉が引締つて肌理がこまかいから、味の美いことは生洲物の比ではありません。凡て鯛や鯉に限らず、旨い魚は總じて鱗が細かく引締つて、燒くと膏が燃え出すやうにチユー〳〵云ひますが、不味いのはそれがない、其代り美味い魚は脂肪が澤山な爲に早くわるくなるから油斷がなりません。

の表替をなしたる時は一面に白き粉のつき居るものなるがこれを湯にて拭きては赤くなるなり、故に水雑巾を堅くしぼりて拭き取るなり。

△室内の煤氣を洗ふ仕方　煤拂ひの時柱又は天井などの煤けたる時は綿子殻の灰汁にて幾度も洗滌すべし。

△硝子磨き法　ブランデー酒、又は揮發油、アルコールの内いづれにても布巾につけて拭ふべし。

△硝子壜の内部を洗ふ法　馬鈴薯を細く霰に切り、これを一と握りほど壜中に入れ外に水五勺ばかりつきこみ、口栓を堅くして數十回ふりて洗ふべし又白米を入れて洗ふもよし。

△金縁の拭ひ方　額面又は鏡などの金縁の光澤を出し又は蚊、蠅の糞を落すには玉葱を横二つに切て、其切口にて靜かに撫でたる後ち海綿又はフランネルに水を含ませ、柔らかに拭ふべし。

△鼠の驅逐法　壁又は羽目板など鼠の常に出入する穴を見つけ其周圍にコールタール（黒色の臭き粘液にしてぶりき屋根など塗るもの）を塗り置くべし其臭氣のある間は鼠來ることなし。

△産地と擇び方

野菜類も猶且格好の好いのが旨く、大根でも牛蒡でも人參でも、眞直で節瘤のないのが一番宜ろしくて、曲つたり歪んだり捩くれつたりしたのは筋が多くて不可ません、又甘藷、里芋のやうなものでも姿のよいのが美味くて醜いのはどうしても味が劣ります、其他大概の原料は、此形姿で善惡が分りますが、一つは季節と産地にも因ります。

先づ魚類の産地から申しますと、鯛は關東方面では相州葉山、逗子、小田原、松輪邊一帶、相模灘の陸に近い方に漁れたのが一番結構のやうで、殊に東京では松輪鯛を以て第一等としてあります。次に比目魚、かれい、ぼら、鱸の類は神奈川から横濱近海のものが最も脂肪が多くて珍重されます、又鮎は美濃の長良川、鮒は江州琵琶湖のもの、是等は申さずともの事でせう。

それから野菜類では、松茸、しめじ、芋、筍等はどうしても京都のが一等で、大根は尾張の宮重大根、百合根は奥州南部の産が最上です、殊に東京附近の筍は皮が硬くて根を半分も切落さなければ食べられませんが、京都のはそれが柔かいから少しも棄てるところはないやうです、芋も其通りで關西のは箸で樂に切れるやうです、すべて恁ういふ風に、味の美い惡い

△蟻を防ぐ法　座敷などに蟻の這ひ上るには和布を煮たる汁を椽下、床下等に撒きてよし、又果實などには其樹の下に撒べし。

△炭の跳ねるを防ぐ法　これは食鹽一と匙を其中に投ずべし、自體炭の跳れるは乾き過ぎたるものなれば使用する前に俵の儘にて雨にさらすか水を濺ぐかすれば塵も立たず、跳ぬる恐れもなく、火の持ちもよきものなり。

△水を澄す法　良水を得難き地方にては止むを得ず濁りたる水を使用する時はまづ水を桶に汲み置きこれに少許の明礬を混じてかきまぜ置くべし。

△獸皮の貯へ方　膽礬を細かにくだき水にて煉り、獸皮の裏面へすり込むべし、蟲害を免かるゝなり又水楊散を水に溶き薄く延ばしたる中に獸皮を一度浸しよく乾かして貯藏するもよし。

△漆器を清潔にする法　苛性ソーダ三匁、酒石一匁五分水二十四匁に混じたるものを貯へ置き、所用に臨み水にて薄め汚れたる漆器に塗り三四分間を經たる後柔かなる雜巾にて拭ひ取り更らに水にて洗ふべし。

△氷を久しく保たしむる法　細かに碎きたる氷は解け易きものなりこれを簡

はどうしても產地によつて異ひますから、隨つて其撰擇方にもなか〱經驗が要ます。

△美味は季節物にあり

『目に青葉山時鳥初鰹』と申して、走り物を喰はなければ面白くないといふやうですが、これは物の味を謬つた話で、野菜でも魚類でも本統に旨いのは矢張り其時々の季節物に限ります。走りや後れものは唯だ値段が高くて珍らしいといふだけの事で、其實盛漁期の時に比べますと味がづッと落ます。鯛ならば先づ最も澤山漁れる三四月頃、即ち子持七分といふ所が一番美味くて、其前後は肉も縮つて居なければ脂肪も上りません。又野菜類とても同じ譯で、茄子、瓜、芋、大根等何によらず其物が澤山出來て値段の最も廉い時が一等旨いので、初物や季節後れの高價物ほど味が却つてわるいので厶います。

畢竟金を多くかけて珍らしいものを集めたとて、必ずしも美味い物が出來ると限らぬのですから、それよりも其時々の季節物をいろ〱に使ひ分けて、うまく味べられる樣にするのが料理法の極意で厶います。

△煮出しと醬油

形の湯吞茶碗にフランチルの布を張り其中央を凹めて其上に氷片を載せ置くべし又多く貯ふるなればなるべく乾きたる日光の當らぬ場所へ穴深く掘り其底より少しく上げて格子をはめ其上に芝土をのせ次に松葉か又は鉋屑を澤山つめ氷塊をこゝに置くべし其上にも松葉鉋屑を置きて土を覆ふなり。

廚房の整理法

臺所道具の整理不整理で經濟に何位損があろか知れません、先づ臺所の道具の整理に就て、二三をお話し申し上ませう。

◎鍋釜の取扱ひ

申す迄もなく、使用後は清潔に洗ひ錆の生ぜぬやうに、布巾で濕氣を拭はれば不可ぬ、夫に飯を焚た後へは、水を柄杓で一杯濺て置くのです、應うしないと空釜を焚憂いがあります、又鍋釜の新調した時は小豆を入れて、鐵シブを除かればならぬが、鐵シブをとるには小豆を煮るのが一番良い。

◎洗箒より糸瓜

それから鍋釜を洗ふには糸瓜殼が良い、單に鍋釜のみでなく桶類を、糸瓜殼で洗つたら木

原料の好惡に次いで料理と大關係のあるのは、だしと醬油です、だしの原料は鰹節と昆布とが主なるものですが、今では土佐節よりも却て伊豆節の上等が脂肪があつて、だしの利きが良いやうでムいます、又だしの種に使ふ昆布は北海道から大阪方面へ廻つた物が特に宜しいやうです。次に醬油は煮物なら蓬萊印、刺身なら龜甲萬がよろしうムいます。砂糖は純良な三盆白か氷砂糖、味噌は普通の赤味噌よりも三州味噌の方が遙に味がよくて加之德用なやうです。序に申しますが、砂糖でも鹽でも味淋でも之を料理に用ゐるには、すべてアクを脫いた方が良いので、即ちよく煮立てゝ其泡を去つて使ふのであります。

品物の擇び方はザッとこんなものですが、今度はその調理法です、これを述べるに就いて、何と何とを何樣取合せて何時間煮るなどゝいふ事はその品々に就て、特別な手加減が必要ですから今一槪にそれを申上る事は出來ませんからそれは省きまして、更に野菜や魚肉の切り方、及び水加減等をお話致しませう。

△切り方と水加減

如何に原料が宜くても、其切り方が惡いと物が硬くなつて大層味を損じます。牛肉でも鳥肉でも野菜でも魚類でも、總て木の輪目と同じやうに縱

地を損める、恐れがない又鍋の使用後は必ず棚へ伏て置のですが、煮物の火加減に由つて鍋釜の焦着く事がある、此の場合には徐々と糸瓜殻で磨き、此も短兵急に洗つては鍋を損じるのみならず焦着く癖が着くものですから、料理法には鍋の取扱ひが最も大切です。

◎陶器の保管法

陶器は破壊し易いので、保管を克くせればなりませぬ、先つ陶器を新調した時は一遍釜か鍋で、水から煮なければ不可ません、然うして沸湯を潜らせて置けば、比較的に丈夫で無暗には砕けません、此陶器の茶澁なぞに穢れたのは灰汁を入れて煮れば清潔となります、併し大切の器は糸瓜殻へ磨砂を着け、氣水に洗ひ落すに限ります。

◎徳利の安全

使用後に、キルクで口を塞いで置き、使用する時に再々洗ふのに限ります、徳利の中の汚物があつたら鶏卵殻を砕き、徳利の口から押込み克く振れば、中の汚物の掃除が清浄に出來ます、臺所は總て清潔に限りますが、清潔の原素は、

◎布巾と雑巾

といふものがあるから、此繊なりに随ふて庖刀を使ふことが大切で、若し繊に逆ふて截ると自然と肉が荒れます。ツマリ鰹節を削るにも逆さではさくれが來てかけないと同じ道理ですから、筋を切るにも繊なりに順へば屹度軟かく食べられるのであります。

次に魚でも野菜でも、畑や海から採りたての品と日が經つた品とでは、之を煮るに水加減を違はせる必要があります。活きた漁たての魚は水分を澤山含んでゐるから、水を少なくし、活きて居ないものは、時日の比例によりて水を増して煮なければ不可ません、野菜も亦同じ事で、之に注意せぬと其都度加減の異つたお料理が出來て了ひます。

又炭は最も火力が強くて保ちのよい、備長といふのが一等です、炭が悪いと燒物などは殊に調子が狂ひますから、ツマリ良い炭を使ふのは贅澤なやうで其實經濟になるのであります。以上は一般の御婦人が餘りお氣のつかれぬ些事ではありますが、而も忘れてはならぬ要件だらうと存じます。

春の庖厨

△鯉の飴だき　鯉の鱗をとり頭をおろし、腹をあけて腸を去り、膽に庖丁をあてざるやう注意して三枚におろし薄身を取り、俎板にのせ、皮目を下

にあります、布巾は毎日使用しますから、茶褐色となり易いのですが、此布巾を三日目位に大洗濯をするのです、大洗濯と云へば臺所で使用する布巾を鍋に入れ、酢か又は炭酸曹達を適宜に加へ、之へ水を割つて克く煮るのです、その布巾を鍋から箸で取り出し、再び清水で上洗ひするのです。

◎雑巾にも二種

上雑巾下雑巾と分るのです、雑巾には襤褸を多く使ふのですが、之も餘り襤褸よりは地質の丈夫な古袷を、麻糸で刺して用ゆるのが經済です、新しいのは座敷廻りの上雑巾とし、其の上りを下雑巾とするのが克いです、上雑巾も布巾を洗濯した、酢や炭酸曹達の沸湯で濯げば、何時も清潔となつて居ます。

◎裏漉や菜箸

裏漉は使用後は水を掛け、糸瓜で横目に擦れば自然と清潔となる、菜箸は何所の臺所でも細紐で括つてありますが、使用上不便ですから菜箸はバラに限ります、併し紛失の憂ひがあるとすれば菜箸は箸立へ取寄して置くのがよいです。

◎洋食の道具

にし、薄刃庖丁にて皮に達するほどに刃を入れ味淋一杯、酒一杯、水飴少量を加へよく煮立たせたる中へ煮笊を敷きて右の鯉をならべ、落し蓋をし暫らくにして少量の醤油を加へ汁の煮つまりたるを待ち鍋を卸して皿に盛り、粉山椒をふりかけて出す。

△鮒の昆布巻　昆布をよく洗ひ置き、味淋と醤油にて下煮をしたる焼鮒を右の昆布に包みて干瓢にて結び鍋に入れ水を加へて暫く煮て其ゆだりたる頃味淋と醤油とを入れ、ぬる火にて煮つむるなり。

△鮒のごかし漬　鮒の二三寸位なるを堅ねりの甘酒に二日位つけ置き、三日目に取出して其儘遠火にて焼き冷まして白味噌の中へ漬け込むなり。

△鮒の雀焼　一二寸位なる鮒を脊開きにして竹串にさし味淋と醤油にて煮つめたる汁にてこれを付焼にし粉山椒を散布す。

△たなごの佃焼　小なるたなごを竹串にさしざつと焼きてこれに醤油をぬり、三回ほど付焼にしたるものなり又粉山椒を添ふ。

△鹽鯛の料理法　米の泔水に三日間浸し後ちよく水洗ひしてザツと湯煮し吸物に用ふるには適宜の形にきり、焼目をつけて紫蘇の葉をもみこみ、少許の長芋をすり落し、味噌吸物となし又鹽出しの儘水氣を去り毛髪の如くむしり、鹽出したる大梅干と榎茸とを取合せになして薄清汁の吸物にも用ふ鉢肴には鹽出したるを茹でゝ大切にし、よく火どりて味淋にて煮ぬ

洋食の道具は曹達湯で洗ひ、脂肪氣の脫た所を再び沸湯で洗ふのです、恁して取扱へばバタ臭い、移り香は他の器物にうつりませぬ夫からフライパンの焦着た時には、鍋へ油を濺り火に掛て置ばその焦が取れます、また鐵葉の器具は錆を生じて腐蝕し易いから、最も注意せねばなりませぬが、鐵葉の器具は使用の後、水で克く洗つて布巾で拭ひ、火に焙つて乾かすのです。

◎漆器の洗滌法

一番難しいのは漆器です漆器の汚物を洗ふのは微温湯に限られ、熱湯を注いだら漆が兀げますから、漆器を清潔にすには、注意をせねばなりませぬ、最後に水瓶の蟲防の方法をお話し申しませう、外見は體裁は惡いけれど、粗繩で水瓶を鉢卷させるのが克いです、然うして置たら蛞蝓が這入りませぬ。

眼の衞生十個條

むかしから一眼といつて眼は我々の身體の最も大切な機關ですから、平素の衞生法に就ては大に注意しなければなりませぬ、併し專門的の事柄に就ては却々一朝一夕に述べ盡す事は出來ませんけれども、こゝには唯そ

き上部より花がつをまきちらし、少量の食鹽を加へて煮るなり又鹽出しゝたるを其儘水洗ひして水氣を拭ひて刺身につくり、生姜酢を注ぎても食ふべし。

△鹽鱈の料理法　薄鹽鱈を水に浸して鹽出しゝて少し鹽氣の含めるうち取出して適宜に切り清し汁の吸物にするなり取合には、靑昆布、白髮昆布を用ふ又粉山椒を吸口とするなり、又味噌の吸物にするには其皮を剝ぎて薄切にし、丸むき大根及び花がつをゝ取合に入れ藥味には刻み葱粉唐がらし陳皮等を添ふ又賽の目に切り酒にてよく煮て再び酒と醬油とにて煮つけ、少しばかりの煮切りたる胡麻の油を混和して干山椒粉を散布して鉢肴ともなす、又毛髮のごとくむしり、ゆがきたる鱈の子をもみて盛り合せこれに岩茸の生栗のせん及びおろし山葵を添へ煎り酒を注ぎて刺身に代用す。

△鱈の子の料理法　鹽漬なれば熱湯にてゆであげ、よく水氣を去り、手にて揉みほぐして煮物に用ひ、或は鹽出したるを其儘小口切にし、椀に入れとゝろ昆布小松菜を加へて清し汁をそゝぐ又鹽漬のまゝ小口切にし花がつをゝ掛けて酒鹽をそゝぎ、穗蓼、靑山椒、紫蘇の實等の内一品を添ふ。

△鹽引鮭の料理いろ〱　其まゝ大骰の目形に切り、炮烙に入れて酒と鰹ぶしの煮汁とを加へ鷄卵を割りこみて燒きたるを炮烙燒といふ、これを糀漬にするには肉のよき分部を細作りにし、酒にて溶きたる糀の中へ一日ほど

の最も普通な事柄を申して置きませう。

△適度を保つ事

眼を過度に使つたり、又休め過ごしたりするのはいづれも眼の視力を衰弱せしむる基ですから、他の諸器官と同じく適度に使用し適度に休息せしめなければなりませぬ、又其の使用に就ての平素の習慣によつて或は一方に偏して遠方の物を見たり、又あまり近接した物を視たりすると、知らず〳〵の間に遠視眼になつたり、又近眼になつたりするものですからなるべくは平素調和を取つて使用するやうな習慣をつけねばなりませぬ、殊に視力の薄弱な者に取ては此の邊の注意は最も肝要な事柄です。

△光線に對する注意

眼の虹彩は光線の強弱に應じて、徐々に伸縮してこれを調和する作用を爲すものですから成可く眼中に入り來る光線の度の急變を避くる事が、必要です、のみならず、あまり強烈な光線に觸れる事も、網膜の働きを損ふ原因となるものですから、これを戒めねばなりませぬ。

△注目注視の害

浸し後ち取出して笹の葉につゝみ、硯蓋などに用ふ次に鮭びしほを造るには肉のよき部分を庖丁にてかき取りよき酒糟にたゝきませ、後ち小板の上につけて梅びしほの如くつくるなり、又船場煮は肉を適宜に切り湯にてよく煮こぼし再び湯を仕かへ、酒鹽と少許の醬油とを加へ、取合せにさゝがき牛蒡、或は初茸を混和したる汁なり、次に刺身をつくるには、薄切にして皿にならべ、上より白酒をそゝぐなり、又一夜づけのこけら鮨をつくるには水に浸して鹽出をし、薄く大へぎにし、木耳、麻の實、纖生姜、色よき澤庵をせん切にして、酢を混和したる飯にかきまわすなり又鮭の皮のみをよく水に浸し、鱗を去り水氣をぬぐひ、胡麻油にてあげ、大根のしぼり汁、及び醬油を注ぎたるを大猪口又は小丼物に用ふ、次に鮭鱠は頭部を割り、内部の氷頭を取り、薄切にして、酢に浸し、大根を卸して醬油と酢とを混和し、獨活の白髮切を加へて右の氷頭をまぜ合せたるものなり、次に鮭の筋子は其まゝ熱湯に投じよくほぐしたるを豆腐の糟汁に入れ、吸物にす、又ほぐして山葵酢を注ぎて手鹽皿に盛るなり。

△鹽鰹の船場煮　肉を湯煮したる後煮こぼし更に湯を仕かへ、少量の酒と同量の醬油とを加へて汁を造り大根の薄片と右の鰹肉とを加へて煮るなり又酢煎りはせんば煮のごとく製したる中へ少許の酢をそゝぎ根芹を混和し茶碗に供するにはよく鹽出して適宜に切りこれを蒸し長芋の餡をかくるな

次ぎに長時間斜めに物體を注視て居る時は、眼筋の異常な収縮によつて終には斜視眼になることがあるものです。

△細字と燈光の明暗に注意する事

田舎などではよく不注意なする事ですが、薄暗い光線の側で針仕事をしたり、細い字を書いたり、又は讀んだりするのは直接に近眼になる原因です、燈りは暗過ぎるよりは寧ろ明り過ぐる方が害は少い。

△日光と炬燵の害

次には烈しき光線たとへば太陽の光の如きものを直接に見てはならぬ是れ大いに視力を害ふものである。又炬燵などに久しくはまつて居ると逆上て視力の薄弱なものは終に眼を害ふものです。

△車上の讀書

次には烈しく動揺する馬車、人力車などの上では决して讀書をしてはならぬ、これは動揺の度毎に眼と書籍との距離が、絶へず變化し隨つてこれを調節するのに甚だしく視力を勞するからです。

り。

△鰤の薄あんかけ　鰤を厚手の刺身につくり、九切れ若しくは十一切づゝに分ち、蒸籠の中へ竹の皮を敷きたる上へ置きてむし、皿に盛り、其上へ薄餡をかけ、おろし生姜を添へてすゝむべし、さて薄餡の拵らへ方は、味淋を鍋に入れ、文火にかけて凡そ半分ほどに煮つめ、これに生醤油を加へ再び煮つめ、更らに煮出汁を加へて其味をほどよくつけ鍋を火にかけ一と沸かしゝて鍋を火よりおろし、これに水にて溶したる葛をそろ〳〵に垂らしこみ又鍋を火にかけ、葛の變るをまちて鍋を火よりおろすべし、但し濃さの加減は蒸したる肉にかけて流れざるほどにゆるくすべし。

△とろゝ芋の海苔卷　まづとろゝ芋をよく摺りつぶし山葵のすりたる中に入れ、上等の海苔にて鮨のゝり卷のやうに卷き極めて鋭利なる刃物にて二寸位の長さに切りて用ふ。

△牡蠣の味噌あへ　かきをざつと空煎をなして唐辛味噌にてあへるべし、さて唐辛味噌は並味噌を摺鉢にて摺りこれに唐がらしと砂糖少々とを加へ摺りませ、これを摺鉢の中面にぬりつけ、摺鉢を火の上にふせて燒き、輕くこがせしものなり。

△蕪菁の鮨づけ　直徑二寸五分乃至三寸位の大なる蕪菁を厚さ七分ほどに切りそれを又二つに切りて（但し切り放さず）其間に鮭の肉をつめこみ三

△執務中の心得

讀書したり、執務したりする時、成るべく光線を側面より受る樣にせねばなりませぬ、又日光に照らして物を見るは眼の大害である。

△刺激物と煤烟

次に酒、烟草其他の刺激物を甚だしく用ひ、又は眼に觸れしめてはならぬ、又煤烟に燻されたり、砂塵の揚がる時塵除眼鏡なくして歩くなどはよくない事です。

△毎朝の洗滌

次に眼は毎朝清潔な微温湯か冷水で洗ひ眼瞼などに附着する不潔物を除き去られ ばならぬ。

△異物竄入の手當

若し塵埃其他異物の眼中に竄入つた時は明るい方へ行かせて片手で其の眼を開き、片手で軟らかな且つ清潔な布巾を取り其の端で其物を取り去るがよい、それには眞綿が一番よい、尤も此際あわてゝ眼を擦つたりなどすると却つて刺激を加へて痛みを増したり炎症を起しなどするものであるから注意せ

日間ほど酒の粕に漬置きよきほどに切り、洗はずして其まゝ用ふるなり。

△鯛の卷燒き　鯛を三枚におろして幅二寸縱一寸位に切り、醤油に砂糖少し入れてよくませ合せ、其中へ右の切身を半日位つけ置き蕗の葉を取り水にてよく洗ひ、水を去り、前に醤油につけ置きし切身を蕗の葉にて程よくつゝみ、火にかけて氣長く燒くなり、右は風味よろしく魚は鯛に限らず何魚にてもよし。

△鯥のたまり燒　先むつを三枚におろし、其身を適宜の大きさにて庖丁し別に生醤油に少しく粒味噌を加へしものをつくり、これを切身にまぶし、二三時間おきて金串四五本をうち、水をそゝぎかけて味噌を除き燒くべし但し燒き上りまでに兩三回生醤油をそゝぎかくべし。

△鯖鹽出鱠　新らしき鯖を三枚におろし薄鹽をふりかけ、桶にならべ、重石をなし其上に押石を置き、十分に押されて堅くなりたる切身を刺身のごとく皿に盛り、卸し生姜酢、又は芥子柚子の酢をかけて食す、つけ合せには卸し大根、おろしわさび、千切獨活、かつらむき大根、海苔など見計ふべし。

△湯煮鱈　まづ鹽鱈を三枚におろし、薄肉をへぎ皮をひき、水に充分つけ置き、よく鹽氣をぬき、七分ほどの骰形に切り置き、食する時は恰も湯豆腐のごとく、これを沸騰湯の中へ投じ、火の通るを待ち網杓子にて掬ひ、

ればならぬ。

△眼鏡の撰び方

次にどんな眼鏡でもこれを掛ける時は、其の容貌が何となくきつく見へるもので殊に妙齢の婦人などは最も人目を惹くものですから、特別の眼病あるものでも必要のない時はなるべく掛けぬやうにせねばならぬ、而して眼鏡は専門家の診察を待つて適當なものを撰び決して素人の任意にしてはならぬものである。

紹介

▲姙産婦の心得　醫學博士　緒方正規述

この書は産科婦人科の名醫緒方博士が姙産に對する一般の衛生を說述されたるものにて受胎の始めより分娩に至るまで正規の産事に對する心得、異常の姙産に對する衛生法、流産、早産、の手當其外姙産に伴ふて起る諸種の病氣の豫防等あらゆる産婦の心得となるべき事柄を平易切實に說きたるものにて家庭衛生上欠くべからざる良書なり（定價三十八錢）（博文館發行）

皿に盛り、其上より山葵醤油をかけ、みぢん切の葱を添へ熱き内に食すべし。

△貝柱のおろしあへ　貝の柱を目笊に入れ一と鹽あて、笊のまゝで俎の上に置き柱より泡の出るまで笊を振り動かして笊を水の中へさし入れ振り動かしてよく洗ひ、水を切り一寸鹽酢の中へ漬け置き、酢を切り、これをおろし大根にてあへ、みぢん切の生姜を添へて出すなり、さておろし大根は大根の皮をむき、頭の方よりおろし金にておろし、少しく食鹽を加へよくませて布巾につゝみ、輕く搾りて更に生酢につけ再び布巾につゝみて搾り煮つめたる味淋を加へ白砂糖にて少しく味をつくるなり。

△蓮根の粉がらしあへ　まづ蓮根の皮を去り、一分位の輪切にし、ざつと湯煮して水をきり置き、葛粉に少々砂糖を加へ、水にてどろ〳〵にとき置きさて鍋に油をひき文火にかけて前の蓮根を入れよくまぜ、次に葛粉のときたるを入れ、十分間ばかり焦げつかぬ様によくませ鍋をおろすなり、さめたる時鉢にうつし、粉唐がらしを醤油にてときたるを入れまぜて用ふ。

△海鼠の二杯酢　まづなまこの疣を切り削ぎ、両端の口を切り捨て二枚にはがし、水にて洗ひ小口より一分ほどの厚さに切り、目笊に入れ、よく洗ひ、水を切り、又鹽酢にて洗ひ、目笊にあげ置きて後皿に盛り、食する時二杯酢をかくるべし。

皇后陛下の御日常

陛下は每朝七時前後に御起床、御化粧を了らせられて後、御洋裝に改めさせたまひ、入時頃御朝餐を召され、御居間に於て內廷の何くれを聞し召さる、夫れより午前中は桐の間に於て外國使臣に謁を給はり、內謁見所に於て各皇族同妃殿下に謁を給はり、御晝餐は多く主上陛下と御食卓を共にせられ、午後は內苑の御運動、御詠歌等を遊ばされ、夜は主上陛下と御對談あらせらるるか、又は御讀書、御咏歌などを遊ばされ、午後十一時頃御寢に就かせ給ふ、御服裝は朝夕多くは洋服にましませど日本服を召させらるゝ時は、夏冬を通じて羽二重の白色をのみ召させたまひ、御肌着は、白フランネルの御襯衣を召したまふ、御食事は朝はパンと牛乳、紅茶に限り、御晝食、御晩食は共に日本食にて、鯛、鮎などの副食物を召さる、洋食は絕て召させられざるよし承はる、御嗜好は興津鯛の飴煮と、白魚にて、御菓子は白隱元もて作りし蓬が島と云へるものなりと、(御料の御箸は柳の丸細にて其

△鹽鮭のバタ料理　まづ鹽鮭を薄く大きく刺身の樣にそぎ、バタを塗りつけ、金網にてあぶり皿に三切位盛り、あしらへには三ツ葉又は芹、萵苣など、少々添へソース或は橙酢などをかけて食すべし。

△鮪のてり燒　まぐろの肉を適宜の切身となしこれを生醤油につけ置きて後ち、取出し金串をうち、布巾を以て切身の醤油を輕く拭ひ取り、鐵架にかけ渡して炙るべし、但し燒き上り迄に二三回生醤油をかけて燒くべし。

△鷄卵豆腐　まづ鷄卵をほぐしこれに其量の二倍ほどの煮出汁と凡そほぐし玉子の三分の一ほどの生醤油を加へ、よく交せてこれを薄手の丼鉢に入れ又これを蒸籠の中へ入れ（蒸籠の代りに釜を代用す）蒸籠の蓋を五分ほどあけ、三四十分間文火にてむして蒸籠より取り出し豆腐を金杓子にて一と掬ひづゝ切り取り椀に盛り、而して汁を注ぎ、卸し山葵を添へてすゝむるなり。

△梅花鷄卵　これは正月の口取などによきものなり、まづ鷄卵を微温湯から茹で、（ゆでる時間は十二三分間ばかり）其殼をはがし、冷めざるうちに布巾をのべ、其端の方へ鷄卵を竪に三つならべ、其布巾の端より卷きこみ、兩端を糸にてくゝり、太き丸箸五本を竪に此布巾の外に同じ距離に配りあて、糸にて箸を三ヶ所に堅くしばり、暫らく置きて、布巾より取出し、鷄卵の兩端を少しく切り落し三つほどの小口切になすべし、又別に食紅を

兩端を細く削りあり）御入浴所は御一方に一個づゝ設けありて、形は丸形にて檜を用ひ、眞鍮の桁を本磨きになしあり、中に御腰掛の設けあり、湯は別に沸して入るなり、御浴は玉體の御都合にて午前に召させる事もあり、午後に召させらるゝ事もあり、寒中には御寢前に鹽湯を取らせらるゝ事もありと。

陛下の御智識の高うましますことは大空の測り知るべき極みなきが如くにおはします、殊に和歌の道に秀でさせ給ふて、其の御詠草は數萬首に餘れるが、萬づ謙讓を旨とし給へば臣下には示させ給はず、只だ高崎御歌所長に仰せて折節の御詠を拜見の事仕らせ給ふのみ、假初の御遊びと申す御歌なんどにすら、然なり、況してや際立てる御儀どもに於けるをや、只だ總てに女子らしかれと仰せて稜ある御振舞などつゆおはしまさぬが、智德の御光りは自から御威儀の上に顯はれて、戒飭の御言など承はるとも候はで、人々は一向に身を愼み、行を正め和同して勤勞み仕へまつるとなん、殊に內外の御交際には圓熟の御待遇いみじくましまして、各國皇后の御方々には駐在の公使をもて御訪問の事斷えず仰せ聞えさせ

水にて溶き、これを煮立てゝ其汁の中へ殘る半數の卵を入れ鍋とゝもに振りうごかし、薄紅色に染めて取出し、水にてよく洗ひ、更に沸騰湯の中へ投じ温め、布巾につゝみ前のごとくして紅梅をつくり、紅白梅花を一つづゝ取り揃へて皿に盛るなり。

△親芋の胡麻味噌かけ　まづ中位の八ッ頭芋十個ほどを撰み、よく洗ひ、瘤を切り落し、皮をむき、蔕をのぞき七分ほどの厚さに切り、更に水にて洗ひ、蒸籠に入れ、とゞの出來るまで蒸し、それを澤山のだし汁へ少しの醬油を加へたる汁にて薄加減に煮ふくめ、椀に盛り、黒胡麻味噌をかけて食す、猶黒胡麻味噌のこしらへ方はまづ黒胡麻二合をあらひ、篩の裏又は布巾の上へ乾して水氣をきり、焙爐にて煎り、摺鉢にて油の出るまでよく摺り、これに胡桃五粒、並味噌百目を加へ摺りませ、猶味淋の煮切一合半と白砂糖少しを加へて摺りませ、毛ぶるひにて裏ごしをなして鍋に入れ、文火にかけてざつと煮るべし、若し固き時はこれに煮出汁を加へゆるめるべし、右の分量は十五人前の積りなり。

△鰡の丸鮨　鰡の新らしきを脊開きにして骨と眼玉を除き、小骨は毛抜でぬき、よく洗ひ酢に鹽を少々入れ浸して置き、さて飯を炊きて酢に鹽砂糖をよきほどに入れ、よく／＼まぜて冷まし其飯を握り鰡にはらませ、切溜につめ暫く壓し置き八分位の厚さに切りて出すなり。

給ふと承はる、總して此も綺麗を貴ぶ世の態に習はせ給ふなどの御事には在まさず、偏に四海同胞の義によりて此國と此民と安かれと思す御心に出でさせ給ふなる、御歌に

四方の海みなはらからと睦ひなは
世に波風はたゝしとそ思ふ

又左右に仕へまつる人の時として過ちあれど、故意にせる罪ならざる限りは以後、慎むべき由の御沙汰のみにて別に御叱責ありつる事なし、況して御聲高く物を仰せられし事なく、若し出仕の男女些かにても變りたる顔色あれば、如何せしと問はせ給ふには皆なく〳〵忝けさに涙を催すよしに承はる。

以上の御徳を仰ぎて世の女子達は己が鑑みとなし此の新らしき年の首より自から省み給ひかし。

御歌のかず〳〵

陛下の御歌中承はるまゝを記す。

風光日々新

しきしまや正しきみちの春かせは
きのふにけふと世に長閑なり

新年風道

あらたまる年の光りによろつたみ
いよ〳〵みかけあめつちの道

△白身吸物　まづ玉子の白身三つ以上を丼に入れ箸を四五本一緒にもちてよくかきまはし、味淋と醤油を少し入れ混ぜ、それを汁の煮立ちたる中へ落し入れ、ざつと煮立てるなり。

△牛蒡の酢あへ　まづ牛蒡の皮をそげ、水に放ち置きてアクを抜き、鍋に入るゝほどの長さに切り鍋に入れ、水たつぷりと米の糠少々とを加へ、柔らかに茹でこれをあげ置き、擂子木にてたゝき、これを揃へて両端と中央とを竹の皮にてくゝり、更に鍋の中へ敷笊をしきて其上に前の牛蒡をかぶるほどの煮出汁と味淋と白砂糖とを加へ暫く煮たる後生醤油を加へて煮あげ一寸五分ほどの長さに切りこれに白胡麻酢をかけるなり。

支那風の野菜料理

△菜包　これは精進の東坡煮のやうなものなり、まづ大根、牛蒡、栗、椎茸、麩などを骰子形に切り、青菜を細かに刻み右の七種を量にして一升ほどならば胡麻の油七勺ばかり沸騰させ、最初大根、牛蒡、青菜を投じてよくいりつけ、次に椎茸、油揚、豆腐、麩、栗等を加へよくかきまわして醤油にて味をつけ、其の熟するを待ち、別にメリケン粉に水を加へて捏ね、板の上にのばして圓形に打抜き、其中へ右の材料を包みこみ、花形につく

迎年言志
はつくになしらしゝ御代の姿にもたちかへりたる年のゆたけき

都鄙迎年
ひなみやこむかふる年の長閑けさに知らす／＼もうたふ御代かな

新年富山
ゆたかなる年の光りにそへにけり雪をときはの富士のしはやま

松不改色
君と臣のこゝろの色にうつさはやいつしかはらぬ松のみとりを

鶯入新年詞
まつりことおこたらぬ世と鶯も年のはつねをいそくなるらむ

新年祝言
日のみはた高く揚けてくにたみのあふくや年のひかりなるらむ

盤上鶴鳴
いつくしみ廣きみ國にすむたつはもとのさはへは慕はさるらむ

竹有佳色
すめらきの千代をいはひしの吳竹はもとすゑおなしみとりなりけり

河水久澄

り、蒸籠にて蒸すなり。

△養老　これは牛蒡の皮を去り、一寸ほどに切り、油にて煎りつけ、醬油を少し加へて味をつけ、摺りたる胡麻と砂糖とを加へたるなり。

△酢菜　これは牛蒡、胡蘿蔔、三つ葉を針形に切り、麩を細かく切りませ、水煮をなし、酢と醬油とを合せてよく沸騰したる中に投じ煮たるもの。

△干筍　これは乾したる筍を二三日、間水に浸し、これを水煮して後ち取出し、更に水二三回かへて煠で、短冊形に切り、油にてあげ、醬油にて味をつけたるものあり。

△油餅　これは餅を油にてあげたるもの砂糖又は鹽をかけて食す。

△麻糬　これは餅を水煮して黑胡麻を煎りて細かに摺り、砂糖を交せて右の餅にまぶしたるもの。

△豆腐糟　豆腐三丁ほどの量に胡麻油三四合を沸騰せしめてよく煎りつけ醬油にて味をつけ、山椒の實を添へたるもの。

△豆芽菜　これは赤豆、若しくは豌元などを桶に入れて水を注ぎ、後ち其水を去り、桶の上に藁の蓋をなし、溫氣を加へ暖きところに置き、（室の中へ入れるもよし）蒔芽につくり、後ちこれを胡麻油にて煎りつけ、醬油にて味をつけたるものなり。

△梅甘　これは梅干の皮と核を去り、肉のみに氷砂糖を加へてよく摺りま

あまつ日のてらさんかぎり神風や
　みもすそがはの末はにごらし

四海靜

おほやしまみうつくしみの廣き世は
　波のちさともとなりなりけり

晴天鶴

あふぎみるあまひまはゆき大空に
　たつかれ高くきこゑけるかな

雪中早梅

つかさ人君をことほくおほにはに
　ゆきまの梅もさきそめにけり

緑竹年久

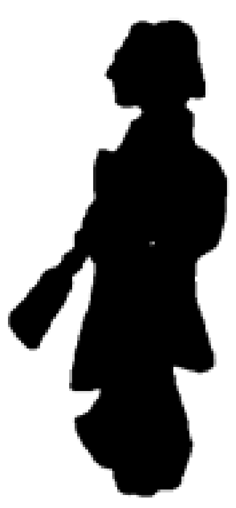
年々にみどりそひゆくくれたけの
　かげこそ御代のすがたなりけれ

池水浪靜

のどかなるとしやたつらむ大庭の
　御池のきしによるなみもなし

雪裡松

ふる雪をしのぎてたてる松にこそ
　千年へぬべきかげは見えけれ



せ、蓮根又は梨子をあへたるものなり、

△卷纎　これは大根、牛蒡、栗等を纎にうち、推茸、麸を細切にし、青菜をこまぐに刻み、豆腐一丁を十二に切り、油にてあげ、又一片を二枚にへぎ、又細かく切りて右の七種を合せ、其量一升に胡麻の油を七八勺ばかり煮立たせ、まづ大根牛蒡青菜を入れてよく煎り、次に推茸、麸、豆腐、栗を入れ、これを醬油にて味をつけ、取り出して豆腐の皮を入れ其まゝ引あげ、打ひろげて其中へ右の材料を卷込み、其留口に葛粉を塗りつけ、更に油にてあげ、厚さ六七分ばかりに切り、卷纎酢をかけて食す。

△豆腐干　これは豆腐を布袋に入れ、壓して水氣を去り、固くして其まゝ醬油にていりつけ、これを巾一寸四方、厚さ三四分ほどに切り、油にて揚げたるもの。

△山藥卷　これは山の芋をおろし葛粉を加へ擂鉢にて擂りまぜ、團子の形につくり、油にて揚げ、醬油にて煮たるものなり。

△煎菜　これは青菜を一寸ばかりに切り、其分量一升ほどに胡麻の油二勺ほどを沸騰させ其中にて煎りつけ醬油にて味をつけたるものなり。



家庭衛生

分娩期の算定法

妊娠の期日を算定するには俗間では月經が閉止してから十ヶ月後といふ風に取つてゐるやうであるが、こは、甚だ不確實なもので決して當にはならぬものである、併し生理學上では遙かに確實なる算定法がある、それはどうして檢するかといふに、

第一は最終の月經の起始から九月と七日を加へた時が即ち分娩の期日である、例へば本年一月二十日に月經が閉止まつたとすると、これに九ヶ月と七日を加へると十月の廿七日となる、丁度二百八十日目で、即ち分娩の期日である。

第二は月經の終末から、後三ヶ月を引去り、それに七日を加へたものである、例へば二月二十日に月經が閉止つたとすると二月、一月、十二月を、引去り即ち十一月の二十日となる、これに七日を加へたならば十一月の二十七日となつて、やがてこれが二百八十日目の分娩期日なのである。

第三は胎動期即ち子宮内に於ける胎兒の運動によつて知る事が出來るのである、それは始めて胎動を感じた月から二十週目が分娩期といふのであるが、この方法は最も馴れた經驗ある産婦でなければ一寸算定し難い方法である、それも初産婦などは胎動とはどんなもんであるかといふ事を理解しないから、何時胎動を感じたかといふ事を記憶するのが困難である。

さて以上の如き算定法で分娩の期日を定める時は縦し一二日の差はあつても、決して一週間以上の差はないものと心得てよいのである、又この分娩の日を反對に計算する時は、受胎した日限を知る事が出來るのであ

るから、世間に隨分例の多い私生兒や、其他何かに就て受胎の時日を明瞭に測知するの方便として最も捷徑のものである。

姙婦の健康診斷

我國では往々分娩期日まで少しも醫師や產婆に診斷を乞はないものもあるが、これは誠に惜しむべき事である、勿論姙娠をしても必らず難產するわけでもなければ又必らずしも安產と限つたものでもないが、いづれにしても診察をして貰ふのが第一の攝生法である、この姙娠の鑑定法といふのは容易なやうで其實なかなかむづかしいもので、產科專門家の診斷でも稀には誤ることがある位である、それ故姙娠したと思ふ時はその母親の身體の檢査は勿論、姙娠の有無、乃至は其の通常姙娠であるか、又異常娠であるかといふ事を鑑定して貰ふのが必要である、彼の歐米諸國では、姙娠の時は勿論、分娩の時にも必らず醫師を招くといふ風習がある、これは一つは彼國では分娩が容易ならぬからでもあらうが、遉がに文明國だけに最もよい習慣である。

殊に初ての產婦とか又は、晩年の初產婦などは是非醫師の診察を請はなければならぬ、それから又黴毒とか、或は骨盤の狹隘症とか、又は他の疾病があつて、臨月に至つて難產となつたり、若しくは死胎兒を分娩するがごときことも、婦人科專門の鑑定によつて死胎の發育と骨盤の大小とを比較して九ヶ月或は九ヶ月半に於て人工で分娩せしめ、また斯樣な早產兒も善良なる養育法によつて殆んど滿月で產れた小兒と同樣に發育さする事が出來るのである、それから又如何に骨盤が小さくても腹壁截開術を施して分娩せしめ、母子共に少しの危險もなく、これを救助し得ることが出來るのである、或は又近來は骨盤の骨を切開してこれを出すことさへも出來て產科の發達は實に驚嘆すべき程度に達してゐるのであるからどんなに骨盤の小さい婦人でも、またどれほど大きい小兒でも少しも憂ふことなく安產せしめることが出來るのであるから姙婦はなる

べく専門家の診斷を受くる樣にせねばならぬ、それかといつて、どんな分娩でも必らず專門の醫師を招くといふことは、あまり馬鹿正直なやうでもあるから、產し當り學術もあり經驗もある確實な良產婆に依賴して置くやうにしたいものである。

　序に一寸申して置きたいのは、我國では產の爲めに生命を奪はるゝものが一ヶ年に凡そ四千人もあるさうで死兒の統計は約十五萬といふ事です又產の爲めに病弱の身となつて餘命を短縮するものは十五六萬の大多數であるといふ必竟これは產婦の不攝生に因ることは勿論であるが又その所天たるものゝ無智なるも大いに原因ある事であるから今後は家庭の衛生智識を博めて產婦は產兒の健康に異狀のないやうにしたいものである。

哺乳兒の衛生

　生れたての小兒を養ふ營養品の內で、一番よいのは母乳である、外國では社交術の發達してゐる爲めと職業問題の爲めに母が自分の子供を育て上げる事が少く隨つて乳母や、乳牛によつて養ふ方が多い、日本では幸に古來概ね母乳で育るのが普通で、これは誠によい事である、第一人情の上からいつても母が子に對する愛情上至當の事であるが、實際上母の乳で育てゝゐる小兒には病氣が少く、牛乳其他の人工營養品で育てられてゐる小兒には消化不良の病が非常に多いのは醫家の實驗上爭はれぬ數であるそうな。

△母乳と牛乳の比較

　そこで母乳と牛乳とを比較して見ると、まづ母乳の方は母の體內から乳首を取つて直ぐに小兒の口に入れるのであるから、母の身體に病氣其他の異りがなく、乳首も清潔で、小兒の口腔も清潔である限りは小兒の胃に入るまでに非常な有毒な黴菌などが混じる恐れが誠に少いのである、これに反して牛乳の方は牛の乳房を出てから小兒の口に這入るまでの途が誠とに長く、隨つて有害なものが此間に乳の中に這入る危險が比較的多い、まづ牛の住んで居る牛小屋の如きは決して清

潔なものではない、いかに清潔にしても元來が動物の事であるから其所に大小便もすれば、これを人乳の清潔さと比べたらば、雲泥の差があると言はねばならぬ。

△牛乳の利害

されば如何に清潔にしやうとしても清潔にされない、所ろで搾つた牛乳であるから、其内に若惡いものでも混じつてはいけない、またまじり易いために、どの牛乳屋でも搾り取つた乳を直ちに



煮沸する、煮沸して中にある惡い毒物を煮殺ろして仕舞ふ、それだけは一寸人乳と相違がやるやうだが、それから瓶へつめたり、運搬したり、時間も非常に立ち、種々の變遷を經て小兒の口の中へ參るので、其間にもし少しでも惡い所でもあると元來が腐敗し易い乳の事であるから營養品どころか却つて危險な有害なものとなつてしまふのである。これが單に成分の上からでばかしでなく人乳の

牛乳に勝つて居る所ろである

乍併こゝに牛乳の一德として母乳の使用の出來ない時の必要を申すと、第一母親が病氣にかゝつた時、或は元來虚弱な體格の時、また其他の故障例へば旅行して不在の時などには之に代はるものがないと直ちに大不便を感ずる、こんな時牛乳より外に母乳の代理をするものはない。

△授乳の心得

授乳に就ての注意の一斑をいふと、第一に時間を定める事である、これは小兒を育てる上に就て殊に必要な事柄である、まづ極小い、即ち生後二三ヶ月までの間は三時間毎に飮ませ、少しく大きくなつた小兒には二時間をき、又は二時間半をき位に與へる樣にする、初めの内は馴れぬから小兒が泣くけれども、一日其の習慣をつけると慣れてしまつて、却つて時間が來なければ飮まぬ樣になるものである、殊に夜分は哺乳の時間を永くして、せい〴〵二回位に止めて置く方がよい、始めの内は少し位骨が折るも終には樂になるものである。

△其　二

乳の飮ませ方は初めて產をした方にはなか〳〵むづかしい事で充分の忍耐と注意とをせねばなりませぬ。第一乳首は直接に小兒の口中に入るものであるから極めて淸潔にして置かねばならぬ、哺乳せしむる前には常に淸潔な水、アルコール等で拭き、母親の指も又淸潔に洗はなければならぬ。

最初小兒に乳を飮せるには母親に別段病氣がなく、又他に故障のない限りは產後十二時、晩くも二十四時間たつと、始めて乳が出て來るから哺乳を始める、この際注意すべきは、初生兒の鼻を乳房の爲めにをしつけて窒息させない樣に、指で注意しなければならぬ。

△其　三

一回の哺乳時間は强壯な小兒で七分から十分、弱い子は十分から十二分かゝり、まるで蛭に血を吸はせた時のやうに飮み飽きれば自然とやめて、睡るものであるが小兒が吐乳する時などは此時間を縮めて何度にも

やつた方がよい。

△乳兒と睡眠

嬰兒に乳を飮ませて仕舞ふと其子が健康である限り直ぐに寢てしまふ、此の睡眠、生れたては夜る晝の差別なく、乳をのむ時の外はすや／＼と眠つて仕舞ふ、この睡眠は赤兒に取つて極めて必要な事で、それが腦髓の發育をよくし、胃の消化をすゝめるものであるから、乳を呑ませてしまつたらば、元の樣に臥床の中へ横にするのがよい、大人ならば食後の運動なども必要だらうが赤兒に限つてこの運動は不必要であるのみならず、却つてよろしくない、彼の哺乳後に抱きかゝへて戸外へ出たり、またはゆすぶつたりして乳を嘔かせる事がある、これは身體の發育を妨げるのみならず腦膜炎などの原因になる事があるから、哺乳後には靜かに臥かせるのに限る併しこの睡眠時間も年齢に應じて一槪にはいはれぬが、まづ大概生後一年の終りには平均十六時間位、二年の終りには十二時間位となつてゐる。

△乳兒の健康診斷

小兒の診斷上即ち健康と不健康を檢るに大小便を檢査する事は今日の醫學上最も必要な事となつてゐる、これは母親の大いに注意すべき事柄である、まづ大便の方は其色と分量と、一日の回數、水分の有無、大便内の顆粒と粘液とが含まれてゐるや否やを注意する事が肝要である、即ち、通常の母乳で育つてゐる小兒の便は卵子の半熟のやうに黄色であるが、身體の工合の惡い時には白くなつたり、綠色になつたりする、また臭みも平常のには殆んどないが、病氣の時には非常に臭氣を放つから其臭氣の有無と、水分の有無とをよく注意して居り、又顆粒と粘液これは平常の健全な小兒の大便にはないものであるが、少し腸胃の疾患にかゝり、消化のわるい時には大便の中に必らず顯はれて來るものである、そして粘液は丁度水飴か、鼻汁のやうなもので、是等の有無は診斷を受ける際極めて必要な事であるから母親は常に怠らず注意して居らねばならぬ。

△其 二

又小便の方も其回數と量と色丈は注意せねばならぬ、尤も量はとても十分には分らぬが、回數はそしめを取かへる回數で分るものである、色も其際に注意すればよい、病氣の種類によつては小便の回數も量も減じてゐるものがある、色が變化するのは重い病氣の證據である。

すべて是等の事柄は平素子に對して慈愛深き母親が注意し觀察すべき事で決して乳母や子守などに任すべきものでないのみならず、醫師に診斷を受ける時などは平素保育の方法から從來の狀況、病氣にかゝつてから後の狀況其他を悉く知つて居て、醫師に十二分の說明を與へる事は嬰兒を診斷せしむる上に非常に必要な事で、又これが母たるものゝ平素の義務であると言はねばならぬ。

百日咳の手當

百日咳といふのは專ら小兒の氣道粘膜を犯して發作性に激しき咳を發する病で、都會の地には割合に多く時としては流行病として現はれる事もある殊に麻疹の次に流行することがある傳染性のものであるから一家の小兒が皆舉つてこれに罹ることがある、又幼稚園など小供の群集する處など殊に流行の媒をなすものである、この病氣は概ね五六歲までの小供の犯さるゝこと最も多く年を取つたものは少いのが普通である。

百日咳の始めはカタル期といつて氣管や氣管支のカタルを起し、咳が出て、晩方になると熱が三十九度から四十度に上る、けれどもこの外に別段惡るい徵候を來さないものである、そしてこの時期には長短いろ〳〵あるけれども一週間から一週間半位の間にある、これから次第に第二期の痙攣期に移つる、同時に咳も次第に強くなつて遂に百日咳に特有な咳嗽の發作がつゞくやうになるのである。

そうしてその咳は長く息を引くのと交互に激しい咳をして痙攣が續くから、小兒は紫色になつたり、鼻血を出したり、嘔吐したり、甚だしいのになると目鼻

から血が出ることさへある、咳の出るのは病の輕重によつて一樣ではないがまづ一日に十四回から多いのになると四五十回もやることがある、重に晝間よりは夜分でその咳が出る前には呼吸が促ッたり、嘔吐たりする事がある、この病は一般に咳の發作る間の中間期は容態に別段變りはなく、小供によりては活潑に遊んで居るものである、隨ッてカタル期にあつた熱度も痙攣期に至つて無熱となるのである、若し高熱が續く時は、餘病を引き起すものであるから注意せねばならぬ。痙攣期の長さは大抵三四週間から三四個月に亘ることがある。

△併發症の注意

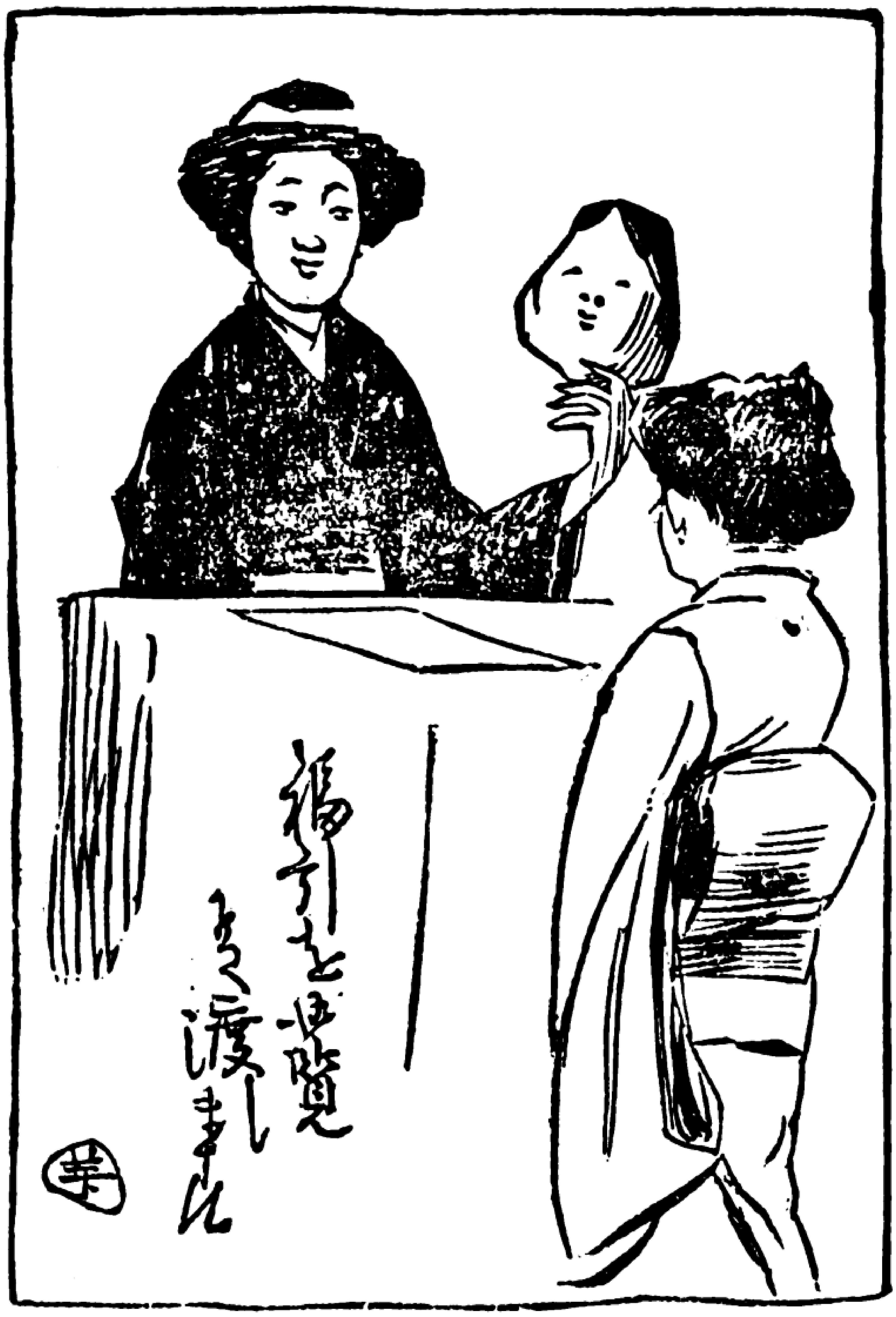
百日咳の併發病で最も大切なのは肺炎である、これを發した場合には呼吸が深く急速となり熱は高く、一般の容體が又不良で、或は呼吸つまり、或は全身の衰弱を來し、遂には不治に終ることがある、まづ百日咳で心配なのは肺炎である、其の頃に割合に多いのは下痢であるが、これも甚だしく營養を害するものである、又慢性氣管支の弱い小供はカタルになつたり、肺結核を發することもあるから油斷はならぬ。

△手當法

これはなるべく傳染を豫防するやうにせねばならぬ、即ち一人の子供がこれに罹つたらば、他の子供とは嚴重に隔離して置かねばならぬ、それから病の處置は一般の衛生法、營養法に注意して、殊に呼吸器に關するものであるから、清新な空氣を與ふることは最も大切な事である、そこで病室內は日當りよく、空氣の流通よき所を撰び、若し風もなく暖かな日は小兒が熱さへなかつたらば戸外をあるかせてもよい、併しあまり空氣の乾燥した時、雨風の吹く時などは斷じて不可い、又室內では火鉢に鍋などをかけて熾んに湯氣を立てゝ空氣の乾燥をふせぎ、又は濕布などをかけて置くもよい、そして咳を鎭むるには度々吸入器をかけて石炭酸溶液の蒸氣を吸入せしむるのがよいそれから又、服藥としてはキニーネ、アンチピリンなど用ひてよい。

小供の消化器病

子供の消化不良にはいろ〱特別な點があるが、急性の胃病中輕るいのは單に彼の物あたりより重いのは急性の胃加答兒に至るまで不消化物、食養、或は食過ぎの際に起るものである、又榮養の不規則な事（これは時間の不規律、分量の不等、及び授乳の度數等に定めなき事）にも大いに關係がある。



人乳で育てられる子供は乳房の不潔、裂傷並びに炎症、又は哺乳者の不快等が原因となる事がある、牛乳で育てられる子供は牛乳の性質（殺菌の不充分なるもの）等にも關係するが、大分大きくなりて這ひ又は歩み始めた小兒は落ちた食品を無意識に食べたり又は塵埃などを口中に入れるより忽ち消化作用の障害を起すものである、稍や成長した小兒には菓子や果物の過食から食傷を起すものである、尤も是れは小供の年齢や病

氣の輕重によつて相違はあるが、一般の徵候は食慾の減ずる事、舌に白苔の溜る事、口中から惡臭を放つ事、噯氣の出る事、又重い塲合には食物を吐いたり、腹が痛んだり、放屁をしたり、下痢をしたりする、そして此の際幼兒は泣き入つたり、又感覺が鈍くなツて來るのである、やゝ物心の付いた小供は身體が倦怠くなり、頭痛がして遊ぶのに懶くなるものである、尋常の食傷では少し位の發熱はあるが、眞の胃加答兒になつては口中に熱を發するものである、又三歳以下の小兒は消化されずして、胃中に停滯する食物の腐敗から一時全身の痙攣を起して正氣を失ふ事がある、便通も又乳兒にあつては常に變化するもので、始めの間は平常の黃色粥狀の便に變じてやゝ堅い綠灰色の糞を排泄し、次第に薄い液狀となり、且つ益々惡臭を放ちて眞の下痢となるのである、すべて是等の障害は小兒には屢々起るものであるけれども決して輕く視てはならぬ、故に此の際、殊に食物の撰擇を嚴重にし且つ食べさせる分量や時間に注意しなくてはならぬ。

右の手當は子供の年齡によつて相違はあるがまづ乳兒ならば早く胃の洗滌を行つて速やかに不消化物の殘餘を除去ねばならぬ、其緩下劑としては蓖麻子油、甘汞、及び大黃チンキ等などがよろしい、次に最も大切なのは嚴しく食物に注意しなければならぬ、又牛乳で育てる小兒が胃病にかゝつたらば直ぐに牛乳を廢めさせて唯稀湯ばかりを與へて置き舌の苔も直り、便通も常に復するをまちて牛乳を與へ、始めは少しづゝより次第に其量を增すやうにするがよい、乳放れをした小兒でも暫らく粥ばかり與ふるのがよろしい、又この際には喉の乾くものであるから赤葡萄酒を加へた水などを少しづゝ與ふるもよろしい若し慢性になつた時にはそれぐ\適宜な食養生法を守らせねばならぬ。

小兒の胃擴張

これは小兒の發育に大切な關係があるもので、營養法の不適當から起るものである、牛乳で育てる子供は吸乳器の吸ひ口の穴の大きい處ろから一時多量の牛乳

を飲みこむ爲めに起るものである、又中には乳を與へる時に乳兒の飲む分量を不注意にしたり又は小兒の食食症のをも知らずに唯泣く子をすかそうとして吸口の穴を大きくしたり、又一時に子供を成長せしめやうとして、多量の食物を與ふる等から起るものであるから、よく氣をつけなくてはならぬ、されど胃擴張は急激に起るものではない、乳兒が多量の乳を呑んで戻すやうなことが度々に及ぶ時は遂に胃の力を弱めるものである、既に胃の力が弱くなれば食物は自然胃中に滯ッて腐敗し、遂には嘔吐がつゝいて身體が次第に瘠せて來る、又稍や成長した小兒でも其狀況は粗々同樣であるが原因は食物を十分に嚙まずして嚥下したり、又は不消化物や或は砂糖氣のものや芋などを多量に食したり、乃至は間食を食ぼる事などより來るものである、其手當は前述のごとく、胃の掃除をした上極めて消化し易い營養物を撰み、食事と食事との間は少くも四時間位隔てをして又毎日一定の時に胃の洗滌を行へば治療を速めるものである。

腸チブスの手當

△原因と傳染

一體これはチブス扞菌といつて有機物が人の腸の中に出來て、激しい毒のある排泄物を出して、それが原因となつて種々な病症を呈するのである、而して其傳染は何からであるかといふに、土地からの事もあれば飲料水からの事もある、併し一度チブスに罹つた人は大抵二度と感染しないやうです、年齡は大抵十五六歲から二十五六までゝ一體に若い者に多い。

△症狀

初まりは身體中だるく、食慾が少しもなく、頭痛がして、一回又は四五回ゾット惡寒がして、それに熱が出る、それから一週間目には頭痛が激しくなり、咽喉が非常に渴き、熱は漸々增し舌は乾きて苔が出來、脈はつよくなり、鼻血は出、便通がなくなり、脾臟が少し腫れ出します、それから二週間目になると熱は止まるが病症は益々重くなッて一方で精神はぼんやり

してしまひ、時々ウハゴトを言ひ、氣管支炎を起し、腹はゴポ／＼鳴り、黃色い豌豆位の下痢をして、腹に澤山の細い藍紅色のふきでものが現る、三週間目には經過さいよくば熱も解れ恢復期に向ふ、惡くすると此の病氣は氣管支カタル、肺炎、耳下腺炎などを併發する事がある。

△營　養　法

輕い症ならば大抵二十日か二十五日位である、重症は五六週間、一體に恢復は緩慢であるからこの病氣は專ら營養法が肝要である、若し營養法を誤り怠ると輕症も變じて重症となり、死に至る事もある、故に看護は最も注意して猥りに病人に食物などを與へてはよろしくない。

△飮　料

病人に與る飮料は清潔な氷か、又は赤葡萄酒、（水百に葡萄酒三乃至五分の割合）を混ぜた冷水、さもなければオモ湯がよい、下痢を起さない時は蜜柑の汁など與へてもよろしい、病氣の始めには滋養分のある牛乳など與へるもよい、五日目頃から消化力非常に衰へた時には粥の上汁四分に牛乳一分とを混ぜたものを與るがよい、八日目頃からソップを小さな茶呑に一杯、一日に三度位與へるのもよい、二週間の初めから冷水を廢して赤葡萄酒を一日に三四回（一日分百グラム）やる、漸々熱が解れるに隨つて玉子の黃味、粥汁、牛乳などを與へてもよい、爰に大に注意すべきは、タトエ熱が解れてしまつて平常のやうになり、食慾が進んで來ても決して固まつた食物を與へてはならぬ、早く固體の食物（即ち飯やパンや野菜肉類）など與へると再び熱が出て下痢を起し、事によると腸出血などを起して大變になる事がある。そして病室は常に新らしい空氣を入れ、寢床を清潔に且つ柔かにし、人と面會を避け病人には精神を安靜にさせて健康に復したら直ぐ轉地療養するが一番よいのである。

生存競爭の圈外にある 別天地

韓山野客

文明世界の生存上の必要から來た競爭や、社交的向上心の必要上から來た刺激や、乃至は單に煩雜なる都會的生活の影響からして過多に心神を消耗せしめたる人々の爲めにこゝによい隱れ家（少々語弊はあれど）を紹介致そう、併し隱れ家といつても決して想像する樣な理想的の完全なる美的世界ではない、唯日本の勢力範圍であつて、當分と言ひたいが、こゝ三四十年間は文明の空氣の一寸這入らない極めてのん氣な、且つそれだけ、野蠻でもあるが、又太古的な悠長にして曆日なしの國土がある。といつて見れば一寸異樣で趣味もありそうだが其實、あまり、感服はされないかも知れぬ、波一つ彼方の朝鮮の內地である。そこでまづ其のあまり感服されない方から言へば、土地固有の衣食住である。

△茅屋的家屋

韓國の物質的文明に就て衣食住の三つを比較したらば衣服が一番文明の域に達して居て、これは寧ろ日本以上といつてもよろしい、が其の反對に住居が一番野蠻である、まづ相當な程度と見られるのは食物である、そこで一番野蠻の外形を備へて居る住居に就て見るに、其の程度はアイノ人の家と相距ること遠からざるものである。都鄙一體（京城のごとき大都會の中心街路は別として）に茅屋である、そして其軒は極めて低く其の外觀は極めて陋穢なるもので、一見豚小屋的である。蠻的である。そして其の部屋は四角又は長方形で大概四疊敷か廣くて八疊敷位のもの、室內の裝飾といふものは殆んどなく、疊の代りに呉蓙を敷く位なものである、それ故旅人が宿泊するに就ても我國の旅館のやうなものは更にない、朝鮮の旅舍は彼の所謂酒幕と唱へる飲食店である、宿泊せんと欲するものは、まづその飯屋に就て夕飯を喫べた後、各々設けの一座

に集つて旅客互に雜居寢をするのである、さてそれには寢具といふ樣なものもなければ、寒い時には溫突といつて床の下を溫むる裝置があるばかりで銘々着のみ着のまゝで其所へ木の丸太を枕として一夜を明かすのである、故に旅中の疲れを慰むるといふ事は出來ない、夜が明ければ其儘其所を出立する仕組であるから夕飯の外に宿泊料といふものを要さない、韓國の風俗は大抵支那と似て居て、日に二食であるから、朝出立の際宿舍で飯を食はず、三里なり五里なり歩いて十時頃に朝飯を適宜な飲食店で認むるといふ簡單なるものである。飯食料は通例一飯が一貫文(十錢)位である。

△簡易なる庖厨

食物は住居の陋穢なるに比較して割合に進歩したものであるが、矢張まだ蠻的なるを免かれない、通常上流中流の社會は米を常食とするけれども下等社會は稗、粟等の雜穀である、更に下等社會に至つては夏季中は胡瓜を常食として居るのもある。其價は一本二三錢である、飯は眞鍮の椀に山盛にしたのを一杯切りで、盛方は却々巧妙であるけれども杓子なく手盛にするのである、菜は重に明太魚と稱する干鱈で、それに牛肉、豆腐、豆の芽し等である、又韓人は辛いものを嗜好する人種で、唐辛子、蒜、韮等を飯の上にふりかけて食べる、又漬物は日本と大差なけれども、押石をせぬのが多いから鹹くて食へない、又彼等が最も滋養とする處は例の牛の頭である、これは牛の頭を大鍋に入れて數日間煮出し、其汁をツップとして吸ひ、ツップを煮出した殼を引あげて米の粉などに交せて餅に燒いて食べるのである。牛は、皮と、角と、骨を除くの外は、一切彼等の腹を肥すの料で、臟腑でも、腦味噌でも、血でも一滴一片も殘さず之を食ひ盡すのである。殊に腦味噌は滋養分あるものとして牛の頭は貴重視されるのである、其外酒は濁酒を戸々で釀して飲む、臭氣あり、酸味ありて日本人の口には到底入らない、又味噌、麹なども造るけれどもいづれも其製法不完全、且つ不潔である、醬油は滷汁から採るもので、苦

味甚だしく、是れも又到底日本流に煮物などに使用されない。それから甘味の料としては砂糖の代りに蜂蜜を使ひ、菓子は飴菓子の外に蜜で固めた胡麻や豆のもやしボールのやうなものがある、其他野菜としては豆の發芽を油で煎りつけたものなど彼等の珍味とする處である、食器は四本脚の膳の上に眞鍮の椀をならべ、箸と匙とを供し、挾み且つ掬ひつゝ食ふのである。旅行者の談によると韓國中等社會の生活は一家五口を標準として二十圓もあれば十分だといふ事である、何故に斯く廉價で生活が、出來るかといふのにそれは專ら庖厨の材料が天然的であるからだといふ、即ち、醬油、砂糖、鰹節、酒、味噌のごとき、税金のかゝる贅澤物は無論、肉類でも、蔬菜でも、多く商人の手を經ずして生産者から直接に購買して生活し得らるゝ丈けそれだけ、文明程度が低いからである。



△流行を追はざる服裝

彼等の生活に比較して一番文明の域に進んで居るのは服裝であるがこの服裝は男女を通じて無地のものである、決して縞や模樣のあるものを用ひない、通例は白色であるが、中には赤、青、黄、其他の色を染拔いたものを用ふる、地質は上流社會では絹、を用ふるけれど

も中下の社會では一般に金巾、木綿である、夏は單衣、冬は綿入、而して其體裁は極めて高尚優美である、下等の勞働者を除くの外、商人でも、官吏でも、又貴族でも皆同じ制服で、階級に依つて服裝の差のある事などは日本人の眼には一寸わからない、頭髪は男は頂に小さく束ねた短かい釵を挿したのみで別に装飾はないが、女は後頭部に束ねて立派な花挿簪を用ひ、長さ七八寸もあり、又中流以上の婦人は外出の際は一般に被衣を覆る風俗である、履物は、一般に草鞋で雨天の時稀れに下駄のやうなものを穿つけれども概して雨少く土地が乾燥であるから、草鞋が常の履物である、これは日本の草鞋よりは更に手の籠つた製法で、多くは藁のしべで製つたものである、足には綿の這入つた深足袋を穿き、其上に草鞋を穿つのである、兎に角韓人の服裝は極めて高尚で且つ優美の感がある。蓋し韓人の財産といへば、唯この衣服身の廻りであらうが、何年經つても衣服に流行といふ事もないから、破れざる限りは文明國人の衣裳の樣に古くなつて世に棄てられるといふ事はない、これが彼等の經濟上の大利益である。

△日常生活の一斑

概して懶惰の風俗である、彼等の日常最も好む處は三尺以上ある長煙管を携へて知友相訪問し、長閑に雜話することである、直接に生活上の辛勞なき上中流社會では終日雜談、賭博、骨牌戯に日を暮らすのであるが、人に雇はれて賃錢を得る境界の勞働者は今日十錢を得れば十錢だけ食ひ、明日仕事なければ食はずにごろ／＼と野や山や川のほとりに牛馬の如く寢ころんで遊んで居る、又仕事あるも嚢中自から錢ある時は仕事に就くを厭ふて錢の無くなるまでは遊んで居る、故に韓人に錢を與ふるは却つて怠けさせるやうなものである、必竟貯蓄心など微塵もなく、其日暮らしの太古の民である。それ故極めて呑氣、悠長、山中暦日なしといふ有樣、世智辛い日本の都會生活に居て多年の神經衰弱に陷つた人などには或は好き療養地であるかも

知れない。斯る次第であるから随つて文明的の刺激より來る種々の病氣に犯されるといふ樣な事はない、一體が、野蠻で、衞生的の設備がないから弱い者は、幼少の内に死んで强い者が生殘るといふ自然淘汰を經て來て居るのであるから、體格一般に强壯で、醫者の厄介になる事が尠い。つまりよく天然に耐ゆるやうに出來て居る、偶に病人があれば多くは外科的の患者で、内臓の病氣は割合に少いのである。併しこれほど呑氣で競爭心がなく、外部の刺激がないから嘸ぞ皆が長命であるかといふのにこれは又衞生智識がないだけに人爲的に長命を工風しない故か七十歳以上の長命者は比較的少いのである。次に生活程度の低い事は驚くべきもので一日十五錢位あれば一家數口生活して行く者もある、そして文明の及ばぬ證據には夜中燈火といふものがなく、唯枯草を焚いて明を取るか、稀には牛の脂を燈す位に過ぎない、朝鮮の夜は眞の暗黒である。

△清潔の意味を知らぬ人種

韓人の間には入浴といふ身體清潔上の設備はない、夏季になると僅かに近邊の河水に浴する位なもので寒中になると更に風呂に入らない、其代り衣服の洗濯には却々まめである、生活に樂な境界の者で不斷汚點のついた着物を身につけて居るものはない。

けれども清潔好かといふと、これは又反對な事が極めて多い、第一尿水を不潔と思はぬ、一例を擧ぐると、井戸の水を汲む釣瓶を、放尿器の代用として平氣であるのみならず、尿器を頭に戴いて運ぶ際、面上に滴り落る尿水を拭ひもせず其まゝに飲食する事もあれば、座敷の眞中で客の居る前で放尿して恬として恥ぢないのは異風の甚だしいものである。且つ一般に廁といふものがないから放糞は往來道路の側、家の檐下、物の蔭、到る處に、散點して居るといふ蠻風には眉をひそめざるを得ない。そうかとおもへば、雨を恐るゝ事非常で、雨天には如何なる大事あるとも外出する事なく、陋屋に蟄居して雨の歇むのを待つて居る、それは衣服を濡らす事を命から二番目の一大事と心得て居る

からであらう。

△冬と夏、天産の潤澤

元來大陸の一部分で、潮流の影響を受けぬ土地であるから、夏と冬との氣候の差は甚だしい、冬は零度以下二十度の寒さは通例で迚も日本風の家の建築では凌がれない。そこで例の石室的の茅屋の中で溫突を焚いて凌いで居る、其の代り空氣が乾燥であるから、雪は尠く又寒冷の氣に犯されるといふ事も尠い、外出するには世話がなく、河も池も、田も沼も一面に凍りつめるから、何所を歩いても差支ない、それこそさつぱりとしたものである、隨つて又物が腐敗するといふ樣な事は更にない、肉類、野菜、果物を數十日屋外に貯へて置いて、必要の時取り出して料理する、併しどちらかといへば冬は韓人の極樂でなくて、理想的の生活の快樂は寧ろ夏である。此頃歸つて來た人の話によると朝鮮は前述の如く空氣が乾燥して居るから健康には至極宜しい、日本に居て病身なものが朝鮮に行くと達者になる、概して食慾が進む、子供の出來ない婦人などは朝鮮に行くと子供が出來る、乾燥したる空氣は身體には至極適するものと見へる夏は非常に暑いけれども敢て凌がれぬと云ふ程では無い、最も不愉快なのは蠅の多いことである、京城を始め田舍の百姓家に至るまで、夏になると蠅は殆ど限無く發生する、蠅を煮〆にでもして食ふ位の決心が無ければ、朝鮮の町に生活は出來ないと或人はいつたが眞に其の通である又市を少しく離れて生活するなら、夏は殆ど日本に居るのと變らない、日本から取寄せたる草花が綺麗に咲く、水瓜でも茄子でも瓜でも澤山出來る、林檎などは實に見事に實る、魚も安い、かゝる所に一家を構へ韓人を相手として暮さうものなら生命は必ず延びる、高い税がかゝるでなし小面倒な手續などは一も要らない、而して白銅の一つも出せば韓人は命のまゝに働く、田園生活でもする氣なら先づ韓國に限る、それから又韓國にも香魚は澤山居る、洛東江の上流に行くと幾許でも取れる、朝鮮では別に取締も無いから、香魚の澤山居る

ところを見澄まして爆彈の一つも投込むと、幾百と云ふ香魚が一時に取れる、密陽大邱邊では現にこれを遣つて居る、この地方では香魚取りが夏の唯一の慰である、と言つて居た位であるから、この天然的國土の生活がどんなに都會的生活を隔絶して居るかを想像する事が出來るのである、若しそれ、社交的の競爭や、文明的の刺激や、都會的の煩雜の爲めに其の心身を過耗した人には一寸よい隱れ家であるまいかと思はれるのである。

雄大なる大陸的の生活狀態

笛聲

亞細亞大陸の中央部に當つて一大高原部がある、この高原部の大半は戈壁の沙漠を以て成立つて居る、むかし支那人は澣海とゝなへて、戈壁の沙漠を曠漠無際限の大海のごとくに見做して一たび、この地に踏み迷ふならば、終生本土へ歸ることの出來ないものとして居たらしい、實際この沙漠は殆んど際限無く廣い曠野で、若し其の周圍を普通の旅行で經巡つたならば却々以て一年や二年で巡り切れるとはできないのである。

この廣大無邊の戈壁大沙漠は元より一帶の荒地ではあるが、所々に豐饒なる沃土の部分が存在して居て、隨分盛に牧畜もやれば又農耕も出來るのである。

蒙古は即ちこの大沙漠中の豐沃地を縫ふて沙漠の周圍に散在して居る處の部落の總稱であるから、其の版圖の廣大なることは、露西亞本國、支那本土若くは、印度などよりも遙かに廣いかも知れない、隨つて人種の差別もいろ〳〵なれば、家居の制も樣々まづそれを大別すると、游牧民と、農民との二樣に區別せらるゝのである。

△游牧民の生活

所謂水草を逐ふて轉居する游牧民は實に野蠻の種族で、今も猶數十年以前太古の生活其儘で、今日の文明の風などは微塵も吹いて居らない蒙昧至極なるもので

ある、これ等の人種は平素どういふ風な家に住ふて居るかといふのに、無論家といふ形ちの上の觀念はなく、唯或る時期の間だけ、或る地方に帳幕の裡に棲息して居るのである。抑もこの帳幕といふのは、何であるかといふに、これは駱駝の毛で織つた鼠色の氈、(普通の織物ではなく唯獸毛を壓窄して固めたもの)であるが。其幕の形は概ね圓形で、之れを作るにはまづ、平地に直徑一丈二三尺の圓形を畫き、周圍に七八本の柱を立て其間に小さき椽木樣のものを縱横に組んだものを箝めて柱に結びつけ、そして圓形の周壁を造り、そして柱と柱との間に横木を架け渡して一大輪形の圓屋となすのである。そして全體を被ふのに前記の氈を以てし、其上を馬の尾で造つた繩で十分に結びつけるのである。そして其戸口には厚い毛氈を垂れ下げて風雪を防ぐ樣にし、又天井の中に鈎を以て開閉の自由になるやうな窓をこしらへてそこから煙を吐き出す工夫に出來て居る、其の構造は甚だ粗雜なものであるけれども、如何なる、暴風にもよく耐へ、又寒暑の雨雪にも耐ゆるのである。そして移轉をするのに最も便利であるから、游牧民に取つては是非共こういふ設計の住居でなくてはならない。又帳幕の側傍には一般に廣大な園圃があつて、枯柴で垣が結ひめぐらしてある、これは夜間牛馬や、羊群を棲はせる處である。

帳幕を組み立てるのは大抵婦女子の仕事となつて居る、彼等は通例一年に二三回多きは四五回も移轉するのであるから、よく其の事に慣れ、動作は極めて敏捷なものである。牛羊の食物たる草が無くなれば、直ぐに帳幕を撤して駱駝の脊につけ、一家族七八人、家財諸道具は申すに及ばず、牧する所の眷族牛羊數十百頭を牽きつれて、ぞろ〳〵と草の繁殖して居る地方を尋ねて移つて行き又幕を組立てる。そして草が無くなれば又家を疊みて駱駝の脊につけ、斯くして一ヶ所三月なり半年なり居て、一生の間に何十回となく所を轉じて一生涯定まれる住居はないのである。即ち天下の廣大を我家とする、荒涼なる生活法である故に蒙古の游牧民は廣大無邊の荒野を終生巡り暮らして、先祖幾

千年のむかしから曾て變らぬ游牧生活である。

さてその日用の家具はどんなものであるか、僅かに鍋、土瓶、茶碗、杓子、皮嚢、木桶、木椀、火箸等のもので、彼の箪笥や、長持や、瓶の如き我々定住的民の有する如き重量ある器具は移轉の際に困難であるから、決して備へぬのである。

△農牧民の生活

蒙古に於ける農耕民は大概豐沃の地に一定の居を卜して部落を形造つて居る、彼等は耕作と牧畜とを以て業となし、隨つて移轉する事は游牧民ほどに頻繁ではないけれども、絶體的に永住するものでもない、まづ半土着の人民である、其の家屋は大概土塀の屋で、構造は極めて粗雜であるが元來蒙古は雨の尠い乾燥地であるから、割合に永く持つのである、其の形はいろ〜であるが概して粘土を用ひたもので、屋根に茅を葺いてある、室內には溫床を設け、毛



氈を敷き壁上に佛像の畫圖を掛けて装飾とし又禮拜をする、游牧民に比しては稍家居的で卓子もあれば椅子もある、食器などもやゝ具備して居るが、其の生活は極めて單純蒙昧なもので風俗は支那の北部、滿洲地方と較や似たやうな所もあるが、まだ蒙古通有の牧民生活は免かれないのである。

△簡單なる庖厨

まづ本土着の農牧民の日常の飲食物は何であるかといふのに、多くは羊肉牛乳である、それに少許の麪粉、牛酪、甎茶、等も加はる、酒は牛乳から釀したものがある、又滿洲の方から輸入する燒酎もある、一般に蒙古人は魚鳥の肉を汚物として食はない、そして一日の中隙があれば何度でも食に就くといふ風で飲食に一定の時はない。彼等の最も嗜好するのは甎茶である、これは丁度茶を煉瓦のやうに打固めたもので、それを削つて湯に煎出して飲むのである、其嗜好は貧富を通じて非常に貪翫するもので、若し二三日間茶を飲むとが出來ないとすれば不幸を歎ずるほどである、故に茶を貴重すると恰も貨幣の如くで、市場に於て物品の賣買に甎茶を用ふる位である、それを飲む方法は削つて粉にして湯の沸騰せる鍋の中へ入れ、これに牛乳と食鹽とを和して飲む、猶一層贅澤なのになると、更にバタを和して飲むのである。殊にこの茶は來客用として珍客ある毎に十分に美味の加へた茶を饗するのが、客を優待するのしるしとなつて居る、されば彼等が嗜好する分量は非常のもので、妙齡の處女すらも一日に大碗十杯を喫する位であるから壯年の男子は大鍋に二三杯を喫するは通例である、斯る次第であるから彼等は皆銘々に茶飲茶碗一つづゝ必ず腰に携へて居る、恰も、煙草入か何ぞのやうに。

△羊乳と羊肉

羊肉は彼等の常食である、之を嗜好するは恰も日本人の米の飯と一般で、羊肉といへば直ちに飯を意味することである、羊肉は皮と骨とを除くの外殆んど棄

つる處はなく、殊に胸部と腰部とを美味として貴重する、彼等はすべて肉を食するに箸を用ひず、手指で肉を大切に摘んで口に入れ、口許の處で小刀を使つて切つて食ふのである、其の小刀の使ひ樣は極めて巧みで、我々が箸を用ふるのと少しも異はない。殊に彼等の多食は驚くべきもので、一度によく數斤の肉を食するは通常の事、其大食者に至つては二日間に一頭の羊を平らげる者すらある、併し其代り二日間位絶食する事も又平氣である、まづ一日一人の食料は羊腿一個を食ふのが通常である、故に彼等の身體は極めて强壯で、多血で、顏色は常に赤色を帶びて居る、其外飲料としては例の茶の外に羊乳である、これは多く焦がした麥粉などを入れて飲む事がある、又乳を乾燥せしめた餅のやうなものもある、多くは旅行の時に携帶して行くのである。

△衣服と身邊の裝飾物

蒙古人の衣服は大概支那と同じ物である、冬は概して羊裘を着、夏は麻布樣のものである、腰邊には帶を締めて、そこへ煙草袋、燧石、小刀、などを結び着けて居る、帽子は滿洲土人の用ふるやうな平たいもので、縁の反り返つたやつを冠つて居る、そして男子の頭髮は支那と同じく剃りあけで中央に辮髮を蓄へ、婦女子は剃らずに辮髮にして垂下げて居る、頭髮の裝飾には寶石や、珊瑚などを用ふるものもある、又耳輪や、指環には隨分貴金屬を嵌めて居るものもある、殊に彼等の身邊裝飾の一特色は例の茶碗である、富豪者は支那銀製のものを用ひ、若しくは髑髏に寶石を鏤めたものなどを携帶して居るものがある。

△鄕黨の關係

蒙古は有名な成吉斯汗の勃興した土地である、又其以前に於ても强盛なる民族が起ッて、屢々支那本部の患害を爲した程で、隨分歷史上に侵略の事蹟を遺した民族ではあるが、輓近清朝に統一されてからは、極めて柔順な、寧ろ意氣地のない人種となつて仕舞つたの

は不思議である、それは清朝の始祖が、喇嘛教を蒙古一般に布いてその宗教の力を以て彼等の野心を壓つけたのであるさうな、兎も角今の蒙古人といふものは極めて愚蒙なものであつて、そして御し易い柔順な民族である、隨ツて彼等の風俗は極めて質朴である、其の動作は恰も童兒の如くであつて、人をして一笑せしむる、彼等が貴人に面する時に其前に跪き、口儀を述ぶるときは、慇懃で、大いに尊敬を表するやうに見ゆるけれども、少しく時がたつといつしか其の禮義を忘れて、粗野なる言語を放つなど常識に欠けた無邪氣な處がある、これは自然に自由放逸なる游牧生活の本色が顯はれたもので、到底永く行儀張つた事に堪へない證據である、しかし概して淳朴で人を遇する事は懇切である、若し客が其の幕營を訪問する時は知ると知らざるとに關せず、親切に勞らつて、まづ煙草を供し、次に茶、羊乳、を出して遇待し頻りに談話を交へんとするのは一般の習慣である。そして遠來の客がある時には近隣の知己朋友を招き集めて客に珍談を促がすのが一般の例である、又途中で偶々人に遭つても互いに必らず携ふる處の嗅煙草を出し互に相供するのが禮となつて居る。

△婚姻嫁娶

蒙古人の結婚は矢張り媒介者に依つて成立つのであるが、其の前に婦婿兩方の家で意氣投合せなければならない、それには、双方共に豫ねての人物の性情を知り、本人同士の干支さいも調べて見るのである、それでいよ〱約婚が成ると婿の家からは結納の高を定めて新婦の父母に贈物をする、其品物は大抵家畜で、稀れには金銀、衣服等を贈るものもある、又婦家よりは家具に附屬する帳幕を贈るを例とする。概して蒙古の財産は家畜である。次に夫婦間の關係に於ては支那と粗々同様で一家内にあつては男女殆んど同權である、但し戸外に於ては萬事夫の處置に從はねばならぬ、又男子は正妻の外に妾婦を置く事も自由であるが、家政の事は皆正妻の管理する處で、妾婦は恰も侍婢同様

である、そして妾は正妻と共に一家内に同居し、すべて其命令に服從せねばならぬ、中には正妻の妾に對するは恰も姉妹のごとき關係なのもあつて一家よく和合團欒して行くのもある、これは文明程度の低い故であるかも知れない。



△交通

蒙古は曠漠無限の地で部落と部落との間が甚だしく隔絶して居るだけに、古來交通には馬を用ふる、胡兒三歳にしてよく騎るとあるが、實際蒙古人は乳臭兒の時から馬を御するの術に習ふて居る、故に往來交通すべて馬を使用する、隨つて通信は極めて迅速である、蒙古の俗人に遭へば先づ新聞の有無を問ひ、若し新事件の發生を耳にする時は如何なる遠隔の地といへども直ちに馬に騎つて親戚知友の間へ報導する、例へば、今日何處へ幾人の旅客が何用あつて來たといへば、忽ち駿馬を四方へ馳せて曠野中の部落へ流布するのである、其の迅速なることは、文明世界で恰も電信を使用するやうなものであ

る、されば彼等が駿馬に乘つて曠野中を馳走するは最も得意とする處で僅か二三町の間を往來するのでも、決して歩行するといふ事はない、隨つて馬を御するのも得意で、どんな悍馬でも一たび彼等の手綱を把る時は忽ち順良な乘馬となるのである。

△都會的蒙古の風俗

これは游牧民の部落でもなく、又土着民の村落でもなく。蒙古部落中の首府の一つである、庫倫といつて北京から凡そ三千五百淸里の西北方に當る處ろにあつて、外蒙古土謝圖汗部の王の居る處であるから、他の部落的とは大いに趣を異にして、儼然たる支那風の一市街を成して居る都會である、府の人口は約そ五萬といへば、滿洲地方にあつても遼陽、牛莊などと比すべき有數な都會である。

この都府は蒙古中の物貨の集散する一大商業地であるのみならず、北京から張家口を經て露國に通ずる要衝であるから市街は却々繁榮で、支那人も一萬人位は移住して商店などを開いて居る、又露人や、西比利亞土人なども大分出張して商業に從事して居る、支那の商人は、毛皮、茶、其他蒙古人の生活に要する日用品、雜貨を販賣し、露人も又雜貨を賣つて土產の羊毛や獸皮を買入るゝのである。一體蒙古の產物といへば、重に羊毛、駱駝毛、馬、牛、皮等であるが、其他鹿の角だの、藥草だの、狐、黑貂、獺其他の獸類は頗る多く、是等は槪ね、支那商人の手で北京へ輸入せられるのである。

土人の風俗は前に述べた部落の土着人と大差はないが、生活の趣は多少都會化した處がある、彼等の常食は羊肉が、第一で、それに例の甎茶を煮て、夏は馬の乳、冬は羊乳、牛乳を混和して用ゆる、馬の乳は羊牛のそれに比して淡泊である、其外土人の支那人化したものは麵類なども大いに賞味して居る併し野菜、魚類、は一切用ひないのである。

食事上の風習は游牧民と大差はない、甎茶の中に焦げた粟を混じたり、又ミルクの一種を入れて客を饗す

る事がある、彼等は又時として馬乳から醸した酒を用ふる、この酒は酸味を帶びたものであるが、乳酒の外に高粱で作つた燒酎をも飲む、衣服、器物のごときは都會に住するだけ割合に開化して居る、殊に財產ある者は男女共に黑繻子を着し、貧民は一般金巾か、靑色の木綿である。

外蒙古の部落は游牧生活の高原部落に比して土地は肥沃である、殊に樹木なども澤山で、燃料には困難をしない、（游牧部落では馬糞を乾かして燃料に供する）又麥などの穀物も播種され、野菜も作らるゝのであるが、併し住民の大部分は牧畜であるから、土民の財產は矢張り羊、牛、馬等の多少を以て算せらるゝのである。

滿洲の年中行事

舊曆で正月元日から五日までは放工といつて農事休みである、五日間は午前の食物は角子といつて麥粉の中へ豚や葱、蒜などを包んで蒸したものを喰べ、午後は諸種のお菜に米の飯の御馳走がある、これが滿洲では大御馳走で一年中米の飯を食べる事は滅多にないのである、又晩は燒酎を食膳に供し、豚や、白菜や、寒天製の料理品を備へて飲酒を酌むのである。

尤も農家は十二月から正月の頃は日が短かく、且つ勞働が少いから一日二食であるから、晚は多量に食品を供しないのが例である。

又正月十四日、十五日、十六日の三日間は「願節」といつて休日で、每晚燈籠など點じて門窓に掛けて祝ひ、一日に二回共御馳走を供する。

次で一月十五日は「添倉」といつて早朝、椀に粱の飯を盛り其飯に五穀の農具を粟殼で造つたものを刺して、穀物倉の前に供へ燒香禮拜して了つて酒を酌み角子を喫するの習はしである。即ち斯くして穀神を祭るのである。

それから二月の二日を「龍擡」の儀といつて赤い紙を裁つて鷄の形をつくり、其口に又赤紙を啣へさせ、即ち鷄が蚰蜒を啄む形を擬したものをこしらへて門の窓や框の上に掛けて例の如く酒を酌み祝ふのである。

三月の始めの清明には「墓掃」といつて午前半日休みて祖先の墓詣をなし、燒いた紙を墓上に載せ、石で壓つけて置くのである。

四月の始めには「挨鋤」といつて農事始めの祝節である、此日は各家々に因つて日は異なるのであるが同じく一日休息して食事に御馳走をするのである。又同じ月の十八日は「娘々廟會」で男女老幼皆午前中にお寺詣りをして隻眼、片手、歪口、跛脚等の不具者に寄するのである。

これを不十全の神といふ、即ち足の病ある者は乘殻で脚の形をこしらへ手の病ある者は手の形をこしらへて神に供するのである、又四月二十八日は藥王爺的生意といつて、以前願を立てた家では病氣の願望解なするのである。

五月五日は「五月節」といつて一日休み丁度日本の風俗と同じく蓬蕊を屋の前後に掛け又紅紙で瓢をつくり、桃の枝に糸をつけて繋ぎつけて門前に挿み、蕉の膽を浸した酒(屠酒のごときもの)で耳を浸して飲み、又米に棗を混じた粽を造り、鷄卵二個づゝを食ふのである、同じく十三日は「老爺單刀會」といつて豚を屠る儀式がある。

六月六日は又「蟲王爺的生意」といつて同じく豚を屠り、近隣集つて大いに酒食を饗するのである。

七月七日は「牛郎會」といつて牽牛織女をまつり十五日は「鬼節」といつて精靈をまつり正午に麥粉で豚肉を包み蒸した物を食ふ。

八月十五日は「八月節」と云つて一日に三度御馳走がある、又晩には月餅及び月餅に栗などを備へて祝ふのである次に十月の初旬に農事完了の祝があるこの日は正午に御馳走がある、この時は一年中の豐りのある時であるから賭部には山海の珍味を供するのである。

十二月の八日は「臘八」といつて朝は粟飯、晩は豚包子を食する例である、次に二十三日には「過少年」といつて大に馳走をなし、粟殻で馬、狗の形をこしらへ、それを王爺廟に携帶して香を炷き、王爺の畵像を剝ぎ取つて竈の中へくべて燒きながら、念誦語を唱へて厄落しをするのである。

十二月晦日は夜十二時頃に竈神に接するといつて燒香燒紙又は爆竹を放ち酒食をなし、二三時頃に至つて寢に就くのである。

満洲地方では樹木が至つて尠い樹木といつては僅かに、路傍にある楊柳位のものである、それで自然家屋の構造も木を材料にするといふ譯に行かないから煉瓦、石材、高粱の殻を應用するといふ事になる、壁は石を積み立てるか、煉瓦を積み重れたもので家根は僅かに木材と粟殻で葺き、其上に土を塗る位なものであるが、元來水蒸氣の少い土地で在から其でも十分凌がれる。併し屋内は却々狹くはない、土間もあれば床もあり、厨房もあれば、客座敷もある、そして一體に寒國的で保温の設備が十分であるから、昨今のごとき寒中零度以下三十度の日でも裸かになつて仕事する事も出來るのである。併しその代り屋内に蠅の居ることは實に言語道斷で、寒中二三ケ月丈は姿を見せないけれども、少し陽氣が暖かくなるとそろ〳〵天井裏から飛び下りて來て、飯器に充滿し密集する、椀に飯を盛ると忽ちの間に數百疋集つて來て白飯を黑くするのである。



都市膨脹の片影

天涯生

三越の繁昌は都市の發達の幻影――東京市は世界第三の大都會――市民の負擔額二十五倍に上る――市民一日の魚類蔬菜消費高――肉食の增進――一年の女髪結賃五十幾萬圓――市中の遺失物と拾得物――棄兒と自殺者――離婚と結婚――教育の進歩――地方より年々幾何の來住者あるか――小都會よりも大都會

一　三越の繁昌は發達の幻影

一日三越に出掛けた。小間物賣場の千紫萬紅、寄切室の雜踏、一種の感を惹いたが、休憩室の洋樂、寂然とした茶室、食堂には洋食の傍らに、壽司の供給あり、噴水の奔騰してゐる庭園は、三圍稻荷を祀つて、空中に架つてゐる。自分は裝置の莊麗、優雅なるに一驚を喫したといふよりは、三越をして爰に至らしめた二十世紀の文明に無限の感慨を懷いたのである。で、織るが如き華客の間に交りて、陳列場を見ると、紋御召、縞御召、絣御召、丸帶一本百圓以上に出てゐるのも珍らしく無い。之を店員に質すと、百圓以上の華客は一日數十人に出づと。

北米合衆國のワナメーカー、若くは英國倫敦のホワイトレー、或は近頃世に喧傳されつゝあるハーロッヅ等の百貨商店を觀たる眼を以てすれば、三越呉服店の如きは殆ど言ふに足るまい。併しながら紺暖簾を垂れた十數年前の呉服店を以て、今日の三越、白木屋、松屋等の粧飾、規模等を見れば、何人も隔世の感を懷かぬ者は有るまい。のみならず、衣服に支拂ふ金高だ、鄙吝な事をいふと思し召さるな、明治五六年の頃、三谷、竹原、松屋等の富豪等は、油相場で大失敗を招き、それに代り合ひて分限長者と爲つた小野の番頭某々等は雨覆のトンビに百五十圓を費やしたといつて、一世の豪奢を以て稱せられ、京濱の間に、寄ると觸ると世評に上つたのを思ふと、今日は如何だらう。衣服裝束に二百圓乃至三百圓の金額を着けてゐる者は、ザラだ。

三越の賣上は、能く這の間の消息を言ひ顯はしてゐる。けれど、世人は三越、白木屋、松屋等の繁昌に對して、奇異の眼を放つ者が無い。其處等の煙草工場に出てゐる女工等も、袖を列ねて、壁御召、縞銘仙等の單衣地に、十圓十五圓の金員を拂つてゐる。――讀者諸兄姉よ、三越等の繁昌は何物を示してゐるかと言へば、文明の進歩だ、都市の發達だ。此の東京市は、三越等のみに依估贔負して居らない。三越は如何に流行の魁だ、文明の華だと誇つても、三越の繁昌は都市の發達に伴つた一幻影に過ぎない。東京の大都市は有らゆる方面に於て、三越の繁昌に等しい奇異と變化とを現はしてゐるのである。

二　東京は世界第三の大都會

先づ東京市の人口を見よう。明治十年頃には、東京市の人口は五十八萬三千、今日の大阪より遙然と尠く、名古屋と横濱を併せた位のものであつた。然るに今日は如何かといへば、戸數は四十八萬五千〇幾十、人口は百九十六萬九千幾百。明治十年來の東京市の膨脹は今日の大阪市と、京都市と、名古屋市と、此の三大都市が、武藏國の一角、舊江戸と稱せられた都會の間に出來た勘定である。――世界で最も大きな都會で、倫敦で、人口七百萬、次は紐育で、四百萬、第三は巴里で、二百七十萬、第四は伯林、及び市俄古で共に百八十萬位であるのを見ると、我東京市は、伯林市俄古以上で世界大都市の第三位に在るものと言へやう。

三　市民の負擔額は二十五倍と爲る

で、最も著しい發達は、東京市政の、歳計の膨脹であらう。明治八九年頃は、東京市一ヶ年の歳計は十八萬三千圓餘、市民一人の負擔額は僅に二十錢强であつた。然るに日清戰役後は、ズン〳〵膨脹して、追加豫算を合して、二百五六十萬圓に上り(三十一年以降)今は千萬圓に增加してゐる。即ち人口の增加は、十年

頃に比ぶると、約四倍であるが、歳計増加は二十五倍に進み、市民一人の負擔額は、五圓幾錢に飛んで居る。

左に仔細別を擧げると、斯んな風に爲つて居る。

	負擔總額	一人平均負擔額
▲國税	七、五三九、九四五圓	三、七七四圓
▲府税	九三〇、六九〇	四六五
▲市税	一、三一五、五三三	六六〇
▲區税	三九七、七四四	一九九
合計	一〇、一八三、九一二	五、〇九九

歳計の増加に比ぶると、人口増加の割合の如きは、なんのそのである。併しながら、明治十年前は僅に二十萬圓内外であつた、東京市民の負擔が、日清戰役を經、日露戰役を過ぎて、千萬圓に發展したのも無理はない。爰に數字を避けるけれど、工業に、商業に、至大の發達を遂げてゐるのを思ふと、東京市の進歩も目醒ましいものである。

四　東京市民一日の魚類蔬菜消費高

今度は食物の方を見やう。

明治八年頃の魚市問屋は五百九十戸、仲買五百一戸、その賣上屆出高は、七十五萬八千餘といふ舊い統計を見たことがある。青物問屋は五百五十五、仲買五萬六十四、賣上高三十萬九千圓、即ち明治八年頃の魚類蔬菜消費高は百六萬圓、、、、一ヶ年一人の消費高僅に一圓五十錢であつた。

然るに三十三年頃の統計に依ると、魚市場の賣上總高五百三十八萬千四百圓、青物の賣上總高は九十三萬四千圓、兩者を合して、市民一人の消費高は、平均四圓三十五錢。けれど實際は斯んな少額では有るまい。地方人が一年十萬人内外は、此の東京市に這入つてゐる筈であるから、市民在住者百五十萬(幼者を除く)と見積り、一人一日の魚菜高を五錢と卑く見積るも、一人一ヶ年の消費高十八圓二十五錢。總計二千七百三十

七萬五千圓の高と爲る筈である。

五　田舍の增進

魚類蔬菜の消費高を擧げたが、序に肉類の消費高を見やう。明治八年頃、市民の食膳に上ぼつた牛は六千百九十九頭、豚は六百十三、羊は八十二、合計六千八十九頭、微少なものだ。然るに三十三年頃には、牛二萬七千百四十五頭、馬七千〇五十七頭、豚五千九百〇六頭、羊七十九頭、合計四萬〇百八十七頭で、斤數一萬五千〇四十四斤に增加してゐる。

然かも日露戰役を過ぎた今日、更に一層の發展を現はして、東京府下の屠獸高丈でも、牛馬豚を合して、五萬頭餘に進み、之に關西中國地方より輸入する分を擧ぐれば、非常な數に上るだらうと想像せられる。特に肉類の需要は馬肉にまで及んで、一ヶ年五千八百二十二頭の屠獸高を見るのは、凄まじい勢ではない乎。

假りに左の數字を以て、市民の肉類消費高として計算するも、一人の消費高九斤平均、一斤の價格が五十錢だとすれば、市民の肉類消費高八百萬圓內外、一人平均四圓五六十錢の計算と爲る。恁う調べて參ると、東京市民の肉食は著しいが、まだ〳〵菜食市民であるとは、チャンと數字の上に顯はれて居る。

六　東京市中の婦人が髮結に拂つてゐる金高

今度は婦人の事に取り掛る。髮飾、香水その他の化粧品等を見ると面白い成績があらうと思はれるのであるが、手許に材料が無いから、單に女髮結丈けに止めて置かう。

東京市中に、四千七百六十一人の女髮結が居る。尤も鑑札の上から見た警視廳の調査であるが、若し無鑑札の者、或は梳子の類を加へると、六七千人の數と爲るだらうとは、髮結通の言である。で、女髮結の一日の收入平均三十錢(卑く見て)とすると、東京市婦人の、一ヶ年の髮結代五十一萬四千六百八十八圓一ヶ月四萬二千八百四十九圓の巨額に上ぼる。婦人の一髮千金を

を繋ぐといふが、東京市中の婦人の髪は千金どころではない。上述の如く一ヶ年五十一萬圓以上に出てゐるのである。（實際は百萬圓以上に出てゐる。）

七　市中の遺失物と拾得物

東京市中に一ヶ年幾何の遺失物と、拾得物とあるか。束髪を喜ぶ人達は、女髪結に五十萬圓以上の金額が消費されてゐるのを見て或は不服の色を爲してゐる者もあるらしいが、遺失物も隨分多い。即ち一年六萬五千百四十六圓に上つて居る。

で、拾得物は幾何ありやと言へば、遺失物の約三分の一、即ち二萬一千五百圓といふ金額である。人口増加の割合から言ふと、遺失物も拾得物も大した増減が無い。

八　棄兒と自殺者

遺失物より、如何した機會か、棄兒に想像が走つた。遺失物の多い割合に比ぶると、棄兒の數は、甚だ尠い。尤もの筈である。一昨々三十八年には、男兒二十五人、女兒二十二人、都合四十七人。そして一ヶ月内外の兒は多いが、三ヶ月以上と爲ると、割合に尠く爲る。生活は困難だと言ふも、生存競爭が激甚だといふも、或は澆季だと稱せらるゝも、都會の發達は親子の情愛を沒却する力が無い。

棄兒に比ぶると、自殺者は恐ろしく多い。三十八年には、二百二十二人といふ多數に出てゐる。なほ年々増加の傾向が見へてゐる。

九　結婚と離婚

東京市には年々一萬〇三百二十の婚姻（人口千に付九人七）と、千六百八十二（人口千に付一人六）の離婚である。一日三四十組の婚姻が、其處等に有る譯だ（實際はまだ多い）。その中四五組は離婚と爲る。

十　教育の進歩

明治三年初めて東京府下に小學校の設あるや、學校

の數は、芝增上寺内源流院、市ヶ谷洞雲寺、牛込萬昌院、本鄉丸山本妙寺、淺草藏前西福寺、深川森下長慶寺の六ヶ所に過ぎなかつた。月謝は寺小屋流儀で、二分。明治十年頃に爲ると、公立小學百四十二、私立六百八十二、合計八百二十四校を見るに至つた。然かも今日は如何である乎。

三十七年度の調査に依れば、學校の數百十六、數に於ては、むしろ十年當時より尠いが、その建築物及び規模が十年の頃と天地の相違があるのみならず、寺小屋的私立學校も漸次減少した。敎員は正敎員千三百八十九、准敎員七十二、專科正敎員百五十九、代用敎員三十六といふ、多數に出てゐる。在學兒童は、高等尋常合せて、男兒一萬三千百八十五人、女兒は一萬千九百五十三人。此の小學兒童を集めて一團とすると、野州足利或は武州八王寺と等しい中都會ができる。

十一　地方より年に幾何の來住者あるか

倫敦或は巴里の如き歐州の大都會も左樣であるが、東京は或意味から言へば、田舍者が寄つてたかつて賑はせてゐる大都會である。北海道と同じく、布哇と同じく、北米本土或は加奈陀の諸都市と同じく一種の新開地である、殖民地である。東京の商工業者は、半ば地方人の需用に依つて存在してゐると同樣、東京市それ自身が地方人の來住で今日の膨脹を見たものであるその證據には、東京市民年々の出產數と、地方來住者とを比べて見ると判かる、出產の數は。何時も地方來住者の數に負けてゐる。左に最近五年間の地方來住者を擧げると、

	男	女
三十八年	四〇、九一一	二九、二九〇
三十七年	三六、四九二	二四、六四五
三十六年	四九、五五四	二七、九九八
三十五年	三五、〇四七	三三、五六六
三十四年	六二、八四九	二八、六六六

註本表は東京市統計書に依り、現在數より前年度の入寄留人員を控除せるもの。唯、東京市統計書には漠然と記入あるのみにて、判明ならざるは遺憾極りなし。

斯うである。年々他縣他郡より東京市に寄留するもの、六萬乃至九萬の間を往來してゐる。若し區役所に屆出である數を擧げると、恐くは十萬乃至十五萬の人口は外れまい。東京市が年一年と人口が增加してゐるのも無理はない。東京市は世界の文明機關を採用してゐると同時に他方にては、此の潮の如く來集する地方來住者に依つて、田舍の風習が傳播せられ、東京市の一部に幾多の新開地——田舍町が出來てゐる。

十二　膨脹は小都會よりも大都會

上述の如く東京市は天魔不思議の速力を以て膨脹して居る。更に歐洲諸國の都會はどうであるかと見るに、矢張其樣だ。そして小都會よりも大都市の膨脹が激しい。左に數字を擧ぐれば、

	大都會	中都會	小都會
▲一八七一年	四・八	七・七	一一・二
▲一八八〇年	七・二	八・九	一二・六
▲一八九〇年	一一・四	九・三	一一・五
▲一九〇〇年	一六・一八	一二・六二	一三・四六

註　大都會といふのは十萬以上、中都會は二萬以上、五千以上は小都會、なほ二千以上五千以下は田舍都會といふ分類はあるが、省く。右表は高野法學博士より得たるもの。

中都會、小都會よりも、大都會の發達が激甚であるとは、右表が瞭然とするであらう。我國の如きも矢張其れで、東京を初めとして大阪、名古屋、横濱、神戸、長崎、廣島等の大都會が、小都市を壓して、獨り威を縱にしてゐる。

レモンの効用

レモンは化粧品としても驚くべき効力があるさうだが、大學の土肥博士の說にも、總ての酸類の中レモンは最も和らかで皮膚に適して居るから、西洋では化粧の必要品として疾くに賞用されて居るが、その作用は、皮膚の脂肪や、表皮細胞、即ち引括めて言へば垢滓を溶解する力を持つて居るので、自然と皮膚を美はしくする効がある、次には收歛の作用に由つて、皮膚の血管を收縮せしめ、皮膚の抵抗力を增さしむるので、從つて霜やけなどを治す効がある、又脂肪や汗の分泌を減じ、其の腐敗を防ぐために、顏の脂じみたもの膚の汗臭いのは、これに因つて治され得るのみならず少し濃くして用ゆると、皮膚のしみを拔きそばかすなどを薄くする効力がある。云々

都會生活の片影

米國の物質的文明は屋上に菜園を設け、地下に鐵道を設くるなどは今世紀以前の事、今は建築に數奇を凝らし、贅澤のあらん限りを盡して古への羅馬の豪華をも凌がんずる勢ひなるがこゝ世界第一の贅澤浴場として時事新報の記する處ろによればこの紐育の國務家某氏は歐洲各國の浴場の設備を視察して歸來一大浴場の建築に着手したりといふ、所ろは紐育の第四十二街、第六アヴエニユーなる新築ブライアント、パーク、ビルデイングの頂上三階にして浴室は一時に能く五百名の浴客を容る可く、使用の家俱は總數百五十名に及ぶといふ、此の建築物の基礎の廣袤五萬四千平方呎にして、浴場に使用せらるゝ部分には、花卉あり彫像あり、繪畫あり、樂器あり、其贅澤なる實に世界一と稱するも過言に非ず、此の新事業の爲めに總計四十萬圓を充用するの豫定にて今其の設計を聞くに、浴場として使用せらるゝ部分の第一階といふは、該建築物の第五階にして、三個の大なる化粧室と、二個の遊戯室あり、此の階、全體を一個のクラブとなし、其の會員を五百名に限りて其の使用を許す、第二階目は即ち浴槽のある所にして、此處には會員外の浴客の更衣室並に寢室を備へ、且つ讀書室、運動場、理髮按摩等有らゆる設備缺くる所なく其廊下には多數の休憩所あり、浴は羅馬、土耳其、露西亞、希臘等各國流の浴槽を備ふるの外例の飛浴あるはいふまでもなし、此の階は凡て乳白色の大理石もて作らる、第三階は即ち日光を浴びる可き處にして天井は悉く張るに硝子を以てし、中に各種の樹木を植ゑたる清新の氣掬す可く、樹間の鳥は囀聲のどかに耳を樂しましむ可く、噴水は樹上に躍りて青葉に露を布く、此の中に池を作る、長さ六十呎、幅五十呎にして深さ五六呎、水は器械力を以て常に交代せらるゝが故に、汚濁することなかる可く、熱鬧の市人一度び此の冷水に浴する時は能く一日の暑氣を拂ふを得可し、外に料理店あり終日終夜客の需めに應ずといへば所謂地上の樂園とや謂はまし。

東京市内の大地主

◎土一升金二升の東京

都會の生命は商工業に在るのは今更言ふ迄も無いけれど地主の勢力あることは、都會も田舍も變つたことはない。特に東京市の如き、年に數萬の人口が殖へてくる大都會であると、地主の勢力は廣大無邊で、その所有土地は人口の増加に連れ、繁榮に連れて、懐ろ手で、地價が昂つてくる。ヤレ株式だ、ヤレ新事業だといつても、槿花一朝の榮だ、昇天の如き景氣を持つて暫時すると、不振に陷つて、動搖するのが常態、此頃電鐵市有論が東京市に起つてゐるのを見ても判からう。それに比べると土地だ、若干の金額を投じて、土地を買ひ占めたが最後、その儘放つて置いても、年月といふやつは、何時の間にか價格を附けてくれて、十年、二十年の間には、恐ろしい價格となる。明治十年頃、二千坪六十圓であつた小石川白山下の窪地は、昨今坪三十圓といふ値を現はしてゐる。即ち六十圓の土地は、三十年後の今日に爲つて、六萬圓といふ千倍の高價と爲つてゐるのだ。早稻田の戸塚邊は、早稻田大學の繁昌に連れて、坪三十萬圓に爲つてゐるのも一例だ。昔日は日本橋目貫の地を、土一升金一升といつたが、之は廢れ文士の形容辭でなく、今日は土一升金二升であることは、讀者も先刻御存知で御座らう。であるから、小金を持つた者は貸家を建ひ立ち、うんと資本のある者は土地に目掛けて、身代を千倍萬倍にしやうとしてゐる。そこで左にざつと東京市の大地主を並べて見るのも當節柄必要であらう。

◎都下大地主の兩大關

東京市中の人口二百萬餘あるが其中で地主といふのが約二萬ある、けれど大地主は極めて少數である。まづ勸進元は三菱家で、東西の大關は三井家と峰島家とである。その所有坪數を擧げて見ると、

△二十二萬千七百九十二坪　三菱家

尤も此の所有高は、兩岩崎家と三菱銀行の所有高が含まれてゐるが、三菱家は日本一の持丸長者であることは爭はれない。東西の兩大關は、

△十七萬二千餘坪　三井家

△十一萬九千餘坪　峰島家（尾張屋銀行主）

三井家の所有高は銀行の分も加はつてゐるが、其は兎も角も兩大關の貫目は十二分に備はつてゐる。特に峰島家は、ロサ、キヨの婦人名義である丈けそれだけ、吾輩の眼に著しい。今一萬坪平均二三十圓と低く換算して、その實價を數て見ると廿萬坪の地主は約五百萬圓の財產である。

◎四萬坪以上の土地所有者

六萬五千餘坪　阿部正植（舊大名）

六萬三千餘坪　渡邊治右衞門（明石銀行）

五萬七千餘坪　安田善次郎（銀行家）

五萬餘坪　酒井忠道（舊大名）
四萬九千餘坪　德川茂承（舊紀州侯）
四萬八千餘坪　淺野長勳（舊藝州侯）
四萬八千餘坪　堀越角次郎（吳服太物問屋）
四萬六千餘坪　鹿島チヨ（質商）
四萬三千餘坪　土井利興（舊大名）
四萬餘坪　阿部正功（舊大名）

誰か舊大名の勢力が減滅したといふ。政治上には或は舊大名の全部はフイに爲つたかは知らぬが、大部分の地主としては、依然として勢力を維持してゐるではないか。なほ下に擧ぐる顔振を見ると、判つてまいる。

◎三萬坪内外の大地主

三萬八千餘坪　細川護成（舊肥後侯）
三萬四千餘坪　東京市（團體）
三萬二千餘坪　三野村倉二
三萬千餘坪　松方正義（侯爵）
三萬千餘坪　桝本喜兵衛（酒店）
三萬千餘坪　酒井忠興（舊大名）
三萬餘坪　東京鐵道會社（團體）
三萬餘坪　平沼八太郎（會社重役）

二萬九千餘坪　黑田長成（舊筑前侯）
二萬八千餘坪　福澤三八（慶應義塾敷地所有者）
二萬八千餘坪　松崎文次
二萬七千餘坪　前田利爲（舊加州侯）
二萬六千餘坪　毛利元昭（舊長州侯）

新華族では松方正義侯爵一家は筆頭に出る。尙二萬坪以上の顔觸を並べて見ると、

二萬四千餘坪　大畑弘國
二萬三千餘坪　川崎八右衛門（銀行頭取）
二萬三千餘坪　大隈重信（伯爵）
二萬三千餘坪　小林傳次郎（時計商）
二萬三千餘坪　太田資美（舊大名）
二萬二千餘坪　小笠原長幹（同上）
二萬二千餘坪　有栖川家（皇族）
二萬二千餘坪　山内豐景（舊土州侯）
二萬二千餘坪　本多忠敬（舊大名）
二萬千餘坪　建石三藏（木綿問屋）
二萬千餘坪　東京瓦斯會社（團體）
二萬千餘坪　安川繁成（會社員）
二萬千餘坪　田中武兵衛（銀行頭取）
二萬餘坪　小原靜太郎

二萬餘坪　山尾庸三（新華族）
二萬餘坪　大河内信好（舊大名）

右の如く二萬坪以上の所有者は岩崎家を筆頭として、四十一人ある。中。舊。華。族。は。十。六。家。見へる。大々地主の約三分の一強だ。即ち東京市の部分は、矢張大名華族の勢力に蔽はれてゐる譯である。とは言へ此の十六家を以てして、三菱三井及峰島の三家の所有高と相匹敵してゐるのを思ふと、新時代の趨勢は、無味乾燥なる數字の中にも、きらりと閃めいてゐるが、此叙は是非なしと仕て置かう。

◎一萬五千坪以上の大地主

今度は込み合ふから、づらりと、名前と職業を擧ぐるに止める。讀者は姓名と職業とを對照して、熟覧あるべし。最初に一萬五千坪以上の所有者を擧げると、

山田喜助（銀行重役）　杉村甚兵衛（西洋織物商）
中村清右衛門　伊達宗陳（舊大名）
高木正善（舊大名）　阿部彦太郎（米商）
松平康荘（越前侯）　安井治兵衛（質商）
喜多吉兵衛（材木問屋）　大久保利和（新華族）
天野源七（花筵問屋）　福島彌兵衛（質商）
市島徳次郎（地方大地主）　森山中次郎（海産物商）
深川養鶏會社（團體）　今村繁三（銀行頭取）
龜井茲常（舊大名）

二萬坪以下に爲ると、そろ〳〵日本橋深川等の大問屋が出て來る。越後の大地主市島氏が、大都會に勢力を潜めてゐるのも注目に値する。圖に、中村清右衛門氏の一族に中村清藏氏あり、乃父の清右衛門氏は、地所の所得で泰平としてゐるが、清藏氏は各種の銀行會社に關係せる會ほ世の流行兒であるのも一種の對照であらう。

◎一萬坪以上の大地主

一萬五千坪以下、一萬坪以上の所有者に爲ると、各種の顔觸れが出てくる。

猪俣吉平（——）　松平康民（舊大名）
中澤彦吉（酒醬油問屋）　小津與右衛門（肥料問屋）
宮本央（——）　石崎政藏（株商、銀行重役）
鍋島直大（肥前侯）　吉川經健（舊大名）
松浦詮（同上）　野村吉熊
若林七五郎（材木商）　内海鐵太
太田徳九郎（同上）　中居百助（髪膏及化粧品商）
村林榮助（雜穀肥料商）　前田利同（舊大名）
堀田正倫（舊大名）　近藤廉平（會社々長）
徳川圀順（水戸侯）　溝口直正（舊大名）
徳川達孝（同上）　淺井新太郎
奥平昌恭（舊大名）　蜂須賀茂韶（舊阿波侯）
津輕承昭（同上）　長井利右衛門（製茶商）
高橋門兵衛（酒問屋）　立花寛治（舊華族）
大木遠吉（新華族）　中井利右衛門

德川達道(舊華族)　牧田清左衛門(木材商)
澁澤榮一(銀行家)　齋藤鐵太郎(公使館二等書記官)
吉川源太郎(——)　濱口吉右衛門(醬油問屋會社長)
戸塚文雄(武官)　東京瓦斯會社(團體)
島津忠亮(舊華族)　加藤泰秋(舊大名)
濱田幸正(同上)　松平賴壽(舊大名)
高津伊兵衛(鰹節商)　東京製綱會社(團體)
村越庄左衛門(吳服商)　戸澤正己(舊大名)

以上、一萬坪以上の地所有者は、總計百〇八人と爲る。その坪數は二百六十七萬四千九百七十二坪である。東京全部の總坪數は、一二、〇七九、八二六坪四一であるから、全市五分の一は、右に擧げた一萬坪以上所有の大地主で持ち切つてゐる譯である。

◎

斯う並べて來て東京市所在の大地主の特色を、胸裡に浮んだまゝ擧ぐれば、

イ　大名華族の地所が多い事

ロ　日本橋深川邊の大問屋が倘勢力ある事

ハ　地方富豪の勢力が大都市に及べる事

等であるが、之は顏觸に依つて、潑然と、胸裡に浮んだ感想であるが、なほ、

ニ　公私團體の地所が尠い事

東京市、鐵道會社、慶應義塾、瓦斯會社、養魚會社の所有はあるが、之を外國の商工的大都市に比ぶれば言ふに足らない。

ホ　純然たる會社銀行員の所有尠い事

尤も安田善次郎氏を始め、川崎八郎右衛門、今村繁三、澁澤榮一氏等なれども、比較的に尠い。商業使用人たる大會社員の所有は特に尠い。僅に近藤廉平氏位のものである。

ヘ　地所の收入に專らなる者も尠い事

純然たる銀行會社員も尠いが、といつて、地所の收入にのみ依つてゐる者も尠い。頭取として、社長として、監査役として、銀行會社に大抵關係を持つてゐる。職業欄に——を引いてあるのは重もに地所にのみ依つてゐる人達である。

此の地主鑑に依つて、新趨勢の間に舊式を交へてゐる東京市の面目が窺はれる。

ト　米商及株屋が土地に指を染めてゐる事

某氏の如き、某々氏の如きはそれであるが、小地主を調べて見ると、或は續々と此の種の事實に出會するであらう。最も著しいのは、徐々と大地主の殖へて居る事であるが、今回は之で筆を止めて置きましやう。

新年の流行履物

◎夫人向――としては一寸五六分の小町形、常盤形、横柾臺又は鼈色艶消塗、梨地塗等にて表は南部、鼻緒は繻珍、厚板、本天等にて二圓より四圓迄

◎令嬢向――としては一寸六七分の小町形、櫻形の横柾臺又は蟲蝕塗、青貝塗、津輕塗等に南部表、鼻緒は繻珍、模様入本天、紅梅織等にて價は同じく二圓より四圓

◎細君向――としては一寸五六分の兩刳臺又は黒塗臺、溜塗臺等にて表は矢張り南部、鼻緒は本天、厚板、黒天等にて太サ六分位（價は一圓五十錢より四圓位

◎娘向――としては兩刳形、小町形、音菊形等の横柾臺或は溜塗、朱溜塗等にて表は同じく南部鼻緒は繻珍、紅梅織、模様入本天等にて五六分の太サ流行し價は同上

◎紳士向――としては堂島形の一寸五六分の横柾臺に南部表、鼻緒は鹿皮、斜子、一楽等にて價は二圓より五圓位まで

◎藝者向――としては一寸四五分の江戸ッ子形、雲井形に表は南部、鼻緒は四分位の本天、黒天の無地に限られ又は黒塗柾目洗ひ出し等も受け好く價は同じく二圓より四圓

◎老人向――としては柾面履、巾三寸六七分或はパナマ表附コロップ臺にて價一圓より三圓迄

◎尚一般の流行――は相變らず堂島形、兩刳形最も多く又兩履も近來頗る流行せり、高さは漸く一寸四五分位にて減り易きより、爪革として生皮を堅く巻き締め、下駄の齒臺に挿入れて履ずれを防ぎ、且足癖惡き人の片べりを防ぐ事を發明したる者もあり。

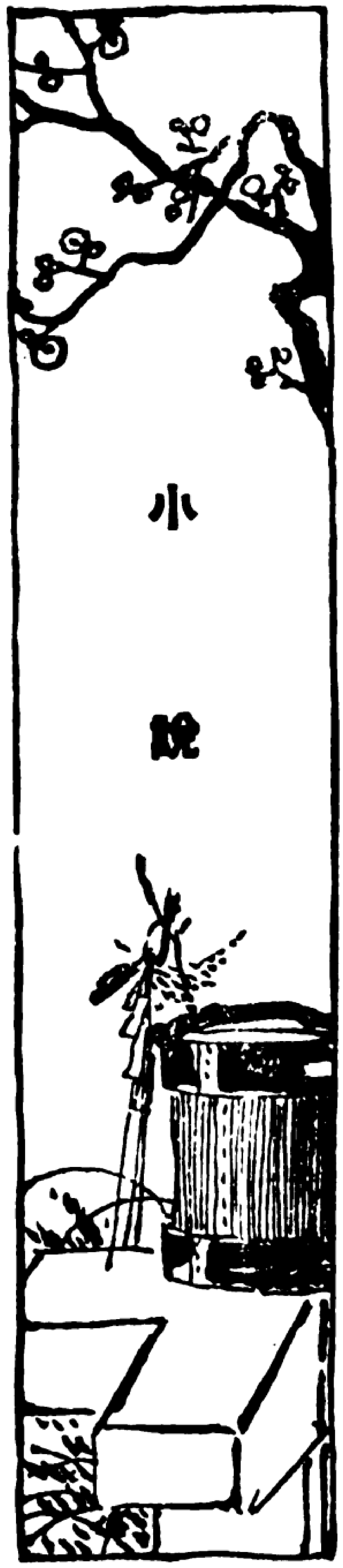
奇想天外より落つ、空前絶後の珍趣向

天機洩すべからず、秘すべし〳〵

破天荒の新意匠 懸賞寶さがし

▲二月一日發行の女學世界は即ち金千圓を懸賞にしたるこの珍趣向を附錄とするものなり

▲破天荒の新意匠とは果して如何なるものぞ、愛讀諸姉乞ふ二月一日の發行を待たれよ



春宵

小萩

（上）

暮の二十八日と云へば、喜ぶ者は、三つ寝ればお正月？と、小首を傾げる子供ばかり。道行く人の頭計り先へ進みて、足の伴なはぬも悟擬しさうに、お高祖頭巾に日和下駄の音霜夜に冴えてカラコロと忙しさうである。西より東、南より北と飛び交ふ提灯の間を二人曳の掛聲勇ましく、俥を飛ばす紳士の跡を見送る萠黄風呂敷頸に巻きたる小僧は「電車に轢かれた蟾蛙」と小聲に唱ひながら、自分も思ひ出した様に急ぎ足に往き過ぎた。路傍に破れ扇挿頭して「時雨を急ぐ」と昔を偲ばしむる翁の肌膚に、如何に此の風の染むであらうと思はるゝ木枯は、電線に音を立てゝ果ては松飾りの笹竹を動揺すのである。何處の店頭も家名を顯はせる大提灯に景氣よく、萬國旗は翻る酸漿提灯の賣出しも賑やかである。

〆飾り賣る店前の群衆を避けて、切通の方より廣小路へ出でたる二十七八の若紳士、ラッコの襟つきたる二重廻しに、鳥打帽子の下の金縁眼鏡もうつりよく、吸さしの巻煙草を捨つゝ。

『あゝア、遼々峰さんの御蔭で、此の寒空に此麼處ま

で引張廻はされて仕舞つた。風邪を引いたら峰さんの責任ですよ。」と云つて空咳をわざと一つ。
「あら、憎らしい！出もしない咳なんか遊ばすんですもの!!、お風邪なんて當になりは爲ませんわオホヽヽ。私だつて此麼遠方まで參る積りぢや無かッたんですけれど、本郷には氣に入ッたのが無いのですもの……でも貴夫、幾ら新世帶だつてお屠蘇のお銚子もなくッちや……。」
「如何もお氣の毒樣、お銚子もない樣な松野辰雄如き貧乏人のところへ御輿入に成ッてねー、美の神の化身とまで唱はれた濱田家の令孃として、お茶の水の秀才、芳野門下に出藍の譽高く、兼ねてはヴァキオリストたる峰子樣をね、郵船會社へ漸く這ひ込んだ貧乏工學士なんぞがす、思へば勿體なくッて淚が翻れますよ。」
呆れたと云ふ樣に、其喋口に任せて居ッた峰子は、糸織の二枚重に風通の羽織を隱したる東コートに、白毛のボアーもつき〴〵しき二十歲には未だ足らぬ花嫁。
「まあ、眞實に何と云ふお口の惡いのでせう……私もう何も申しませんわ……。」美しき眉を秘めて、訴ふるが如く見上げた。
「アハヽ、貴女には這麼事云ッても氣に懸るのですか、僕こそ何にも云へん。アハヽ、串戲ですよ、最ちッと氣を大きく持ッて下さい、而して少し貴女も僕に敗けない位に惡る口のお稽古でもして下さいよ。」
「貴夫こそ私のやうな者お貰ひ遊ばして、さぞ御後悔遊ばしてゞ御座いませうもの……。」
「ア、御免々々、其麼に氣に懸んで許して下さいね、迂ッかり貴女には串戲も言へないサア機嫌を直して笑つて頂戴。」
突と寄ッて其の肩に手を掛る刹那、口々にお目出度と賑々しき聲に送られて出た一組、聲に驚いた此方の夫婦は一齊見かへッた。何時の間に來たのか伊豫紋の前に來てゐたのであッた。
位置の低い島田に白光り鼈甲の中差、同じ櫛、黑縮緬

の紋付に白を重ねた褄高く取り上げて、一足前へ進む姉藝者らしきに引き添うて、紅の勝ッた江戸褄模様に、之も同じく白を重ねて、若やかな島田に櫛笄も艶々しく、内箱らしきと見番の若い衆とを左右にした十八九の藝者。今披露の途らしい。

「オヤッ」

と言つて峰子は立ち停ッた。辰雄の足も動かぬのである。何の氣もなく倶と振りかへッた藝者も、此方の夫婦を見て、俄に物にでも魘はれたかの様に、蹌踉と内箱の肩へ捉まッた。

「アラ、どう爲すッたの……マア危險ない。」

と言ッて内箱は手もて支へた。

「如何したの？」と姉藝者は見かへッた。

「オット胡蝶さん未だ轉ぶにや早いですよ。」

と見番の若衆は頸に掛けてゐる手拭包を入れた風呂敷包を鳥渡直しながら笑ッた。

「イエ鳥渡蹌踉たので……。」

と言ッて俯顔勝に切通の方へ曲ッた。凝と目送ッてゐた峰子は。

「内山さんぢや無いかしら……。」獨語の様に言ッて夫の顔を見上げた。

「何か見た様だと思ッたら、毎年峰さんの家へ歌留多など取りに來た彼の人かい……、眞逆左様ぢやあるまい!!」

「イエ、でも私達を見て、さも吃驚した様でしたもの、乾度内山の蝶子さんで御座いますよ……。此の二年ばかり幾ら搜しても行方が知れなかッたんですが……マア如何して藝者なんぞにお成りに成ッたのでせう……お可愛想に……。」

無限の感に打たれたらしく、鈴を張ッた様な眼には早や涙をさへ宿してゐる。

「分明もしないのに、もう一人で決めてゐるんですねアハヽ、併し眞實彼が蝶子君であッたら、白井はさぞ喜ぶだらう。」

「白井さんッて……彼の辯護士の？……。」

「えゝ、何時峰さん家へ歌留多取りに連れて往ッた事

があるでせう、彼の法科の白井サ……、今京橋に辯護士をしてゐる……。」

「ハア、それで如何して白井さんが內山さんの行方が知れるとお喜び成さるので御座います？……。」

「それはね、彼から僕の顏さへ見れば蝶子君の事を尋ねるんです、而して今でも幾ら友人が妻帶する事を勸めても、頑として應じないから僕が調戲半分に若し蝶子君が藝者であッたらどうする、それでも妻とするかと云ッたら、心さへ正しくばと云ふんです、餘程深く思ひ込んだらしいね。」

「マア左樣で御座いましたか、私左樣ことちッとも存じませんでしたわ……、蝶子さんは又貴夫を大變思ッて居らしッたので御座いますよ！」

「馬鹿なッ。」

「イヱ眞實!!!……、左樣ことは如何でも、全く彼れが蝶子さんなら、如何かして上げたう御座んすわねー貴夫！」

（中）

歌留多よ追羽子よ夢のうちに松飾りは取られても、何の彼のと事に紛れて何時しか一月も過ぎ、寒い〳〵と云ふ間に梅も散ッて仕舞ッた三月の初め、花を誘ふと思へば嬉しき春雨も、打續いては欝陶しく、峰子は今まで彈いてゐた琴にも倦怠てか側へ押遣り、突と立ち上ッて緣の障子を開けた。雨に煙る庭の木立も興を催さぬのか又閉めて、所在なさゝうに火鉢の側へ坐ッた。

と背後の襖をあけて小間使の金は靜かに手をついて、

「奥樣、番町の大奥樣が御見えになりました。」

「アラさう！御母樣が？」

急いで出迎はふと立ち上るを。

「厭な降りですことねー。」

と早や金の背後へ顯れたは、濱田銀行の頭取正道の夫人、峰子が母である。靜岡の富豪の家に生れ、十九の歲濱田家へ嫁付たので、世の波風に揉れた事はないから、人の言を信ずることも早い眞實の奥樣風の品の善

い四十五六の人である。

「マアお母様!? 此樣ところへ……一杯に取り散らして御座います。彼方へ參りませう。金やお火鉢にお火を……。」

「イエ最此處で澤山! お客樣ぢやなし、此の方が氣樂で好御座んす。もうお火なんぞ別に取らなくッても好よ、其の儘に……。」

と金を制した。

「おや穢いのですけれど、此處で御免蒙りませうか……大變御無沙汰を致しましたが御父樣お別條も入らッしやいませんか、而してまだ這麽に御寒いので御座いますが、御母樣御持病は? ……。」

「ハア、難有う! 御父樣は相變らず御壯健でね、私も御陰で今年は寢る程の事はありませんでした。マア當家でも辰雄さんもお前も壯健で、何より結構ですね……私も其の後ちよい〳〵來て見たいと思ッても、お前が居なくなッたので、急に私の用事が殖えて、鳥渡も閑暇がないのでね……だけど人間は矢張忙がしいが好御座んすよ、紛れて病氣も出ないからオホヽヽ。」

「でもマアお宜しう御座いましたこと。私も上り度と存じますのですけれど、六月と言ッても、あと三月しかありませんから、差懸ッてから彼の是のと申しますと、屆かない處が出來ると思ひまして、ちよい〳〵思ひ出した物から整理など致してをりましたので、遂昨日まで掛ッてをりました。……今日何んだか急に用がなくなッた樣な氣がして、お琴を復習て見た處で御座いましたの。」

「ア、さう、ほんに辰雄さんの洋行も六月ですからね……マア〳〵お前がそれ程氣がついて大人に成ッたと思ふと、私も安心しますよ。」

「アラ御母樣、私もう子供ぢや御座いませんわ、二十歳になりますものオホヽヽ。」

「本統にもうさうですわね。何時迄も子供だと思ッてゐるうちに……私達の腰の曲らないのが不思議な位ですねオホヽヽヽ。」

金象眼をした煙管で輕く一ぷく吸ッて、御茶を入れてゐる峰子を見てゐたが。

『峰さん、お前何か少し痩たやうですね……工合でも惡いのですか！……。』

と心配さうに差のぞく。

『アラ左樣で御座いますか!? 其麽事も御座いませんわ……。』

片手に頰を押へて莞爾見上げた。

『何ともなければ善けれど……私はまた少し氣に懸る事を聞いたので、何か其麽ことでも心配しておゐでぢやないのかと思ッて……。』

『氣に懸る事ッて？……何麽事お聞遊ばしたので御座います？……。』

美しき眉をよせて不安らしく、更に母を見た。

『イヱヲ、多分私も辰雄さんに限ッて其麽事はなからうと思ふのですけれど……此間お前も知ッてゐる銀行の坂本が來てね……辰雄さんが此の頃數寄屋町の何とか……ヱ、ーと、ア、さう胡蝶！胡蝶といふ藝者に夢中に成ッて居るとかッてね……眞逆と思ッても氣に成るもんですから、御父樣に御相談しやうと思へば、若いから仕方がないさと笑ッてばかりゐらッしやるので、私獨り氣を採んでますのよ……、それで今日はマア少し閑暇だッたので、樣子を見がてら、降るけれど出掛て來たんですが……其麽樣子も見えませんか!!』

『イ、ヱ別に……。』

とは云ッたが、左樣伺へば此春學友會の新年宴會が伊豫紋であッてから以來、夜更けて赤い顔してお歸りなさる事もあるので、伺へば何時もお友達の家で强ひられてとばかり、如何やら腑に落ちぬ事もあれど、大かた私の邪推であらうと、自ら戒めて色にも出さなかッたのであるが、根もない虛言とも思はれぬ今のお話、眞實左樣であッたら、如何しやう？と小さき胸を搔き亂れて、茶碗もつ手も震はれつゝ。

いづれの籠飼の鶯か、獨り我は顔なるも折にこそよれ。

（下）

母を玄關まで送り出して部屋へ歸ッた峰子は堪へきれぬ樣に痛む頭を押へて、時計を見ればまだ三時、何時ならば四時半には必ず歸る良人の、今日此の頃は七時になり、八時九時にさへ成る事があるので、『今日は如何かしらと、思ふと同時に、深き〳〵印象を與へたる胡蝶の名が頭腦に浮ぶのである。峰子は幾度も口のうちに、

『胡蝶々々。』

と繰返して、遂には堪へられぬ樣に咽び入た。

『そんなら去年の暮に、上野で邂逅たのは矢張り蝶子さんで在ッたのであらう……、胡蝶─蝶子─、あゝ乾度其れに相違ない……餘りな蝶子さん!、姉妹になりませうとまで言ひ合ッた仲の、私が生命にも替へ難く思ッてゐる大切の人を……私が思ッてゐるだけ蝶子さんも思ッてゐるのではあらうけれど……でも餘り酷いわ……蝶子さんは今彼麼商賣をしておゐでだから、嘴口も上手になッてゐるのであらう、迚も私の樣な者とは比較にならぬので、旦那樣も遂情けに被絆れて……嗚呼さうしたら私は如何なるのであらう……如何したら善いのか知らッ、尼にでも成りませうか……イ、エ幾ら尼になッたッて、見えもする、聞えもする。嗚呼如何して其れが堪へられやう、一層死んで……エ、死に度い……私が死んだら何麼に蝶子さんが喜ぶでせう、あゝ左樣思ふとまた口惜しくッて、死にともないわ、私如何しませう………。』

千々に亂るゝ心の果ては、恨めしきにも情なきにも先づ涙である。

六時に成ッても未だ歸らぬので、金とおさんには前に御飯を食べさせたが、自分はどうしても咽喉を通らぬので、お歸り遊ばしてから御一緒にと其の儘お膳を引かせた。

少し風立ては來たが雨は霽れたらしい、軒の雨滴の音も聞えなくなつッた。時は遠慮なく經ッて針は今九時

半を指してゐる。

辰雄は流石に此の頃の我が身の擧動を、峰子が如何に思ふて居るかと自ら咎めて、俥にも乘らず、歸ッて來れば、何日も温顏に出で迎ふ妻の、今日は何としたものか、纔に『お歸り遊ばせ』と言ッたばかり、外套を金に渡して火鉢の前へ坐ッても、始終俯顏勝に顏を見られじと樣に燈火に反けてゐる。背後からついて來た金は、敷居越に手を仕て。

「あの、旦那樣御飯は？……。」

「僕か？、イヤ濟んだよ。」

「左樣でゐらッしやいますか、では奧樣は？」

「私もよしませうよ……。」

「あッ、峰さん、貴女は僕を待ッて居てくれたのですか！、其れは氣の毒しましたね、今晩は遂白井に引張られて付き合つたものだから……サア何卒食べて下さい……。」

「イヽエ、今晩はもう頂きたくは御座いませんから………。」

優しく言はるゝだけ、何氣なき樣を粧はうと思ふだけ、涙が出るのである。凝とみつめてゐた辰雄は差のぞいて。

「如何したんです、峰さん、何處か工合でも惡いのですか？……。」

遂に堪らず峰子は、ハンケチを目に押當て仕舞ッた。

「エ、如何したのです？、何が氣に入らぬのです？、エ、僕に話したッて好ぢやないかね……。」

「わ、私死にたう御座いますッ……。」

「何を馬鹿なッ、貴女が死んだら僕は如何なるのですかッ……誰が何か云ッたのですか、それとも……ああ貴女は僕が此の春以來の擧動に就いて怒つてゐるのでせう……是れには深い原因のある事で、早晩貴女に話さねばならぬ事ですが、話の纏まらんうちに多くの心配をさせたくないと思ッて、今日まで言はなかッたのは僕の誤りでした。これを機會に何も彼も話すから、牆壁を除去て聞いて下さい。實は暮の二十八日に上野まで買物に往ッた時、邂逅た藝者は、

貴女の推察通り内山蝶子であッたのです……。」

さてはと涙の目を上げて良人を見凝た。辰雄は其の情に燃ゆる眼を以て靜かに見返した。で、話の大要は斯なのである。

新年宴會の時、伊豫紋へ來た蝶子の胡蝶は、一度は逃げ樣としたのであるが、峰子が心配してをッたと言ふ事を聞いて、初めて身の上を話した。

一昨年の春、偶とした商業の手違が失敗の基となッて、遂には如何する事も出來なくなッたのである。加之父は是等の事を苦に病んで其の年の六月不歸の客となッて仕舞ッた。跡には母が蝶子と弟とを抱へて、之れも亦病の床に就いたのであるが、最早其の頃は賣るべき品は何一つなく、醫藥をさへ與へ兼ぬるので、遂に蝶子は意を決した、金に飽して仕込まれた遊藝が身を助くる不幸となつて、斯る賤業に從事することゝなッたが、併し爲めに母に醫療を加へる事が出來たので、追追全快に赴いたと共に、弟の學資を補助べく運命の手に身をゆだねたと哀れな物語を聞かされたのである。

『と云ふ譯で、其の時直ぐ貴女に話して仕舞へば何の事もなかッたのを、遂言ひ遲れた爲め愈々言へなくなッて、餘計な心配をさせたのは重々僕が惡かッたんです……。乃で蝶さんの事を白井に話すと、それは是非救ッて遣りたいから、力を借してくれと云ふので、其後六七遍蝶さんに遇ッて話をしたら、今落籍ば親元身請として五百圓もあれば好いと云ふのです。で、白井も種々盡力したけれど、出來星の辯護士には五百圓は困難なので、それに白井は兩親も兄弟もないから一切伯父が世話をしてをるが、眞逆藝者を落籍せるから、五百圓出して呉とも言へずよし貰ッた處が怒られる計りだと云ふので困ッてをッた所へ、折惡く舅さんの銀行に居る坂本とか云ふ奴が、披露早々からつけ廻してをッたのを、蝶さんが手酷く排除たもんだから、意地づくに落籍をすると言ひ出した、サア、乃で白井は彼樣正直な男だから、虚言をついて金を借りるといふ事はせ得ぬので、愈々煩悶して非常に盡力した結果、三百圓は出來たが殘

二百圓が纏まらぬので、何卒かと言ッて頼まれるんだけれ共、僕だッて今が今と云ッては仕様がないので、實は今晩も其の相談の爲めに這麼に遲くなッたんです。斯いふ譯なんだから峰さん、どうぞ惡く思はないで下さいね。」

恨めしきに泣し涙は、何時か同情の涙と變ッたのである。端たなかりし我が身の振舞恥かしく。

「何卒御許し遊ばして……、私左樣事とは存じませんので、聞いたのを眞實とばかり思ッて、逐泣いてお怨み申したのが今更勿體なう御座います……。伺へば伺ふ程蝶子さんお氣の毒で御座いますわねえ、其れにしても坂本は何といふ憎らしいので御座んせう！、蝶子さんが自分の思ふやうにならないので、貴夫と蝶子さんの事を母に密告致したんで御座いませうよ。ですから猶坂本の方へなんか遣り度く御座いませんわ、で、白井さんの方は何時までにお金が出來れば宜しいんで御座います？……。」

「其れがね急なので明日の夕刻までに持ッて行かなければ、蝶さんを坂本の方へ遣ると云ふのです。だから如何しても晝頃までに先方へ渡さなければ成らんので……實際僕も弱ッてゐる……何分急なので。」

腕を叉いでホッと太息をついた。峰子も凝と考へて居たが。

「……母樣に御願すれば、其れ位のお金なんか直ぐ下さるんですけれど、今私申し度くは御座いませんの、とそれ云ふのはお母樣も坂本に言はれたので、幾分か疑ぐッてゐらッしやるでせうから、申すだけ御疑惑を增す樣なもので、出來るのも出來なくなりますから、蝶子さんを立派に白井さんへ嫁入らせてから、委しくお話しましたら、乾度それ位のお金は下さいますが……今此の急場をどうか出來ますまいか……。」

彼れ是れと少さき胸を痛めて思案の末、何か偶と思ひ得たるらしく、愛らしき口元に微笑を湛へて夫を見上げた。

「アッ善い事が……貴夫!!品物を抵當にしてお金を貸

して呉れる所があるといふぢや御座いませんか」

辰雄は不安らしく打まもッてゐたが。

「それはあるが、一體如何すると云ふのです？」

良人の樣子を見て端たないと思はれは仕舞かと、鳥渡いひ淀んだが、もう云はない譯にもゆかぬ。

「あの――私の指輪や時計や頭の物などで、二百圓借しては呉れますまいか……それで足りなければ私着物も入用ませんが……。」

「エッ、峰さん、貴女其麼ことして好ですか。」

「ハイ、私さうする事が出來ましたら、貴女のお顏も立ちませうし、白井さんも蝶子さんも御喜びでせうと思ひますと、私其麼物ちつとも惜しいとは思ひませんわ。」

動かし難き決心の色は眉宇の間に顯れてをる。

「嗚呼峰さん難有!!!……僕は實に感謝の辭を知りません！貴女の御蔭で友人を救ふ事が出來るのです…。」

「あの、貴夫、さう遊ばして下さいますか、ア、嬉しい!! 私はまたお叱になりは爲無かと思ッてハラハラしてをりました。」

「勿體ない叱る處か罰が當は爲無かと思ふ程です。」

「アラ彼樣御冗談……。」

「イエ眞實く……、實際峰さんは僕如き者には過分です!! あゝ白井が甚麼に喜ぶだらう。」

「私にだッて蝶子さんはお友達なので御座いますもの、そんな事で御助け申す事が出來ますんなら……私本統に嬉しう御座いますわ。明日の朝起き拔に乳母を迎に遣りませう。」

「ア、ア白井や蝶さんが喜ぶより僕が安心した、既んでの事で大切な峰さんを失はふとしたアハ、。」

初心らしく峰子は、颯と顏を赤めて、聲も微けく。

「私だッて、貴夫にお別れするのは、死んでも厭で御座いますもの……。」

相顧て互に嫣然した、時計は今十二時を打ッた。今まで氣附かなんだ窓の雨戸を閉むべく、立ち上つて障子を開くれば、空は全く晴れて居待の月は溫き此の室を差覗いてゐるのであッた。

（をはり）



弱き心

靜子

お衣様、胸餘りに塞がりて、何より書き記し申候はん今更申上るまでもなく、あなた様は私の親、はらから、又、二なき友にも候ひしを、今日の御てがみ悲しき御言葉繰り返し〱讀み行きて、伏し沈み候、お衣様、私の日頃の性質はよく御存知に候はん辯解は大の嫌ひにて、眞實にまれ虚僞にまれ、人は如何樣に申候とも兎や角との言ひ譯は是迄致せし事も候はず。何處よりの風、さは御耳をさわがせ候かは存じ申さず候へども、御前様迄が、と、餘りのなさけなさに一度は御心ゆく迄と思ひ候ものゝ、又例の氣質に抑へ候、世はかかるもの、人はこうした者と、あきらめ居候へども弱き心の得堪へずて、折々はこのまゝ消え失せよと願ひ候、私はなど斯くも世の人の注意の的と相成候にや、笑ひぬ、泣きぬの些々たる事より外出、閉居、一々に注目せられて、素通しならば、とにかくに、色目鏡にかけて見られ候もの、青くも黒くも映り候、御恥かしや、いつの間にか愚痴めかしく、辯解がましく筆の走り居候、又言ふ折も候はゞ御目に懸りて彼是の御答へ明らかに申上ぐ可く候、不束なる筆の運びにこの心は寫しがたく、なか〱に又疑ひの種とも相成候かとさし控へ候、あなた様は如何におぼしめされ候とも、私はもとの、儘なる心もて、姉様とこそ、許させ給へ、世に頼りなきみなし兒のあなた様に迄捨てられて、何處に立つ瀬の候可き、只々御心強くおはせ、信じて、下され、心のよわきは、性質に候へどもまだ一度だに誘惑の手には破られ申さず候されども怖ろしき誘ひの手は多く候、心して蹈み迷はじな、との一寸の足の運びに倚かくうたがはれ候ものかと、世の中怖ろしく、

氣も心もます〱小さく、弱く、成り行き候……。

十一月廿日　　てる

お衣様

男の出入しげしと聞きて、姉よ妹よとちぎりし君をなど捨て置かる可き、思ひの儘を言ひ盡くして、この言葉きゝ入れ給はずば絶交とまで言ひやりし心の恥かしさよ、彼の性質は百も承知の上にあらずや、然るを唯人の噂を其の儘信じてはげしき言葉に泣かしめたる我が心の淺かりしよ、弱き心にさぞや悲しみつらん、さるを〱我が信の薄きをも恨まで尙姉様と許せとや許せとは此方こそ、許せ友よ許してよ。

第二信

姉上樣弱き心の堪へがたくて、いよ〱都を去る可く決心致し候いぢめて、いぢめて、いぢめぬきて、かくも追ひやる人々の嘲み笑ひ候かと口惜しう候へども都は私の住居にあらずと染み〱悟り申候、何處に平和を求め得らるゝ身に候やら、思へばこも亦悲しき首途に候かな昨夕は太田が原の古池の邊りに、君ます折を想ひ偲びて、涙も限りかと思はるゝ迄に泣きに泣きて都の別を惜しみ候明日は何處に彷徨の身と相成候可き、行方定めぬ流水の其よりも尙はかなく思ひ入候我から好みて、悲しみの淵に沈み行くよと姉樣は御叱りなされ候はん、されども、私は都と云ふもの、つくづくいやになり候都といふよりも人てふものがいやに候まゝ、成可く人少なの地にと思ひ立ち候、西よりか東よりか又御耳さはがせ候はん、許させ給へ、我が心强かれと御祈の程願ひ上候、申上度き事は數限りもなく候へども心亂れて筆もつゞかず遙に御別れ申上候姉樣の御幸福と御健康とを心より祈りて、かしこ

十二月二日夜　　てる子

姉上樣

いかに弱き心とは言へ餘りに思慮なき事ならずや、さまで世の中憂かりせばなど我が家に逃げては來ずやと一度は恨みしが尙彼が身の心元なくて、落ち居もせず、其より三日目他の友より至急親展の玉章着しぬ光樣の事もやと心躍りて封を開けば、

………衣子様、てる子様の御行方知れずなり候もしや御前様の處にてはこれなく候や、日頃よりとや角との御噂は耳に入り候へども心こそ弱くおはせ、などさる事はと私は信じ居候、さるを一昨日の朝告別の御はがき頂き、驚きて御宿に馳せつけ候ところ御部屋は塵もなき迄に取り片づけられて机と本箱のみ淋しう殘され居候、涙ながらに物語りし宿の主婦の話を其の儘御參考迄にかき記し申候。

「兎や角と御友達の中に噂立てられ給ふと聞けど、そは全くの、ひが目なり、名刺等通じて訪ふ男の人は多けれども大方はずして逢はず氣やすく出入さるる方々二三人はおはせしも、只二十分計り原稿の事等につきて話して歸らるゝが常なり、然れど一人、御朋友の御兄様とて尾藤様とやら、一時の出來心にあるまじき御優しさ、閉居のみは身體に毒なれば少しは出る樣にすゝめて下され、とて、展覽會 音樂會の切符、私の分まで添へて下され、變りはなきやと日毎〳〵學校の歸りに千駄木迄の御運びも、本人に御逢ひなさるゝでもなく只私に御尋ねなさる迄にて逢ひ給ふは四度に一度、其麽に御遠慮なされずとも只今御宅で御ざいますから、と申上れば、何、逢はない方がいゝんです、とて見返りもせで歸り給ふ御出立の前の日の事なり、尾藤樣御出でなされ、たのし氣に語らひ給ふ事、半時間ばかり、御歸りの後小母樣私の部屋に來らつしやいな、御茶がはいつて居りますから、とすゝめられ御部屋に入れば、まだ初咲きの水仙の香、室中に充ちてむせる計りオヤまあ、もう水仙が咲きましたの、尾藤樣が御持ちになりまして？どこ迄御優しい方でせう、當世の方には珍らしう御ざいますのネ、何うせあなたも御嫁きになる御身體でせう、あんな方ならば、一生を御まかせなすつても、と夫とはなしに御心ひけば、何うして〳〵私見たいな者が彼の樣な方の奥樣になれますものか、あんなにかまはないで居らつしやるけれども彼の方は華族ですよ、だから其麽事は思つても駄目、夫より、私、小母樣に話し度い事があるの、實

はゝ、小母樣、東京に居るのがいやになりましたから一層田舍に行つ了はふかと思つてよ、御じやうだんと打消したるもまこと思ひ決せしとて眞面目に別の辛らき事、世の厭はしき事等言ひ出でゝ打濕るにその事は尾藤樣にもおつしやつて、と問へば、何うして〳〵言ひますものか、彼の方があんなでなければ、他の事はどうにか堪へられない事もありませんけれども……今の中避けた方が宜いでせう、』と切なげなるに、怪しくて、『そんなら御嫌ひなんですか、』『嫌いでないから逃げるんです、もう其の事は聞かんで下さい』とて宥むれども賺せどもきかれず、一夜の中に荷造りなし終へて今朝六時、御目的の地をも告げず上野より御立ちになりぬ。

かく語りて『餘り、御氣が弱いから何だか心に懸りまして、』と申居候、お衣樣、あなた樣は如何に御判じ遊ばし候や大方御心弱き爲かと推し候へども、又他にどの樣なる事情おはせしかと思へば御可愛想にて心騷がしう候御前樣は姉よ妹よと呼び給ひし御仲に候へば御もうしなされ候事もやと存じ候、上野よりと言へば大方御あたりと存じ候へども、心元なくて急ぎ筆とり申候否哉の御報待ち居候。あなかしこ

十二月五日　　文子

衣子樣

一度あの樣な事を言ひ遣りたれば、ます〳〵疑の心起しはせずやとの心からにや、我に尾藤の尾の字も告げぬのみか、都を去る可き事情も、漏らさねば。我が此の家へ嫁くとの事を知らせし時、杖とも力とも賴みし大木を取り放たれし心地ぞする今迄の衣樣をと願ふは過ぎたる欲望ぞかし、女は妻となり母となれば友迄に及ぼす愛はなからんとて、嘆きしが、その心もて何事も己が胸一ッにと納めしか、初めより、その樣に淺き交らひにはあらざりしぞと泣きて恨みて脊の君に、甲斐なき事よ、と御叱り受けぬ。

第三信

菊よ紅葉よと申候ひしまに早や今年も日數少なう相成候、新春を迎ふる御仕度に、さぞ御忙が敷御事と御

察し申上候此地は昨日よりの雪まだやまず心まで重くなりまさり候。

「人を疑ふも程あり、姉様との言葉僞ならずば何も彼も包まず明かす可き筈よ」との御恨み、さることゝ存じ候今はこの小さき心に秘め兼ねて御言葉なくとも申上んと思ひさだめたる處に候。衣子様、在校の折よりあなた様こそ私の心はよく〳〵御承知に候はん、男と云へば身震ひする程、嫌ひにて敵の樣に思ひ候を、然れど學校の寄宿舍に世にも知られず世をも知らず、安らかに暮らし候折と異り文筆にたづさはる樣に相成候てより其〳〵に要もありて男の方の出入も有之候へども心の帶固う締め居候へば、いかで馴々しき交り等致すものに候ものかは、三度も四度も宿を轉へ候は、要なき男の訪問、煩さかりし爲に候、火のなき處に煙立たじとかや誰彼の別はなく、一切男の出入御斷り申さんと、申出でたる事も候へども、さる野心ありての交りにはあらず、其は自惚と云ふものなり只美くしう交はり給へとて笑はれ、異に恥かしき思ひ致し候「光様の性質は底に溢るゝ情ありと覺ゆるにその表面の冷めたき、手だにふる可くもあらず然までの性癖を何處に得給ひし、詩的情話を聞かせ給へ」とは殿方の評に候之によりて、男に對する私の態度の幾分御わかりにならんかと存じ候、表面の冷たさ固さは取り除きて底の情のみをもて交る女の友は男に對する我も同じき、それと思はれて兎角の風評、悲しき限りに候ひしよ、果ては、女の友の嫉み深く見る目の怖ろしきに反し男の方のなか〳〵に我を解し給ふと思へばいやしめの眼よりも優しき同情の眼嬉しくて、誹らば誹れ、言ひ度くば言へとの强き心も起り候、此の人々の中には眞實頼もし、嬉しと思ひし人、一人之有候ひしも其の思ひ遂ぐるには餘りに弱きこの心に候、それ見た事かと世の嘲も悲しく亡き母の名迄出されんかと口惜しう、幾日幾夜悲しみまどひ候よ、世人を怖るゝ心に、負くる程の弱き戀なりしかと思ひ候へば、彼にも我にも、世をも燒き盡くす可き情火、慥に燃え居候、然れど、よし人の言葉は怖れずとも容易う思ひ遂げらる可き人の

身分に候はず、我ある爲の彼の人の苦痛を見るに忍びず、美くしう思ひ斷ちて、都も共に捨て候、私の如き女の獨立は到底出來ぬ事と思ふにつけても捨てたる思ひに名殘ありて、染み〴〵寂しう感じ入候、弱かりし心の我ながら口惜しうも悲しうも遣る方なさに悶へ苦しみて、氣もそゞろに候へば筆とり候ても想浮ばず文ならず晝夜空しく考へ込むのみに候されど日々の生活も御恥かしき迄にて好める文學も麵麭の爲に賣るかと思ひ候へば見るも嫌になり候今は此世に住み侘びて、母ある御國へと願ひ候へども其さへ弱き心には勇氣なくて……いつも〳〵泣き言のみ申上候も他に訴ふる人なきまゝと御許の程願ひ上候、御地は御寒さ格別と聞き及び候何卒御身御いとひ遊ばしてよき年御迎へ遊ばす樣祈り居候。かしこ

十二月廿日　　安中の光子

盛岡の姉上樣

屈曲多き彼の生涯は只々世を怖れ人を怖るゝ弱き心とのみ變へて、かばかり悶への人とならしめしか、戀を捨てしは心の弱き爲のみならで彼が兩親の、身分の懸隔に戀破られて、母は異鄕の地に追はれ、十九の齡を悶へて死にし、その悲痛の歷史胸に刻みて忘られぬ爲もあるべし、安中は母上の故鄕とか、聞きしも生活の道、苦しとあるは力と賴む親戚もなきにや、跳ね返りの御轉婆なれとは願はねども、今少し心强からではこの、困難しき世の生存得堪へもすまじ、良き夫得させてその蔭に隱くしてやり度し賴もしき人選びてたまはれと良人に縋れば其麽に一度思ひ込んだ人があれば他は到底駄目らしいねと言はれて愈々彼が行末の心細う、心弱りに弱りし果ては思ひきりたる事を爲兼ねもすまじ、兎に角に呼びよせんものと「姉妹の契はかゝる折にこそ一日も早う御出あれ、世は冬なれども此處には暖き春風御身を待ち居候」と繪はがきもて言ひ送りてより今日迄、五日に餘れど一言の答へもなきは如何にかしつる、若しや强からぬ身を思に傷めはせずや

昨宵よりの雪今朝は軒まで降り積みぬ。彼方にも赤城下ろし寂寞の胸にさこそ染み入る寒さならめ、嗟。

才媛鬪藻　懸賞募集（締切二月十五日）

▲和歌（一人一首）

▲短文（百二十字以内）

▲謎（一人三解）

▲一口噺（一人一題）

▲諸國珍料理（百字以内、成可珍奇なるを採る）

▲家庭日記（百二十字以内）

◎用紙は總てはがきの事◎字體は楷書にて鮮明なるべき事◎住所姓名は必らず原稿に記しおく事◎投稿は博文館女學世界宛の事……………

◎賞品

▲一等一圓▲二等五拾錢

▲三等參拾錢（圖書切符）

▲謎と一口噺は入賞參拾錢

毎月一日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）	…金二十錢
四册（三ヶ月分）	……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）	……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）	……前金二圓八十錢

内（定刊數……………十二册 増刊四回…一、五、九、十一月價格同一）

郵税　一册　二錢

廣告料

	特等	一等	二等	三等
二十四字詰一行	……	……	五十五錢	四十七錢
半頁（卅二行）	二十三圓	十九圓五十錢	十六圓五十錢	十三圓五十錢
一頁（六十四行）	四十五圓	三十八圓	三十二圓	二十六圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず

●御拂込の前金滿切れ候節は送本を停止す

●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る

●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十一年一月十五日發行　第八卷第貳號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　二千六百二十番
千十八番　三千二百二十九番

毎巻醫學專門大家講述

家庭衛生講話

毎巻洋装菊判美本＝紙数各約百六十頁

口繪寫眞版數多挿入

醫學博士 三輪德寛君述

（第一編）一般救急法

正價三拾五錢
郵税金六錢

醫學博士 森林太郎君述

（第二編）衛生學大意

正價三拾五錢
郵税六錢

緒論＝衛生學の意義○衛生學の沿革
（一）土地の事＝地中の空氣○地中の水○外三項
（二）下水の事＝眞の下水○下水の排泄場所
（三）埋葬の事＝風葬○水葬○埋葬○屍骸の木乃伊化○外九項
（四）上水＝水道○水の消費量○水の善惡○外五項
（五）都會の事＝建築物と人口と○東京の建築物と人口と○外六項
（六）家屋の事＝燈火○窓○燈火の變遷○外十八項
（七）空氣の事＝空氣の成分○窒素○酸素○酸化○外六項
（八）氣象の事＝地球の溫○地上の溫の差○外十八項
（九）衣服の事＝溫の調節○體溫の放散○衣服の效用○外九項
（十）營養の事＝所謂滋養品○食の作用○食素の區別○外廿五項

醫學博士 林春雄君述

（第三編）藥物の大要

正價三十五錢
郵税六錢

◎總論●健康と病氣と●藥物の定義●治療の意義●藥物の作用●藥物の分量●投藥の反覆●製劑の製粗並に藥劑の理學上の性質●藥物を用ふる場所●藥劑の個人に對する關係●身體に用ひたる藥劑の發落●藥劑の類別法◎各論●第一類 神經筋肉毒（「クロロフオルム」「アルコホル」の類外十六項）●第二類局所の營養を障碍する有機化合體（粘漿劑外十一項）●第三類無機化合體（水外八項）●第四類 消化醱酵素並に滋養品（脂肪及消化醱酵素の類、含水炭素類、蛋白質類

醫學博士 緒方正清君述

（第四編）姙産婦之心得

正價三十五錢
郵税六錢

○緒論●婦人の生殖器●月經●姙孕●受胎したる卵の變化●胎兒の子宮内に於ける狀態●姙婦の身體に現はるゝ變化●姙娠の徵候幷に姙娠各月の徵候●分娩期日を算定する法●數胎姙娠●胎兒の死亡●分娩の種類●正規分娩の經過●胎兒の位置幷に分娩の狀態●正規の産褥●姙娠中の生殖器以外の異常●姙娠中の膣分泌物の異常●姙娠子宮の位置の異常●胎兒幷に其附屬物の異常●流産及早産●子宮外姙娠●姙娠と共に起る病氣●陣痛幷に腹壓の異常●産道の異常●胎兒の異常●胎兒の附屬物の異常●産道の損傷●胎兒分娩後の無力や出血●分娩時に起る病氣●産褥中の異常

★發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館★

女（後付の一）

家庭整理の指導

當代第一流の女子敎育家編著



家庭百科全書

全部五十册

毎月一回發行

和裝頗美本 ◎紙數各三百頁 ◎石版彩色口繪一葉 挿畫十數個

▲定價一册金四拾五錢——郵稅八錢

近時婦人敎育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尚ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、輙もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には概ね理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尙に過るか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に敎師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須ゐざることながら、人ごとに家庭に敎師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は最良なる家庭敎師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人敎育の缺點を補はんと欲するなり。

第一編

新家庭訓

三輪田高等女學校長
三輪田眞佐子女史著

◎序論◎女訓今昔の感◎少女時代◎女性問題◎處女時代◎女學の要旨◎結婚の意義◎家庭の中和◎家庭の趣味◎家庭と道德◎婦人の模範◎人生と幸福◎家庭と食卓◎文明の婦人◎家庭と快樂◎人生と生々の理◎犠牲の精神◎婦人の生涯◎眞面目◎婦人の天地◎紅閨女史の態度◎理想と空想◎母の責任◎家庭敎育の標準◎敎育と家庭分子◎習慣の勢力◎才德の優劣◎敎育と遺傳◎美的趣味◎子供なき家庭◎生活の改良◎廣義の經濟◎婦人と交際◎古今の女傑◎家庭と老人◎老人の短所及長所◎婢僕と人道◎軍國の婦人◎對外的婦人◎婦人と慈善◎修養の工夫◎人生觀◎模範的家庭◎家庭と物品の二元◎安心境◎師傅と人物◎家庭上の智識◎家庭の健全◎信仰と詩趣◎婦人と高等敎育◎女德の養成◎結論

▶販賣用電話 本局二六二〇◀ ◀發兌元▶ 東京日本橋區

婦女必讀の大全書發行

第二編　四季料理

◎緒論◎春の巻　みの字盡料理●春の西洋料理◎夏の巻　蠶豆料理●鮎料理●南瓜料理●豆腐と煉みそ●茄子料理●鶏卵料理●神武天皇祭料理献立◎秋の巻　栗料理●近江八景料理●松茸料理●紅葉づくし料理◎冬の巻　天長節料理●この頃の料理●紀念戰爭料理献立●新年重詰拵方◎附錄　一月節の取合せ●二月節の取合せ●三月節の取合せ●四月節の取合せ●五月節の取合せ●六月節の取合せ●七月節の取合せ●八月節の取合せ●九月節の取合せ●十月節の取合せ●十一月節の取合せ●十二月節の取合せ●料理の品名●料理の習學法●日本料理を誤解したる事●第一料理を心なしに云ふ人●第二料理敎師を選む心得●第三家庭料理を習ふ時の心得

宮中臣民兩流料理師範
大日本割烹學會々長
石井泰次郎君著

第三編　裁縫指南

◎第一章　裁縫用具の名稱及用法●運針法●針留及糸結び●縫方種類●風呂敷、帹袋、紐前掛、雑巾制方等●衣服の名稱◎第二章一つ身襦袢●三つ身襦袢●四つ身襦袢●大人襦袢●長襦袢◎第三章　女大人物單衣●男大人物單衣●一つ身單衣●三つ身單衣●四つ身單衣●前衿裁單衣◎第四章　袷綿入寸法●袷綿入積り方●袷綿入裁方●袷縫方●綿入縫方●羽織寸法●單羽織●袷羽織●綿入羽織●襠高袴●馬乘袴●小供袴●被布●男帶●女帶●シャツ●ズボン下●布團●夜具●小袖●頭帽子●比翼●股引●脚絆●足袋●小供前掛◎附錄裁縫に就て心得べき事項

女子高等師範學校敎授
喜多見佐喜子女史著

第四編　和洋菓子製法

●日本菓子を拵へるにつきての準備●日本菓子を拵るにつきての道具●日本菓子を拵へるに供すべき原料●日本菓子を拵へるに供すべき原料の保存◎餡類の部○並餡の製法○上等餡の製法○鹽餡の製法　○外五項◎干菓子類の部○片栗の打物○落がん○麥らくがん○外卅項◎生菓子類の部●蒸物類○蒸羊羹○栗入むしやうかん○外廿六項◎焼物類の部○中華○三笠山○櫻餅○外十五項◎寄せ物類の部○煉羊羹○水羊羹○小倉羊羹○外十九項◎煉り物類の部○求肥○草求肥○海苔入求肥○外廿二項◎雑菓子類の部○最中○磯最中○利休最中○外八十八項◎西洋菓子の部○西洋菓子を拵へるにつきての心得○西洋菓子製法用の器具◎焼物類の部○ジンジャケーキ○デセール○スポンジケーキ○外四十二項◎煮物類の部○ストロベリージャム○オレンジジャム○ストロベリーシチウ○外十六項◎油揚物類の部○ダウナッツ○パアフケーキ○マーブン○外六項◎煠で物類の部○アップルプチング○ユコアプッチング○ボイルドポンジケーキ○外三項◎冷し物類の部○レモンゼリー○ジブローマン○イチゴゼリー○外廿五項◎ソース類の部○カスタソース○ミルクソース○ストロベリーソース○外四十五項◎諸國菓子談○日本菓子の歴史

東京治庖會講師
龜井まき子女史著

（續刊）

●茶道と香道……水原翠香女史著

●諸流生花指南……琴松園文雅君　松幸齋理常君　共著

本町三丁目　博文館　振替貯金口座第二百四十番

少年世界讀本

全部拾貳冊

●定價一册金貳拾錢
▲郵稅四錢
●六册金壹圓拾錢
●十二册金貳圓拾錢
▲外に要郵稅

第一卷 英吉利

口繪（英吉利皇帝皇后陛下○皇太子同妃殿下）

○英吉利の帝王旗海軍旗商船旗其他挿畫十數個（目次畧す）

第二卷 支那朝鮮暹羅波斯及東洋諸國

口繪（支那皇帝○暹羅國王○斯波皇帝○朝鮮國王○朝鮮の各國旗○亞細亞の各獨立國）

●何故支那は侮られるか◎何處まで各國が伐込で居るか◎何のためか◎支那には何が出來るか◎どの港が盛なるか◎何うして旨く治まらぬか◎政治をして居るのは誰か◎北京はどんな所か◎軍備はどれほどあるか◎教育はどんな有樣か◎鐵道はどれ位數つてあるか◎此後見込のあるのは何處か◎支那で不足な物は何か◎支那人を怖いと云ふは何故か◎支那人の缺點は何か◎此後支那は何うなるだらうか◎滿洲はどんなところか●暹羅とはどんな國か◎どれほど進んで居るか◎日本とどんな關係があるか●波斯が危いとは何ういふ解か◎どんな國か●阿富汗斯坦はどんな國か●オーマン國は何處にあるか●印度の北の獨立國は何國か●朝鮮と日本の關係はどうか◎日露戰爭が朝鮮の爲とは何故か◎何故日本が保護するか◎今はどんな有樣か◎朝鮮人はどうして居るか

第三卷 獨逸墺太利

口繪（獨逸皇帝皇后兩陛下○墺太利匈牙利皇帝皇后兩陛下○兩國國旗商船旗海軍旗◎世界上の獨逸領地と墺太利◎挿畫例の如く澤山）

●獨逸◎獨逸はどういふ國か◎獨逸帝國はどうして出來上つたか◎どれ位領地があるか◎近頃獨逸で殊に大きくなつたものは何か◎外國との商はどんなか◎何か出來るか◎獨逸を學問の中心と云ふは何故か◎海軍は何程あるか◎世界の陸軍國と言われるは何うしてか◎獨逸人は何處が偉いか◎獨逸人の好きな物は何か◎國の有樣はどうか◎伯林はどんな市街か◎獨逸皇帝はどんな方か◎此後何をするだらうか●墺太利◎墺太利は何故偉くならんか◎どういふ風に治められて居るか◎どんな物が出來るか◎軍備はどうか◎墺太利は何故に巧く治まらぬか◎其の政治はどうか◎教育はどんなか◎商賣は盛んか何うか◎匈牙利はどうして元氣があるか◎どれ位まで進んで居るか◎どうして纒つて居るか◎維納はどんな都か◎墺太利の皇室はどうか◎行末どうなるだらうか

巖谷小波君

東京本町

（後付の四）

金子紫草君共編

毎卷紙數百四拾頁

第四卷 西班牙、葡萄牙 亞非利加各國

（西班牙）＝◎西班牙は何處にあるか◎何日頃が最も盛であつたか◎どうして衰えたか◎何故に殖民地がなくなつたか◎軍備はどれ程あるか◎西班牙には何か出來るか◎商業はどんな有樣か◎どうして始終國内が擾ろか◎何故元氣が無いか◎西班牙で見るべき物は何か◎マドリッドはどんな都か◎世界は西班牙を何んなに遇つて居るか●葡萄牙◎何うして澤山の領地を有つて居るか◎どんな國柄か◎産物には何かあるか◎國の政治はどんなか◎軍備はどうか◎教育はどれ位の所にあるか◎リスボンはどんな處か◎各領地の有樣はどうか◎支那にある領地はどんなか●亞弗利加各國◎亞弗利加はどんなになつて居るか◎リベリヤは何うして獨立して居るか◎現にどんな有樣か◎アビシニヤとはどういふ處か◎國内の樣子はどうか◎此後はどうなるだらうか◎摩洛哥とはどんな國か◎何處まで國狀が知れて居るか◎歐洲各國の競争地とは何故か◎埃及は何國の有か◎どうして英吉利のものになつたか◎英吉利はどんなに遇つて居るか◎埃及では何が出來るか◎土人の樣子はどんなか◎何處迄英吉利が世話して居るか◎コンゴー獨立國とは何處か◎どれだけ開けて居るか◎此末どんなになるだらうか

口繪　西班牙王同皇后兩陛下○葡萄牙王同皇后兩陛下○兩國國旗及摩洛哥國旗○リベリヤ國旗○世界に於ける西班牙葡萄牙領地並亞弗利加各獨立國數十

第五卷 佛蘭西 瑞西

●佛蘭西＝◎佛蘭西は何程領地を有つて居るか◎どんな國か◎佛蘭西の特色は何か◎どういふ風に國が治められてるか◎今の大統領はどんな人か◎佛蘭西の偉いところは何か◎軍備はどれ位あるか◎何が出來るか◎外國との商はどんなか◎佛蘭西の船は何う世界に散つて居るか◎教育はどんなか◎佛蘭西に取つて惜むべきは何か◎何うして金が澤山あるか◎宗教家が勢力あるは何故か◎佛蘭西は世界へ何んな感化を與へたか◎佛蘭西人は何して氣が早いか◎佛蘭西を女らしい國と云ふは何故か◎巴里はどんな市街か◎佛蘭西は何國と同盟して居るか◎何うして英吉利と仲善くなつたか◎日佛協約とは何か●瑞西＝◎瑞西を世界の樂園と云ふは何故か◎工業が盛になるは何うしてか◎どうして一つの國となつたか◎政治の方法は何う異つて居るか◎軍備はどんなか◎教育の有樣は何うか◎外國人の見物にどんな便利が講じてあるか◎瑞西の國が立つて行くのは何うしてか

口繪　佛蘭西國旗○商船旗○軍旗○同大統領旗○瑞西國旗○世界に在る佛蘭西領地と瑞西○佛蘭西大統領○同夫人○瑞西風景

第六卷 中央亞米利加各國

●墨西哥＝◎墨西哥は何處に在るか◎何うして獨立したか◎其後どんな事があつたか◎國内の樣子はどんなか◎何が出來るか◎外國との商の樣子はどうか◎墨西哥人とはどんな人種か◎政治はどんな風か◎軍備はどれ位あるか◎墨西哥で何處が最も開けて居るか◎何故外國人が多く入込まぬか◎日本の勞働者は何うして受が惡いか●中央亞米利加＝グワテマラはどうして出來たか◎どうして治めて居るか◎どんな國か◎サルバドアはどんな國か◎ホンデユラスはどんな樣子か◎政治や商はどんなか◎ニカラガでは何が出來るか◎國内の樣子はどんなか◎ニカラガ運河は何故止めになつたか◎コスタリカはどんな國か◎どれ位開けて居るか◎巴奈馬はどうして獨立したか◎どんな國になつたか◎どんな條件で巴奈馬運河が開かれるか◎何うして合衆國が開くやうになつたか◎どんな運河が開けるか◎巴奈馬運河は世界へどんな影響を與へるか

口繪　墨西哥國旗○ニカラガ國旗○ホンデユラス國旗○○世界に於ける墨西哥及び中米諸國○墨西哥大統領○同夫人○巴奈馬大統領

博文館

ドクトル　フーフェーランド氏著
文學士杉谷泰山君譯述

身心修養　長命術



人壽二百歳とは此著の研究なり、人生の意義より說き起して、衣食住は勿論教育宗教道德に亘りて誨ふる所、實に懇切丁寧を極めたり、人間生活の伴侶として此著に及ぶものなし、學說と應用との二卷より成り古今の長命術を細大漏さず評論し、東西長命者の生活狀態を記載し以て合理的長命術を唱道し、教育法修養法料理法醫藥法變死應急策に至るまで詳述して餘蘊なし、譯文平易何人も之に依りて天壽を完うすることを得ん。

全一冊菊判製本優美
紙數三百五十頁
正價金七拾錢
郵稅金拾錢

産科婦人科楠田病院長　楠田謙藏先生校閲
産科婦人科専門醫　稻生鑑次郎君纂著

實習産婆學

全二冊

洋裝菊判美本
上卷　通常產　紙數三五〇頁
下卷　異常產　紙數約三〇〇頁

◉上卷正價金七十錢　◉下卷正價金八拾錢……▲郵稅各一冊十錢

上卷は通常產を講じ下卷は異常產を逃ぶ通常產の異常產に於ける產科の兩輪双翼にして助產婦たるもの相共に精修練磨せざるべからず然るに其一を修めて其一を習はざれば到底開業者たる資格なく又產科實習の効用を得ざるべし今や下卷の異常產を出版す上下完全して其全科を實修し得べし殊に行文の平易なる挿畫の精密なる世上未だ如此親切懇到のものあるなし開業者は素より本科の生徒諸孃は早く此要書を得て研修の便を得らるべし

東京　博文館　本町



侯爵夫人鍋島榮子題詠
學習院女子部長下田歌子題詠
高等女子實修學校長山脇房子序文
巖谷小波 竹貫直人
沼田笠峰 木村小舟 合編

正價金八拾五錢
郵税八錢

全一冊三六判特製
金模様クロース表紙
紙數約六百頁
口繪十枚挿畫四百餘個

本書口畫には、東宮妃殿下、各内親王殿下の御尊影及び、本邦女子教育大家の肖像を掲げ、極彩色石版には、日本國旗章、外國旗章、女子の勳章、明治時代頭髮の種類、日本女子服裝變遷圖、女子の用具等、日常必須の材を撰み、又本文には少女訓、日本歴史、外國歴史、日本地理、外國地理、動植鑛物、物理化學、天文地文、算術英語、音樂國文、茶の湯挿花、裁縫編物、衛生料理、刺繍、禮法、體操遊戲農業等苟くも日本女子の心得ふべき學科は一も洩さず、加ふるに鼈頭には少女立志談、少女お伽噺等を掲げて、一層其の趣味を深からしめ、別科には老物、笑話、福引、紋形、手毬歌、吉凶占ひ、秘傳、採集法、小鳥、金魚の飼養、少女年中行事等約五十餘題趣味豐富なるものを集め、記述面白く筆法平易挿畫美に、印刷製本又善美を盡せり。



正價金九十錢
郵税八錢

題して『小供心』と云ふ。内容は大方判じ得べし。蓋し子供を主人公としたる、清新高雅なる家庭小説總て七編を收めたるもの是也。著者が當代のお伽作家たる事は、世已に定評あり。而もそれと同時に、巧みに少年少女を寫して、紙上に躍如たらしむる技量も亦文壇の珍とする所とす。本書の如きは、即ち其傑中作の傑作を集め、更に子供畫を以て獨特に妙ある、宮川春汀氏の極彩色挿畫七葉を添えたるもの、苟も世の子煩惱者にして、此書を座右に置かざらん乎、共に家庭を語る可らず、共に兒愛を語る可らず。

東京 博文館 本町

臨時增刊（三）
女學世界都會生活
（明治四十一年一月十五日發行）第八卷第貳號

（定價金貳拾錢 本號に限り郵税金六錢）

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版㊼
明治41年1月（第8巻第1号、第8巻第2号）

2009年7月10日　第1刷発行　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3615-5　C3321